

近世読本における中国古典小説の受容

—都賀庭鐘と石川雅望の読本を中心に—

任
清梅

目次

序章	近世読本と中国古典小説	1
第一節	はじめに	1
第二節	都賀庭鐘の読本と中国古典小説	3
第三節	石川雅望の読本と中国古典小説	7
第一部	都賀庭鐘の読本と中国古典小説	
第一章	『英草紙』第七篇「楠弾正左衛門不 _レ 戦して敵を制する話」小考	12
第一節	はじめに	12
第二節	物語の概要	12
第三節	第七篇の中に見られる三つの計	13
第四節	三つの計略に見られる中国古典の趣向	15
第五節	おわりに	26
第二章	『英草紙』の素材選択から見る都賀庭鐘の創作意識	
	— 『醒世恒言』が使われなかった理由 —	28
第一節	はじめに	28
第二節	「三言」が日本に伝わった時期と『醒世恒言』の日本での流行	29
第三節	都賀庭鐘と『醒世恒言』	30
第四節	素材の選択を左右した都賀庭鐘の異色のな夫婦観と女性観	31
第五節	素材選択から見る都賀庭鐘の政治と歴史へ寄せる関心	33
第六節	義への追求	38
第七節	庭鐘の「三言」に対する認識	39
第八節	おわりに	43
第二章	『繁野話』第一篇と「蘇知県羅衫再合」との関連	
	および第一篇が「貧福論」に与えた影響	50
第一節	はじめに	50
第二節	「雲魂雲情を語て久しきを誓ふ話」と「蘇知県羅衫再合」	52
第三節	「貧福論」と「転運漢巧遇洞庭紅 波斯胡指破鼉竜殻」	56
第四節	「雲魂雲情」と「貧福論」	62
第四章	『莠句冊』第三篇「求家俗説の異同家神の靈問答の話」小論	67

第一節	はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・	67
第二節	「求冢俗説の異同冢神の霊問答の話」のあらすじ・・・・・・・・	68
第三節	「求冢俗説の異同冢神の霊問答の話」と『水滸伝』の魯達・・・・・・・・	70
第四節	冢の神霊問答・・・・・・・・・・・・・・・・	75
第五節	三つの伝説に見る異同・・・・・・・・・・・・・・・・	79
第六節	おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・	84

第二部 石川雅望の読本と中国古典小説

第一章	『近江県物語』における中国戯曲『笠翁伝奇十種』の利用法の一端・・・・・・・・	87
第一節	はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・	87
第二節	『近江県物語』と「巧団円伝奇」の粗筋・・・・・・・・	87
第三節	常人の人物像と「巧団円伝奇」・・・・・・・・	89
第四節	「巧団円伝奇」の「尺」から生まれた「笏」について・・・・・・・・	93
第五節	常人の滑稽と『笠翁伝奇十種』における「醜角」の笑い・・・・・・・・	96
第六節	おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・	100

第二章	『近江県物語』における中国白話小説の趣向利用について・・・・・・・・	103
第一節	はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・	103
第二節	「笏」の登場―中国伝統習俗「試児」の趣向取りとその展開・・・・・・・・	103
第三節	埋葬地からの蘇生―『醒世恒言』巻十四「鬧樊楼多情周勝仙」の趣向取り・・・・・・・・	107
第四節	『初刻拍案驚奇』巻十三 「趙六老舐犢喪殘生 張知県誅梟成鉄案」の趣向取り・・・・・・・・	111
第五節	おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・	114

第三章	『近江県物語』における男の主人公―梅丸の人物造像について・・・・・・・・	118
第一節	はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・	118
第二節	『近江県物語』における梅丸の人物像・・・・・・・・	118
第三節	梅丸と梅若・・・・・・・・・・・・・・・・	121
第四節	梅丸と田村麿大將軍伝説・・・・・・・・	124
第五節	梅丸と直不義・・・・・・・・・・・・・・・・	127
第六節	梅丸と范睢・・・・・・・・・・・・・・・・	129
第七節	おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・	133

第四章	『天羽衣』論―『醒世恒言』及び『史記』の趣向利用について・・・・・・・・	136
-----	--------------------------------------	-----

第一節	はじめに	136
第二節	『天羽衣』と『警世通言』卷二十五「桂員外途窮懺悔」	136
第三節	『天羽衣』と『醒世恒言』卷三十五「徐老僕義憤成家」	141
第四節	『天羽衣』と『史記』	145
第五節	雅望の正義と理想	149
第六節	おわりに	151
第五章	『飛驒匠物語』と『女仙外史』	154
第一節	はじめに	154
第二節	『飛驒匠物語』と「屢中楼伝奇」	155
第三節	『飛驒匠物語』と『女仙外史』	158
第四節	『女仙外史』の日本での受容	165
第五節	おわりに	167
第六章	『飛驒匠物語』における	
	『水滸伝』、『初刻拍案驚奇』、『牡丹亭還魂記』の趣向取りについて	170
第一節	はじめに	170
第二節	『飛驒匠物語』と『水滸伝』	170
第三節	『飛驒匠物語』と『初刻拍案驚奇』	174
第四節	『飛驒匠物語』と『牡丹亭還魂記』	176
第五節	おわりに	181
第七章	雅望と馬琴―『笠翁伝奇十種』と『女仙外史』の利用法を中心に―	184
第一節	はじめに	184
第二節	雅望と馬琴の『笠翁伝奇十種』の利用法	185
第三節	雅望と馬琴の『女仙外史』の利用法	196
第四節	おわりに	199
終章		204
第一節	庭鐘と雅望	204
第二節	今後の課題	205
主要参考文献		207

序章 近世読本と中国古典小説

一 はじめに

近世読本は中国白話文学の影響を受け発生したジャンルであることは、すでに周知のことである。石崎又造氏の『日本近世における支那俗語文学史』¹⁾、中村幸彦氏の「読本発生に関する諸問題」²⁾などはこれについて詳しく論じられている。

江戸初期から始まった唐話（即ち白話）流行の基礎を開いた人を中村氏が「唐話の流行と白話文学書の輸入」で三種に分類している。³⁾

第一に、「我が国の僧侶で彼の国の土を踏んだ者や、その門下達、明末清初の騒乱を避けて我が国に帰化した人達」である。その代表として、中村氏は、尾張藩に仕えた陳元賛、紀州藩に仕えた呉任顕、水戸藩に保護された朱舜水を挙げている。第二に、「隠元を中心として、新しく来朝した禅僧達」である。隠元は承応三年（一六五四）独湛、独吼、大眉を従えて日本に来て、宇治に黄檗山萬福寺を建てた。明の僧が日本にやってくるのは後にも続いた。伊藤東涯や、田中大観、すやまなんせう陶山南涛などの儒者はこれらの僧につき唐話を学んだという。第三に、「長崎に於ける唐通事達とその系統の人達」である。幕初には多くの渡来した中国人とその子孫が通事をやっていたという。

中村氏によれば、唐話学習のために白話小説がテキストとして使われ、『水滸伝』、『古今小説』、『諭世明言』とも、『警世通言』、『醒世恒言』の所謂「三言」や、『金瓶梅』、『三国志演義』などは当時知識人の間で読まれていた。『小説字彙』（天明四年（一七八四））の援引書目には、当時日本に舶載された白話小説類が百五十近く記載されている。

また、唐話を教える人を小説家と称した。その中の一人である岡島冠山は『水滸伝』に訓を施し、『通俗忠義水滸伝』を刊行した。岡白駒は中国の「三言」の書名に習い、「三言二拍」などの短編白話小説集から何篇かを選び訓訳し、『小説精言』（寛保三年（一七四二））と『小説奇言』（宝暦三年（一七五三））を刊行した。この白話小説の訓訳、翻訳の流行に乗って作品を世に問うたのが都賀庭鐘である。彼は『諭世明言』、『警世通言』の中から素材を選び、『英草紙』を寛延二年（一七四九）に出版した。これは読本の嚆矢とされた作品である。都賀庭鐘の後を継ぎ、怪異小説の集大成『雨月物語』（安永五年（一七七六））を出版したのは、都賀庭鐘の弟子上田秋成である。上方で「三言」「剪灯新話」などの短編小

説を翻案する読本が続々と刊行された一方、江戸では、寛政十一年（一八〇一）山東京伝により、長編白話小説『水滸伝』を翻案した『忠臣水滸伝』が刊行された。これは長編読本の元祖とされている。その後、京伝と馬琴は専門的な小説家として、素材を中国の白話小説に取りながら、次々と作品を出していった。江戸読本における二人の存在は際立ったものであった。

このように白話小説の持っている優れた小説性は日本の読本の発生に多大な影響を与えた。ところで、読本作家は実際に作品を作る時に、白話小説だけに素材を求めていたのではない。文言文で書かれた文言小説をも取り入れているのである。例えば、上田秋成は『剪灯新話』を使用したし、都賀庭鐘は『繁野話』において唐代伝奇の「任氏伝」を利用した。なお、文言文で書かれた小説とは、先秦時代の神話、漢代の小説、魏晉志怪小説、唐代伝奇小説、明代伝奇小説、清代の筆記小説等を言う。

また文言文と白話と両方の要素が混在する文学形式も中国に存在した。それは戯曲である。歌う部分の曲は「詞」という形式を取っているので、これはいうまでもなく文言文であるが、役者の言うセリフは日常会話の中で使われている白話で表現されているのである。この戯曲も白話文学に属している。そして、戯曲は白話小説が輸入されたのと同時期に日本に舶載されたのである。戯曲の日本に伝わった年月については青木正児氏の論文「御文庫目録中の支那戯曲」に詳しい。これによると、『御文庫目録』の中に、寛永十六年（一六三九）以前収蔵の戯曲に『八能奏錦』、『西廂記』、『雍熙樂府』、『琴心記』などが見られ、寛永十六年収蔵には『紅梨記』、『曇花記』、『明珠記』、『繡襦記』の名前が見られる。正保二年（一六四六）収蔵には『盛明雜劇』があり、正保三年（一六四七）収蔵には『元人雜劇百種』、『牡丹亭記』、『雙瑞記』、『呉騷合編』、『玄雪譜』、『千金記』、『尋親記』がある。承応二年（一六五三）収蔵には『花筵賺』、承応三年（一六五四）収蔵には『紅拂記』、明暦元年（一六五五）には『琵琶記』、寛文三年（一六六三）には『嘯餘譜』の名前が見られる。

戯曲は白話小説とは違い、伝来当初からすぐに広まることはなかったようである。読解が難しいため、限られた知識人へのみ理解されたのである。荻生徂徠と新井白石は元の雜劇を読み、日本の能、猿楽はこれを擬して作ったものであると記している。⁽⁵⁾

都賀庭鐘となると、彼は戯曲に頗る関心を示し、明の徐渭作『四声猿』の形式に習い、『四

鳴蟬』(明和八年(一七七二))を刊行し、日本の古典戯曲を白話で翻訳することを試みた。また、読本『莠句冊』第六篇の「吉野狸々人間に遊て歌舞を伝る話」においても同じく徐渭の『四声猿』の「狂鼓史漁陽三弄」を使用している⁽⁵⁾。

江戸後期になると、清の李漁作『笠翁伝奇十種』が人気を博し、振鷲亭、石川雅望、曲亭馬琴はこれを読本に取り入れていた⁽⁶⁾。

本博士論文で取り扱う中国古典小説とは、文言文で書かれた史書『史記』をはじめ、唐代伝奇、明清に流行り出した白話小説、筆記小説、さらに戯曲も含めての概念である。

近世読本と中国白話文学関連をテーマとする先行研究は、すでに石崎又造氏の『日本近世における支那俗語文学史』、山口剛氏の「読本の発生」、「江戸小説史上の一事象」(『山口剛著作集』第二巻所収 中央公論社 一九七二)、麻生磯次氏の『江戸文学と中国文学』(三省堂出版社 一九四六年)、徳田武氏の『日本近世小説と中国小説』(青裳堂書店 一九八七年)、『近世近代小説と中国白話文学』(汲古書院 二〇〇四年)、『秋成前後の中国白話小説』(勉誠出版 二〇一二年)などがある。

本博士論文は、これらの先行研究を踏まえながら、江戸中期の読本作家都賀庭鐘と、江戸後期に雅文を用いて読本を書いた石川雅望の二人に注目し、二人の読本作品を取り上げて、中国古典小説の受容の在り方を考察したものである。従来、上方では都賀庭鐘と上田秋成、江戸では京伝と馬琴が読本の代表作家とされてきた。本博士論文で都賀庭鐘と石川雅望を取り挙げるのは、二人を比較するのではないが、中国古典小説の利用にあたってそれぞれ特徴が見られるからである。また、庭鐘が先鞭をつけた読本の中に戯曲を取り入れる手法は、石川雅望に至ると、さらに発展を遂げ、ほとんどの読本に戯曲の趣向が利用されるようになった。都賀庭鐘の使用しなかった「三言」の中の第三言『醒世恒言』も、石川雅望は積極的にこれを訳したり、読本の中に取り入れたりしている。町人の雅望にとつて、ありありと町人の生活を描き出した『醒世恒言』は魅力的に感じられたのであろう。

本博士論文は、「第一部 都賀庭鐘の読本と中国古典小説」と、「第二部 石川雅望の読本と中国古典小説」の二部に分かれる。

先ず第一部である。

二 都賀庭鐘の読本と中国古典小説

都賀庭鐘については、中村幸彦氏に「都賀庭鐘伝攷」、「都賀庭鐘の中国趣味」⁽⁸⁾の論があ

る。ここでは庭鐘を簡単に紹介することに留める。

都賀庭鐘（享保三年（一七一八）〜寛政三年（一七九一））は大阪の生まれである。彼は享保末年に京都に遊学し、香川修庵に医学を学んだ。白話文学の大流行を背景に、都賀庭鐘は読本の三部作『英草紙』（寛延二年（一七四九））、『繁野話』（明和三年（一七六六））、『莠句冊』（天明六年（一七八六））を世に問うた。読本以外に、寛延四年（一七五一）明の何喬遠の『閩書南産志』二冊を刊行し、宝暦五年（一七五五）明の李卓吾輯『開卷一笑』の巻二を訓訳し刊行した。明和八年（一七七二）、『四鳴蟬』を刊行し、安永九年（一七八〇）『康熙字典』の翻刻を刊行した。そして唐本の『康熙字典』の引用文の誤りを九百条訂正した。天明元年（一七八一）『呉服文服時代^{くれはあやは}三国志』を刊行し、文化三年（一八〇六）に『義経磐石伝』を出した。

本博士論文第一部では、都賀庭鐘の読本の三部作にそれぞれ注目し、彼の読本における中国古典小説の受容について考察した。

つぎに「第一部 都賀庭鐘の読本と中国古典小説」の概要を簡単にまとめる。

第一章 『英草紙』第七篇『楠弾正左衛門不^レ戦して敵を制する話』小考』は、楠弾正が義氏と戦う中に使用した三つの計略に注目し、それぞれの典拠を考察したものである。一番目の戦略は敵側の旗を使い、その目を欺くものである。中村幸彦氏はこれを『水滸伝』に趣向を求めているが、『水滸伝』だけではなく、『史記』の「淮陰侯列伝」にも、自分の旗を敵軍の陣内に差し込むことによって、敵を混乱させ、慌てさせ、冷静に状況を考えさせないようにする趣向が存在した。そして、二番目の大樹などで水をせきとめ、必要な時に洪水を起こす戦略は、『史記』の「淮陰侯列伝」における韓信が砂囊で水を堰きとめさせておいて、敵軍が追いかけてくるのを見て、砂囊を取り除き、大水とさせた一条によるものであった。さらに、三番目の間諜と占いを利用する戦略は、『水滸伝』第六十回「公孫勝芒碭山降魔 晁天王曾頭市中箭」にある二人の坊主が晁盖を騙し、晁盖らを待ち伏せた敵軍の中に案内した一段と、第六十一回「呉用智賺玉麒麟 張順夜鬧金沙渡」にある呉用が算者となって盧俊義を見て、東南方一千里の外に行けば難を避け得る一段を用いたものである。『英草紙』第七篇は日本の『庄内物語』を背景に、中国の『史記』からも素材を取り、『水滸伝』からもヒントを得て、作品の中に取り入れ、それらを生かしているのである。『英草紙』の他の作品とは違い、単一ではなく、多くの趣向を同時に同一の作品に使っているのが、この第七篇の特徴である。『英草紙』以後、『繁野話』や『莠句冊』の中にも、この

傾向が見られる。

第二章『英草紙』の素材選択から見る都賀庭鐘の創作意識―『醒世恒言』が使われなかった理由―は、庭鐘がなぜ「三言」の『喻世明言』と『警世通言』の「二言」だけから素材を選び、第三言の『醒世恒言』を使用しなかったのかという問題を出発点とし、都賀庭鐘の創作意識と「三言」に対する認識を究明したものである。『醒世恒言』が「三言」のなかで一番早く日本に伝わったにも関わらず、庭鐘は『英草紙』においても、ほかの二部の読本においても、全くこれを素材として使っていなかったのである。そこで筆者は「素材の選択を左右した都賀庭鐘の異色な夫婦観と女性観」、「素材選択から見る都賀庭鐘の政治と歴史へ寄せる関心」、「義の追求」の三つの面からその理由を考察した。その結果、庭鐘の興味をそそった素材は夫婦の一方が薄情な人間である話や、歴史上の人物が登場する話、そして義を大切に語る話がほとんどであることに気づいた。しかし、『醒世恒言』には、庭鐘のこういう創作意識に合うものは、ほとんど見られない。あるのは、旦那を思う貞節な妻である。また、歴史上の人物が登場する話は、淫乱を極める内容であった(巻二十四「隋煬帝逸遊召讎」と巻二十三「金海陵縦欲亡身」)。一人の儒者としての庭鐘がこのような淫欲を描く作品に興味を示さなかったのは当然のことである。通俗物と言われる「三言」には、確かに町人の生活を描く作品もあり、人間の欲情を描いた俗なものもあるのであるが、庭鐘は其中で特に歴史上の人物が登場する話に目を引かれたのであった。古義堂に近い彼は、「三言」を俗文学と認めた。その上で、その「俗」の中から、できるだけ文人の出てくる作品や歴史の要素が強い作品に目を向け、「雅」の要素の強い作品を抽出し、これを素材にして、自分の創作に活かしていたのである。

第三章『繁野話』第一篇と「蘇知県羅衫再合」および「貧福論」に与えた影響¹⁾では、先ず『繁野話』第一篇「雲魂雲情を語て久しきを誓ふ話」の典拠を指摘した。これは『警世通言』の巻十一「蘇知県羅衫再合」の入話(すなわち、冒頭部)に出てきた「酒、色、財、氣」の四つの物の霊が人の夢に現れ、何かを語り人間を諭す一段を踏まえていることを指摘したのである。ところで、物の霊が登場する作品は都賀庭鐘の弟子である上田秋成にも見られる。『雨月物語』の「貧福論」である。「貧福論」の典拠は、徳田武氏によって『醒世恒言』の巻十八「施潤沢灘闕遇友」が既に指摘されているが、実は「施潤沢灘闕遇友」と同じく金の霊が登場させた『初刻拍案驚奇』巻一「転運漢巧遇洞庭紅 波斯胡指破

「龜竜殻」のほうが、「施潤沢灘闕遇友」よりも、「貧福論」と多くの共通点を持っている。そこで上田秋成が典拠としたのは「施潤沢灘闕遇友」よりも、むしろ「転運漢巧遇洞庭紅波斯胡指破龜竜殻」のほうであるという結論に達した。最後に、『繁野話』第一篇の創作方法が「貧福論」に与えた影響について考えた。すなわち、都賀庭鐘の作品は上田秋成の『雨月物語』、『春雨物語』に多大な影響を及ぼしていると考えられているが、庭鐘が、『警世通言』の卷十一「蘇知果羅衫再合」の入話(冒頭の部分)に「色、酒、財、氣」の四つの物の妖精が夢の中に登場する型を、自分の作品に取り入れたように、秋成も「転運漢」の中に枕元に現れる金の精霊が主人と問答する型を、「貧福論」に取り入れたのである。

第四章『莠句冊』第三篇「求家俗説の異同家神の靈問答の話」小論」では、まず『水滸伝』の魯達の面影がどのように利用されたかについて『水滸伝』の関連箇所と比較してみた。その結果、徳田氏の指摘した『水滸伝』第五回の魯達が劉老人の娘を救う一条だけではなく、円性法師には全体的に魯達の面影が投影されていることが分かった。次に、神憑りの趣向を考察し、これは庭鐘が『警世通言』卷二十七「假神仙大開華光廟」に拠っている可能性が大きいことを提示した。両者の間には、神の霊と人間との問答の内容は違うのであるが、神の霊が人に憑依する時の様子、語り終わった後神憑りした人がぼったりと地面に倒れることや、意識が戻った後に、起こった事について何も覚えておらず、これを奇異に思うところなどは、すべて一致している。そして、庭鐘がこの神憑りの趣向を用いたのは、三番目の伝説の正当性を強調し、海の王族が背景にあるもう一つの伝説の可能性を提示しなかったところにあつたと、考えた。最後に、三つの伝説の「異」と「同」に注目してみると、三つの伝説における女性の愛に対する態度が著しく変化していることが分かった。しかし、これらの背景には、三つの伝説の共通点として、世の事はすべて「酒色財氣」の四つに拠っていることにある、という考え方があり、庭鐘は、それを人々に言い聞かせているところがある。第三篇の作意と主題はかなり難解であるが、これが作者の言いたかったことの一つではないかと考える。第三篇に使われる素材には、『大和物語』にあるおとめの伝説、『水滸伝』の魯達の話、『聊齋志異』の「恒娘」、『西湖佳話』の「西泠韻蹟」などがあるが、これらは本来関係のない話であったのだが、三つの伝承の中にそれぞれ織り込むという方法を使うこと^{たつかゆみ}によって、バラバラの素材を有機的に繋げたのである。『繁野話』の第三篇「紀の関守が靈弓^{たつかゆみ}一旦白鳥に化する話」の翻案方法を、庭鐘自身は序文で「手束弓の故事に任氏の伝奇を繋ぎ」と書き、「繋ぎ」の方法を明かしている。『莠句冊』第三篇「求家俗説の異同」においても、本来無関係の話を「繋ぎ」の方法によって有機的に整合しているのであると考える。

三 石川雅望の読本と中国古典小説

石川雅望（宝暦三年（一七五三）～文政十三年（一八三〇））は、国学者・狂歌作者であると同時に、読本作者でもある。『雅言集覧』、『源注余滴』などの国学研究の業績をあげ、『吾妻曲狂歌文庫』、『古今狂歌袋』、『絵本詞の花』、『画本虫撰』などの狂歌絵本をも刊行している。「三言」の『醒世恒言』から巻六「小水湾天狐貽書」、巻二十八「呉衙内隣舟赴約」、巻三十四「一文銭小隙造奇冤」、巻十八「施潤沢灘闕遇友」の四つを選んで訳し、『通俗醒世恒言』と題し、寛政二年（一七九〇）に刊行した。また、清の孫洙の筆記小説『排悶録』を訳し『通俗排悶録』と題し、前帙を文政十一年（一八二八）、後帙を文政十二年（一八二九）に出版した。これは当時の中国文芸界の新しい動向を伺うのによい資料となった。『狂文吾婦那万里』のような狂文集もある。その他、読本『近江県物語』、『天羽衣』、『飛驒匠物語』を文化五年、文化六年に刊行している。

石川雅望について、粕谷宏紀氏に『石川雅望研究』（角川書店 一九八五年）があり、雅望の一生を年齢順に詳しく紹介している。鈴木敏也氏の『近世文学素描』（目黒書店 一九三四年）や、重友毅氏の『近世文学の位相』（日本評論社 一九四四年）などにも、石川雅望について論じた部分がある。また稲田篤信氏は『江戸小説の世界・秋成と雅望』（ペリカソ社 一九九一年）で、雅望の読本『近江県物語』、『天羽衣』、『飛驒匠物語』を論じておられる。しかし、石川雅望の読本と中国古典小説との関係を論じるものは少ない。本博士論文では、『近江県物語』、『天羽衣』、『飛驒匠物語』における中国古典小説の趣向を調査し、今まで指摘されていなかった典拠を指摘した。すなわち、『笠翁伝奇十種』、『史記』、『醒世恒言』、『警世通言』、『水滸伝』、『拍案驚奇』、『牡丹亭還魂記』などが石川雅望によって読本に取り入れられているのである。雅望の雅文を以って書かれた読本は、あまり評価を得ていなかったが、近時松田修氏の「戯作者の秘めたる毒―石川雅望」（『複眼の視座―日本近世の虚と実―』所収 角川書店 一九八一年、初出は「石川雅望の復権」『展望』一九一号 筑摩書房 一九七四年）によって石川雅望を再評価する動きが見られる。

本博士論文は石川雅望の再評価を志した。

以下は第二部の各章の内容展開である。

第一章『近江県物語』における中国戯曲『笠翁伝奇十種』の利用法の一端は、『近江県物語』と李漁の戯曲『笠翁伝奇十種』との関連を考察したものである。従来、悪役の常

人の人物像は石川雅望の造形したものであると論じられてきたが、実は、常人が藺生に和歌を送る発想や、常人が盗賊に加わる発想は、原典の「巧団円伝奇」に既に見られる趣向であり、石川雅望が全く新しく作ったものとは言えない。そして、「笏」の小道具に注目すると、これは「巧団円」における「尺」から生まれたものであるが、「尺」よりも大きい役割を果たしている。つまり、これは結婚に関わっているだけではなく、後に実の両親と巡り合う大事な証拠品となっているのである。小道具の一つからも雅望の翻案の優れた手腕がうかがえる。そして、最後に常人の身に起こった滑稽は『笠翁伝奇十種』の中にある「醜角」から得たものであると推測した。雅望は李漁のユーモアに知らず知らずの内に影響されたのである。

第二章『近江県物語』における中国白話小説の趣向利用について」では、まず男の主人公愛丸が一歳の誕生会の際に、さまざまな玩具が並んでいるなか、「笏」を選んだことに着目し、中国の風俗「試児」の趣向を指摘した。「試児」の風習は『顔氏家訓』に見られるのであるが、『顔氏家訓』はただ「試児」はどういう風俗であるかの紹介に留まっており、子供の将来が本当に「試児」で占った通りになっているのかどうかについての記述はない。しかし、『女仙外史』にはこれらの記述がみられる。当時三宅嘯山が『女仙外史』を訳し、『通俗大明女仙伝』を出版していたのであるから、同じく白話文学に関心を持っていた雅望も『女仙外史』に目を通した可能性は十分ある。彼は『顔氏家訓』から「試児」を知り、『女仙外史』から「試児」が確実に子供の将来を予言することをも学び、「試児」とその将来を予言できる役割が気に入りに、作品の中に取り入れ、愛丸に「笏」を選ばせたのである。さらに、愛丸が埋葬地から蘇るところに注目し、いくつかの共通点から、『醒世恒言』巻十四「鬧樊楼多情周勝仙」の趣向が取り入れられたことを指摘した。最後に、愛丸が長谷寺観音の申し子であることに着目し、愛丸が神様に祈って授かった点と神様から頂いた言葉が現実になった点を考えて、『初刻拍案驚奇』巻十三「趙六老舐犢喪殘生 張知県誅梟成鉄案」の入話（冒頭部）を使用している可能性を指摘した。

この三つの趣向の利用により、『近江県物語』は起伏に富み、神秘性と伝奇性が高まり、面白く展開させてゆくことができたのである。

第三章『近江県物語』における男の主人公―梅丸の人物造形について―は、梅丸の人物像を考察したものである。まず梅丸の名前に注目すると、江戸の木母寺縁起に関わる梅若

伝説における梅若丸の面影、そして坂上田村麿大將軍の面影が重ねられていることが分かる。そのほかに、『史記』の直不疑、范雎の故事をも使っているのである。特に、范雎列伝は「田村將軍」の章全体が踏まえていると言ってもよい。このように、雅望は主人公の梅丸の身に、中日の古典文学に見える人物の何人かの面影を重ねさせながら、多重的かつ立体的な梅丸の人物像を一步一步作り上げたのであった。仮死するまでの梅丸には、梅若伝説の梅若丸の面影を多く投影し、成人した後の梅丸に、田村麿、直不疑、范雎の面影を投じた。そして、雅望はそれらの故事と典拠をただ積みあげるのではなく、適切に利用し、梅丸の人物像を作り上げることに成功したのである。

第四章 『天羽衣』論―『醒世恒言』及び『史記』の趣向利用について―では、まず『天羽衣』が全体的に『警世通言』巻二十五「桂員外途窮懺悔」に拠っていることを確認した。しかし、『天羽衣』にある使用人の久は『警世通言』には見られない人物である。久の人物像は実は『醒世恒言』巻三十五「徐老僕義憤成家」にある徐老僕を参考にしていたと考えられる。主人に忠実な徐老僕の形象を久の身に移して、正義感を持った忠実な使用人―久を作り上げたのである。また、三保の長者が蔵を開き、飢餓の民を救った一段と、近隣の借用書を返した一段は、それぞれ、『史記』の「汲鄭列伝」にある「汲黯開倉」の故事と「孟嘗君列伝」にある「馮煖燒券」の故事を踏まえたものである。雅望が、自分の作品に正義の人物と、民の為を考える臣下の故事を取り入れたことは、弱者であった雅望自身が公事宿事件で受けた冤罪が終生彼に影響していたことを物語り、また、彼の理想社会への憧れと現実社会への訴えをも表している。

第五章 『飛驒匠物語』と『女仙外史』では、男女二仙が仙界で恋に落ち、それが露顕したため人間界に謫され、人間界で夫婦となり、因縁を全うさせた後に再び仙界に戻った、という物語の枠組みに注目し、従来、山口剛氏によって指摘されていた「蜃中楼伝奇」との関連性をもう一度考えた。その結果、全体的な骨組みは「蜃中楼伝奇」ではなく、『女仙外史』に拠っていることが分かった。「蜃中楼伝奇」から取り入れたのは、謫仙の男女が人間界で夫婦となった、という部分的な趣向のみに留まっているのである。「蜃中楼伝奇」には四人の謫仙が仙界に戻るような記述は全くなく、謫仙の理由と仙界に戻る条件についても言及はなかった。謫された場所は人間界と水界の二世界に分かれ、二組の結婚も、山人と女一の宮のように、人間同士の結婚ではない。それに対して、『女仙外史』には、これらに

ついでに記述が見られる。そして、女一の宮と唐賽児との間にも共通点が見られた。『飛驒匠物語』は『女仙外史』から骨組みを取ったのである。『女仙外史』の日本における受容は、馬琴の読本だけではなく、雅望にも見られたのである。これは、『女仙外史』が読本に強い影響を与えたことを示すことになる。

第六章 『飛驒匠物語』における『水滸伝』、『初刻拍案驚奇』、『牡丹亭還魂記』の趣向取りについては、『飛驒匠物語』の巻一の「ほうらいの山」、と巻四の「夢のたぐち」に注目し、『水滸伝』、『初刻拍案驚奇』と戯曲『牡丹亭還魂記』の趣向利用を指摘した。「ほうらいの山」で、墨繩と松光が牧童に出会う場面は、『水滸伝』の第一回に見られる牧童の一条によるものである。牧童の出現と彼の語りにより、異境に入った神秘性が強調されている。また、仙人が契をなしたことで鍊丹が成就できず、二人の恋が発覚した部分は、『初刻拍案驚奇』巻十八「丹客半黍九還 富翁千金一笑」によるものであると考える。なお、女一の宮が夢を見る「夢のたぐち」の章は、明の湯頭祖の名作『牡丹亭還魂記』の「驚夢」「尋夢」の二幕からヒントを得て、書かれたものであると筆者は考える。妙齡の二人の女性は、昼寝をして、夢を見て、夢の中で美しい男性と語りあい、夫婦の契をなす。そして、夢が醒めても、尚男性に会いたくて、もう一度夢を見て、夢の中の人を捜す。以上の展開は、両者に共通している。『牡丹亭』の日本での受容は、まだ明かになってはいないが、戯曲を愛読し、作品の中によく戯曲の趣向を取り入れた雅望の読本において、最も早く『牡丹亭』の受容が見られたのではないかと筆者は考える。

第七章 「雅望と馬琴―『笠翁伝奇十種』と『女仙外史』の利用法を中心に―」では、雅望と馬琴がともに素材に使った李漁の戯曲『笠翁伝奇十種』と呂熊の白話小説『女仙外史』の利用法を比較してみた。

『笠翁伝奇十種』の利用法に関しては、『笠翁伝奇十種』を利用する際に二人が使う表現形式、翻案にあたって各々重んじるもの、素材を選ぶときの着眼点の三つに絞って分析した。馬琴は、戯曲の表現形式をそのまま取りいれ、翻案する時に原典の滑稽の要素を減らし、勧善懲悪の面を強調した。そして、『笠翁伝奇十種』の中から一番政治と歴史の要素が強い「玉搔頭」を撰び、君臣を誡める一篇を成したのである。一方、雅望は、馬琴とは違い、表現形式の面では戯曲の形を取っていないが、読本中に多くの笑いを取り入れている。これは戯曲の醜角の影響を受けていると考えられる。奇跡的な巡り会いの構想を取り入れ、

結末もハッピーエンドで終わらせている。

次に、『女仙外史』の利用であるが、雅望が利用したのは、嫦娥が下されて、人間界で天狼星との間の「恩怨」を解消した後に天界に戻った構想であった。これを利用して、恋に落ちた男仙と女仙を人間界に下し、人間界で結婚させて、その愛を全うさせた後に天界に戻らせる、という物語に作り上げている。だが、馬琴の場合は、『女仙外史』の中の「転生」の趣向ではなく、唐賽児が忠臣の後裔を集め、建文帝の帝位を奪った燕王に立ち向かう所と、呂熊の使った「春秋誅心」の方法を『侠客伝』に取り入れたのである。

注

- 1 石崎又造『日本近世における支那俗語文学史』弘文堂書房 一九四〇年
- 2 中村幸彦「読本発生に関する諸問題」(『中村幸彦著作集』第五卷所収 中央公論社 一九八二年)
- 3 中村幸彦「唐話の流行と白話文学書の輸入」(『中村幸彦著作集』第七卷所収 中央公論社 一九八四年)
- 4 青木正児「御文庫目録中の支那戯曲」(『書肆学八―五』 一九三七年)
- 5 新井白石が『俳優考』で元曲百種が日本に伝わったと記したこと、雑劇と猿楽とを比較したこと、荻生徂徠が『南別都留』で能楽が元の雑劇を真似たと記したことは、前掲青木氏論文と中村幸彦氏の「唐話の流行と白話文学書の輸入」に詳しい。
- 6 徳田武「庭鐘と『四声猿』」(『日本近世小説と中国小説』第二部第五章所収 青裳堂書店 一九八七年)
- 7 徳田武氏は『秋成前後の中国白話小説』(勉誠出版 二〇一二年)第一部第一章「近世小説と中国文学」に、戯曲を翻案した作品を纏めている。
- 8 中村幸彦『中村幸彦著作集』第十一卷「漢学者記事」所収 中央公論社 一九八二年
- 9 中村幸彦・高田衛・中村博保・校注『英草紙』(小学館 一九九五年)頭注 一五二頁
- 10 徳田武『『貧福論』と『施潤沢灘闕遇友』』(『近世文芸研究と評論』 二十七号 一九八四年)

第一部

都賀庭鐘の読本と中国古典小説

第一章 『英草紙』第七篇 「楠^{くすの}彈^{だま}正^{ただ}左衛門不^は戰^せして敵^{てき}を制^{せい}する話^{ことば}」小考
— 『史記』、『水滸伝』の趣向取りについて —

一 はじめに

『英草紙』についての研究は今まで盛んに行われてきた。その中、第七篇を除いて、ほかの八篇が中国白話小説集「三言」の『喻世明言』・『警世通言』の作品の翻案であることはすでに周知のことであり、これらの八篇についてはさまざまに研究が進んできた。それに対し、第七篇に関しては、中村幸彦氏校注の『英草紙』（新日本古典文学大系）の頭注以外に、論じたものがあまりないのが現状である。

中村幸彦氏は、この第七篇は『庄内物語』などに見える出羽国大山の武藤義氏の滅亡を舞台に、和漢の雑史・小説に見える軍略の奇法を採り入れて作ったものである⁽¹⁾と指摘し、同時に、その戦略を『水滸伝』や、『通俗漢楚軍談』から案を得たと推測している⁽²⁾。

『英草紙』のこの第七篇は、ほかの八篇と違って、唯一戦いを取り扱っている作品で、戦略をうまく描いた作品である。物語は、中村氏の考察したように、『庄内物語』の中に見られる武藤義氏の滅亡を背景にしているが、戦いの中で使われたいくつかの戦略は、実は中村氏の指摘した作品以外にも『史記』などの中国の古典の中に求めることができると思われる。本章は第七篇の中に用いられた戦略に注目し、中村氏の指摘した典拠を再検討するとともに、それ以外の中国の古典との関わりを明らかにしたい。中村氏の指摘は頭注ぐらいしかないので、本章では、より詳細な比較を通して、典拠との関連を追究したい。またそれらの考察を通して、都賀庭鐘のこの一篇における翻案の特徴を見出そうと考えている。

二 物語の概要

出羽国の大山城は、武藤氏が代々所領してきた。その十八代目の義氏は武勇自慢で、百姓のことを考えず、無益な戦争ばかりを起こして、兵卒にも嫌われていた。しかし、彼は生まれながらの力持ちで、敵と斬りあう時には、これに近づくものはいないほどであった。

隣の郡の川北というところに、七党といって、頭立った侍が七人いた。昔はいずれも武藤家に仕えていたが、義氏の無道を嫌い、武藤家に従わなくなり、七人が一致して、各自の領土を守っていた。義氏は七党の態度に怒り、代々の家臣^{とうぜんじ}東禅寺右馬介^{まのすけ}に七党を討伐さ

せようとした。

七党の中に楠弾正左衛門という人がいて、日頃兵法を好んでいた。彼は七党のリーダーとなつて、いくつかの計略を立て、ついに義氏を滅ぼした。

三 第七篇の中に見られる三つの計略

楠は義氏との戦いの中で、力の面では義氏と対抗できないことを充分に認識していたため、防御から攻撃まで真正面からではなく、知恵を使って、ひそかに謀略をめぐらし、義氏を次第に追い詰めた。まず物語順に従つて三つの計略を紹介しておく。

1 義氏が東禅寺を大将にして、川北を討伐するのを聞いて、楠は七党の一人の田川に「急に東禅寺が旗印、さしもの等を似せこしらへ、こよひ間道をめぐりて、大山の本城にとりかけ、東禅寺右馬介、義氏をうらむることありて、諸卒と共に謀反すと披露し、戦をいどみ、よいかげんにしてひきとるべし」と策を伝えた。

田川は楠の言ったとおりに、東禅寺の旗印と指物の偽物を作つて、風体を東禅寺のようにして、間道を回つて、大山城に押しかけ、「屋形に御腹めさせんため、東禅寺右馬介、途中より取つてかへしたり」と叫ぶ。義氏ははなはだ怒り、二百精兵を使って、田川が扮する東禅寺を追いかけたが、田川はうまく逃げ出した。

本当の東禅寺は本城で戦いが起こっているのを聞いて、引き返して城に入ろうとした。すると、城から無数の矢がいかけられ、また妻と子の頭が投げ出された。東禅寺はこれを義氏の悪行だと思い、大衆に力を合わせて、義氏を殺そうとして、何度も攻撃をしたが、義氏自らの防戦で、東禅寺も疲れはて、いったん退却した。義氏も東禅寺の心が変わったと見て、今度は自分で川北を攻めようと準備する。

この離間策によつて、楠は義氏の兵力を減らすことができ、また、東禅寺と義氏との間にうまく亀裂が入つたために、後に東禅寺に協力してもらふことができたのである。

2 義氏の武勇は七党の兵力ではなかなか敵対できないと分かつて、義氏が川北を攻めるのを前にして、楠はまた計略を考え、「明日一日敵を（筆者注、川北に）わたさねば、義氏に一生川北の地を踏ますまじく覚ゆる」と言う。

義氏は翌日一万騎を率い、川を渡ろうとするが、川の水が滔滔と漲つて、岸にも溢れだ

すほどであった。これでは渡りようがなく、水位が下がるのを待っていたところ、夕方になると、水嵩が少し低くなった。が、本城から急使が来て、義氏の留守の間を狙って、東禅寺が襲ってきたという。そこで義氏はここから引き返し、東禅寺を撃退したが、しばらく軍隊を休ませ、川北への討伐も延期しなければならなかった。

これらのことは実は楠が初めからよく打算した計略であった。彼はひそかに兵力を湯殿山に派遣した。兵士たちは最上川の上流で、幅の狭いところを選び、大樹を切って倒し、川に入れて水を堰きとめ、山に沿って湛えおき、義氏が川を渡ろうとする日の夜明けから、水をせき止めた大樹を取りのぞき、水を流し、一日だけの洪水を起こさせたのである。

また、随分前から楠は東禅寺のところに使者を遣り、義氏が川北へ出陣している留守を襲うように頼んでおいた。東禅寺はその言葉に応じ、本当に本城を襲撃し、一方の義氏は結局川北を渡ることができず、引き返した。

一日だけの洪水と東禅寺との協力によって、義氏はとうとう川北に渡ることを果たせず、そのまま川北を攻めようとする気を次第になくすようになった。

3 川北に草苺大蔵という侍がいて、その妻は器量がとてもよい。先に東禅寺に扮した七党の中の田川次郎左衛門は好色で、草苺の妻と密通し、その妻を自分の館に隠した。草苺は大いに田川を恨み、義氏のところに赴いた。彼は義氏に早く川北を討伐すれば、自分も田川への恨みを晴せると勧めたが、義氏はやる気が出ず、どこへも戦を起さず心配さえないく、英気を養っていた。

その頃、相模坊さがみぼう尊海そんかいという修験者がいて、人の悩みを祈祷し、効果があると言われ、百姓たちから尊敬されていた。義氏は普段このような祈祷を軽蔑していたが、東禅寺や川北のことで悩み、尊海を家に招いて、家運を占ってもらった。

尊海は義氏の手相を見て、「今日より七日の間、甚だ重き御つつしみなり」と言う。そして災いを避ける術を「唯御席所を別所へ移してさげ給へ。今日をはじめとして、毎日四方二里の外に忍び行きて、心をすまし、安居し給へ。」と教えて帰った。

義氏は尊海の言葉を信じ、一日目は南方へ、二日目は東方へ、三日目は北方へ、昼は行って、夜は城に帰った。

四日目は西の方、高館山のおもと、新山の森という深く茂っている森に行って、心を澄まし、謹んでいた。日が西に落ちる頃、義氏が疲れて、敷皮の上で寝ていると、鋭い太刀打ちの音に目が覚めた。見れば、目の前に腹心の草苺大蔵と高坂中務が、腹心のもう一人

の佐藤刑部を殺したところであった。「どうしたことか」と叱ると、森の奥から楠弾正左衛門、田川、大庄寺、酒田、山中などの七党がつきつきと現れてきて、草苅も高坂も七党の仲間であることが分かった。義氏は切腹し、武藤の家では、義氏の弟兵庫頭義興を立てて、十九代の屋形とした。

敵の内部にスパイを置くことと占い師を利用することが楠の考えた三つ目の計略である。このように、知恵を働かせて三つの計略を立てたことで、勝ちよくなかった戦いに七党は勝ったのである。

四 三つの計略に見られる中国古典の趣向

楠弾正左衛門をはじめとする七党は義氏との戦いで、本篇の題に記されたように、本当に「戦はずして、相手を制」したのであった。戦は戦力だけで対抗するものではなく、時には知恵が肝心な働きを果たすことを示したのである。都賀庭鐘は『英草紙』の中で、計略を以って勝利を収めた一篇を設けたのは、その「戦はずして制する」ところにある奇、不思議さを読者にアピールするためであった。

次は具体的に三つの計略を分析してみよう。

ア 敵の旗印などを使って相手を騙す計略

楠が考え出した一つ目の計略は敵軍の旗や、指物を作って、田川を東禅寺に装わせて、義氏と東禅寺との仲を離間する離間策である。

(1) 『水滸伝』の趣向

敵側のものを使って、その目を欺くような戦術は『水滸伝』の中にも見られる。それについて中村幸彦氏は以下のように指摘している。⁽³⁾

旗印を他人の、または敵の軍のものを用いて、敵を欺くこの方法は、『水滸伝』（百二十回本）第三十四回、秦明を味方にするため、秦明の兵隊の服装で、まず青州を騒がせた一条による。真の秦明が帰った時には、青州側はその妻を殺して、秦明を入れなかった。よって秦明は青州を離れる。

中村氏の説明が簡略であるため、『水滸伝』の筋について、もう少し説明を加えよう。

秦明は黄信から手紙を受け、花榮が清風山の強盗たちと仲間になって、朝廷に反しようとしていると知って、自ら五百大軍を率いて、清風山に向かった。が、戦いの中で、失敗して、捕まった。花榮、宋江たちは彼を招待して、疲れた彼に酒をたくさん飲ませた。そのため、秦明はすっかり酩酊し、翌日の夜明けになってやっと目覚めた。彼は急いで城に戻ったが、たくさんの人が死んで、倒れているのを見て、驚愕した。城に入ろうとするが、敵とされる。そして、慕容知府は秦明が昨日の夜城に帰って、百姓を殺したと言って、彼を捕まえようとする。秦明は自分のしたことではないと訴えたが、慕容知府はつぎのような行動を取る。

知府喝道、我如何不認的這廝的馬匹、衣甲、軍器、頭盔、（中略）你如今指望賺開城門取老小、你的妻子今早已都殺了。你若不信、与你頭看。 軍士把槍將秦明的妻子首級挑起在槍上、教秦明看。 秦明是個性急的人、看了渾家首級、氣破胸脯、分說不得、只叫得苦屈。城上弩箭如雨點般射將下來、秦明只得回避。（知府は大いに怒り、「きさまのその馬、鎧、武器、兜を、私が分らないはずがない。（中略）今城に入って、家族を連れ出そうとしているだろう。きさまの妻は、今朝とつくに殺してしまった。信じなかったら、頭を見せてやろう。」と言った。すると、兵士は槍を取り、秦明の妻の頭を穂先にかけて、秦明に見せた。秦明は気が短くて、妻の頭を見るなり、胸もはりさけんばかりにかつとなり、いいわけもできずに、ただ「ひどいこと」ともだえるばかり。そこへ、城から矢が雨のごとく射込まれてきて、秦明は仕方なく身を避けた。⁴）

そして、ついに宋江はその真相を打ち明ける。

総管休怪。昨日因留総管在山、堅意不肯、卻是宋江定出這條計來、叫小卒似総管模樣、卻穿了足下的衣甲、頭盔、騎着那馬、橫着狼牙棒、直奔青州城下、点拔紅頭子殺人。（総管どの、どうか私達を責めないでください。昨日、貴方を山にひき留めようとしたが、堅く断られたので、宋江がこのような策を考え出した。あなたの姿によく似た部下に、貴方の鎧、兜をつけさせ、その馬に乗らせ、狼齒棒を横たえさせて、青州城下へやり、手下の者たちを指揮させて、人殺しをやらせたのです。）

さて、ここで『水滸伝』の内容と『英草紙』第七篇の内容とを、詳細に比較し、中村氏の説を再検討してみたい。

上の引用文の傍線部、「叫小卒似総管模樣的、卻穿了足下的衣甲、頭盔、騎着那馬、橫着狼牙棒、直奔青州城下、」の部分は、自分の部下に秦明の格好をさせた箇所である。秦明を自分たちの仲間に入れるために、秦明の服装、兜、武器などを使って、敵の知府を欺いたのである。夜なので、知府は秦明の顔がよく見えず、服装、兜、武器以外では、秦明であるかどうかを判断する方法がなかったのである。

同様に、第七篇の中においても、「田川下知にまかせ、俄に東禪寺が旗印をこしらへ、みづから右馬介が体に出でたち、其の夜間道より出でて、大山の城へ押し寄せ」たのである。

楠が田川に東禪寺の風体を装わせ、城に取りかけさせた。これも夜のことなので、義氏は偽りの東禪寺の顔がよく見えず、やはり外見的なものでしか判断できなかったのだった。

また、引用文の傍線部、「你的妻子今早已都杀了（中略）与你头看、軍士把槍將秦明的妻子子級挑起在檜上、（中略）城上弩箭如雨点般射將下來」など、妻の首を切って、槍の穂先にかけて主人に見せる処や、城から矢が雨のごとく飛んできたような描写が第七篇では、「やくらより雨のごとく矢を射出し、城中にのこせし右馬介が妻子の首を切つて投げ出したしたり。」のようになっていいる。読んで分かるように、この描写も庭鐘が『水滸伝』からヒントを得たことを示唆している。

このような細部にわたる共通点から見ると、『英草紙』第七篇を創作した際、庭鐘が『水滸伝』あるいは当時流行している『水滸伝』の翻訳本を目にしていたことは確実であろう。しかし、ここで注目すべきところは、『水滸伝』の中には、「旗印」に関する記載がないことである。では、敵の「旗印」を真似る、という戦略を都賀庭鐘はどこから得たのであるう。

(2) 『史記』の趣向

「旗」が戦争の中で重要な役割を果たした例は、『史記』の中に見られる。それは敵の旗を作るのではなく、自分の旗を敵軍の陣内に差し込むことによって、敵を混乱させ、慌てさせ、冷静に状況を考えさせないようにするという戦略である。

これは『史記』の列伝第三十二「淮陰侯列伝」の中に見られる。

韓信と張耳は趙の国を攻撃しようとした。これを聞いて、趙の国の広武君李左車が成安君に、韓信の攻撃を防ごうといるるアドバイスをしたが、成安君は聞きいれなかった。韓信は使いをやって、趙の行動を盗み見させた。広武君の意見が採用されなかったのを聞

いて、彼は次のような行動を取る。

(筆者注、韓信) 兵を引きて遂に下る。未だ井陘せいけいの口に至らざること三十里にして、止まり舎す。夜半に伝を發し、輕騎二千人を選び、人ごとに一赤幟せきしを持ち、間道の草山よりして趙軍を望ましむ。誠めて曰く、趙、我が走ぐるを見るや、必ず壁を空しくして我を逐はん。若、疾く趙の壁に入り、趙の幟を抜き、漢の赤幟を立てよ、と。(中略) 趙果たして壁を空しくして漢の鼓旗を争ひ、韓信・張耳を逐ふ。韓信・張耳已に水の上の軍に入り、軍皆死を殊めて戦ひ、敗る可からず。信の出だす所の奇兵二千騎、共に、趙、壁を空しくして利を逐ふを候ひて則ち馳せて趙の壁に入り、皆趙の旗を抜き、漢の赤幟二千を立つ。趙軍已に勝たず、信等を得ること能はず、壁に還歸せんと欲す。壁皆漢の赤幟にして大いに驚き、以為へらく漢皆已に趙の王・將を得たるならんと。兵遂に乱れて遁走し、趙の將、之を斬ると雖も、禁ずること能はざるなり。是に於て漢の兵夾み撃ち、大いに破り、趙軍を虜にし、成安君を泚水ちすいの上に斬り、趙王の歌を禽とりにす。『史記』「淮陰侯列伝」 原漢文)

右に引用した部分の粗筋を簡単に言うと、以下のようなになる。

韓信は兵士を率いて井陘口三十里のところまで泊まった。夜中に、輕騎二千人を選んで、間道から山に入って隠れ、趙軍を監視した。また彼らを誠めて「趙軍は私達が敗れるのを見て、きつと城を空けて私達を追いかける。その時をねらって、すばやく趙軍の城に入つて、趙軍の旗を抜き、漢軍の赤い旗を立てたまえ」と言った。その結果、漢軍が負けたふりをする、趙軍は本当に城を空けて追いかけてきた。韓信の言ったように、二千の輕騎はすばやく趙の旗を抜き、漢の赤い旗を立てた。趙軍と漢軍は水の中で戦つて、漢軍は必死に戦い、趙軍はそれに対抗できないので、城に戻ってくる。すると、旗が全部赤色の漢の旗になってしまったのを見て、趙王はもう虜になったと考え、みんな逃げだした。將軍がそれを斬つても、止められなかった。最後、趙軍は敗れて、成安君も泚水の上に斬られ、趙王の歌も捕まった。

韓信は兵法にとっても通じていて、この列伝中では彼はいくつかの計略を使って、うまく敵を撃退している。

その中でも右の引用の部分は、自分側の旗を敵軍に立てることで、敵軍の心を惑わし、慌てさせる効果を果たし、うまく勝利を収めたものである。

ここに出てきた「旗」は『英草紙』第七篇の中の敵側の「旗」ではないが、軍の印とも言える旗をもつて、計略をめぐらし、敵軍を惑わし、欺く効果は同じであった。

都賀庭鐘は『水滸伝』の第三十四回から服装や、兜、武器、人の風体を装うことなどのヒントを得たが、「旗」に関しては、やはり『史記』の記載から案を得たのであろう。

というのも、この他にも字面の一致という点において、『史記』のこの記載と、第七篇との間には共通点が見られるからである。

「間道」という言葉に注意しておきたい。第七篇の中の「(田川) 俄に東禅寺が旗印をこしらへ、みづから右馬介が体に出でたち、其の夜間道より出でて……」の□で囲んだ部分は、右の引用文の「人ごとに一赤幟せきしを持ち、間道の葦山よりして」と趣がよく似ている。違うところは前者が二千人であり、後者は田川一人であるところである。

恐らく、都賀庭鐘は第七篇を創作するに当たって、その素材は一つだけではなく、日本の『庄内物語』をも参考にしながら、中国の『水滸伝』にも目を通し、また『史記』をも読んでいたのであろう。即ち、素材を一つの典拠から選ぶのではなく、何種類の典拠から趣向を取ってきて、それらを庭鐘なりにひとつに組み合わせ、自分の創作に活かしたのであろう。

『水滸伝』からは服装や、風体の装い、秦明の妻の頭を見せるところ、城から矢が雨のように飛んでくるような趣向を取り、『史記』からは「夜の間道」と「旗」というヒントを得たのではないかと考える。

イ 大樹などで水をせきとめ、必要な時に洪水を起こす戦略

「三 第七篇に見られる三つの計略」の部分で述べたが、楠は義氏を川北に渡らせないために、前もって兵力を湯殿山に派遣し、最上川の上流で、幅の狭いところを選び、大樹を切って倒し、これを川に入れて水を堰きとめ、山に沿って川の水を湛えておき、義氏が川を渡ろうとする日の夜明けから、水をせき止めた大樹を取りのぞき、水を流し、一日だけの洪水を起こさせた。

(1) 『史記』の趣向

実は、このような場面は先に紹介した『史記』の列伝第三十二「淮陰侯列伝」の中にも見られる。それは、韓信が漢の赤旗を趙軍に立て、それによって趙軍の心を惑わし、戦いの勝利を収めたすぐ後の話である。

韓信は斉の国を攻め、楚は龍且を大将にして、斉を助けようとした。

ある人が龍且に勧め、「漢軍は遠いところから戦いに来て、失敗したら逃げられないから、勇猛に戦うに違いない。今、斉王の腹心を漢軍の占領した各地に行かせ、斉王がまだ生きていることを伝えさせてください。すると、みんなは王が生きていること、楚軍も助けに来ていることを知ったら、必ず各地で漢軍に反発します。その時、漢軍は食べるものも見つからなくて、戦いにはきつと負けます。」と言った。

が、龍且は韓信が肝の小さい人と思いきや、この勧めを聞きいれなかった。そして、両軍は淮水を挟んで戦いを始めた。韓信は次のような戦略を取った。

韓信乃ち夜、人をして万余の囊を為り沙を満盛し、水の上流を壅がしめ、軍を引きて

半ば渡り、龍且を撃ち、詳いっはり勝たずして、還り走ぐ。龍且果たして喜びて曰く、固より信の怯なるを知れり、と。遂に信を追ひて水を渡る。信、人をして壅おぎし囊を決

せしめ、水大いに至る。龍且の軍、大半渡ることを得ず。即ち急に撃ちて龍且を殺す。

龍且の水東の軍、散じ走げ、斉王広も亡げ去る。

右の引用文は韓信が龍且を撃退した部分である。彼はまず人を使って、夜に、囊に砂をたくさん入れさせ、一万個あまりの砂囊で淮水の上流を塞ぎとめることを命令した。彼は半分の軍隊を率いて川を渡って、龍且の軍隊と戦ったが、負けたふりをして、逃げる。龍且は果たして韓信が怯えたと信じ、追いかけて来る。韓信は兵士に砂囊を取り除かせ、大水を起こさせる。龍且の軍隊は半分ぐらい渡ることができない。そこを韓信は急撃して、龍且を殺す。龍且の軍隊は逃げ出し、斉王も逃げさった。

韓信は砂囊で水を堰きとめさせておいて、敵軍が追いかけてくるのを見て、砂囊を切りはなし、大水とさせたのである。

「砂囊」だった道具は第七篇では、大樹に変えられて登場する。楠は人を湯殿山に派遣して、「大木を斬って倒しかけ、水をせきとどめ、山に沿うて湛へ置き、敵の川を渡らんずる日の未明より、水せきの大木取り流せしかば、清川俄に水出でて、一日の洪水をなした。使われる道具は異なるけれども、計略そのものは同じである。水をせき止め、必要な時に、水を堰きとめていた道具（砂囊か大樹）を取り除き、洪水を起こして、敵を混乱させ、川を渡らせないようにするのである。韓信は中国史上において、戦略がうまいことで有名であるが、庭鐘は第七篇のはじめの所に楠について「平生些しの謀略あり」と紹介している。おそらく、庭鐘は、楠に韓信の面影を重ねさせたかったのであろう。

(2) 『通俗漢楚軍談』の趣向

ところで、中村幸彦氏はこの水を堰きとめて川を渡ろうとする敵を阻害するという計略を『通俗漢楚軍談』巻第七「韓信定計取三秦」の条に求めている。⁽⁷⁾

この計略は、『通俗漢楚軍談』巻七「韓信定計取三秦」の条に、廢丘の城を攻めるに、白水の流れを砂囊で止めて、八月の半ば、秋水の漲るを待つて、砂囊を除き、一気に水を城中に流れ込ませたのに案を得たか。

韓信は廢丘の要害を破るために、

夜に入りてひそかに曹参を伴て高き山に上り、この城麓に白水の流あり、西北より出て城の東南を繞る、御邊千餘人の兵を率て囊に砂を盛て水の口を塞とめ、今八月の半なれば、秋水の漲を待て急に切て流し、又東南の河口に砂囊を積で其水を遮ば、水の勢急にして直に城中へ流入べし。⁽⁸⁾

と思案を巡らした。砂囊で水を堰きとめ、またこれを一気に取りこわし洪水を起こさせるのは、これもまた『史記』の「淮陰侯列伝」に源を遡ることができるであろう。

『通俗漢楚軍談』は江戸中期の読本であり、中国明代の甄偉作―『西漢通俗演義』の翻訳である。『西漢通俗演義』を書くに際して、甄偉は西漢の歴史に関する史料を読まない創作はできなかったであろう。『史記』は西漢の史料を豊富に記載しているから、彼にとつては、まさに都合のよい本であったと推測できる。

が、微妙に違っているところもある。『史記』では、砂囊で水を大量に堰きとめ、敵軍が追いかけてくると、すぐに砂囊を取りこわし、大水とさせたので、其の間に時間をあまり隔てていない。が、『通俗漢楚軍談』では、流れを砂囊で止めて、秋水の漲るを待つてから、砂囊を取りこわすのである。その間に時間がかかったのである。『英草紙』の第七篇も、大木で水を湛えとどめ、敵の渡ろうとするその日の未明から大木を取りはなし、洪水とさせたのであり、「秋水の漲るを待つ」ようなことはなかった。

それに加え、また前の旗印のことをも考えると、やはり庭鐘は『史記』の「淮陰侯列伝」を直接参考にしたと考えられる。庭鐘は『史記』に載るこの「淮陰侯列伝」の話がどうも好きで、文化三年に出版された『義経磐石伝』巻三の十二「漢の韓信大功有りて讒言を被し事」の中で、韓信の事蹟を書いている。その中にも、韓信が斉の国を征するとき用い

る方法について言及していた。すなわち、「韓信乗じて斉を襲ひ、田広高密に走る。楚より龍且を二十万に將と驚して斉を救ふ。濰水を夾て陣す信、囊沙を以て塞ぎ、龍且が軍の半渡る時、壅を決せて水大に至り、大半は渡ることを得ず。急に撃て龍且を殺し、楚の卒を虜にし、斉主亡て国を去る」とある。結末に「韓信實に反逆せず。是千古の憤る所なり。今義経の身の上も是に類して憐なり」と綴っている。庭鐘は、日本の義経が中国の韓信と同じ境遇をされたとの考えである。『英草紙』の第五篇「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」では、義経の不遇な一生を憐み、庭鐘は、彼を新田義貞に転生させたのである。これについては、第二章をご参照いただきたい。

ウ 間諜と占いの利用

(1) 間諜の使用

楠が使った三番目の戦略は間諜の戦略と言えよう。草苺という侍を義氏のところに行かせ、義氏の信用を得て、腹心になってもらう。草苺が義氏のところに行った理由は、自分の妻が七党の田川と密通し、また彼女が田川によって隠されているためである。妻が自分を裏切って、ほかの男と密通することは夫にとっては、非常な恥辱であり、男のプライドを強く傷つけることである。だから、草苺が義氏のところに行き、一日も早く田川の七党を討伐することを望んでいるのも、義氏から見れば、至極当然のことであっただろう。

『水滸伝』の中にも、間諜を派遣して、敵側の信頼を得て、最後に敵を遭難させたシーンがあった。これは第六十回「公孫勝芒碭山降魔 晁天王曾頭市中箭」の一節にあった。晁蓋は軍隊を率いて、曾頭市を討伐しに行く。しかし戦いはしたが、曾頭市の将領一人をも捕まえていない。晁蓋がそのことに悩んでいる時に、突然二人の坊主が晁蓋の陣にやってくる。二人の坊主がこう言った。

小僧是曾頭市上東辺法華寺里監寺僧人、今被曾家五虎不時常来本寺作踐囉啤、索要金銀財帛、無所不為。小僧已知他的備細出沒去處、特地前來拜請頭領、入去劫寨、剿除了他時、当坊有幸。(私どもは曾頭市の東側にある法華寺の監寺を勤める僧です。この頃、曾家の五虎が、しきりに寺を荒らし、金銀財帛を奪い、勝手な振る舞いをしていきます。私どもは彼らの出沒する所が分かります。今日伺いに来たのは将領たちにお願いして、早く曾の寨に攻め込んで、彼らを殺してほしいからです。彼らが滅亡するならば、我々の寺にとってこれ以上ありがたいことはないです。)

晁蓋はこれを聞いて、大いに喜び、その日の夜に、兵士を率いて、二人の坊主に案内されて、曾家の寨に行く。しかし、二人の坊主がただ道をすこしだけ進んだ処で、姿を消してしまった。夜道なので、案内を失った軍隊も勝手に動けない。すると、四方から太鼓を叩く音が聞こえて、見渡す限り、松明ばかりであった。晁蓋は兵士を引いて脱走しようとしたが、敵側の矢に射られた。なんとかして、逃げ出したものの、晁蓋に命中したその矢は毒矢なので、晁蓋は命を失ってしまった。

晁蓋は坊主は嘘をつかないと思って、他の人の忠告を聞かずに、坊主二人を信頼した。その結果、たくさんの兵士が命を失って、自分も命を失ってしまった。義氏もまた草苺を信頼し、最後になつてはじめて、草苺が間諜であると分かった。

一人の坊主には妻はいないので、妻を奪われた恨みから間諜になるという要素は『水滸伝』の記述にはないが、しかし、二人の坊主と草苺との間諜のあり方に類似がある。

第三者の誰かに信頼してもらう方法のひとつは、自分が第三者と同じ敵を持っている、その敵から被害を受けていることを伝えることである。二人の坊主は晁蓋たちと、曾頭市の五虎という同じ敵を持ち、草苺は義氏と、七党という同じ敵を持っている。それを信じてしまった晁蓋も義氏も悲惨な最期を迎えた。二人の坊主も草苺も間諜として役目を大きく発揮した。

また、「五虎」と「七党」の名前に注目してみると、数字の類似があることに気づく。『水滸伝』では、曾頭市の勇猛な五人兄弟のことを「五虎」と言う。これをヒントにして、川北にある頭たった七人の侍のことを「七党」としているのではないかと推測できる。

尚、『水滸伝』では、二人の坊主の間諜が出てくるのは、先にも述べたが、第六十回であり、これは呉用が占い師となって、北京の盧俊義を山に上らせる第六十一回のすぐ前である。次節の「占いの利用」で述べるが、占いの趣向は実は、庭鐘がこの第六十一回から取ったのである。『水滸伝』の第六十一回を読んだ庭鐘はその直前にある六十回にも目を通しただろうと推測するのも難しくなからう。

(2) 占いの利用

義氏は修験者尊海の占いに対して、少しも疑うことなく信じ、尊海の言う通りにする。

中村幸彦氏は、この占いについて、「この山伏のやり方、諸事ませこせて、これだけで、怪しい奴なのだが、迷った義氏が気がつかないこととしている。これも一種の心理的謀略

である事は、『水滸伝』第六十一回で、呉用が算者となって盧俊義を見て、東南方一千里の外に行けば難を避け得る、と説いた条の応用であろう。¹⁰と述べている。

中村氏が占い師の尊海を「怪しい奴」と言ってしまったのは、尊海を七党の仲間と考えているからであろう。氏は尊海の名前について、「この名は、『太平記』巻二十七に見える「仁海・尊雲」の二僧の一字ずつを採り、義経の家臣という常陸坊海尊を参考にして作ったもの」と指摘している。¹¹

庭鐘が『太平記』の「仁海・尊雲」の二僧から字を取ったかどうかは分からないが、この修験者の名を「相模坊尊海」と付けたのは、やはり義経の家臣「常陸坊海尊」の名前を意識して、それをまねたのであろう。彼が名前を工夫したのは、この占い師に常陸坊海尊の面影を重ねさせたかったのかもしれない。「常陸坊海尊」が義経の家臣であったことから、「相模坊尊海」も楠の家臣であるかもしれないと読者に聯想させたかったのであろう。

前に述べたが、中村氏は占いの一段を『水滸伝』の第六十一回の呉用が算者となって、盧俊義を占った一条によると指摘している。

補足すると、梁山泊の軍師呉用が北京の盧俊義を山に上がらせるために、算者の張氏と名乗って、盧俊義の吉凶を占う。そして、盧俊義には百日以内に大きな禍がふりかかると言い、その禍を避ける方法を「則除非去東南方異地上一千里之外、方可免此大難。（東南方の一千里の外に行かないと、この禍を避けられる方法はない）」と薦めたことを言っているのである。

それに対して、第七篇では、尊海は義氏に災いを避ける術を「禍をさくらの道、唯御席所を別所へ移してさげ給へ。今日をはじめとして、毎日四方二里の外に忍び行きて、心をすまし、安居し給へ。さわがしき世の中なれば、かならず人にしられ給ふな。今日南方よりはじめて、東北にめぐりて出で給ふべし」と教えている。

中村氏の指摘した通り、その禍から逃れる方法が『水滸伝』の趣向であることは明らかである。また、占い師の言葉を信じてしまった盧俊義も義氏もひどい目に遭った。盧俊義は呉用の言葉に従って、東南方に行つて、梁山泊に閉じ込められた。一緒に連れてきた下人は家に戻り、盧俊義が謀叛したと朝廷に告げ、自分が盧俊義の妻と財産を奪ったのである。義氏は尊海の言葉を信じ、西の方に出かけたら、七党に包囲され、切腹させられたのであった。

が、庭鐘はその趣向を活かすときに、すこし工夫をしているのである。『水滸伝』では、あらかじめ呉用の身分を紹介しておき、算者となるのは、盧俊義を梁山泊に上がらせるた

めの手段であることをはっきりと言っている。

が、庭鐘は尊海を登場させる時に、「其の頃日本の高山をあまねく巡拝し、出羽国の三山を拝して、尚奥へ通る修験者、相模坊尊海といへる山臥、人の憂をいのりて効験ありとて、村里の人民、是を尊敬すること、生不動ともいふべし」と紹介する。ここから、この修験者に関する情報を、深く探ろうとしても、あまり出てこない。唯一の手がかりである「相模坊尊海」の名前は、義経の家臣の常陸坊海尊を想起させるが、この修験者は一体どのような能力を備えた人物なのであろうか、と読者に自由に考えさせる余地をも与えている。はっきりと言わずに、余韻を残すことで、読者にいろいろと推測する楽しみを味わわせることができたのである。

小説や、軍記物語の中で、占いは一種の戦略としてよく使われるが、庭鐘もそれを第七篇に活かしている。余談ではあるが、実際には、庭鐘の占いそのものに対する見方はどうも否定的なようである。

同じく『英草紙』第八篇「白水翁が売卜直言奇を示す話」（122）の中でも、占い師が出てきて、男の人が今年今月今夜子時に死ぬと宣言する。男は怒って、家に帰って占いの話を妻に話す。その結果、子時になると、男は本当に家を出て、川に身を投げた。しかし、これらはすべてが見せかけであった。事實は、男の妻が別の男と密通していて、男が帰って妻に占い師の話をしていた時、密通していた男は彼の家に隠れていて、占い師の話を聞いた後、その妻と密通している男とが、夫が寝ている時に、彼を殺したのであった。

都賀庭鐘の占いに対する態度について、小川陽一氏が「三言と英草紙―三現身包龍凶断冤を中心に―」の中で、以下のように述べている。（122）

占いについては都賀庭鐘は「三現身」を含む明代小説が基盤としたものをはっきりと否定していた。「白水翁」の占いはたんに奇異なストーリー―構成の材料として用いただけである。」

また、都賀庭鐘自身は同じ『英草紙』の第九篇「高武蔵野守婢を出だして媒をなす話」（123）の中で、面相の占いに対して、こう言っている。

勸善の話に多く説く、極貴の相ある人も、悪を積めば陰徳を損じて、富貴に至らず。また極悪の相ある人も、善を積めば、禍を返して福となるといへり。是懲悪のことはにして、古代人を相するに謂はざる所、相家の深妙は尚高きに有るべし。悪相を變ずる程の善をなす人、はじめより悪相見ゆべきや。善相を失ふ程の悪をなす人、初より

善相と見ゆべきや。人相は善人悪人によるべきものならず。今日不善の人に出身発跡する人あり。善人にも下賤にうづもれ果つる人あるを以て見るべし。^(一三)

この一段を見てみると、都賀庭鐘の占いに對する不信感を讀み取ることができらるう。また、善人か悪人かは人相によって定まるべきものではないと言っている。

彼は、占いを利用し、ストーリーに変化を持たせることに成功した。一方、いくつかのキーワード（相模坊尊海の名前の工夫、草薙という川北からやってきた侍の設定など）を設けることによって、読者にこれはただの占いではなく、陰謀であることを暗示的に伝えている。

五 おわりに

本章では、楠が戦いの中で使った三つの戦略に注目し、その戦略に見られる中国の古典の趣向―『史記』の趣向と『水滸伝』の趣向―について考察してきた。

『史記』は古い時代から日本に伝わり、知識人たちに愛読されていた。また、江戸時代に入って、『史記評林』などの『史記』に注をつけて、その理解を深める本もたくさん日本に輸入された。『水滸伝』も早い時期に江戸に輸入され、享保十三年（一七二八）には岡島冠山がこれを『通俗忠義水滸伝』に和訳した。都賀庭鐘と同じ時代の建部綾足も『水滸伝』を翻案し、『本朝水滸伝』（安永二年（一七七三））を著した。特に金聖歎外書七十回本と李卓吾評閱一百回本が広く読まれ人気を博していたらしい。『水滸伝』の諸本研究については白木直也の研究が有名であり、また神田正行氏に『水滸伝』の諸本と馬琴^(一四)の論考もある。

庭鐘は恐らく『史記』と『水滸伝』を讀んで、その中の面白い話を心に留めたのである。そして後に、自分が「戦はずして制する話」を創作するとき、これらの面白い趣向を想起して、作品の中に活かしたのである。

『英草紙』において、第七篇はやや異質な存在であり、これはただ第七篇が唯一の戦いに関する作品であるからだけではなく、ほかの八篇とは違い、典拠の大枠をひとつの作品に求めることはせず、いくつかのテキストから素材を選び取り、作品の中で組み合わせるゆえであると思われる。ほかの八篇はそれぞれ『諭世明言』・『警世通言』の中の作品と一対一の関係を持っているのに対して、第七篇は日本の『庄内物語』を背景に、中国の『史記』からも素材を取り、『水滸伝』からもヒントを得、作品の中に持ち込み、それを生かし

ているのである。『英草紙』以後、『繁野話』や『莠句冊』の中にも、この傾向が見られる。

注

- 1 中村幸彦 高田衛 中村博保 校注、新日本古典文学大系 『英草紙 西山物語 雨物語 春雨物語』の頭注 一五二頁 (小学館 一九九五年)
- 2 注1に同じ
- 3 注1に同じ 一五四頁
- 4 『水滸伝』の本文の引用は『水滸伝』(施耐庵 羅貫中 中華書局 一九九八年)に拠った。翻訳は適宜中国古典文学大系『水滸伝』(平凡社 一九六八年)を参考にしながら、訳したものである。
- 5 『史記』「淮陰侯列伝」の本文の引用は、新釈漢文大系『史記』十(明治書院 一九九六年)による。ただし、旧字を常用漢字に改めた。
- 6 『史記』のこの砂囊の計略は、『本朝水滸伝』第二十八条でも、一捻りして使われている、『本朝水滸伝を読む并に批評』で、木村黙老がそのことを指摘し、馬琴も頭注で肯定している、と播本眞一氏からご教示をいただいた。恐らくこれは当時においてよく知られた趣向であつたろう。
- 7 注1に同じ
- 8 『通俗漢楚軍談』(有朋堂文庫 大正十五年)を参考にしながら、数箇所を早稲田大学図書館蔵『通俗漢楚軍談』(出版年不明 大坂河内屋板 請求記号へ1300710)によって改めた。
- 9 『義経磐石伝』からの引用は、『都賀庭鐘・伊丹椿園集』(江戸怪異綺想文芸大系2 高田衛監修 国書刊行会 二〇〇一年)による。

10 注1に同じ

11 注1に同じ

12 小川陽一「三言と英草紙―三現身包龍図断冤を中心に―」『和漢比較文学叢書』第七卷所収(汲古書院 一九八八年)

13 『英草紙』からの引用は新日本古典文学大系『英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』(小学館 一九九五年)による。

14 神田正行 『水滸伝』の諸本と馬琴『馬琴と書物 伝奇世界の底流』(八木書店 二〇一一年)に所収

第二章 『英草紙』の素材選択から見る都賀庭鐘の創作意識

— 『醒世恒言』が使われなかった理由 —

一 はじめに

『英草紙』は読本の嚆矢とされ、寛延二年（一七四九）に出版され、五巻にわたり、九篇の短篇小説を収めている。その中、すでに周知のように、八篇は明代の短編白話小説集「三言」の作品を翻案したものである。従来、『英草紙』の白話小説との関係について、多くは「三言」をひとくくりにして論じられてきた。⁽¹⁾

「三言」とは、明代の馮夢龍（一五七四—一六四六）が編著した短篇白話小説集『古今小説』（一六二一年、後に『喻世明言』と改題された）、『警世通言』（一六二四年）、『醒世恒言』（一六二七年）の総称である。

しかし、この八篇が「三言」の各「言」からそれぞれ典拠を取るのではなく、『喻世明言』と『警世通言』の「二言」だけから典拠を取り、第三「言」の『醒世恒言』をまったく利用していないことは、表一の対応関係の図を見てみると、一目瞭然である。なぜ第三「言」の『醒世恒言』は素材として選ばれなかったのであろうか。この問題に関しては、従来の研究ではほとんど触れていないのである。

しかし、これは都賀庭鐘の創作意識と彼の「三言」に対する認識と関わる重要な問題であると思われる。本章はこの問題を検討するものである。『英草紙』の各話と『喻世明言』『警世通言』との対応関係は表一に示している。⁽²⁾

表一

『英草紙』	『喻世明言』	『警世通言』
後醍醐の帝三たび藤房の諫めを折く話		卷三「王安石三難蘇学士」
馬場求馬妻を沈めて樋口が婿と成る話	卷二十七「金奴棒打薄情郎」 ⁽³⁾	
豊原兼秋音を聴きて国の盛衰を知る話		卷一「俞伯牙捧琴謝知音」
黒川源太主山に入ッて道を得たる話		卷二「莊子休鼓盆成大道」
紀任重陰司に至り滞獄を断くる話	卷三十一「閻陰司司馬貌断獄」	
三人の妓女趣を異にして各名を成す話	卷十二「衆名妓春風吊柳七」 ⁽⁴⁾	
楠弾正左衛門不戦して敵を制する話	「三言」との関係が見られない。 ⁽⁵⁾	
白水翁が売卜直言奇を示す話		卷十三「三現身包龍圖断冤」
高武蔵野婢を出だして媒をなす話	卷九「裴晉公義還原配」	

二 「三言」が日本に伝わった時期と『醒世恒言』の日本での流行

「三言」はいっつ日本に伝わってきたのであろうか。

幕府の『御文庫目録』⁽⁶⁾によると、寛文八年（一六六八）の入庫記録に、「諭世明言一名重刻増補古今小説 二四卷 明刊 六冊」とあり、承応二年（一六五三）の入庫記録に、「醒世恒言 四〇卷 明刊 葉敬池 十六冊」のように記されている。

また、大庭修氏の『舶載書目』（元禄十二年から宝暦四年までの長崎輸入書目）によると、『警世通言』は寛保三年（一七四三）に亥十四番の船で日本に舶載された⁽⁷⁾。さらに、中村幸彦氏の考察によると、享保二十（一七三六）年に亡くなった田中大観の『大観随筆』には、「嘗観小説名警世通言、……」⁽⁸⁾とのような記述が見られたという。このことから、『警世通言』は一七三六年以前に日本に伝わったことが推測される。

即ち、『醒世恒言』は一六五三年、『諭世明言』は一六六八年、『警世通言』は一七三六年以前に、日本に伝わっていたのであり、全て『英草紙』の発表された一七四九年より前の伝来であった。そのうち、『醒世恒言』が一番早く、凡そ『英草紙』の出版された百年ほど前に日本に舶載された。「三言」の中では一番遅く成立した『醒世恒言』は成立年と輸入年のタイムラグで言えば、一番早く日本に伝わったことになる。

「三言」が日本に広がると、当時の知識人たちはこれを「唐話」のテキストとして使い、かつ翻訳するようになった。特に『醒世恒言』の翻訳が盛んであった。

岡白駒が訳した『小説精言』（一七四三年）は、四卷全て『醒世恒言』の中の作品の翻訳である。それはそれぞれ、卷三十三「十五貫戲言成巧禍」、卷八「喬太守乱点鴛鴦譜」、卷二十一「張淑児巧智脱楊生」、と卷九「陳多寿生死夫妻」である。

同じく岡白駒の『小説奇言』（一七五三年）は、五卷のうち二卷が、『醒世恒言』の卷十「劉小官雌雄兄弟」と卷七「錢秀才錯占鳳凰儔」を訳したものである。そのほかの三篇は『諭世明言』、『警世通言』、『西湖佳話』からそれぞれ一篇を選んで訳したものである。

また、『近世白話小説翻訳集』（汲古書院 一九八四）を見てみると、「三言」のうちでは、やはり『醒世恒言』に訓訳を施すものが多く見られる。

岡白駒の弟子の西田維則と言われる贅世子が翻訳した『通俗赤繩奇縁』（一七六六年）は四卷四冊からなり、『醒世恒言』の卷三「売油郎独占花魁」を四章に分けて訳した作品である。

また、訳者不明の『通俗繡像親裁綺史』（一八〇〇年）も同じく『醒世恒言』の卷三「売油郎独占花魁」を訳している。

『醒世恒言』の卷三「売油郎独占花魁」を翻訳した作品は、すでに二つ存在していることが分かる。

さらに、石川雅望が翻訳した『通俗醒世恒言』（一七九〇年）の四卷五冊は、『醒世恒言』の巻六「小水湾天狐詭書」、巻二十八「呉衙内隣舟赴約」、巻三十四「一文銭小隙造奇冤」、巻十八「施潤沢灘闕遇友」を訳したものである。

このように、『英草紙』の前にも、その後にも、『醒世恒言』の翻訳が日本で非常に流行っていたことが分かる。

三 都賀庭鐘と『醒世恒言』

しかし、『醒世恒言』がこれほど流行っていたにも関わらず、都賀庭鐘がその中から素材をひとつも選ばなかったのはなぜであろうか。

当時白話のテキストとして使われていた「三言」を、都賀庭鐘は当然知っているはずである。しかも、そのうち『醒世恒言』は一番早くに日本に舶載され、一番早く翻訳された作品である。

都賀庭鐘は一七四三年に出版された『小説精言』を意識して、敢て岡白駒の使っていた『醒世恒言』を避けていたのではないかと考えられる。

『英草紙』は、今までの浮世草子と違って、新鮮な味わいを漂わせている。⁽⁹⁾ その新しさを貫徹するため、素材の選択の面においても、彼はわざと流行していた『醒世恒言』を避けて、当時まだそれほど翻訳されていなかった『警世通言』と『喻世明言』の方に目をつけたのであろう。読本の面白さは、読者にその背後に隠れている典拠を探してもらおうとこころにあると言われている。⁽¹⁰⁾ 庭鐘はより新鮮な要素を作品中に取り入れたくて、新しい素材を探していたのであろう。

が、『醒世恒言』は四十篇もあり、岡白駒によって取り上げられた作品の数はそれほど多くはなかった。なぜ都賀庭鐘は岡白駒が取り上げていなかった作品にも関心を示さなかったのであろうか。これは『醒世恒言』の内容とも関係あると思われる。すなわち、庭鐘は『醒世恒言』の内容をあまり気に入らなかったのではないかと考えられる。『英草紙』以後の二部作『繁野話』と『莠句冊』においても、『醒世恒言』からの典拠は見られない。『繁野話』の「江口の遊女薄情を憤りて珠玉を沈むる話」は『警世通言』の巻三十二「杜十娘怒沉百宝箱」の翻案であり、「白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話」は『喻世明言』の巻二十「陳從善梅嶺失渾家」の翻案である。『莠句冊』の第四話「玉林道人雑談して回頭を屈する話」と第八話「猥瑣道人水品を辨じて五官の音を識る話」は『警世通言』の巻一「王安石三難蘇学士」の趣向を『英草紙』の延長上に使って翻案した作品である。⁽¹¹⁾ これらはいずれも『醒世恒言』から素材を選び、典拠にしたのではなかった。以下は、素材の選択を左右した庭鐘の夫婦観と女性観、庭鐘の政治と歴史に寄せる関心、義についての解釈の三点

から、『醒世恒言』を用いなかった理由を考察することにする。

四 素材の選択を左右した都賀庭鐘の異色な夫婦観と女性観

表一で示したように、庭鐘が『喻世明言』の卷二十七「金玉奴棒打薄情郎」（以下「金玉奴」と略す）を典拠にし、『英草紙』の第二話「馬場求馬妻を沈めて樋口が婿と成る話」（以下「馬場求馬」と略す）に翻案した。また、『警世通言』卷二「莊子休鼓盆成大道」（以下「莊子休」と略す）、卷十三「三現身包龍圖斷冤」（以下「三現身」と略す）をそれぞれ『英草紙』の第四話「黒川源太主山に入ッて道を得たる話」（以下「黒川源太主」と略す）と第八話「白水翁が売卜直言奇を示す話」（以下「白水翁」と略す）に翻案し、『喻世明言』の卷十二「衆名妓春風弔柳七」（以下「衆名妓」と略す）の一部から発想を得て、『英草紙』の第六話「三人の妓女趣を異にして各名を成す話」（以下「三人の妓女」と略す）に利用した。

「馬場求馬」は、薄情の男を主人公にしている。馬場求馬が貧乏だったときに、乞食の娘のお幸と結婚し、お幸の家で経済的不自由一つなく、学問に専念することができた。そのおかげで若狭国の武田家から招聘を受けた。乞食出身の妻の身分を嫌がる馬場求馬は若狭に赴任中、悪い心を起こし、普段から受けつつあった妻の恩を顧みず、お幸を川の中に落として死なせた。

「金玉奴」のあらすじをそのまま踏襲している「馬場求馬」は「金玉奴」と同じく、非情な夫を描き出し、夫婦としての在り方、夫婦の間の信義はどうであるべきかを考えさせる作品となっている。原典の「金玉奴」では、金玉奴の夫である莫稽が赴任中に金玉奴の父親の「団頭」、すなわち乞食という恭敬されない身分に重圧を感じ、金玉奴を水に突き落とす。身分の高い人の娘を嫁にしたかったのである。「乞食」に関しては、堀誠氏には「女乞食の物語―祥林嫂・周長寿・金玉奴と社会」、⁽¹⁾「乞食の物語―孝義・吹簫・蓮花落」の論がある。

ところで、『英草紙』には相手の低い身分に圧力を感じたことで、相手を殺す話以外、女性に欲望で夫を殺したり、夫の脳味噌を出そうとしたりする話もあるのである。

『英草紙』第四話「黒川源太主」では、ところどころ原典を変えているが、彼の言おうとしていることは原典と変わらない。それは人妻としての女性がいかに非情であるかである。夫が死んで、さほど経っていないのに、深谷はそれ以前の貞潔や、見栄を捨て、ほかの男性に惚れてしまう。しかも、男性から誘われるのではなく、自分のほうから積極的に男性と一緒になろうとする。男性の病気を治すために、死後二十日間余りの夫の脳味噌を出そ

うとしている。すると、死んだはずの黒川源太主は棺桶の中から蘇った。黒川源太主は分身術ができ、死んだふりをして、新しい男性に分身し、妻の操を試したのである。

これも原典をそのまま利用している。新しい男性と一緒にいるために、死んだ夫の脳味噌を取ろうとする妻の貪欲と残酷さが浮彫にされている。

『英草紙』第八話「白水翁」は、原典の「三現身」よりは裁判色が薄くなっている。¹³

占い師の占いを利用して、自分の夫を殺し、姦通していた男と夫婦になった女性の非情と残酷さが強調されている。妻の小瀬は、夫の茅渟官平が白水翁に占ってもらった結果を知り、占い通りに夫を「今年今月今夜三更子の時に死」なせたのである。彼女は官平に隠し、ずっと別の男と姦通していた。夫が白水翁に占ってもらった日も、姦通の男はその家にいた。彼女は、白水翁の言葉を忘れようと夫の官平に酒を勧め、夫が寝静まると、姦通の男と一緒に官平を殺したのである。公には、官平は白水翁の占った通りに、運命のために死んだように見せかけた。

ほかの男と一緒にいるために、自分の夫を殺した小瀬は、夫の脳味噌を取ってほかの男性の病気を治そうとする深谷と同じく、非情で、残酷すぎる。しかも、彼らは人前では、人妻としての道徳をよく守っていると見せかけた虚偽者でもあった。

この三つの話は全て夫婦関係の話であり、妻か夫のいずれかが非情である話であった。夫婦関係が良くない作品がどうも庭鐘の注目を引いてしまうようである。そこに潜んでいるのは、彼の非情な女と非情な男への揶揄風刺であり、夫婦関係への不信であろう。

彼のこの異色な女性観と夫婦観は、読者に今まで味わったことのない新鮮味を提示することができた。同時に、人々に夫婦としての在り方、夫婦の間に存在する信義はいつい何であろうかを考えさせる。『警世通言』の「金玉奴」、「莊子休」と「三現身」は庭鐘の夫婦観、女性観を表現する上で格好の良い素材であったに違いない。

庭鐘は普通の女性に対して、いいイメージを持っていないようである。中村幸彦氏は、「庭鐘の二十七篇の小説の中で、普通の女性はみんな姦通するとか、悪質の一つもしくはいくつかもっている女性であり、真つ当な女性は遊女かお化けかである。」¹⁴と言っている。

中村幸彦氏が指摘しているように、すくなくとも、『英草紙』を読んだ限りでは、庭鐘には、そのような傾向が強いようである。『英草紙』において、唯一真つ当な女性を登場させた作品は、「三人の妓女趣を異にして各名を成す話」である。

「三人の妓女」は『喻世明言』の巻十二「衆名妓春風弔柳七」と『青瑣高議』の「玉幼玉記」を参考にして翻案したものである。

都賀庭鐘は三人の姉妹遊女にそれぞれ特徴を持たせている。姉の都産みやぶとは広瀬という男を思い、死んだ後、自分の髪を広瀬のところに送ってもらって、その家の祖先の墓のそばに

埋めてもらった一途な女性であった。妹の檜垣ひがきは身請けされたが、半年も経たないうちに化病を使って、逃げ出し、再び遊女を勤め、遊女の道を貫いた女性である。三女の鄙路ひなぢは自分のために死んだ男の仇討をした後、姿を消してしまった俠気な女性である。この三人の遊女は非情で残忍な人妻の深谷と小瀬と鮮明な対比になっている。

一方、典拠となった「衆名妓」では、主人公の柳七は赴任先で、名妓の周月仙と出会う。周月仙は川の向こう側に住んでいる黄秀才と愛し合い、夜は船で川を渡り黄秀才の所に行く。が、お金持ちの劉員外は周の美貌を愛し、彼女と黄秀才との件を妨げようと悪知恵を働かせる。最後、柳七の助けによって、周月仙と黄秀才は夫婦となる、というストーリーである。「三人の妓女」では、三女の鄙路は夜舟に乗り、川の向こう側にいる平四郎の所に行く。武士の三上五郎太夫は鄙路の美色を愛し、平四郎を殺そうといろいろな謀りを案じるところからは、鄙路に周月仙の面影が重なっていることが分かる。その上に、自分のために死んだ男の仇を討つ俠義な面を庭鐘は新たに加えた。「衆名妓」は鄙路の創作上に都合の良い素材であった。

偶然であるうか、『醒世恒言』には、庭鐘の選択した素材と類似性を持つ作品は一篇も見当たらなかった。あるのは、難病の夫と離縁せず、心を込めて面倒を見る一途な女性（巻九「陳多寿生死夫妻」）や、夫の将来を考え、自分は苦勞して、夫を出世させた女性（巻十九「白玉娘忍苦成夫」）、知恵を働かせ、殺されんとする受験生を救い出した女性（巻二十一「張淑児巧智脱楊生」）、辱を忍び、家族の仇を討った後に、自殺した孝行と貞潔の烈婦（巻三十六「蔡瑞虹忍辱報仇」）である。

このように、完璧な夫婦関係の話や、一途な人妻の話や、烈婦の話や、都賀庭鐘が一篇も取らなかったのは彼の特異な女性観と夫婦観によるものである。彼のこのような考えが素材の選択に当たり、確実に役割を果たしていた。それに、真正面から称えるべき優れた人物を作るよりも、マイナスな人物像を作りあげることのほうが、読者に与える刺激が大きいと庭鐘は狙っていたのかもしれない。

五 素材選択から見る都賀庭鐘の政治と歴史へ寄せる関心

庭鐘の政治と歴史へ寄せる関心は第一話の「後醍醐帝ごたいごてい三たび藤房とうぼうの諫いさなを折ひく話」(以下は「後醍醐の帝」と略す)や第三話の「豊原兼秋とよはらかねあき音を聴ききて国くにの盛衰せいすいを知る話」(以下「豊原兼秋」と略す)と第五話の「紀任重陰きたかしげいん司しに至いたつて滞獄たいごくを断わぐる話」(以下「紀任重」と略す)に見られる。

「後醍醐の帝」の粉本は『警世通言』の「王安石三難蘇學士」である。「王安石三難蘇學士」は学問に軽薄な態度を取る蘇東坡に対して、「人が第一に良いことは謙遜であること」

という人間の教育論を述べた話であるが、「後醍醐の帝」は、国をどう治めるべきかの治国論の話になっている。

藤房は「帝此の時太平に志怠り給ひ、馬場殿を建て逸遊度なく、女謁盛んに行はれ、朝野怨を含むもの甚だ多し。近比仏教を信じ給ひ、僧徒また禁宮に出入するものすくなくからず。」という国の有様を見て、後醍醐天皇に諫めたが、耳を貸してくれなかった。

またある日、一匹の竜馬が後醍醐天皇に献上された。竜馬が出るのは初めてなので、帝はその吉凶を聞く。他の大臣はみんな帝の機嫌を取り、「吉」と言ったが、藤房はこの馬は良いことに役立たないと言って、「今大乱の後、民費え人苦みて、天下いまだ安からざるに、人主の誤を正すべき執政もなく、群臣言に阿つて、国の危きことを申さず、大内裏を造り、馬場殿を建て、民に課役をかけ、宸襟を休め奉りし功臣を賞し給へども、恩賞其の功にあらず、忠功空しく怨を含むもの多し。」と切に諫めた。

最後に、彼は「治世の期、吁やんぬるかな。今主上智は奢に用ひ、弁は非を覆ふに足る。」とついに官をやめ、隠遁した。

この三ヶ所の藤房には後醍醐天皇の建武政治への批判が窺える。後醍醐帝は一国の統治者であるにも関わらず、仏教に耽つて、民の苦しみを理解せず、豪奢な大内裏を建て、奸臣の諂う言葉に耳を傾け、功のある忠臣への賞も適正ではないなど、いろいろと致命的な欠点を有している。これらが建武政治の失敗に繋がっていたとこの一篇は述べている。

原典は政治論や歴史論ではなかったが、蘇東坡が王安石の詩「西風昨夜過園林 吹落黃華滿地金」を読み、黃華（即ち菊華）が生命力の強い花であり、風に吹き飛ばされること絶対ないと断じ、王安石の詩を批判して「秋華不比春華落 説与詩人仔細吟」の二句を付けた。後黄州に下された蘇東坡は風で菊の花がいっぱい落ちたのを見て、自分の王安石に対する軽薄な態度を思い出し、後悔する。「後醍醐の帝」では、藤房は帝より自分宛ての和歌「あづま路にありといふなる逃水のにげかくれても世を過すかな」を古歌とは知らず、帝の新作であると勘違いして、「逃水」の二文字がよくないと批判した。腹立った帝は彼を東国に追放した。武蔵野の国で一人の田夫から「逃水」の事を教えられた。逃水は古い歌の中に出ており、水の流れのように見えるが、水ではなく、いくら行っても、流も向こうへ行くようなので、逃水と言われていると。

黄華が落ちることがあるのを知らないところを、藤原の「逃水」を知らないことと書き換えるのに都合がよかったのである。また、蘇東坡と王安石の二人の文人官僚のやり取りを後醍醐帝と藤房との君と臣とのやり取りに変えたところや、学問の「三難」を、忠臣の諫めを「三度折く」に変えたところに都賀庭鐘の政治への関心が窺える。

『英草紙』第三話「豊原兼秋」は『警世通言』の「俞伯牙捧琴謝知音」の大筋を殆どそのままに翻案している。話の冒頭で、豊原が追放された後醍醐天皇のことを思い、鳳管を吹いたところ、久しぶりにいい音色が出た。彼は「近頃、主上聖運を開かせ給ふことあるべし」と考え、都へ行くが、その途中、北条氏が滅び、後醍醐天皇が配所から脱け出したことを知った。その後、後醍醐天皇は再び帝位に付き、建武中興の公家一統の天下となった。

まず、原典の春秋時代を、後醍醐天皇の時代に変えた。そして、鳳管の「音を聴きて国の盛」を知るという不思議な話を描きだした。これは原典には見られなかったところである。

続いてのストーリーは、兼秋と時陰が知音になって再会を約束するという流れになる。

この物語の筋は、ほぼ原典のままであったが、時陰の口を借りてなされる、瑤琴、和琴、箏、琵琶を含めた琴についての紹介は原典には見られない。

琴についての知識的紹介が長く、「そのために作品が学術的になった」という指摘もあったが、よく考えてみれば、庭鐘が琴の紹介に拘るのは、知識的な見せびらかしよりは、琴の政治との関わりを意識し重要視したからではないかと考えられる。

琴と政治とが関わりが深いことは、古くから論じられていた。

『琴史』（宋 朱長文撰）巻六「釈絃」では、五絃によつて発する五音「宮、商、角、徴、羽」について説明し、これを政治との関係において解釈している。その中には、

宮為土為君為信為思、商為金為臣為義為言、角為木為民為仁為貌、徴為火為事為禮為視、羽為水為物為智為聽、故達於樂者、可以見五行之得失、君臣民事物之治乱、五常之興替、五事之善惡灼然可以鑑也。^{（一七）}

とある。

右の引用文を解釈すると、以下ようになる。

宮の音は五行の中の土であり、君臣民事物の中の君であり、五常（信、義、仁、礼、智）の中の信であり、五事（思、言、貌、視、聽、）の中の思である。商の音は五行の中の金であり、君臣民事物の中の臣であり、五常の中の義であり、五事の中の言である。角の音は五行の中の木であり、君臣民事物の中の民であり、五常の中の仁であり、五事の中の貌である。徴の音は五行の中の火であり、君臣民事物の中の事であり、五常の中の礼であり、五事の中の視である。羽の音は五行の中の水であり、君臣民事物の中の物であり、五常の智であり、五事の聽である。故に楽に達する人は、五行の得失、君臣民事物の治乱、五常の興替を見ることができ、また五事の良し悪しをもはっきりと見分けることができるのである。

五音と政治との関係だけを抽出すれば、宮は君であり、商は臣であり、角は民であり、徴は事であり、羽は物である。楽に達している者は、「君臣民事物の治乱」を見る事が出来

ると言っている。

また、『上古琴論』(清 莊臻鳳撰)には、

其(注、琴)絃有五。以按五音。象五行也。(中略)宮為君。商為臣。角為民。徵為事。羽為物。五音画正。天下和平。而兆民寧。雅樂之感人也。性返于正。君臣義。父子親。消降邪欲。返乎天真。(中略)故視琴聽音。可以見志觀治。知世道興衰之理。

故舜彈五絃之琴歌南風之詩。(中略)

自古聖帝明王。所以正心修身。齊家治國平天下

者。咸賴琴之正音是資焉。⁽¹⁸⁾

とある。

右の引用文を解釈すると、以下のようになる。

絃は五つあり、これは五音によるのであり、また五行を象徴するのである。(中略)宮の音は君であり、商の音は臣であり、角の音は民であり、徵の音は事であり、羽の音は物である。五音が正しく調和すれば、天下は平和であり、民の安らぎの兆しである。雅樂は人を感動させ、人間の本性を取り戻すのである。これにより、君臣は義に従い行動し、親子は親しくなるのである。邪悪な欲望を捨て、天真に戻るのである。故に琴を見て音を聞けば、人の志、世間の治乱を見ることができ、また世の盛衰の理も分かるのである。そのため舜は五弦の琴を弾き、南風の詩を歌うのである。(中略)古代から歴代の聖帝明君が、心を正し身を修め、家をととのえ國を治め天下を平らかにしているのは、みな琴の五音が正しく整えたからである。

ここから、琴と政治との関係が明らかであることは分かる。五音についての解釈は、前の『琴史』と同じであり、宮は君であり、商は臣であり、角は民であり、徵は事であり、羽は物である。五音がよく調べば、天下が平和であり、国民が安らかの兆である。昔からの賢明なる帝たちが心を正し身を修め、天下をよく治めたのは、みな琴の五音が正しく調べていたからであると述べている。

波線部の「故舜彈五絃之琴歌南風之詩」⁽¹⁹⁾と同様に、庭鐘も「堯舜の御代には、五弦の琴を操って、南風の詩を歌うて、天下大に治る。是琴の徳ある所あり。」と「豊原兼秋」の文中に書いている。

一方、原典の「兪伯牙」では、琴の音を知る「知音」については、友達としての意味を重んじ、兪伯牙と鐘子期が掛け替えのない友達であることを描いている。琴と政治との関わりについてはまったく言及していない。これに対して、前にも述べたように、庭鐘は、まず冒頭で鳳管を吹いたところ、いい音がであったことから、後醍醐天皇の開運を予言するという筋にしている。

そして、最後の所では、「主上御位に復し給ひしより、仮初御遊琵琶箏などを弾じさせ給ふにも、燕なる曲のみ造らんと望ませ給ひて、ことしげ世を治め給ふべき君にあらず。

是古より伝へいふ、桑間濮上の音起りて、国亡びしといふも、此の心なり。久しからずして、都もまた一変すべし。我も二君に仕へんよりは、早く身を潜めて、天年を楽しむべき所存なり」と、兼秋は後醍醐天皇の治国に失望し、自ら官をやめるのである。

こうした庭鐘の創作態度について、石破洋氏は「庭鐘が琴の神秘・予兆性を政治に結び付け、政治の未来を予知し、帝を批判してしまう」、「原拠の、琴を風雅の道においてのみ捉え、琴を媒に伯牙と子期の友情を讚美する仕方は、琴の重要な意味合いを缺落させているのであって、中国における琴の伝統と些かずれているが、庭鐘においては、原拠とはちがって、精確に琴の意味を把握している」と述べている。

石破氏の指摘のように、庭鐘は、「音」を聴くことによって、政治の治乱、国家の盛衰を知る意味合いを重視していたのである。これも原典の「知音」の言葉を「聴音」に転ずる彼の一工夫が見られる。琴が政治との関わりを持つている性質に注目したからこそ、彼は「俞伯牙」の一篇を素材にしたのではないだろうか。

第五話「紀任重」の粉本は『喻世明言』の「閻陰司司馬貌断獄」である。「閻陰司司馬貌断獄」と類似する話は『三国志平話』の冒頭、三国の由来を語る部分にも見られるが、内容は簡潔である。

「閻陰司司馬貌断獄」は不遇の文人司馬重湘が地獄に連れて行かれ、『西漢通俗演義』（江戸時代『通俗漢楚軍談』に翻訳された）に登場する人物を『三国志演義』の人物に転生させることによって、三百年も解決しなかった事件を解決したという話である。時代を超えて、歴史の人物を再生させるこの発想は庭鐘に刺激を与え、義経などの『源平盛衰記』の人物を『太平記』に転生させ、中国の歴史上の人物をうまく日本の歴史上の人物に置き換えることができたのである。

「紀任重」の主人公紀任重は司馬重湘と同じく、学才ありながら、不遇な文人である。地獄に連れて行かれ、百年あまり解決できなかった訴訟を解決した。彼は安徳帝の二位尼に対する訴え、義経・範頼の頼朝・大江広元に対する訴え、畠山重忠の北条時政・北条政子に対しての訴えを公正に裁き、安徳帝が二位尼によって入水され、死んだのだと断じ、安徳帝を阿野康子、二位尼を西園寺実兼の娘として転生させる。また、義経の死が兄頼朝の狭量によると断じ、義経を新田義貞、頼朝を楠多門兵衛正成、広元を円心と転生させる。重忠は功あって罪全くなく、またその文武両道に達した為政の器があると見られ、足利高氏へと転生される。時政は功臣を謀り殺したことによって、北条高時に転生し、来世一家滅ぶと裁かれ、政子は重忠を謀り殺した罪で、民部卿の局に転生し、一生志を得ない来世となるよう、裁かれた。

原典の「閻陰司」では、漢楚興亡の人物を『三国志演義』の人物に再生させるところに、

作者の歴史に対する独特の見解が見られるが、そこに日本の歴史を当てはめ、『源平盛衰記』の人物を『太平記』に再生させるところに庭鐘の歴史に対する独特な見解も窺える。彼はまず中国の漢の時代の人物を、日本の源平時代の人物に当てはめ、そして、裁判を通して、源平時代の人を南北朝の時代の人に転生させる。その当てはめ方と公正な裁判から彼の歴史に対する関心、一種の歴史を正そうとする考えが見えてくる。

また、文人としての都賀庭鐘は政治への批判や、自分の歴史観を陳述する際に、素材の選択をも慎重に行い、原典にも文人の出ている作品を選んでいる。彼の選んだ蘇学士、俞伯牙、司馬重湘の三人はいずれも文人である。また蘇学士と俞伯牙は朝廷に仕える仕官であり、司馬重湘は官職の売買の社会に不満を抱きながらも、出世できない文人である。

総じてみれば、「王安石」、「俞伯牙」と「闇陰司」は、庭鐘の政治と歴史への認識を述べるのによい素材である。「王安石三難蘇学士」の「三難」があるところから、「後醍醐の帝三たび藤房の諫めを折く話」の「三たび折」が生まれた。また「俞伯牙摔琴」から琴が政治との関わりを想起させたから、豊原兼秋の「音を聴きて国の盛衰を知る」が生まれた。さらに、「闇陰司司馬貌断獄」の発想は庭鐘にとっていかに嬉しいことであるか「紀任重陰司に至つて滞獄を断くる話」を読んでみると分かる。

一方、『醒世恒言』の中には政治と歴史と関係のある作品は少なく、隋陽帝（『醒世恒言』巻二十四「隋煬帝逸遊召譴」）と金海陵（『醒世恒言』巻二十三「金海陵縦欲亡身」）のような歴史的人物も出てくるが、これは二人がどのように淫欲を極めていたかの話であった。また、『醒世恒言』の主人公は普通の庶民が多く、文人が登場した場合があっても、才子佳人のような男女の愛の話や（巻七「銭秀才錯占鳳凰儔」、巻二十八「呉衙内隣舟赴約」、巻三十二「黄秀才得靈玉馬墮」など）、仙人になる説経話（巻四十「馬当神風送騰王閣」）などに限られる。これらは庭鐘の政治と歴史観の開陳を発揮するのに全く向かない作品である。

六 義の追求

『英草紙』序文には、「原より名山に蔵して、後世を待つ物のあらずといへども、此の書義気の重き所を述べれば、昔より牛喘を問うて時の政を知り、馬洗の音を聞きて阿字をさとり、礎のひびきに冬の近きを思ふためしあれば、鄙言却つて俗の倣となり、これより義に本づき義にすすむ事ありて、半夜の鐘声深更を告ぐるの助とならんこと、近路行者・千里浪子の素心なる哉。」と、『英草紙』が義を重んじ、人々に義に基づき義に進むべきと鐘声を鳴らしている本であることを述べている。

「義」は「五常（仁・義・礼・智・信）の一つ。他人に対して守るべき正しい道。物事

の道理にかなっていること」である。⁽²⁾

庭鐘は、第二話の「馬場求馬」、第四話の「黒川源太主」、第八話の「白水翁」においては、自分の特異な夫婦観と女性観が働いて、夫婦の間に存在する義はどうであるべきかを読者に考えさせた。また、第一話の「後醍醐の帝」、第二話の「豊原兼秋」、第五話「紀任重」においては、自分の歴史に対する考えを陳述したほか、帝としての義はどのように国を治めるべきかにあり、臣としての義は臣の立場に立ち、どのように帝を諫め、帝を助け、彼を賢明なる主君であるように支えるべきかにあるということを言っている。

また、まったくの他人同士の義とはどういうものであるべきかは、第九話の「高武蔵野かうのむさしの守婢かみひを出だして媒なまぢをなす話」から読み取れる。第九話は『諭世明言』の巻九「裴晉公義還原配」を翻案したものであり、高武蔵守師直が召使の勝子を婚約者の額田次郎左衛門の元に返し、しかも二人のために、結婚式を準備し、額田次郎左衛門を助け、彼を出世させた話である。粗筋は粉本と少し違うところもあるが、大体は粉本の筋に即している。そこから、他人の善事に助成する高師直の広い心と道義が読み取れる。高師直が「婢を出だして媒をなすこと」は義に基づいた行動である。

高師直は、足利幕府の執事である。彼は、自分の所に来た召使をその婚約者の元に返し、結婚式まで準備をし、また額田次郎左衛門が備前の国へ赴任する添文を失ったことを聞き、下し文を整えたのである。幕府の執事という高い位にありながら、下の召使や、武士に温かく接する。高い地位にあるとは言え、下級の百姓たちの幸せを成し遂げさせる。これは、まったく知らない人を助けて、大義をなすことであるが、と同時に、一つの国の執事として、多大な百姓の幸せを自分の責任のように感じ、それを実現させようとするところに、一国のリーダー（帝に限らず、上の階級にある官僚とかも含む）がどうやって国民のことを考え、行動すべきかの意味合いもある。そこで、「裴晉公」が選ばれた理由も分かる。

徳田武氏は、「庭鐘は一個の儒者として、下は「修身齊家」の個人道徳から、上は「治國平天下」の政治的モラルを献策すること、「経世済民」の義務を国字小説という虚構に載せて果たそう、という意図を抱いていたと考えられる」と述べている。⁽³⁾

徳田氏の指摘の通り、庭鐘は夫婦の義、遊女としての義、帝の義、臣下の義、他人同士の義を各々書いている。人間として、いろいろな役目があり、庭鐘は、人間をいろいろな角度から分析したのである。

七 庭鐘の「三言」に対する認識

魯迅は『中国小説史略』において、呉自牧の話本の分類方法を挙げている。⁽⁴⁾ 呉自牧は、『夢梁録』において、話本を四種類に分け、小説、説経、講史、合生（二人以上のかけあ

いで演じた落語のようなもの」との四つの分類をしている。これをもっと詳しく分類すれば、小説には、煙粉、靈怪、伝奇、公案、樸刀桿棒（俠義）、発跡変態（出世）などの種類があり、説経には仏教、道教の二種類を説くものがあるという。『夢梁録』と類似の記載は南宋耐得翁の『都城紀勝』⁽²⁵⁶⁾「瓦舍衆伎」に見られる。耐得翁は「説話」（話本）を四種類に分類し、一に「小説」といい、一に「説経説参請」といい、一に「講史書」といい、一に「合生」という。また小説には「煙粉、靈怪、伝奇、説公案（樸刀桿棒、発跡変態）、説鉄騎児」の種類があると紹介している。

また、宋代の羅燁編『醉翁談録』⁽²⁶⁶⁾の甲集巻一『舌耕叙引』・「小説開關」では、小説を「靈怪、煙粉、伝奇、公案、樸刀、桿棒、妖術、神仙」の八種類に分けている。

さらに、孫楷第は『中国通俗小説書目』⁽²⁷⁾の中で、煙粉小説を人情、狂邪（花柳の巷での遊興）、才子佳人、英雄の男女、淫猥など五つに分けている。

表二（次のページ）は「三言」の各篇の内容に基づき、吳自牧と耐得翁、羅燁と孫楷第の分類法を参考にしながら、説教（仏教と道教を説く）、煙粉（狂邪、才子佳人、英雄男女、淫猥、人情あり、人情なしに再分類できる）⁽²⁸⁾、靈怪、伝奇、公案、樸刀桿棒（俠義）、発跡変態（出世）、再会、因果応報のいくつかの分類を設け、「三言」の内容を分析したものである。

表二を分析してみると、以下のようなことが分かる。

(一)

庭鐘の選んだ素材は、それぞれ煙粉から狂邪を一篇（『諭世明言』巻十二）、人情なしを二篇（『諭世明言』巻二十七、『警世通言』巻二）、伝奇から一篇（『警世通言』巻三）、公案から二篇（『諭世明言』巻三十一、『警世通言』巻十三）、俠義から二篇（『諭世明言』巻九、『警世通言』巻一）である。

彼は、「三言」の中にある説教、靈怪、出世、再会、因果応報（勸善懲悪強調）の題材の話にまったく興味を示さなかった。

彼の興味を引いたのは、薄情の夫と薄情の妻が存在する「人情無」の作品であり、姦通し、夫を殺した残酷な妻が裁かれた公案の作品と、遊女の出してきた狂邪の作品である。また、地獄に連れられて、歴史を公正に裁判する司馬貌の話と琴の出してきた俞伯牙の話である。すでに前に述べたように、これらの素材は彼の夫婦観と女性観、歴史観を表すのに絶好の素材となっているのである。

分類	説教	煙粉	狂邪	才子佳人	英雄男女	淫猥	人情		靈怪	伝奇	公案	撲刀桿棒 (俠義)	発跡変態 (出世)	再会	因果・応報 (勸善懲惡 強調)
							無	有							
『諭世明言』	7篇(卷4、13、14、2 9、30、33、37)	6篇	卷12	卷23	卷28	卷3	卷1	卷27	4篇(卷19、20、24、 32)	2篇(卷25、40)	7篇(卷6、7、8、9、1 6、38、39)	5篇(卷5、11、15、2 1、22)	2篇(卷17、18)	2篇(卷34、35)	
『警世通言』	3篇(卷7、39、4 0)	12篇	卷32	卷23、26、29、 30	卷31、37	卷33、38	卷24	卷2、34	8篇(卷8、10、1 4、16、19、27、 28、36)	3篇(卷3、4、9)	3篇(卷1、18、2 1) 3篇(卷13、15、 5)	2篇(卷6、17)	3篇(卷11、12、 22)	3篇(卷5、20、2 5)	
『醒世恒言』	8篇(卷4、12、22、26、 31、37、38、40)	15篇	卷3	卷7、8、11、28、32	卷9、10、19、20、21 36	卷23、24、39			1篇(卷25)	1篇(卷29)	4篇(卷1、2、17、35) 7篇(卷13、14、15、 6、27、33、34)	4篇(卷1、2、17、35)		4篇(卷5、6、18、30)	

『喻世明言』においては各種類の話本がバランスよく取られている。それが『警世通言』では、霊怪的な話（妖怪と亡霊と妖術）と煙粉の話が多くなってきた。『醒世恒言』になると、出世と再会の話は見られず、説教と煙粉の話が合わせて二十二篇もあり、全書の半分以上にもなっている。

また、各「言」における明代に作られた話は、『喻世明言』には二十九話、『警世通言』には二十一話、『醒世恒言』には三十三話あることが指摘されている。⁽³²⁾ 即ち、馮夢龍が集めた宋元時代の話本は「三言」を編集するにあたって、足りなかったのである。そこで、『醒世恒言』において、当代明代に作られた話を前の「二言」より多く取り入れた。「錢秀才錯占鳳凰儔」のような「才子佳人」の話や、「陳多寿生死夫妻」のような一途な女性の話や、「赫大卿遺恨鴛鴦繚」「陸五漢硬留合色鞋」のような「淫欲」の話などがそれである。

アメリカの有名な漢学研究者 Patrick Hanan は『The Chinese Vernacular Story』(『中国白話小説』⁽³³⁾)の中で、『醒世恒言』は前の「二言」(『喻世明言』と『警世通言』)と大きく違っていると述べている。その原因はある人が『醒世恒言』の大部分の作品を執筆したからである。また、この「ある人」は馮夢龍の協力者である「石點頭」の作者の「浪仙」であると指摘している。「浪仙」について、まだ史料が足りない所もあり、確かな証拠は見つからないが、その可能性として否定はできないと思われる。

尾形仍氏は都賀庭鐘の「三言」の受容について、以下のように述べている。⁽³⁴⁾

当代の庶民の意識に立って当代庶民の生活を描いたところに特色のある「三言二拍」の中から、「閻陰司司馬貌断獄」や「王安石三難蘇学士」などの歴史や政治にかかわりの深い話を選んで、(中略)そこには中国白話文学の受容における一つの大きな屈折が考えなければならぬであろう。極端な言いかたをすれば、明人にあつては現代の庶民小説として創作されたものが、庭鐘においては士大夫の文学に近い性質を帯びた一種の歴史小説としてうけとめられたのだということになる。

尾形氏の指摘した通り、庭鐘の選択した話は歴史や政治に関わりが深い話であり、また素材に出てきた人物は、ほとんど莊子、俞伯牙、司馬貌、王安石、蘇東坡のような歴史人物と文人であった。すなわち、庭鐘はより政治性と歴史性の強い素材を選ぶ傾向があるのである。文人としての彼は、通俗のものの中からもこのような「雅」の要素の強い作品に目を引かれてしまうであろう。

ただし、庭鐘は「三言」を本当にただの士大夫文学の歴史小説としか受け止められなかったであろうか。むしろ、彼は、きちんと「三言」のなかにある「士大夫文学」の話と

「俗文学」の話を選んだのではないであろうか。『喻世明言』の卷十二「衆名妓」を選んだ時点においては、庭鐘はすでに「三言」の俗性を認めたのである。ただし、狂邪の話を選ぶ時でさえ、主人公が文人であるのを選ぶという所から、庭鐘の拘りが見られる。『醒世恒言』にも一篇狂邪の話―卷三「売油郎独占花魁」があるが、タイトルで示された通り、その主人公が、油売りの普通の庶民であったためか、庭鐘はそれを利用しなかった。それに対して、庭鐘以後の人西田維則がこれを『通俗赤繩奇縁』（一七六六）に翻訳したことや、訳者不明の人がこれを『通俗繡像親裁綺史』（一八〇〇）に訳したことは前に述べた通りである。

夫婦観や女性観を述べる時にも、莊子（莊子休）のような歴史人物や、大学生（金玉奴）の男の主人公）のような文人が出てきた作品に目を向けてしまったようである。

庭鐘は、「俗文学」の中からできるだけ「古雅」の要素の付いている物を選びたかったのである。文人である庭鐘は、その雅なる思想から出発して、「俗文学」の素材に手をかけた時においても、雅なる要素のある作品について気を惹かれてしまったようである。通俗小説は、俗の文学ではあるが、庭鐘はこれを俗文学と認めた上で、その「俗」の中から、できるだけ文人の出ている作品に目を向け、「雅」の要素の付いている作品を抽出し、これを素材にして、自分の創作に活かしているのである。儒者としての彼は古義堂に近い（師の香川修庵と伊藤仁斎は仲がよい）ため、「雅」を重視するのであるが、これはまた古義堂の非儒教的な要素を排除し儒教を純粋化しようとする学問の傾向とは異なるものである。庭鐘の「雅」への志向は儒教以外にも向けられていた。『英草紙』の第五話「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」は地獄で紀任重が三百年も裁けない訴えを迅速に裁いた話であるが、これは庭鐘が地獄という特別な環境を設定し、歴史を正させたのである。仏教的な設定の中であるが、彼の歴史観をよく表現した作品であると言える。

おわりに

本章は、庭鐘の素材の選択を左右した彼の異色な女性観と夫婦観、と彼の政治と歴史に寄せる関心、と義への追求の三つの部分に分け、庭鐘の『醒世恒言』を使わなかった理由を試しに分析したものである。前にも述べた通り、『醒世恒言』の素材は、庭鐘の創作意欲に向くものがあまりにも少ない。それに、『喻世明言』と『警世通言』の二言と比べて、『醒世恒言』の中に登場する文人が少ない。「三言」の俗性を十分認識しているようであるが、成るべく「雅」の要素の濃い素材を選ぶのは、『英草紙』を創作する時の彼の拘りであろう。

注

- 1 『英草紙』と『三言』についての論文は、徳田武氏『英草紙』と『三言』、尾形仍氏「中国白話小説と『英草紙』」、劉潔秋氏「中国「短編白話小説」と江戸「読本」の比較研究―『三言』と『英草紙』を中心に―」などがある。また、早くから山口剛氏や、麻生磯次氏の論がある。
- 2 『英草紙』と白話との関係は、古くからすでに『諸越の吉野』（前川来太天明二年）・『風草紙』（森羅子寛政四年）などの書に、その典拠の一部が指摘されている。麻生磯次氏は、『江戸文学と中国文学』第二章「読本の発生と支那文学の影響」で、典拠との詳しい比較が行われた。山口剛氏は「読本の発生―庭鐘と秋成との関係―」では、『英草紙』と『諭世明言』と『警世通言』との比較を行われた。
- 3 『諭世明言』の卷二十七は『今古奇観』卷三十二にも収められている。『今古奇観』は明の抱翁老人が『諭世明言』から八篇、『警世通言』から十篇、『醒世恒言』から十一篇、『初刻拍案惊奇』から八篇、『二刻拍案惊奇』から三篇を選び編集した小説集である。その中、『英草紙』の第二話と第九話の典拠となった『諭世明言』の卷二十七「金玉奴棒打薄情郎」、と卷九「裴晋公義返原配」は『今古奇観』の卷三十二と卷四にも所収されており、『英草紙』の第三話と第四話の典拠となった『警世通言』の卷一「俞伯牙摔琴謝知音」、と卷二「莊子休盆成大道」は『今古奇観』の卷一九と卷二十にも所収されている。
- 4 「三人の妓女」は『諭世明言』の卷十二の一部と『青瑣高議』前集卷十所収の「王幼玉記」によっていることは尾形仍氏が「中国白話小説と『英草紙』」の論文で詳しく論じている。
- 5 拙稿『英草紙』第七篇小考―『史記』と『水滸伝』の趣向取り―について（『近世文芸 研究と評論』第八十一号、本博士論文第一部第一章所収）をご参照いただきたい。第七篇においては、『三言』との関係が見いだせず、その代りに、『史記』や『水滸伝』の趣向が取り入れられている。
- 6 『御文庫目録』早稲田図書館蓬左文庫蔵の影印本を参考、出版社と出版年は不明。
- 7 大庭脩『関西大学東西学術研究所資料集刊七 宮内庁・書陵部蔵 舶載書目 附解題』一九七二年一月
- 8 中村幸彦『中村幸彦著述集』第七卷第一章「唐話の流行と白話文学書の輸入」 中央公論社 一九八四年三月
- 9 日野龍夫氏は『近世文学史』（日野龍夫著作集第三卷所収 ぺりかん社 二〇〇五年）で『英草紙』について「人間への洞察に富んだ思想性、人物の性格や心理の的確な描写、重厚な文語の文体、緻密な時代考証等々、末期浮世草子とはまったく異なるすぐ

れた文学性を獲得するに至っており、この作品によって読本なる新しい小説の様式が切り開かれた」と述べている。

- 10 徳田武 『馬琴京伝中編読本解題・序』一頁 勉誠出版 二〇一二年三月 原文を引用すると、括弧の中の内容になる。(読本の文学観は、典拠、それも世にあまり知られていないものまでも多く知り、それらを自由自在に運用するところに価値を見出す、というものであった。だから、誰もが知っているような話や知識を何度も用いるような安易な運用態度は、尊重されない。(中略)従って、読本を読む際には作者が込めている典拠を探知し、その融合の巧妙さを味わうことが必要になる。作者の潜めた典拠を看破し得た時の喜び。それが読本を読む楽しみの主要な一つだ。)
- 11 王安石三難蘇学士が『英草紙』以外、『莠句冊』にその趣向が使われていることは、山口剛氏が「読本の発生」(『山口剛著作集』二五四頁)で触れており、また麻生磯次氏も「読本の発生と支那文学の影響」(『江戸文学と中国文学』一〇〇頁)で言及しておる。
- 12 堀誠 『流謫の花 中国文学と生活』研分出版 二〇〇三年
- 13 劉潔秋 「中国「短編白話小説」と江戸「読本」の比較研究―『三言』と『英草紙』を中心に―」 『季刊日本思想史』三十六 一九九〇年十一月
- 14 中村幸彦 『中村幸彦著述集』第十一卷 中央公論社 一九八二年十月
- 15 徳田武は『英草紙』と三言―俗に即して雅を為す―(『日本近世小説と中国小説』第二部第一章所収 青裳堂書店 一九八七年五月)で指摘している。
- 16 13に同じ。
- 17 朱長文『琴史』 四庫全書子部芸術類所収
- 18 莊清鳳『上古琴論』四庫全書子部芸術類所収
- 19 「舜彈五絃之琴歌南風之詩」の言葉は『十八史略』卷一「帝舜有虞氏」にも見られる。「彈五絃之琴、歌南風之詩、而天下治」とある。『十八史略』は新釈漢文大系『十八史略』明治書院 一九六七年)による。
- 20 石破洋 「都賀庭鐘の翻案態度―『英草紙』第三篇における琴を中心に―」 東方学 第五五卷 一九八七年一月
- 21 中村幸彦校注 『英草紙』(新編日本古典文学全集 小学館 一九六五年十一月)「紀任重陰司に至りた滞獄を断くる話」の頭注による。
- 22 日本国語大辞典 小学館 一九七九年
- 23 15に同じ。
- 24 魯迅 『中国小説史略』七三頁 (上海古籍出版社 一九九八年一月)
- 25 『都城紀勝』は『西湖老人繁勝録三種』八十二頁(中華民國七十年(一九八一) 文

海出版社)による。

26 羅燁 『醉翁談録』三頁 (古典文学出版社 一九五七年)

27 孫楷第 『中国通俗小説書目』一一五頁 (作家出版社 一九五七年)

28 ここで、「人情あり」と「人情なし」は、夫婦の間に限る話である。夫婦としての関係が、いったん有る原因で破綻してしまうが、後にまた巡り会え、困難に遭った相手の一方を、全力尽くして助けてあげ、最後に夫婦の縁を続ける話は、「人情有り」の話に分類した。また、これと違って、自分のために、夫か妻かを殺すような鳥肌が立つような話を「人情無」に分類した。

29 □で囲まれた作品は、単純に属する分類の要素だけではなく、他の要素の性格も強いが、作者の態度から判断し、これらを一応該する分類にしたのである。例えば、『警世通言』卷十三「三現身包龍凶断冤」と三十五「況太守死孩児」は、公案の話に分類したが、十三「三現身包龍凶断冤」は、姦通する妻とその男が一緒になるために、夫が自殺したように凶り事をし、夫を殺害した話であり、「況太守死孩児」は、寡の邵氏が、使用人の誘惑を抵抗しきれず、淫欲の念を起こし、子供ができてしまった。後に自分の名節のため、子供を殺したが、その死体は、悪人の支助の手に入る。支助から脅かされた邵氏は使用人を殺し、自分も自殺した。そこで、況太守が裁判を行い、真相を明らかにした物語である。『醒世恒言』に至ると、公案の話が多くなってくるが、卷十三、十四、十五、十六のように、その大部分は、人間が淫欲で、事を犯し、最後裁判で事実が明らかになった類である。『警世通言』の卷三十二「杜十娘怒沈百宝箱」は、煙粉の「狂邪」(遊里)の話に分類したが、作品中には、杜十娘の一途と秀才李甲の薄情が漂っている。都賀庭鐘はこれを『繁野話』の「江口の遊女薄情を憤りて珠玉を沈むる話」に翻案している。

30 胡士瑩 『話本小説概論』第十四章・第一節『三言』故事的来源和影響一五四〇頁 (中華書局 一九八〇年)

31 Patrick Hanan 『The Chinese Vernacular Story』(Harvard University Press 一九八一年)

32 尾形仿 「中国白話小説と『英草紙』」(『文学』三四―三 一九六六年三月)

附録 「三言」の各巻のタイトル

『喻世明言』

- 卷一 蒋興哥重会珍珠衫 卷二 陳御史巧勘金釵鈿 卷三 新橋市韓五壳春情
- 卷四 閑雲庵阮三償冤債 卷五 窮馬周遭際壳媪 卷六 葛令公生遣弄珠兒
- 卷七 羊角哀捨命全交 卷八 吳保安棄家贖友 卷九 裴晋公義還原配
- 卷十 滕大尹鬼断家私 卷十一 趙伯昇茶肆遭仁宗 卷十二 衆名姬春風吊柳七
- 卷十三 張道陵七試趙昇 卷十四 陳希夷四辞朝令 卷十五 史弘肇龍虎群臣会
- 卷十六 范巨卿鷄黍生死交 卷十七 单府郎全州佳偶 卷十八 楊八老越国奇逢
- 卷十九 楊謙之客舫遭俠僧 卷二十 陳叢善梅嶺失渾家 卷二十一 臨安里錢婆留斧跡
- 卷二十二 木綿庵鄭虎臣報冤 卷二十三 張舜美灯宵得麗女 卷二十四 楊思温燕山逢故人
- 卷二十五 晏平仲二桃殺三士 卷二十六 沈小官一鳥害七命 卷二十七 金玉奴棒打薄情郎
- 卷二十八 李秀卿義結黃貞女 卷二十九 月明和尚度柳翠 卷三十 明悟禪師趕五戒
- 卷三十一 閻陰司司馬貌断獄 卷三十二 遊酆都胡母迪吟詩 卷三十三 張古老種瓜娶文女
- 卷三十四 李公子救蛇獲称心 卷三十五 簡帖僧巧騙皇甫妻 卷三十六 宋四公大鬧禁魂張
- 卷三十七 梁武帝累修帰極樂 卷三十八 任孝子烈性為神 卷三十九 汪信之一死救全家
- 卷四十 沈小霞相会出師表

『警世通言』

- 卷一 俞伯牙捧琴謝知音 卷二 莊子休鼓盆成大道 卷三 王安石三難蘇學士
- 卷四 拗相公飲恨半山堂 卷五 呂大郎返金完骨肉 卷六 俞仲拳題詩遭上皇
- 卷七 陳可常單陽仙化 卷八 崔待詔生死冤家 卷九 李謫仙醉草吓蠻書
- 卷十 錢舍人題詩燕子樓 卷十一 蘇知鼎羅衫再合 卷十二 範鰲兒雙鏡重圓
- 卷十三 三現身包龍凶斷冤 卷十四 一窟鬼癩道人除怪 卷十五 金令史美婢酬秀童
- 卷十六 小夫人金錢贈少年 卷十七 鈍秀才一朝交泰 卷十八 老門生三世報恩
- 卷十九 崔衙內白鷄招妖 卷二十 計押番金鰻產禍 卷二十一 趙太祖千里送京娘
- 卷二十二 劉小官團圓破毡笠 卷二十三 樂小舍拚生覓偶 卷二十四 玉堂春落難逢夫
- 卷二十五 桂員外途窮懺悔 卷二十六 唐解元一笑姻緣 卷二十七 仮神仙大鬧華光廟
- 卷二十八 白娘子永鎮雷鋒塔 卷二十九 宿香亭張浩遇鶯鶯 卷三十 金明池吳清逢愛愛
- 卷三十一 趙春兒重旺曹家庄 卷三十二 杜十娘怒沈百宝箱 卷三十三 喬彥傑一妾破家
- 卷三十四 玉嬌鸞百年長恨 卷三十五 況太守斷死子孩兒 卷三十六 皂角林大王仮形
- 卷三十七 万秀娘仇報山亭兒 卷三十八 蔣淑真刎頸鴛鴦會 卷三十九 福祿壽三星度世
- 卷四十 旌陽宮鉄樹鎮妖

『醒世通言』

- 卷一 兩県令競義婚孤女 卷二 三孝廉讓產立高名 卷三 壳油郎独占花魁
- 卷四 灌園耆叟晚逢仙女 卷五 大樹坡義虎送親 卷六 小水湾天狐詒書
- 卷七 錢秀才錯占鳳凰儔 卷八 喬太守乱点鴛鴦譜 卷九 陳多寿生死夫妻
- 卷十 劉小官雌雄兄弟 卷十一 蘇小妹三難新郎 卷十二 佛印師四調琴娘
- 卷十三 勘皮靴单証二郎神 卷十四 閻樊楼多情周勝仙 卷十五 赫大卿遺恨鴛鴦繚
- 卷十六 陸五漢硬留合色鞋 卷十七 張孝基陳留認舅 卷十八 施潤沢灘闕遭友
- 卷十九 白玉娘忍苦成夫 卷二十 張廷秀逃生救父 卷二十一 張淑兒巧知脱楊生
- 卷二十二 呂洞賓飛劍斬黃龍 卷二十三 金海陵縱欲亡身 卷二十四 隋煬帝逸游召譴
- 卷二十五 独孤生帰途鬧夢 卷二十六 薛祿事魚服証仙 卷二十七 李玉英獄中訴冤
- 卷二十八 吳衙内隣船赴約 卷二十九 盧太学詩酒傲王侯 卷三十 李汧公窮邸遭俠客
- 卷三十一 鄭節使立功神臂弓 卷三十二 黃秀才得靈玉馬墮 卷三十三 十五貫劇言成巧禍
- 卷三十四 一文錢小隙造奇冤 卷三十五 徐老漢義憤成家 卷三十六 蔡瑞虹忍辱報仇
- 卷三十七 杜子春三入長安 卷三十八 李道人独歩雲門 卷三十九 汪大尹火焚宝蓮寺
- 卷四十 馬当神風送騰王閣

第三章 『繁野話』第一篇と「蘇知具羅衫再合」との関連

および第一篇が「貧福論」に与えた影響

一 はじめに

『繁野話』は、都賀庭鐘の読本三部作（『英草紙』、『繁野話』、『莠句冊』）の第二部であり、明和三年（一七六六）に刊行された。これは、第一部の『英草紙』が出版された寛延二年（一七四九）より十七年後の出版である。全書は五巻にわたり、九篇からなっている。庭鐘は序の中で、以下のように語る。⁽¹⁾

其首なる雲のたちある談は、是をこそ一方の雲の賦と号べきか。守屋の連不言の裏に意ふかく、厩戸の理もよく展たり。手束弓の故事に任氏の伝奇を繋ぎ、邪色の人を蕩すことを覚す。白菊の巻は白猿梅嶺の旧趣を仮り、占卜の前数に因る事を説き、女教の名実全からんことをはしましむ。唐船の弥言は聚散の悲喜を尽し、望月の偶言に竜雷の表裏たるを断る。江口の始終は杜十娘を翻して、侠妓の偏性をかたり、子弟の戒となすなる。宇佐美宇津宮の戦略は軍機の得失頭らかに、南朝の絶ざる昔物語見ゆ。

即ち、庭鐘は序文で作品の内容を簡略に紹介しながら、いくつかの典拠を自ら明かしているのである。第三篇の「紀の関守が靈弓一旦白鳥に化する話」の典拠が、唐代伝奇小説の「任氏伝」によるものであり、第五篇の「白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話」は唐代伝奇小説『白猿伝』と、『喻世明言』の「陳從善梅嶺失渾家」が粉本となっており、第八篇の「江口の遊女薄情を恨て珠玉を沈る話」は『警世通言』卷三十二「杜十娘怒沈百宝箱」

を翻案したものである。

九篇のうち、庭鐘が自ら典拠を明かしているのは以上の三篇である。いずれも唐代伝奇小説か白話小説かによる翻案である。また、先学の研究により、この他にもいくつかの典拠が明らかにされてきた。『繁野話』のいままでに明らかにされている典拠を表一に纏める。

表一 『繁野話』の典拠

繁野話	典拠となった話
第一篇 雲魂雲情を語て久しきを誓話 ⁽²⁾	
第二篇 守屋の臣残生を草莽に引く話	
第三篇 紀の関守が靈弓一旦白鳥に化する話	唐代伝奇小説『任氏伝』、『今昔物語』三十一「人の妻化して弓となり、後に鳥となりて飛び失せし語」。
第四篇 中津川入道山伏塚を築しむる話	『兵家茶話』、『太平記』
第五篇 白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話	唐代小説『白猿伝』、白話小説『喩世明言』卷二十「陳從善梅嶺失渾家」
第六篇 素卿官人二子を唐土に携る話	『異称日本伝』、『明実録』と『殊域周咨録』 ⁽⁵⁾
第七篇 望月三郎兼舎童屈を脱て家を続し話 ⁽⁷⁾	『広益俗説弁』の「甲賀家伝」、『輟耕録』卷二十四「誤墮童窟」、『女仙外史』第十回 ⁽⁶⁾
第八篇 江口の遊女薄情を憤りて珠玉を沈る話	『警世通言』卷三十二「杜十娘怒沈百宝箱」
第九篇 宇佐美宇津宮遊船を飾て敵を討話	『兵家茶話』 ⁽⁸⁾

上の表からも見られるように、『繁野話』は、『英草紙』のように、中国小説に依拠するものがそれほど多くはなかった。徳田武氏は、『繁野話』と『英草紙』の区別について、

（筆者注、『繁野話』は）中国白話小説に依拠する割合が減少して、和漢の諸典拠を利
用して、彼自身が創造する比率が増加してきたのである。これはすなわち、国字小説
をいよいよ国字小説らしくするための庭鐘の努力の反映である。そして、それにつれ
て歴史論などの議論が導入されることが多くなり、筋の変化を意図する、いわゆるス
トーリー性が減じている。第一・二・四篇にそうした傾向が顕著である。また、小説
造りの方法が多様になって、（中略）翻案方法を多様化することは、中国小説の筋立て
にそのまま依存する姿勢を変えて、自己の方法を確立したことを意味している。⁽⁸⁾

と述べている。即ち、庭鐘は、『繁野話』においては、中国白話小説の筋をそのままに翻
案する手法を、多様に発展させ、その中で独自の方法を確立したのである。そして、『繁野
話』においては、物語のストーリー性が減らされて、歴史論のような議論が多くなってい
ると氏は述べている。

第一篇の「雲魂雲情を語て久しきを誓ふ話」がこの一つである。

徳田武氏は、雲を相手として、その情景や属性を聞き出す、という着想は、『荀子』賦篇
の「雲賦」から得たと言っている。また、雲の名前は『民用晴雨便覧』（明和四年）にも見
られるが、その刊行は『繁野話』の一年後であることから、『繁野話』から雲の名前を取っ
た可能性が高い、と氏は推測している。⁽⁹⁾しかし、氏のこの指摘以外、第一篇に関する論考
は、ほとんどないのが現状である。

そこで本章では、第一篇「雲魂雲情を語て久しきを誓ふ話」の小説の作り方に着目して、
『警世通言』巻十一「蘇知県羅衫再合」の入話（冒頭の話）との関連を示したい。そして、
この作品で行われた創作手法が庭鐘の弟子秋成に引き継がれており、『雨月物語』の「貧福
論」では、『初刻拍案驚奇』巻一「転運漢巧遇洞庭紅 波斯胡指破龟竜殻」の入話（冒頭
の話）の小説手法が用いられていることに説き及びたい。

二 「雲魂雲情を語て久しきを誓ふ話」と「蘇知県羅衫再合」

まず、第一篇の粗筋を要約しておく。

大永元年（二五二一）一人の沙門が岡山県の和氣の法花堂から旅に出て、富士の麓を過ぎて、折り返す。途中、難波の四天王寺に寄り、身を休める。夜、この寺の浮屠（五重塔）の五階に登り、欄に寄りかかり、「秋涼の通夜ぢ読誦」する。五重塔が高いので、「世とへだたりたる心地し、雲路近きかと」疑うぐらいである。やがて、沙門は眠くなり、夢に入るのである。

夢に難波（大阪）の上方に集まる雲が登場する。四方に位置する雲は、互いに遠く望むばかりで、普段会うことはできないが、今日右旋左旋の風に吹かれ、ともに一箇所に留まることができた。一番目に口を開いたのは丹波太郎であり、これは北方に立つ雲である。そして次は奈良次郎である。これは東方に立つ雲である。泉の小次郎は南に立つ雲である。摩耶九郎は西に立つ雲であり、六甲山の左右に跨る。各々自己紹介した後は、丹波太郎は在間三郎を紹介した。在間三郎は西北方に立つ雲であり、雨の神の将である。続いて、雲はさまざまなことを語る。例えば、季節ごとに雲の在り方も形も所在も定まらないことや、形は風に従い、存在は陰陽による、風の勢力は四方の山系によるため地方によって違い、唐土の本に書く風の名称は日本には適用しないことなど、さまざまな角度から雲の性質を述べる。最後「百とせの後つかた太平長に時を得て、祥雲瑞気常にたな引き立て、福利海に満ち人文林をなし、限なく東風恵みふか」い、とめでたい言葉を残して、雲は四方に分かれ去って行く。沙門は夢から覚めて、珍しく雲の霊の語りを聞いたので、これを人に尋ねると、昔から雲に各々名前があったことを知る。

大永年間から百年後は、江戸時代初期の元和年間（一六一五―一六二四）に当る。雲は徳川家の盛世を予言したのである。

沙門の夢に雲の魂が登場して、さまざまなことを語る。語る内容はストーリーではなく、むしろ議論に近いのである。最後に雲の霊が百年後の治世を予言して、姿を消した。沙門は夢を通して、百年後は盛世であることを知った。庭鐘は、夢の世界を借り、物の魂を登場させて、彼らに何かを語らせ、百年後の盛世を予言させたのである。

夢に物の霊が登場して、何かを語り、人を諭すという小説の型は、庭鐘の愛読する『警世通言』にも見られる。これは巻十一の「蘇知県羅衫再合」の冒頭の話である。

杭州府には一人の才子―李広がいる。彼は学問が優れているが、不遇にも何回か試験を

受けたにもかかわらず、及第できなかつた。時は秋に当たり、彼は船に乗り、錢塘江を渡り嚴州に行くことにした。岸边に「秋江亭」があり、李広は亭に上がり、「酒色財氣」について「西江月」の詞を壁に書きのこした。その詞は

三杯能和万事、一醉善解千愁、陰陽和順喜相求、孤寡須知絶後。財乃潤家之宝、氣為造命之由。助人情性反為仇、持論何多差謬。（三杯は能く万事を和し、一醉は善く千愁を解く。陰陽和順すれば喜び相求め、孤寡なるは須らく後を絶つるを知るべし。財は乃ち家を潤ほすの宝なり、氣は命を造るの由為り。人を助くれれば情性 反て仇と為る、持論 何ぞ差謬多からんや）

である。書き終つた後、李広は眠気に誘われ、机に伏して寝て夢を見た。夢に四人の美女が登場してきて、それぞれ黄、紅、白、黒の服を着ている。かれらは、それぞれ酒、色、財、氣の精である。酒、色、財、氣の精は、李広に一人を選んでもらつて、李広と一夜を過ごすという。選ぶ基準は、過ちがないことである。すると、酒の精は、自分をほめて、色の精を貶す。自分は「善く英雄の壯胆を助け」るが、色の精は「能く疾病を生む」のだ、と。これを聞いた色の精は腹立ち、故人が国を滅ぼし、命を失くしたのはみな酒のせいであり、自分こそ過ちがないと主張する。すると、財の精は色の精を罵り、呉の夫差が亡国したのは、色のせいだと言って、自分にこそ過ちがないのだと強調する。これを聞いた氣の精は自分こそ間違いないと言う。すると、他の三つの精は、氣の精を罵り、項羽の死は氣のせいであると怒る。四人の精は互いに相手の過ちを暴きながら、殴りあつた。

李広は見るに堪えず、四人の喧嘩を止めようとすれば、氣の精に力強く推されて、目覚めた。乃ち、これは一場の夢であつた。李広は改めて酒、色、財、氣の四つの事を考え直し、先ほど壁に四者を讚美する詩を書いたことを反省した。それで、その後ろにもう一首を題した。それは

飲酒不醉最為高、好色不乱乃英雄。無義之財君莫取、忍氣饒人禍自消。（酒を飲みて酔はざるを最も高しと為し、色を好みて乱れざるは乃ち英雄なり。義無きの財は君取ること莫れ、氣を忍び人を饒せば禍自ら消す）

というものであつた。すなわち、酒、色、財、氣の四つは、いずれも度を過ぎないのが大事である、ということである。

酒、色、財、氣の四つの精の争いを夢で見ていた李広は、酒、色、財、氣のそれぞれの性質に気づき、四つはいずれも度を過ぎると、過ちを生じると分かつたのだ。そのため自分が先に書いた詩は後世の人に悪い影響を与えるかもしれないと反省し、新しく右の一首

をつけ加えたのである。

『繁野話』の第一篇「雲魂雲情を語て久しきを誓ふ話」と「蘇知県羅衫再合」の冒頭の話と比べると、以下の共通点が見られる。

- 1 夢という世界を設定した点。
- 2 夢に物の霊が登場して、何かを語り予言する、あるいは人を論ず点。
- 3 ストーリー性が薄く、霊(精)の議論が中心となっている点。
- 4 夢を見た人が、何かを悟った点。(沙門は、百年後は治世であることを知り、李広は、酒、色、財、気の四つは適度であることが大事だと気づいた。)

このように、『繁野話』の第一篇と、「蘇知県羅衫再合」の冒頭の話とは、粗筋においては、共通点が少ないのであるが、小説の構成においては、ともに夢の世界を利用し、物の精霊が登場させ、人に何かを語り論ず点で、一致している。物語の筋や、趣向だけではなく、構成においても、庭鐘は白話小説に習って、自分の作品に試みたのである。「蘇知県羅衫再合」の冒頭の話はこの意味では、「雲魂雲情」にとつてたいへん都合のよい手本と言えるかもしれない。『英草紙』の第一篇が、『警世通言』の巻三「王安石三難蘇学士」を翻案したものであることは、第二章で述べたとおりである。また、この「王安石三難蘇学士」は『莠句冊』の第四篇と第八篇にも使われている。庭鐘が『警世通言』を素材の一つとして愛用していたことが分かる。

そして、『警世通言』巻十一「蘇知県羅衫再合」は『繁野話』の第一篇だけではなく、庭鐘の読本三部作の第三部としての『莠句冊』第三篇「求冢俗説の異同家の神霊問答の話」にもヒントを与えていたと見える。「求冢俗説の異同家の神霊問答の話」の末尾のところでは、酒、色、財、気の四つについて書かれている

酒は飲のみざれば酔よべからず。借かりの乱みだれも内うちよりするにあらず。**色**は仮かり如ごと也。其人ひとと時ときと定めがたく孟子物もつしものがたりの色いろにはあらず。**財**とは此こゝに宝器ほうきのみならず、恋こひもしつ欲ほりもして、得えたるも得んとするも皆財さいなり。**気**こそわきていみじき物なれ。飢うゑてもくらはず死ししても恨うらみず。寵ちやうを争あをせひ移うつるを恥はぢとし堪たへるも耐たざるも、人の直すなるは此内こゝにありて、駒こまの手綱たづなのひかへらるべき物か。此こゝの馬鬣ばれかほう封ふうに心こゝろとむるも気きなるべし。(一一)

庭鐘は、「蘇知県羅衫再合」と同じく、酒、色、財、気の順序でこの四つを書いている。これは前掲の「蘇知県羅衫再合」の李広が作った詩「飲酒不醉最為高、好色不乱乃英雄。無義之財君莫取、忍氣饒人禍自消」と同じように、酒、色、財、気の四つに対する解釈である。

徳田武氏は、「雲が徳川氏の治世を予言して姿を消すという結末の型は、『雨月物語』の「貧福論」の結末に取られているが、そのみならず、同書の「白峯」に対しては、通夜問答の構成や議論開陳の様式など様々の小説作法において影響を与えた」と述べている。実は、「雲魂雲情」が『雨月物語』の「貧福論」に与えた影響は、結末の雲が治世を予言して姿を消すという型だけではない。「はじめに」の所で述べたが、庭鐘が白話小説から小説の作法を学び、これを作品に導入すること自体が、弟子の秋成に引き継がれたのである。換言すれば、庭鐘が「蘇知県羅衫再合」の冒頭の話の部分の型を取り、「雲魂雲情」の中に取り入れたことを、秋成は見抜いたのである。彼は、また同じような方法を使い、「貧福論」を著したと思われる。

三 「貧福論」と「転運漢巧遇洞庭紅 波斯胡指破龜竜殻」

「貧福論」は上田秋成の短編読本集『雨月物語』の最終話である。以下に、そのあらましをまとめる。

陸奥の国蒲生氏郷がもうじきとの家に、岡左内という武士がいた。彼は、普通の武士とは異なり、富貴を願う心が極めて強かった。そのため儉約を家の掟とし、長年の積み重ねでかなりの富を積んだ。

ある時、左内は家に長く下男として仕えた人たちの中に、黄金一枚隠し持っている人がいるのを聞いた。そこで、その下男を呼びよせて、「金の徳は天が下の人をも従へつべし。武士たるもの漫みだりにあつかふべからず。かならず貯へ蔵むべきなり。備賤しき身の、分限に過ぎたる財を得たるは嗚呼をこの事なり。賞なくばあらじ」と言つて、下男に十兩の金を与えた。

その夜に、左内の枕元に一人の「ちひさげなる」翁が現れた。彼は、金の精霊である。左内と金の精霊は、貧福について議論した。金の精霊は、まず当世の武士が財を軽んじて名を重んじることを批判した。そして、貪酷残忍な人は富むが、主君に忠節の限りを尽く

し、父母に孝行を尽くす人は朝早く起き、夜遅く寝て、東西に生計に奔走するのに、財が集まらないのは、仏教の「前業」と儒教の「天命」によるものか、という岡左内の質問に対して、金の精霊は、富貴と貧賤とは、仏の教法とは関係なく、儒教の「天命」とも関係ない。「天の時に合ひ、地の利をあきらめて、産を治めて富貴と」なる、と答えた。

また、岡左内の豊臣家の政治は長く続くものかという質問に対して、金の精霊は、それは長く続かなくても、「万民和ははしく、戸々に千秋楽を歌はん事ちかきにあり」と言つて、寺の鐘が五更の時を告げた時に、姿を消した。

徳田武氏は「貧福論」の典拠を『醒世恒言』の卷十八「施潤沢灘闕遇友」の一部として⁽¹³⁾ いる。これは大事な指摘であると筆者も首肯する。徳田氏の論にも要約があるが、今もう一度「施潤沢灘闕遇友」の内容を確認したい。

施潤沢は、養蚕をもって生計を営む人である。思いやりがあり、人の銀子を拾って落とし主の朱恩に返し、義兄弟となった。その後、朱恩の家に一晚泊まって、多くの人の命を奪った台風から、一命を拾った。施潤沢の家はそののちますます豊かになった。あるとき、新しく買った家屋の土の下から一千両金の銀子を発見した。そして、家屋の工事の際、柱の下から銀子二千金を発見し、その中に、腰を紅絨で束ねた大きめな銀子が八錠あった。

その日、薄有寿という六十歳くらいの人が施家の家に来て、八錠の銀子の事を尋ねて来た。この八錠の銀子は、自分と妻が菓子屋を経営して儲けた金であり、二人の老後に使うように貯めたものであると語る。

不想今早五鼓時分、老漢夢見枕边走出八個白衣小廝、腰間俱束紅絨、在床前商議道、「今日卯時、盛沢施家豎柱安梁、親族中応去的、都已到齐了。我們也該去矣。」有一個問道、「他們都在那一個所在？」一個道、「在左边中間柱下。」說罷，往外便走。有一個道、「我們住在這裏一向、如不別而行、覺道忒薄情了。」遂俱覆軀身向老漢道、「久承照管、如今卻要拋撇、幸勿見怪。」那時老漢夢中、不認得那八個小廝是誰、也不曉得是何處來的。問他道、「八位小官人是幾時來的？如何都不相認？」小廝答道、「我們自到你家、与你只会得一面、你就把我們撇在腦後、故此我們便認得你、你却認不得我。」又指腰間紅絨道、「這還是初會這次、承你送的。你記得了麼？」老漢一時想不着幾時与他的、心中止挂欠無子、見其清秀、欲要他做個乾兒、又對他道、「既承你們到此、何不住在這裏、父子相看、幫我做個人家？怎麼又要往別處去？」八個小廝笑道、「你要我們做兒子、不過要送終之意。但我們該往旺處去的。你這老官兒消受不起。」道罷、一

斉往外而去。老漢此時覺道睡在床上、不知怎地身子已到門首、再三留之、頭也不回。惟聞得說道、「天色晏了、快走吧。」一斉乱跑。老漢追將上去、被草根絆了一交、驚醒轉來、与老荊說知、就疑惑這八錠銀子作怪。到早上拆開枕看時、都已去了。因要試驗此夢、故特來相訪、不想果然。（思いがけなく、今朝四時頃、私は次のような夢を見ました。枕元に八人の小者が白い服を着て、腰に紅い帯をして、ベッドの側で相談していました。いうことには、「今日卯の時に、盛沢の施家では棟上げをするので、親族のなかで行くべき者はみなすでに行ってしまった。我らも行かなければならない」と。中に一人問うことには「かれらはみんなどこにいるの？」と。一人が「左の中央の柱の下だ」と答えました。言い終つて、外に出ようとなりました。すると、一人が「我らはずっとここに住んできました。もし別れもせず行ってしまうのであれば、薄情のような気がする」と言いました。それでみな引返し私に向かって「長い間お世話になりました。今は他の処に行きます。悪く思わないでください」と言いました。その時、私は、夢の中で、その八人がだれなのか、どこから来たのかも分からなかったので、聞きました。「あなたたちはいつ来たのか。どうしてあなたたちを知らないのか」と。小者が答えたことには、「われらはあなたの家に来てから、あなたとただ一回お会いしたことがあります。その後、あなたは我らを忘れました。ゆえに、われらはあなたを知り、あなたはわれらを知らないのです」と。また腰の紅ひもを指さして「これは初回の時に、あなたから頂いたものです。思い出しましたか。」と言いました。私はすぐにはいつ彼に与えたかを思い出せず、このころの中ではずっと息子がいないことばかり気にかけていたので、その可愛らしいのを見て、養子にしようと思ひ、また「ここにせっかく来ていただいているから、どうしてここに住まないの？わたしたち親子となり、私を助け家を起こそう。何故ほかのところに行くの？」と聞きました。八人の小者は笑いながら、「我らを息子にしたいのは、死に水を取らせたいだけだろう。ただしわれらは盛んなどころに行くべきだ。あなたのような老人はごめんだ」と言い終ると、一斉に外に出ました。私はその時ベッドで寝ていたと思つたのですが、なぜか分かりませんが、体はすでに門口に来ていて、何回かかれらを引き留めようとしたものの、彼らは振り返りもしませんでした。ただ彼らが「もう遅い。早くしよう」と言っているのを耳にしました。一斉に走り出したので、私も追いかけると、草の根につまずいて、目覚めました。妻にこれを話したら、この八錠の銀子の仕業ではないかと疑いました。そこで朝になつて枕を開いてみると、本当に銀子がなくなっていました。この夢を確

かめたいため、わざわざ訪ねに来ました。やっぱりそうでした。⁽¹⁴⁾

徳田武氏は、この一段の話を「貧福論」と比較し、「一、夜、枕もとに金の精霊が現れること。二、金の精霊は小さな体であること。三、金の精霊と問答すること。四、明けがた、精霊は去っていくこと。五、金はそれを使いこなす者のもとに集まる、という金銭論が説かれること」⁽¹⁵⁾の五つの類似点を挙げている。

枕もとに金の精霊が出てくる点は、「貧福論」にもっともヒントを与えた点であろう。

実は、「施潤沢」の中のこの一段は、『初刻拍案驚奇』の巻一「転運漢巧遇洞庭紅 波斯胡指破龜竜殻」(以下「転運漢」と略す)の冒頭の話の内容と似ている。

内田保広氏は「上田秋成の貧富論—『貧福論』をめぐる—」⁽¹⁶⁾では、「施潤沢」と「転運漢」との二話は「富の移動を説話化したもの」であるとし、その点において「貧福論」と共通するものが見られると指摘しているが、「転運漢」と「貧福論」の小説の作り方に着目し、両者を詳しく比較し論じていなかった。

そこでいまもう一度「転運漢」の内容を確認し、「貧福論」との関連を考えたい。

宋の時に、汴京(現在の開封)に金維厚という商売人がいた。朝早く起き、夜遅く寝て、いろいろと計算し、金を確実に儲ける仕事ばかりをしてきた。その報いがあり、家はだんだんと豊かになった。彼は、たまった金を百兩ごとにかたまりの大錠にして、その腰に紅帯を束ねた。一生かかって、八錠、すなわち八百兩の銀子をためた。彼は、これらを枕もとにおき、毎晩に必ず撫でまわしてから、やっと寝られるのであった。金維厚には四人の息子がいる。金の七十歳の誕生祝に、金維厚は四人に二錠ずつ分けると言った。その夜のことである。

是夜金老帶些酒意、点燈上床、醉眼模糊望去、八個大錠、白晃晃排在枕辺。摸了幾摸、哈哈地笑了一声、睡下去了。睡未安穩、只聽得床前有人行走脚步聲響、心疑有賊。又細聽着、恰象欲前不前相讓一般。床前燈火微明、揭帳一看、只見八個大漢、身穿白衣、腰繫紅帶、曲躬而前、曰、「某等兄弟、天數派定、宜在君家聽令。今蒙我翁過愛、擡舉成人、不煩役使、珍重多年、冥數將滿。待翁歸天後、再覓去向。今聞我翁目下將以我等分役諸郎君。我等與諸郎君輩原無前緣、故此前來告別、往某縣某村王姓某者投托。後緣未盡、還可一面」。語畢、回身便走。金老不知何事、喫了一驚。翻身下床、不及穿鞋、赤脚趕去。遠遠見人人出了房門。金老趕得性急、絆了房檻、撲的跌倒。颯然驚醒、乃是南柯一夢。急起挑燈明亮、点照枕辺、已經不見了八個大錠。細思夢中所言、句句

是実。歎了一口氣、哽咽了一会、道、「不信我苦積一世、卻沒分与兒子每受用、倒是別人家的。明明說有地方姓名、且慢慢尋下落則個。」一夜不睡。(その夜、気持ちよく酔った金老人は、灯りをつけてベッドに入り、もうろうとした酔眼で見やると、八錠はキラキラと枕もとに並んでいる。何回も撫でまわし、満足そうに笑って、そのまま眠った。まだぐっすりとはまでは眠り込まないうちに、ベッドの前で人の足音がするのを聞き、泥棒だと思った。また耳を澄ましてみると、互いに前に行くのを譲り合っているような様子。ベッドの前灯のほのかな明るみに、帳を揚げて見ると、八人の大男が、身に白い服を着て、腰に紅紐を束ね、腰をかがめて言った。「わたくし兄弟は、天の定めにより、あなた様の家にお仕えする身となりました。今あなた様に可愛がられて、成人しました。働かせたりもせず、大事にしていたいただきました。あなた様が天に戻る日までお仕えして、よそへ行こうと思いましたが、今日私たちを等分して息子さんに与える話を聞きました。私どもは息子さんたちと御縁がありません。ゆえに別れを告げに来たのです。これから某県某村の王某なる人のもとへ行きます。縁はまだ尽いていないので、また御目にかかりましょう」と言い終ると、背を向けて立ち去った。金老はどうしたことなのか分からないが、びっくりして、ベッドから飛び降り、靴も履かず裸足のまま追いかけた。遠くに八人はすでに門を出て行った。金老人は慌てて追いかけたので、敷居につまずいて転んだ。その途端にパッと目覚めた。ただの夢だったのである。急いで灯をつけて枕もとを照らすと、八錠の銀子はすでに無くなっていった。よく夢の中の言葉を考えると、すべてが事実だった。溜息をついて、しばらくむせび泣きをして思うには、「一生苦勞して貯めあげたのに、それが息子のためにならず、かえって他人様の家のものになるとは信じられない。はっきりと場所と名前を言っていたから、ゆっくりと行方を尋ねよう」と。その夜は眠ることができなかつた。⁽¹⁾)

そして、次の朝、金老人は息子たちと一緒に王姓の家を訪ね、王家のベッドの下に八錠の銀子があったことを知った。金老人が、それを見せてもらおうと、まさに自分が一生をかけて貯めた銀子であった。金老人は、八錠の銀子を見て、涙をぼろぼろと落とし、また撫でまわしながら「私は本当に運がなかった。それで持つことができないんだ」と言っており、三両の銀子は王姓の人の敷居に落ちていた。王姓の人と別れた。王姓の人は三両の銀子を封じて金老人の袖に入れたが、袖には穴があり、三両の銀子は王姓の人の敷居に落ちていた。

『拍案驚奇』の巻一のこの冒頭の部分は、先に挙げた「施潤沢」の一段と同じ話のよう

に見えるが、金老人が金の精霊の夢を見る一節は、直接的に描写されており、「施潤沢」の薄有寿のように、夢を思い出すという間接的な描写手法ではない。

そして、『雨月物語』の「貧福論」も直接に夢を描く方法を使っているのである。

其の夜左内が枕上まくらじかみに人の来たる音しけるに、目さめて見れば、灯台とうだいの下に、ちひさげなる翁おきなの笑をふくみて座をれり。左内枕をあげて、「ここに来るは誰たそ。我に糧かてからんとならば力量りきりやうの男どもこそ参りつらめ。……」（中略）

翁いふ。「かく参りたるは魑魅ちみにあらず人にあらず、君がかしづき給ふ黄金わうごんの精霊なり。年頃としらふ篤くもてなし給ふうれしさに、夜話よがたりせんとして推おしてまゐりたるなり。君が今日家の子を賞しょうじ給ふに感めて、翁が思ふところばへをもかたり和なぐさまんとて、仮かりに化かたを見はし侍まる……」

そして、右の引用の部分を吟味すると、

- 1 家の主人が夢を見るタイミングが、その日に金を他人に与えた（与えたく思った）後である点。
- 2 夜左内が寝どこに入ったあと、金の精霊が枕もとに現れる点。
- 3 枕元に人の来た音がして、人の来たことに気づいた描写がある点。
- 4 金の精霊が自ら主人に篤くしてもらっていることを語る点。
- 5 左内が夢を見る時間が金老人と同じくその日の夜であった点。

以上の五つの点は、「施潤沢」には見られず、『初刻拍案驚奇』巻一「転運漢」の入話の部分に見られるところである。左内が夢を見たのは、「転運漢」の金老人と同じく、その日の夜であり、「施潤沢」の薄有寿のように、朝の明け方くらいではなかった。そして、「転運漢」には枕もとに人の足音がする描写はあったが、「施潤沢」には見られなかった。特に、精霊が自ら語る大事にされてきた点は、「施潤沢」には見られなかった。

夢の中に、主人公の枕元に金の精霊が登場してきて、主人公と問答する点は、「施潤沢」と「転運漢」の両方には書かれたのであるが、右の五点のような細かいところを描き出すときに、秋成がより参考にしたのは「転運漢」であると思われる。

ただし、「施潤沢」も「転運漢」も同じく、金の流動が人の意志に拠らないと物語っている。薄有寿の処に集まっていた金も、金老人の処に集まっていた金も、一晚でよそに去っ

てしまうのである。これは「貧福論」で金の精霊によって語られた金の流動性の性質と一致している。

「貧福論」では、金の精霊は「富貴のみちは術にして、巧なるものはよく湊め、不肖のものは瓦の解るより易し。且我がともがらは、人の生業につきめぐりて、たのみとする主もさだまらず、ここにあつまるかとするれば、その主のおこなひによりてたちまちにかしこに走る。水のひくき方にかたふくがごとし。夜に昼にゆきくと休ときなし。」と語る。すなわち、金は水のように常に一か所にとどまらないと説いているのである。

「施潤沢」と「転運漢」では、金がよそに行ってしまったことを、薄有寿は天命だと考え、金老人は運が薄いと言う。つまり、二人とも運命論と結びつけているのである。これは「貧福論」の金の精霊の理論と違っている。「貧福論」では、金の霊がはっきりと、金の流動は仏教とも儒教とも関係ないと言っていた。

内田保広氏はこの点について以下のように述べている。

福神は恣意的に行動するものである。その行動の恣意性を説明するのに、中国の二話（筆者注、「施潤沢」と「転運漢」の二つを指す）では、「前縁」や「命」と言った現実の人間には検証不能であり、普遍的、一般的な現象に対するものと同じ説明になっている。「貧福論」では富の流動性は黄金の自律的な運動によって説明される。「神にあらざらばならず。もと非情の物なれば人と異なる慮あり」という翁の発言は、黄金には黄金の『慮』があるという明言で、中国の両話で提起されている『縁』と『命』の支配については明示的に否定している。

内田氏の指摘の通り、「貧福論」では、「施潤沢」と「転運漢」の中に表現されている天命、運命論を否定しているのである。あるいは、秋成はこの二話を読んだ後に、わざと金の流動は運命によるものではないと反論をしたいと考え、「貧福論」を作り出したのかもしれない。

だが、様式上には、金の精霊を枕元に登場させ、主人公と問答する型は、「施潤沢」と「転運漢」によるものであることは明白である。そして、金の精霊が登場する細かい描写に関しては、前に述べた如く、より「転運漢」を参考にしていたのである。

四 「雲魂雲情」と「貧福論」

以上述べてきたように、庭鐘の「雲魂雲情」と秋成の「貧福論」は、両方とも物の霊を登場させている。庭鐘は、雲の魂を登場させ、秋成は金の精霊を登場させたのである。秋成が物の霊を登場させて何かを語らせるのは、庭鐘に影響されたのであろう。前にもふれたが、徳田氏は、「雲魂雲情」における雲が治世を予言して姿を消すという結末の型は、「貧福論」の金の精霊が「万民和はしく、戸々に千秋楽を唱はんことちかき^まにあり」と言つて明け方に姿を消すという結末に利用されている、と指摘している。まさしく首肯すべき言である。しかし筆者は、結末の部分だけではなく、全体の構成も、「雲魂雲情」に負う所が大きいと考える。物の霊を登場させ、人に何かを語らせ、何かを予言してもらうという小説の作り方は、庭鐘に影響されたものである。

ただし、庭鐘が、『警世通言』の卷十一「蘇知県羅衫再合」の中の話の色、酒、財、氣の四つの物が夢の中に登場する型を、自分の作品に取り入れたように、秋成も「施潤沢」と「転運漢」の中に枕元に現れる金の精霊が主人と問答する型を、「貧福論」に取り入れたのである。これは庭鐘の小説を作る方法が弟子の秋成に継承されていることを示していると言えよう。

従来、庭鐘の『英草紙』と『繁野話』とが、秋成の『雨月物語』と『春雨物語』とに与えた影響については、数多く論じられてきた。

後藤丹治氏は「英繁二書と雨月物語との関係」(『国語国文』第二十五卷第三号、一九五六年)で、『繁野話』の第五話「白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話」の主人公白菊が妖怪のために奪い去られる箇所は『雨月物語』の「浅茅が宿」に取り入れられたと述べている。

徳田武氏は「読本における主題と趣向―庭鐘から秋成へ―」(『国語と国文学』一〇月号一九七一年)で、『繁野話』の第八話「江口の遊女薄情を憤りて珠玉を沈る話」と秋成の「蛇性の姪」との継承関係を指摘している。

長島弘明氏は『英草紙』と秋成―秋成の物語の主題、構想解明の補助線として―(『国語と国文学』八月号 一九七九年)で、『英草紙』の第六篇「三人の妓女趣を異にして各名を成話」は、『雨月物語』の「浅茅が宿」、「菊花の約」、と『春雨物語』の「樊噲」の三篇に与えた影響を論じた。

宇佐美喜三八氏は「雨月物語私言」(『解釈と鑑賞』第一卷第七号 一九三六年)で、『繁野話』の第一話「雲魂雲情を語て久しきを誓話」の冒頭は『雨月物語』の第一話「白峯」の書き出しに影響を与えたと指摘している。

また浅野三平氏は、『繁野話』が秋成の『雨月物語』・『春雨物語』に与えた影響について、

以下のように述べている。⁽¹⁹⁾

同じ構想、同じ用語、同じ語彙が見られるからといって（筆者注、氏は十数ヶ所にわたり、『繁野話』と『雨月物語』・『春雨物語』との類似を指摘している）、庭鐘の「繁野話」が、秋成の「雨月物語」「春雨物語」に影響を及ぼしているとは断定できない。たゞ、この事実からは二人の作家は、よく似た語彙を持ち、同レベルの文章力を所有していたと見るべきであろう。それでは、何を秋成は庭鐘から受け継いだのであろうか。それは、作品の構想や、文中の語句や、文章そのものではなくて、もっと重要な創作方法自体を学んだと見るべきである。たとえば、「繁野話」の第二篇「守屋臣残生……」の話は、前章で説いた如く「日本書紀」に、その多くを採っている。この書紀の扱いは、「春雨物語」の「血かたひら」に於ける「日本逸史」や「日本書紀」の利用法につながる。

浅野氏の述べた通りである。秋成が庭鐘から受け継いだものは、ただの主題の継承だけではなく、むしろ小説の創作方法だったのである。浅野氏には言及がなかったが、『繁野話』の「雲魂雲情」の書き方、創作方法は、まさに『雨月物語』の「貧福論」に継承されたのであった。

また、『繁野話』の第一篇「雲魂雲情」は、実は『警世通言』巻十一「蘇知県羅衫再合」の話から型を取って、描き出した作品であることも、考察してきた通りである。夢の中に物の霊を登場させて、かれらの会話の中から何かを悟らせる仕組を、庭鐘は利用した。こうした小説の作法は、弟子である秋成にも引き継がれ、『雨月物語』の「貧福論」の中にも使われたのである。秋成は師の庭鐘に習い、「施潤沢」と「転運漢」にある金の霊の登場する型を自分の「貧福論」に取り入れたのだ。

注

- 1 『繁野話』第一篇「雲魂雲情を語て久しきを誓ふ話」からの引用は、新編日本古典文学大系八〇 徳田武校注の『繁野話』（岩波書店 一九九二年）による。
- 2 『繁野話』の各篇のタイトルは目録と本文とにずれがある。目録と本文中に於けるタイトルをそれぞれ左の表二に記し、目録と本文とで異なる所を傍線で引く。

表二 『繁野話』の目録における各篇のタイトルと本文中の各篇のタイトル

タイトル	目録	本文
第一篇	雲魂雲情を告げて太平を誓ふ話	雲魂雲情を語て久しきを誓ふ話
第二篇	守屋臣残生を草莽に引話	守屋の臣残生を草莽に引話
第三篇	紀の関守が靈弓 <small>たつかゆみ</small> 一旦白鳥に化する話	上に同じ。
第四篇	中津川入道山伏 <small>やまぶしづか</small> 塚を築しむる話	上に同じ。
第五篇	白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話	上に同じ。
第六篇	素卿官人二児を唐船に携る話	素卿官人二子を唐土に携る話
第七篇	望月三郎兼舎童窟に竜と談る話	望月三郎兼舎童窟を脱て家を続ける話
第八篇	江口の遊女薄情を恨て珠玉を沈る話	江口の遊女薄情を憤りて珠玉を沈る話
第九篇	宇佐美宇津宮遊船を飾て敵を平る話	宇佐美宇津宮遊船を飾て敵を討話

目録と本文中のタイトルは九篇中、三篇だけ一致しており、六篇に多少のずれが生じている。たとえば、第一篇は目録では「告て太平を誓ふ」のところだが、本文中となると、「語て久しきを誓ふ」となっている。第七篇は目録では「童窟に竜に談る」のところだが、本文中では「童窟を脱て家を続し」となっている。推測ではあるが、庭鐘はおそらく先に本文を書き、のちに目録を編集するにあたって、本文中のタイトルを目でもう一度確認せず、記憶を頼りに目録を編集したのであろう。

- 3 徳田武校注『繁野話』（新編日本古典文学大系八〇）の第四篇に関する解説。
- 4 徳田武校注『繁野話』（新編日本古典文学大系八〇）の第六篇に関する解説。
- 5 田中規子『繁野話卷四素卿官人二子を唐土に携る話』の典拠「『女子大國文』八十二卷 一九七七年」
- 6 徳田武校注『繁野話』（新編日本古典文学大系八〇）の第七篇に関する解説。
- 7 徳田武校注『繁野話』（新編日本古典文学大系八〇）の第九篇に関する解説。

- 8 徳田武校注『繁野話』（新編日本古典文学大系八〇）の第一篇に関する解説。
- 9 注8に同じ。
- 10 「蘇知県羅衫再合」からの引用は『警世通言』（敝敦易校注 人民文学出版社 一九五六年）による。
- 11 『莠句冊』からの引用は、『江戸怪異綺想文芸大系』第二卷（高田衛監修 国書刊行会 二〇〇一年）による。
- 12 注8に同じ。
- 13 徳田武『『貧福論』と『施潤沢灘闕遇友』（『近世文芸研究と評論』 二十七号 一九八四年）
- 14 「施潤沢灘闕遇友」からの引用箇所は、『醒世恒言』（顧学頤校注 人民文学出版社 一九五七年）による。翻訳は、辛島驍訳『醒世恒言』（全訳中国文学大系第一集 東洋文化協会 一九五八年）を参考にした。
- 15 注13に同じ。
- 16 内田保広「上田秋成の貧富論―『貧福論』をめぐって―」（『江戸文学』十四号 一九九五年）
- 17 「転運漢」からの引用箇所は、『初刻拍案驚奇』（中華書局 二〇〇九年）による。翻訳は辛島驍訳『拍案驚奇』（全訳中国文学大系第一集 東洋文化協会 一九五八年）を参考にした。
- 18 注16に同じ。
- 19 浅野三平『『繁野話』の周辺』（『国語と国文学』五十一―一〇 一九七四年）

第四章 『莠句冊』第三篇「求冢俗説の異同冢神の靈問答の話」小論

一 はじめに

『莠句冊』は、都賀庭鐘の読本三部作のうち、三番目の作品にあたり、天明六年（一七八七）に大坂の六書肆によって出版されたのである。前作の『英草紙』、『繁野話』と比べると、中国の白話小説を典拠とするものが減っている。宇佐美喜三八氏は「莠句冊の九篇は前二者のそれに比して、一見支那小説との関係が遙かに密接に思はれるに係らず、今所、具体的に明かなものは何程もない。西湖佳話中の一話に部分的に據つた一篇と、小説ではないが明代雜劇の趣向を学んだ一篇のあることが序文に記され、他に警世通言の一話の二部分を一つづつ用ゐたことがみとめられる二篇のあることが知れるのみである」と述べている^①。宇佐美氏の言っている『西湖佳話』の一話を取り入れたのは、『莠句冊』の第三篇「求冢俗説の異同冢神の靈問答の話」である。宇佐美氏のこの発言をヒントにして、徳田氏は『庭鐘と『西湖佳話』『聊齋志異』——『莠句冊』第三篇覚書——の論を展開し、『莠句冊』第三篇と、『西湖佳話』の「西泠韻蹟」と『聊齋志異』の「恒娘」との関係を明らかにした。また「明代雜劇」というのは、徐渭の『四声猿』の事である。これは庭鐘が自ら明かしたことであり、すなわち「岐路の為に枝を折る、吉野猩猩は徐渭が四声猿を襲ひ、群憤^{いびばり}を南山の猿楽に漏すも、古人の辱^{こじん}に筆暢さる所あり^{のび}」である。徐渭の『四声猿』が第六篇の「吉野猩猩々人間に遊て歌舞を伝る話」に取り入れられた^②。また「警世通言の一話」というのは、「王安石三難蘇学士」を指す。『英草紙』の第一篇「後醍醐の帝三たび藤房の諫めを折く話」にはすでに利用されているのであるが、『莠句冊』の第四篇「玉林道人雑談して回頭を屈する話」と、第八篇「猥瑣道人水品を弁じ五官の音を識る話」にも趣向として取り入れられている^③。

徳田武氏は、「(前略)『莠句冊』は、前作の『英草紙』『繁野話』にくらべると、いよいよ文体は晦渋、創作の方法は複雑になっている。各篇の創作意図と方法は一筋では説明ができず、従つて庭鐘が、『莠句冊』において前二作からどのように推移した姿を見せているか、という問題を捉える段階にはほとんど到っていない^④」と『莠句冊』の研究状況を語っている。

第三篇の先行研究としては、前引の徳田氏の論考以外、高田衛氏には「伝承・庭鐘・求

塚―ある十八世紀小説の試行錯誤―」の論がある。高田氏は、求塚の伝承に対する近世的精神の有様を模索して小説を書く庭鐘の姿勢に注目して、庭鐘の小説を作る試行錯誤を考察した。

本章では先行研究を踏まえつつ、今まで明らかにされていない問題点に着目し、第三篇を論じてみたい。

徳田氏は、『日本古典文学大辞典』（岩波書店）『莠句冊』の項目において、第三篇には『水滸伝』の魯達の面影が見られると述べていたが、具体的に魯達の人物像がどのように利用されていたかについては、論証がなかった。そして前掲徳田氏の論文の中にも、魯達に関しての具体的な考察がなかった。

また、タイトルに「冢神の霊問答」とあるが、実際には問答の話はごく一部しか占めていないのである。二人の男性が塚を通りかかる時に、その中の一人が塚神の霊に憑かれ、残りの一人と問答し、問答が終わった途端に倒れた。再び意識が戻ると、何もかも覚えておらず、この出来事を奇異のように感じる。この趣向は庭鐘の愛読する『警世通言』巻二十七「假神仙大鬧華光廟」の中にも見られるのである。

最後に、庭鐘が三つの伝承を綴る意図はどこにあるのかを考えたい。そして、第三篇の書き方は、庭鐘の読本第二作『繁野話』第三篇の「紀の関守が霊弓一旦白鳥に化す話」とよく似ているように思われる。『繁野話』における「繋ぎ」の方法が、『莠句冊』の中にも引き続き用いられたのではないかと筆者は考える。本章では、以上の三つの問題を解決するものとする。

二 「求冢俗説の異同冢神の霊問答の話」のあらすじ

まず、第三篇「求冢俗説の異同冢神の霊問答の話」（以下「求冢俗説の異同」と略す）の内容を確認しておく。

摂津の国菟原（菟薈とも）の郷に、昔から求冢という二つの同名の塚がある。東にあるのは、住吉村にあり、「茅淳づか」とも呼ばれ、これは男の塚である。真ん中にあるのは、東明村にあり、「処女冢」という。西にある塚は、味泥村にあり、「処女冢」と呼び、これは菟原男の塚である。塚の形は前のほうが出ているため車塚とも呼ばれる。これはその傾いている様子が車の轆ながえと似ているからである。

ある年、丹州の中野何某と友達の関の何某が真ん中の塚を尋ねた。その時に、関の何某に塚の神の霊が憑依して、中野氏と問答を行なった。

問答の後、塚に関する三つの物語が展開されていく。

一つは真ん中の塚の近くに宿る客人に宿の亭主が語るものである。二人の男がおとめを争い、おとめは思いわずらって、生田川に身を投げると、二人の男もそのあとを追って、同じく入水した。おとめの塚を中にして、左右に二男の塚を造った。これは所謂『大和物語』にある菟原おとめ伝説をそのまま利用しているのである。

そして、もう一つは、西にある味泥の塚の傍らにいた土地の人が、古い古跡を尋ねてくる旅人に語るものである。郡家なる庄官の娘は、多くの男性から慕われていた。そのうち、茅渟男は、艶書を何回も送ってきて、娘の心を得た。同時に、菟原を司る庄司何某が、郡家の娘を求めて自分の家に娶らんと願った。困った親は射芸の優れるほうに娘を嫁がせると決めた。菟原の男の勝ちであった。娘は一心に茅渟の男の勝ちと思いついていたので、父から菟原の男に嫁がせると聞くと、悲しくなり迎えの輿の中で死ぬと決めた。折から天台山から下りてきた円性法師が、茅渟の男の艶書が代筆であり、男の目的はこの家の財産にあったと見抜いた。茅渟の男がおとめを奪いに来た時、腰元のあけぼのおとめの代わりに輿に入らせた。しかし、菟原の男性は本当のおとめが茅渟の男に奪われたと考え、途中茅渟男をおそい、相打ち死んでしまった。輿の中にいる腰元は自分がかつておとめの代筆をしたことを悔い、住吉川に身を投げた。親族は腰元を東明村に、菟原の男を味泥村に、茅渟の男を住吉に埋葬した。おとめは、三人の死は自分のせいであると思い、落髪して、三人の塚を守る。故に三塚ともに処女塚と呼ぶ。

最後の伝説は、東の塚に近い神社に雨宿りをする行脚の人に、山伏様の人が語ったものである。太古、この地に神の子孫海伯わたづみの一家があった。后妃は住吉姫である。住吉姫は君主と愛しい、そのため民は逸楽に耽り礼節を軽んずる人が多くなった。臣の一人である小竹多さきたはこれを憂いて、庶民の菟会うなひのおとめに、化粧、楽器歌舞などを教えて、海伯に進めた。海伯は、菟会のおとめを気に入り、彼女を宮中に留めて、寵愛した。姫の戚家陳努やからちぬの臣は、夢で姫が冷遇されることを知り、宮に参り、姫に海伯の愛を取り戻すための策略を教える。住吉姫はこれを用い、海伯の心をうまく取戻し、菟会のおとめをも宮中に留めた。住吉姫は、陳努と小竹多が功あるとあって、海伯の塚の東西に両臣の塚を営ませたのである。三つの塚はすべて男の塚である。

三 「求冢俗説の異同冢神の靈問答の話」と『水滸伝』の魯達

『水滸伝』の魯達が取り入れられたのは、西なる味泥の塚の近所の里人が、古い古跡を尋ねてくる旅人に語る伝説、すなわち第二番目の伝説である。

郡家である庄官の娘は、茅渟の男が射芸比べで菟原の男に負けたのを知り、悲しくなり、嫁を迎えにくる輿の中で死ぬと覚悟した。母親は娘の姿を見て心配し、一家は悲しい雰囲気に包まれていた。その時に、天台山から荒法師が下ってきたのである。以下原文を引用する。

天台より下山せし荒法師、言の君円性、幼名阿達池丸とよび、ア氣力を売弄し大石を飛し大木を抜き、時の意興に違へば、師長の法師も打たゝかれければ、山衆一致して逐ひ出しやる。筑紫へ還らんとて此所を経歴し一宿を求む。

母親は「怨敵除の祈りにも」と、法師を家に入れた。すると、荒法師は家の悲しい雰囲気に気づいた。

此僧内のやうのうちひそみたるを見て、『いく日の前に帰寂の人ありや』と問ふ。母氏つゝみかねて処女が身の難をかたる。

母親から家の事情を聞いた法師は茅渟の男の艶書を見ることを要求する。

僧云、『茅渟の男幾ばかりの才能ある。来書を見んずる』といふ。処女恥がはしらかぬ文をえらみ出したり。上がきに『あなごとくし』と書きたるもあり。『萩の葉ならば』とかきしも見ゆ。円性一観して『是恐らくは実に其人の自筆にはあらず。艶書に人を雇ひたるも、是を其人の墨色と相るに、其人もまめにはなくこそ。文の詞も古き襲ひて肺府より出るとも見えず。其求る所美色に非ず美産にあり。俗情軽薄誠とすべからず』と云。

母親は法師の言葉を聞き、人を茅渟の男の所に遣わし、その人柄を窺わせると、娘に艶書を送る人は茅渟の男ではなく、その家の寄人であり、出身の分からない人であった。いつも他人の家の婿になることを望んでいた。この話を聞いた円性は自分の疑いが的中したと思ひ、茅渟男を自分に任せ、「来らば取ひしぎてすてめ」と言った。そして、茅渟の男がおとめを奪いに来た。

ウかくて茅渟の男、先に超て奪ひとらんとみづから輿を□(□の中は手偏に昇である)せ来り。人数を道にひかへさせ、独自一個ひそかに女の許にいたりしが、障子の下にゐて、さすがうるはしくも得出ず、袖ばかり出したり。始より一目を見ぬことなれば、

使女あけぼのをかざり障子を隔てかたらしむ。法師傍にありて筆をもて教へてこたへ
きかす。男云、『今日御身を迎へかえらずば尸を爰にとぐめん』と畏す。法師大に発作
て怒るさまなれば、彼男をやあやまたんかと、家人等肝をひやす。法師答へていはし
む、『此ごろ伝に聞に、御身通ふかた一かたならずと。今より恐る、海陸の言早くも起
らんことを』。男云、『それいさゝか思ひあたる事あり。輿だに入り給はゞ、逐去るに
いとやすし』。女云、『それは逐るゝ人の身にさぞなげかしからん。さりとも一心なき誓
の文を今ここに一紙かゝせ給へ』と、文かく四宝をつらね出し、物すきより見れば、
彼男俄に赤面して、『二度の誓約はせぬ物にこそ』と身を退やうなり。女云、『是厭事に
あらず。今こそ通ふかた多きを探り知りぬれば、誓ひを給れ』と強て乞けるに、是非な
く筆に信て紙を染るを見れば、過つる数々の通はし文には墨さへ似もせず、詞さへ
つゞかず、かんなも濫なりければ、果して最初の人にもあらず。『仮に詐を以て詐
に對し、使女を代としてあざむきやり、世にかなのはしりがきするものは技痒にた
へかねて人に忌るゝは、因果の縁とところなるべきに、人の手をかりまどひて憂せきや
つかな。此家の難は是までならんか。彼等は風流縁業、今や殺生に及べり』と袖を払
ひて去りをはんぬ。

円性は真正面から茅渚男と対面することなく、曙をたてて彼女の側において指導をし、茅渚
の男を試したのであった。男の書いた仮名を見て確信を下した。すなわちおとめに艶書を
書いた人はこの男ではない、と。偽物を以って偽物に對すると言つて、あけぼのおとめ
の代わりに輿に入れることにした。

円性法師についての描写は、以上の三ヶ所にわたる。

徳田武氏は、この話では、『水滸伝』第五回の劉老人の娘を救う魯達の面影が投影されて
いる。但し、全体の話は魯達のそれとは異なる。『大和物語』の伝説を潤色改変して、荒法
師や侍女を添加するというのが、この話の作意であろうか」と述べている。

氏の『水滸伝』の魯達についての言及はこれのみである。魯達の面影はどう投影されて
いるのかについては、具体的な指摘はなかった。そこで、ここで魯達の人物像がどのよう
に投影されているのかについて見てみたい。

まず、『水滸伝』の魯達はどういう人物なのかを見てみよう。

魯達が『水滸伝』（百回本）に登場するのは、第三回「史大郎夜走華陰県 魯提轄拳打鎮
関西」、第四回「趙員外重修文殊院 魯智深大鬧五台山」、第五回「小霸王醉入銷金帳 花

和尚大鬧桃花村」、第六回「九紋龍剪徑赤松林 魯智深火燒瓦罐寺」、第七回「花和尚倒拔垂楊柳 豹子頭誤入白虎堂」、第八回「林教頭刺配滄州道 魯智深大鬧野猪林」、第十七回「花和尚单打二龍山 青面獸雙奪寶珠寺」、第九十九回「魯智深浙江坐化 宋公明大戰烏龍嶺」などである。

『莠句冊』の荒法師について「天台てんたいより下山げさんせし荒法師あらかほし、言ことばの君円性きみえんじやう、幼名阿達池丸をさな、あだちまるとよび、氣力を売弄かつけろかし大石たいせきを飛とばし大木たいぼくを抜ぬき」と書いてある。「氣力を売弄し大石を飛し大木を抜き」の記述だけに注目しても、これは『水滸伝』第四回における魯達が五台山の大石で作られた金剛を壊し、第七回における魯達が相国寺にある楊柳の大樹を手で抜いた二条を意識していることは、明らかである。これは、魯達の人物像の典型的特徴であるからである。すなわち、庭鐘が意識したのは、徳田氏の述べられた「第五回魯達が劉老人の娘を救う」一条だけではない。魯達の荒っぽい性格、力の強さなどを含めて、彼の全体の面影を、円性法師に移そうとしたのであった。

魯達―魯智深は、金翠蓮という女性とその父親の味方をし、金翠蓮から不法の金を取った鎮関西を打ち殺した。その後、彼は逃げだして、代州雁門県に至った。ここで、意外にも金翠蓮の父親―金老に巡り合った。金老と翠蓮は魯達からもらった金を使って、牛車を雇い、今のところまで逃れたのであった。翠蓮は今趙員外の妾と成り、豊かに暮らしているのである。魯達の恩に報いたくて、趙員外は魯達を自分の村に住ませたのであるが、魯達が殺人犯ではないかと村の人々が疑ったため、仕方なく、趙員外は魯達を五台山に送り、彼を一人の和尚の弟子とさせたのである。アしかし、魯達は五台山で和尚の戒めを破り、二回も酒を飲み泥のように酔い、寺の金剛の像を壊し、坊主たちを殴り怪我させた。寺の住持も彼を庇うことができず、彼を五台山より追い出して、開封の相国寺に行かせることにした。(『水滸伝』第三回、第四回) 魯達は、開封に行く途中、日が暮れたので、桃花庄という人家に、「小僧赶上宿頭、欲借貴庄投宿一宵、明早便行」(愚僧、宿場には間に合わない)ので、貴庄で一晩泊まらせていただきたい。明日早朝出発するから)と一晩宿らせたいことを願った。

家の主人劉太公が彼の願いを聞き、家の中に入れてくれた。魯達は劉太公が何か悩んでいるのを見て、「太公縁何模様不甚喜歡」(太公は、なぜ浮かぬ顔をしているのですか)と氣使うと、劉太公は一人娘が今夜結婚することになったことを言ひだし、これは不本意の事であり、他人に脅迫されたことと語る。

この経緯を知った魯達は、ある案を考えだした(第五回)。

ウ智深聽了道、「原來如此。小僧有個道理、教他回心轉意、不要娶你女兒如何。」太公道、「他是個殺人不眨眼魔王、你如何能勾得他回心轉意。」智深道、「洒家在五台山長老處、学得說因緣、便是鉄石人也勸得他轉。今晚可教你女兒別處藏了、俺就你女兒房内說因緣勸他、便回心轉意。」(智深、これを聞き、「そういうことであつたか。愚僧に一つの考えがある。そいつに心を入れかえさせて、あなたのもすめをもらわぬようにするのは、いかがかな」と。大公、「あれは人を殺しても目ばたき一つせぬ魔もの、あなたさまがその心を入れ変えさせることなどできませんよ」と。智深言う、「わたくし、五台山智真長老のところ、因縁の説教を習つていました。鉄や石のような人でも、言い聞かせて心を入れかえさせます。今晚、娘さんをどこかよそへ隠しておき、おれがむすめさんのお部屋で、因縁を説き聞かせたら、そいつ、心を入れかえますよ」⁽⁸⁾と。)

すなわち、魯達が考え出したのは、自分が劉太公の娘の代わりに、新婦の部屋で寝て、新郎を待ち、彼を教育することであつた。そして、新郎が来ると、魯達は拳骨で彼をぶちのめした。新郎はあまりのことに驚き、傷だらけになりながらも慌てて逃げた。実は新郎はこの地方の盗賊の一人―周通という人である。彼には兄貴に当る人がいて、李忠と言ふ。李は弟の仇を討つと言つて、劉太公の所に来たが、意外にも魯達とは知り合ひであつた。李は、魯達と渭州で一回会い、史進と三人で酒を飲んだ仲であつた。李忠も魯達の俠義に感服していたので、魯達の面子を立て、周通が劉太公の娘をもらわぬことを約束した。

『莠句冊』と『水滸伝』の傍線部を比較してみると、以下のような共通点が見られる。

ア 円性も魯達もともに性格が粗っぽく、力が強い。その性格のせいで勤めた寺から追ひ出された点と、途中で人家に一晚を乞う点。

イ 両者とも、宿泊先の主人の機嫌がよくないのに気づき、これを気使つたところ、家の主人から家の難を語られる点。

ウ 主人の家の難を知つて助けようとする二人は、智慧を巡らし、難を乗り越えようと、案を考えた点。(魯達は、自分が娘の代わりに、新婦の部屋で寝て、新郎が来ると、彼を拳骨で殴つたのに対して、円性は、家の娘の代わりに、腰元のあけぼのを茅渚の男と会話させ、茅渚の男が偽物であることを明らかにした。)

しかし、さらに注意を払うべきは、円性も魯達も、最後まで家の難を助け切っていないところである。そこまで、庭鐘は円性に魯達の面影を重ねていたのである。

李忠と周通は、魯達の俠を尊敬し、彼を自分の寨さいに招き、何日か招待したが、魯達は、二人が吝嗇な人であると思い、二人が外出して金銀を奪いに行くのを機に、彼等の家の財宝を取って寨から姿を消した。周通は魯達を「くそ坊主」と言い、李忠は「彼を追いかけて、赤恥を搔かせよう」と憤った。しかし魯達は、自分が李忠の財宝を取って姿を消した後、周通がまた劉太公の娘をもらいに行くと劉太公一家はどうなるかまでは、考えていないようである。いやむしろ、予見はしていても、そこまでは自分の力が及ばないとあきらめたのかもしれない。この点からも、魯達は緻密な性格ではなく、荒っぽい性格の持ち主であることが分かる。

一方、円性は、茅渚の男が偽物であるのを見破り、偽物の曙をおとめの代わりに茅渚のおとくに嫁がせると提案する。これまではよいのであろうが、円性は、最後に「此家の難は是までならんか。彼等は風流縁業、今や殺生に及べり」の言葉を残して、「袖を払ひて去つて行った。すなわち、円性は、この家の難はまだまだあって、これから殺生が起こることを予見しながら、これは自分の力では及ばないものとして、姿を消した。

これで魯達と円性との間に、四番目の共通点が出てくる。すなわち、

エ 二人とも最後まで宿泊先の家を守りきれず、これからの災難がまだ続くこと、あるいは続く可能性があることを知りながらも、その場を去って行った点。

である。

『大和物語』の優雅なおとめ伝説の世界に、俗の魯達の面影を投影する庭鐘の狙いは、何であるうか。

第二説の始まりに、「又古き跡とむる旅人、西なる味泥の塚にて田の畔に立る人に問へば『言長々し。我いほりへ』といざなひて、『俚談さへ早昔となりぬ。(省略)』とある。すなわち、第二説は、一つの「俚談」として語られたのである。「俚談」である以上、俗の話でないといけない。そのため魯達が人の娘を救う一条をここに活かしたのであろう。これだけではなく、魯達の荒っぽい性格、ものすごい力、寺から追い出された典型的な特徴は、円性の人物造形に巧みに利用されているのである。その性格の荒っぽい僧を入れることで、物語は優雅な乙女伝説から、生き生きとして現実味のある、面白みの出ている物語にがら

りと変わることができた。

庭鐘が『水滸伝』を利用したのは、『莠句冊』が初めてではない。第一作の『英草紙』の第七篇「楠弾正左衛門不^レ戦して敵を制する話^{こと}」において、すでに『水滸伝』が利用されていたのである。⁽⁹⁾

また、庭鐘以外、彼の弟子なる上田秋成も魯達を作品の中に取り入れたのである。『春雨物語』の「樊噲」である。⁽¹⁰⁾『春雨物語』は文化五年にようやく形を得たのであるが、師弟関係にある庭鐘と秋成は、魯達の人物像に興味を持ち、これを読本に取り入れたところは共通している。

四 冢の神霊問答

第三篇のタイトルは「求冢俗説の異同冢の神霊問答の話」であるが、冢の神霊の問答の部分にはそれほど多くの丁数を費やしていない。三つの求冢の伝承を語り始める前に、中野何某と友達の関の何某が塚を訪れ、関の何某に塚の神の霊が乗り移り、中野何某と問答する話が置かれている。

一とせ丹州の中野何某なるもの、友なる関の何某に連れて高砂の辺を遊賞し帰るがてに、「此の中の陵を慇懃に拜して過けるが、忽ち関氏独云常ならず。『云、』「それ冢陵は棄戸の地にして、其氏族恩義の外は与らず。祭れる霊社は別にして日を撰て神を降し祭礼す。帰命の日さへ祭らず。是を平人の冢と思へるか」。中野其言に対して云、「如何なる貴人の跡ぞ」。関云、「我も知らず」。云、「しらずして何ぞ人を咎る」。云、「我は此男が拜するによつて降りたる冢の神なり。其始は稀に此冢を拜する人あるが為に降されて我任と思へり。先つかた遥の海島より我を降してかしこのぞめり。彼祝詞に云、『其奥柳は饒速日命、其地は御子孫を海の伯として家を占給ふ。其跡を認て津守といひ住吉と名づけ、国社在す。茅渟の玉出に向ひて共に海の幸を守り給ふ。世々遥に祈りて海利を蒙り、今此に勸請し奉らんとして、其地勢を知らず。冢の御神を請奉つて其地の象を受けて、山水似たる地を撰んで経営を志す者なり』と告る、是もまた知れがたき故に、求冢といふ類かと、人に抛りて其間にこたへ畢ぬといふ。(中略) 霊

ありて降す人常に絶ずとも、神は特々各別にこそ降らめ」と、^三かたりて地に伏す。半時にして覚来り独言の応答を兩人語りあひて、我思ひよりや出けんと奇特の事に思

里にかへりて人々にもかたりぬ。古きうたに、

たましひはをかしきこともなかりけりよろづの物はからにぞありけり

かゝることは声もなく香もなく、いふもいはぬも誰か心をとめん。世の事は酒色財氣によれる事こそ。憐も、興も、ありこし断をも思ひ知べき。

右に引用した箇所は神の霊が関の何某の体に移り、中野氏と問答する内容である。塚の神の霊と中野氏との問答の内容はさておき、人が突然神憑りして、他の人と問答するプロットについて見てみたい。

庭鐘の愛読する『警世通言』卷二十七「假神仙大鬧華光廟」にはこのような話がある。

宋の時杭州の普濟橋に宝山院という寺があり、別名華光廟と言う。魏宇という秀才は華光廟の隣の小楼に住み、学問に専念している。ある夜、突然呂洞賓と名乗る仙人が来て、魏には仙骨があり、彼を度したいと言う。魏はこれを信じ、夜ごと呂洞賓と一緒に寝る。しばらく経つと、呂は何仙姑と名乗る仙人を連れてきて、魏とのことを何仙姑に知られたので、なんとか何仙姑を宥めて、天帝にばれないようにと願う。そこで魏宇は呂洞賓と何仙姑と三人で夜と一緒に寝ることになる。こうして半年過ぎたところで、魏の父親は魏宇の瘦せこけた姿を見て、大いにびつくりして、魑魅魍魎ちみもりょうに誘惑されたと分かる。裴守正という道士に魑魅魍魎を祓い除くことを願ったが、効果は少しもない。そこで、家族のアドバイスを聞き、華光廟の神仙に祈願する。魏宇の友人は新しく建てられた純陽庵（呂洞賓を祭る庵）に祈禱した。すると、次の夜になって魏宇は元気がでるようになる。魏の父親は華光廟の神仙に感謝しないと思ひ、祭礼を揃えてそこに行った。親戚たちも彼について行った。その時のことであつた。

札畢、化紙、一只見魏公双眸緊閉、大踏步向供桌上坐了、端然不動。叫道、「魏則優、

你兒子的性命、虧我救了。我乃五顯靈官是也。」

衆人知華光菩薩附体、都來參拜。

叩問、「魏宇所患何等妖精？神力如何救拔？病体幾時方能全妥？」魏公口裏又說道、「這

二妖、乃是多年的亀精、一雌一雄、慣迷惑少年男女。吾神訪得真了、先差部下去拿他。

二妖神通廣大、反爲所敗。吾神親往收捕、他兀自假冒呂洞賓何仙姑名色、抗拒不服。

大戰百合、不分勝敗。恰好洞賓仙姑亦知此情、奏聞玉帝、命神將天兵下界。真仙既到、

僞者自不能敵。二妖逃走、去烏江孟子河裏去躲。吾神將火輪去燒得出來。又与交戰、

被洞賓先生、飛劍斬了雄的亀精、雌的直驅在北海水陰中受苦、永不赦出。（中略）你看

我的袍袖、都戰裂了。那雄龜精的腹殼、被吾神劈來、埋於後園碧桃樹下。你若兒子速愈、可取此殼煎膏、用酒服之、便愈也。」^目說罷、魏公跌倒在地下。^マ衆人扶起、喚醒、問他時、魏公並不曉得菩薩附体一事。衆人向魏公說這備細。魏公驚異、就神帳中看神道袍、果然裂開。往後園碧桃樹下、掘起浮土、見一龜板、約有三尺之長、猶帶血肉。(祭礼が終わり、紙錢を焚くと、魏公(魏宇の父)は両目をつぶって、大またに供物の机に向かつて行き机に座り、端然とじつとしてゐる。そして、「魏則優、あなたの息子は、私のおかげで、命が救われたのだ。わしは五頭靈官だ」と叫んだ。衆人は華光菩薩の靈が魏公に乗り移ったことを知り、みな参拝に来て、尋ねた。「魏宇はどんな妖精に迷わされたのですか、神様はどのようにに救い出したのでしょうか、病んだ体はいつ治るのですか」と。魏公また口を開いて言った。「この二つの妖精は、長年活きた亀だ。一つは雄、一つは雌で、よく少年少女を誑かしていた。わしは事実を下調べした後、まず部下を遣わしかれら捕まえさせたのだが、二妖の神通がすごいものだったため、かえって敗れてしまった。わしは自ら行き捕まえようとしたが、彼らはやはり呂洞賓と何仙姑と偽り、抵抗して降伏しない。百回も戦って、勝負がつかない。おりよく本物の洞賓仙姑もこれを聞きつけ、天帝に奏聞すると、天帝は神將神兵を遣わした。本物の神仙がお見えになると、偽物は自ずから対抗できず、逃げて烏江孟子河に行き隠れた。わしは火の輪を用い川を熱くした。すると彼らは出てきて、また戦ったのだが、雄は洞賓先生の飛劍で切られ、雌は北海に逃れて苦しみを味わい、永遠に出ることを許されない。(中略)見てごらん。わしの長衣の袖は戦いで破れている。雄の亀の甲羅はわしが割り、後園の桃の木の下に埋めた。息子にはやく治ってもらいたいなら、この亀の甲羅を取り葉に煎じ、酒と一緒に飲ませてあげなさい。」語り終わると、魏公は地面に倒れた。衆人は彼を起こし目覚めさせた。魏公に先程のことを聞くと、彼は菩薩が自分に乗り移ったことを全く覚えていなかった。衆人が事こまかに教えると、魏公は驚異した。帳の中にある神の像の着る道衣を見ると、果たして破れていた。後園の桃の木の下に行き、土を掘ると、亀の甲羅があり、それは三尺ばかりの長さで、まだ血肉がついていた。)

右に引用した部分と「求冢俗説の異同家の神靈問答」の「神靈問答」の部分と比べると、以下のような共通点が存在することが分かる。

一 神の靈が人の身に憑り、何かを語る点。

Ⅱ その場に居た人間が、神の霊と会話をする点。

Ⅲ 神が話を終えると、神憑りした人は地面に倒れて意識不明になる点。

Ⅳ 神憑りした人は、目覚めた後、起こったことについて何も覚えておらず、聴かされる
と、奇異に思う点。

『警世通言』巻二十七と「求冢俗説の異同塚神の霊問答の話」は、神の霊と問答する内容自体は異なっているのであるが、右に挙げた四つの共通点を考えれば、神憑りするプロットは同じである。神が人の体に移って、人の口を借りて何かを語る、語り終えると、神憑りした人は、地面に倒れ、意識を失う。そして、目覚めて意識が戻った後は、何も覚えておらず、聴かされると、起こった事を不思議に思う、といったところである。

言葉そのものの引用は見られないのであるが、プロットが利用されていることは認められよう。『警世通言』に通暁している庭鐘が、これを自分の作品に趣向として取り入れたことは推測しやすい。では、庭鐘はなぜこれを取り入れたのであろうか。

徳田武氏は、塚の霊の問答の部分については、触れていない。高田衛氏は前掲論文で「中野何某」と友達の「関氏」は実は『撰津志』の編者である「関祖衡」と「並河誠所」を指していると指摘している一方で、この部分が難解であるとしている。

氏は「霊問答のかたちをとって神道論が行われるところは、作者の大きなねらいであったと考えられる。しかし残念なことに、そのかんじんの神道論の内容の部分が、論旨が錯綜かつ不鮮明で、理解困難なのである。たとえば、ここでいう『冢神』は、その塚を拝礼するときに降臨する神であって、けっして塚（に祀られた古人）の霊ではないのである。したがって『冢神』ではあるけれども、その塚の主は知ることができないし、その必要もないというのである。この論述には一種の異論理があって、これをめぐる言説は難解というより他にないのだ」と述べている。

高田氏の述べられた通りで、問答の内容は極めて難解であるが、前に引用した「求冢俗説の異同冢の神霊問答の話」の□で囲んだ部分に注目すると、塚の神が塚に対して一種の説明をしていることが分かる。すなわち、神の霊が関の何某に乗り移って語るには、自分はこの塚を拝する人が稀にあるため下されたものであり、塚の主ではない。この塚は「平人の冢」ではない。だが、「如何なる貴人の冢」なのかについては、自分も知らず、自分を降した「先つかた」の祝詞から知ることができると、祝詞によると、「其奥擲は饒速日命、其地は御子孫を海の伯つかさとして家を占給ふ。其跡を認て津守といひ住吉と名づけ、国社在す」という。しかし、これは知れたいことであるため、人々は勝手に求塚と答えてしまった

という。

神の霊が言い出した塚の由来は作品の冒頭にあった「古來文人皆俗談に抛りて藻を作り、『葦の屋のうなひをとめの奥柳』（傍点は筆者）と詠じ」たものと違う。神の霊がこの奥柳は饒速日命のものであり、その土地は饒速日命の子孫が海の伯として家を占めると言った。面白いことに、後に紹介された三つの伝説の中で、神の霊の言ったことと似たような伝説がある。これは三番目の伝説である。

三番目の伝説の始まりに「況瑞穂の国に、今は太古と語にしつゝ知るべのかぎり思ひよるに、滄海原は先に素盞鳴の大任にて、其に従へる海伯の一家あり。其先は諾尊西海に洗拔して置せ給へる諸神の末裔にて、浪速の水奈太に抛て其令遠く行はれ、水郷を専らとし、海伯に長たり。宮居を玲瓏の御館と称す。其の后宮住吉姫賀美閑雅たり」とある。つまり、神の末裔である点、海と関わる点においては塚の神の霊の言ったことと同じである。

神の霊の言った「この塚は「平人」の塚ではなく、貴人の塚である」というところは、興味深い。庭鐘は、冒頭の中で確かに「其の冢の状前の方長く出たるを俗に車づかと呼ぶ。馬鬣封のなだれたるが轅の象あればあらん」と書いている。馬鬣封なら、「平人」の塚だと考えるのは、やはり違和感がある。高田氏は、「（庭鐘が）塚（『馬鬣封』）前方後円墳」のスケールから、古代治世者階級を想定した上で、海の王族の世界へ話を転じているわけである。パロディとしての発想にもかかわらず、塚を成立させた古代への想像力は、論理的学術的な洞察力にもとづいているというべきではないだろうか。」と述べている。高田氏も、塚が王族の塚であるとの考えであろう。

庭鐘はなぜ神憑りのプロットを使ったのかという問題に戻る。三つの伝説を語る前に、このような一段を置くことは、塚の神の霊の言葉を借り、三番目の伝説の正当性を強調しようとした庭鐘の狙いがあったのではないかと思われる。すくなくとも、海の貴族が背景にある伝説の可能性を庭鐘は提起したかったと考えるとよからう。神の霊の言葉を置くことで、のちに視線を海のように転じる下準備をしておいたことになったのである。この前提があるから、庭鐘は第三の伝説において、海の王族の物語を展開することができたのではないか。三番目の伝説は、神の霊の問答の話を前提に書かれたと言えるよう。

五 三つの伝説に見る異同

塚に関する違う伝説を三つ羅列して、庭鐘はこの作品を通して一体何を言いたかったので

あろうか。

高田氏は以下のように述べている。

一般にもよく知られた摂州菟原郡の求塚伝承を材とし、三つの塚をめぐる三種類の縁起を並列するという方法は、作者がこの三つの縁起を書くことで、何を言わんとしているかが必ずしも単純明瞭ではないがゆえに、一種異様な印象をあたえかねないのである。¹⁵⁾

しかし、果たしてそうであろうか。

まず、三つの伝説の異同を考えたい。

庭鐘は三つの伝説を紹介したのであるが、粗筋のところの説明したように、伝説の内容そのものは違う。

一番目の伝説では、塚にはおとめ、茅渟の男と菟原の男、つまり女性一人、男二人が埋められている。二番目の伝説では、塚にはおとめの腰元である曙と、茅渟の男と菟原の男と、すなわち女性一人、男性二人が埋められている。そしておとめ本人が死んでおらず、塚の守り役をする。三番目の伝説では、塚には海伯わたつみと、二臣の陳努ちぬと小竹多さきたが埋められ、つまり三人の男の塚となっている。住吉姫の塚でもなく菟会うないおとめの塚でもない。塚の中には女性はいなかった。

すなわち、まず第一の「異」として、塚に埋められた人が違うところが挙げられる。お

とめ、茅渟の男、菟原の男 → 腰元である曙、茅渟の男、菟原の男 → 海伯、陳努と小竹多の二臣と変わってくる。

そして、三つの伝説における女性の心境はどのように移り変わってきたのであろうか。

第一話では、おとめは男性の気持ちに答えられず、自ら入水してしまった。その後を追い、二人の男性も入水した。おとめが、どちらかの男性と結婚したいかのような描写は全くなかった。二人の男性の愛に応える術がないゆえ、自ら死を選んだ純粋な女性として描かれた。

しかし、第二話となると、主人公のおとめは死んでいなかった。死んだのは、おとめの身代わりの腰元の曙であった。そして、この話において、注目すべきところは、おとめは自らどちらの男性と結婚したいかを強く願っていた点である。彼女は茅渟の男を慕い、自分が菟原の男と結婚することになるのを知ると、悲しみ極まった。これは、第一話の中のおとめの形象と顕著に違うところである。

そして、第三話となると、これは二人の男性が一人の女性を争うのではなく、二人の女

性が一人の男性を争う物語となっている。男性と女性の主動性は逆転したのであり、能動的なのは、男性ではなく、女性である。二人の女性は男の心を得るために、策略まで使ったのである。

求め塚の俗説の異同は、ただの塚に関わる主人公の名前や、伝承の内容の異同を指しているのではなく、この三つの伝承の中における女性の男性への態度の移り変わりも含んでいると思われる。第一番の伝承から第三番の伝承までの物語の内容が推移し、変化しているなか、物語がだんだん俗っぽくなってくる中で、女主人公の愛情に対する態度の変化も著しく感じられる。表で三つの伝説の「異」を纏めると、以下のようなふう。

表一 三つの伝説の違い

求塚俗説の異同	第一話	第二話	第三話
塚に入っている人	おとめ、茅渟男と菟原男（女性一人、男性二人）	腰元の曙、茅渟男と菟原男（女性一人、男性二人）	海伯、臣の陳努と小竹多（男三人）
おとめの結末	入水して死んだ	尼となり、死んだ 三人の塚を守る	おとめは住吉姫に留められ、二人で海伯に仕えた
おとめが男の愛情に積極的に応える	なし	積極的である	おとめも住吉姫も積極的である
話の俗っぽさ	なし	俗っぽい	俗っぽい

では、三つの伝説における「同」は何であろう。ともに「求塚」をめぐる伝承である点は、もちろん同じであるが、三つの伝説を通して、庭鐘が何を言いたかったのかも三つの伝説

における「同」と言えよう。

ここで注目したいのは、庭鐘が冒頭と末尾のところ、二箇所にわたり「酒色財氣」に触れていることである。

冒頭の「神の靈問答」の次に、次のような内容が書かれている。

古きうたに、

たましひはをかきこともなかりけりよろづのものはからにぞありけり

かゝることは声もなく香もなく、いふもいはぬも誰か心をとめん。世の事は酒色財氣によれる事こそ。憐も、興も、ありこし断をも思ひ知べき。

世の中の事はすべて酒色財氣によるものである。憐れな事も、興のある事も、すべての理によるのである。

そして、三番目の伝承を語り終った後、結末に

酒は飲ざれば酔べからず。借りの乱れも内よりするにあらず。色は仮如也。其人と時と定めがたく孟子物がたりの色にはあらじ。財とは此に宝器のみならず、恋もしつ欲もして、得たるも得んとするも皆財なり。氣こそわきていみじき物なれ。飢てもくらはず死しても恨みず。寵を争ひ移るを恥とし堪るも耐ざるも、人の直なるは此内にありて、駒の手綱のひかへらるべきものは。此の馬鬣封に心とむるも氣なるべし。

とある。

結末も酒、色、財、氣の四つにそれぞれ解釈を加えての文章となっている。庭鐘はなぜこれに触れたのであろうか。

一番の伝説では、二人の男が一人の女性を愛し、女性の後を追ひ、入水するとあるのだが、それは実は二人の男は「色」のために死んだのであり、おとめを思う気持ちは「色」を思うと同じである。これが原因で、二人とも死ぬこととなった。「色」が人の生死を決めるポイントとなっているのである。

二番目の伝説では、おとめが茅渟の男の艶書に心打たれ、茅渟の男と結婚したいと思うのは、「色」の心が芽生えたからである。そして、茅渟の男はおとめと結婚しようとしたのは、おとめの家の財産が気に入ったからである。菟原の男がおとめが奪われたことを聞き、茅渟の男と殴りあった結果、二人とも死んでしまったのである。菟原の男はもし「氣」がすこし大きく、当時の状況を正しく把握すれば、悲惨な結末は免れられたはずであった。しかし、怒りの気持ちで一杯だったその時は、事情を確認するには至らなかつた。二番目

の伝説はまさに「色」、「財」、「気」の物語と言えよう。

三番目の伝説では、海伯が菟会のおとめを気に入ったのは、まず「色」心が働いたからである。住吉姫の海伯を取り戻す作戦は、まさに「色」と「気」の二つを併用したものである。「旧衣を去り、新に裁たるさへぐを服して粧ひ脂沢を施すのは、「色」を用いる策略であり、「今夕にても君公内に入らせ給はゞ、顔を和げ菟会を召て左右に侍せしめ。妃は身みづからさかり卑て席を専らとせずして、君の去来にまかせ給へ」という陳努の臣のアドバイスは、住吉姫の気立てを試すものである。「色」と「気」をうまく使った住吉姫は、海伯の心を取り戻すことに成功した。三番目の伝説は「色」と「気」の物語とも言えよう。

徳田氏は、第三話が全篇の中心であるとし、「媚態は、国家の治安を維持するという政治論理の要請のもとに用いられるのである。女性の男性籠絡術というすぐれて私的な事柄が、庭鐘の手にかかると、国家の存亡を決定する政治論理にまで関連づけられる。このように、いささか強引な関連づけによって、庭鐘は小説中に政治論理を込めようとする。とすれば、これまた粉本の私的性質を公的性質に変質させる翻案方法なのであった」と述べている。⁽¹⁶⁾ 徳田氏の指摘された通りで、庭鐘のオリジナリティーの翻案方法が見られるわけではあるが、三つの伝説を通して、庭鐘が共通して言いたかったのはむしろ人間の「酒色財気」に対する執着である。

実は、第三章のところで触れてはいるが、『繁野話』第一篇「雲魂雲情を語て久しきを誓ふ話」の典拠となった『警世通言』巻十一「蘇知県羅衫再合」の冒頭の話には、酒、色、財、気の物の霊が登場して、李広と一夜を過ごすため、各々自分の長所をアピールし、他の短所をあげつらう話があった。李広はどうとう酒も色も財も気も適宜であることが大事と気づいた。庭鐘は、『警世通言』巻十一に登場する物の霊が語りをするという趣向を取り、『繁野話』の第一篇に取り入れたのであるが、李広の「酒色財気」の四つに対する見方も庭鐘に影響を与えたと思われる。世の事はこの四つによっているからこそ、ことさらに度を過ぎず適度な扱いをしなくてはいけないのであると庭鐘は人々に警告しているのかもしれない。

『繁野話』の「序」で、第三篇の「紀の関守が霊弓一旦白鳥に化する話」について「手束弓の故事に任氏の伝奇を繋ぎ、邪色の人を蕩すことを覚す」と書いている。「邪色じしよの人を蕩すとらことを覚すさと」のが、『繁野話』の第三篇を書く目的と言えよう。人々を諭す意味で、『莠句冊』の第三篇は『繁野話』の第三篇と同じである。「酒色財気」が世の事を変えることができる」と庭鐘は、人々に注意を喚起したかったのであろう。身分階級を問わず、性別を問

わず、平人にせよ、貴人にせよ、男にせよ、女にせよ、「酒色財氣」の四つに支配されやすいゆえ、適宜な扱いをしなければならぬと庭鐘は読者に言い聞かせているのであろう。

六 終わりに

本章では、まず『水滸伝』の魯達の面影がどのように利用されたかについて『水滸伝』の関連箇所と二番目の伝説とを比較してみた。その結果、徳田氏の指摘した『水滸伝』第五回魯達が劉老人の娘を救う一条だけではなく、円性には全体的に魯達の面影が投影されていることが分かった。そして、『水滸伝』の通俗物語が利用されることによって、『大和物語』にある優雅なおとめ伝説から俗っぽい普段の生活にありうる物語に転じることができた。

次に、神憑りの趣向を考察し、これによって庭鐘が『警世通言』巻二十七「假神仙大鬧華光廟」に拠っている可能性が大きいことを提示した。両者には、神の霊と人間との問答の内容は異なるのであるが、神の霊が人に移る時の様子、語り終わった後神憑りした人がぼったりと地面に倒れることや、意識が戻った後に、起こった事について何も覚え、奇異に思うところなどは、すべて一致している。そして、庭鐘がこの神憑りの趣向を用いたのは、三番目の伝説の正当性を強調し、海の王族が背景にあるもう一つの伝説の可能性を提示しなかったところにあつたと、考える。

最後に、三つの伝説の「異」と「同」に注目してみると、三つの伝説における女性の愛に対する態度が著しく変化していることに気づく。男の恋に対してどう応えるべきかに迷ってしまった結果自ら入水した純情なおとめから、どちらかの男性と結婚したいかをはっきりと自分の主張を持つおとめへ、最後は、男の愛を取り戻すために策略まで考える女性へと移り変わったのであつた。

しかし、これらの背景には、三つの伝説が共通して、世の事はすべて「酒色財氣」の四つに拠っていることを庭鐘は人々に言い聞かせているところがある。第三篇の作意と主題はかなり難解であるが、これが作者の言いたかったことの一つのことではないかと思われる。

第三篇に使われる素材として、『大和物語』におけるおとめの伝説、『水滸伝』の魯達の故事、徳田武氏が指摘するように、『聊齋志異』の「恒娘」、『西湖佳話』の「西泠韻蹟」などがあるが、これらはそれぞれもともと関係のない話ではあるが、三つの伝承の中にそれぞれを織り込むという方法を使うことによって、バラバラの素材が有機的に繋がつたのであ

る。『繁野話』の第三篇「紀の関守がたつかかり霊弓一旦白鳥に化する話」の翻案方法を、庭鐘自身は序文で「手束弓の故事に任氏の伝奇を繋ぎ」と書き、「繋ぎ」の方法を明かしている。徳田武氏は、「都賀庭鐘 遊戯の方法―『英草紙』『繁野話』と唐代小説・三言―」（『日本近世小説と中国小説』第二章）で、「繋ぎ」の方法について論じられている。¹⁷⁸。そして徳田氏は、この「繋ぎ」の方法を、『文人』庭鐘がその才気、学識の縦横な駆使を楽しむための、即ち知的遊戯を兼ねた方法である¹⁷⁹としてしている。

『繁野話』の第三篇においてはそうであったが、『莠句冊』第三篇「求冢俗説の異同」において、本来無関係の話を「繋ぎ」の方法によって有機的に整合しているのであると思われる。その「繋ぎ」の糸としては、「三つの異なる伝説」を書くアイデアであった。この点から、庭鐘の第三部の読本作においてもその知的遊戯方法が見られるのではなからうか。

注

- 1 宇佐美喜三八「垣根草と支那小説」（『国語と国文学』十卷五号 一九三三年）
- 2 徳田武「庭鐘と『西湖佳話』『聊齋志異』―『莠句冊』第三篇覚書―」（『日本近世小説と中国小説』第四章所収 青裳堂書店 一九八七年）
- 3 『莠句冊』と徐渭の『四声猿』についての受容関係は、徳田武氏「庭鐘と『四声猿』―『莠句冊』第六篇―」（『日本近世小説と中国小説』第五章所収 青裳堂書店 一九八七年）が詳しい。
- 4 『警世通言』卷三「王安石三難蘇学士」は『英草紙』だけでなく、『莠句冊』の第四篇「玉林道人雑談して回頭を屈する話」と第八篇「猥瑣道人水品を弁じ五官の音を識る話」にも使われたことは、早くから山口剛氏（「読本の発生」『山口剛著作集』二五四頁）と麻生磯次氏（「読本の発生と支那文学の影響」『江戸文学と中国文学』一〇〇頁）によって指摘されている。
- 5 注2に同じ。二二五頁。
- 6 高田衛「伝承・庭鐘・求塚」―ある十八世紀小説の試行錯誤―（『文学』六一―三一九九五年）
- 7 注2に同じ。
- 8 『水滸伝』からの引用箇所は『水滸伝』（中華書局 一九九八年）による。翻訳は『完

訳水滸伝』（吉川幸次郎 清水茂 岩波書店一九九八年）を参考にした。

9 『英草紙』における『水滸伝』の利用は第一部第一章をご参照いただきたい。

10 『春雨物語』（日本古典文学大系 中村博保校注）「樊噲」の頭注にある。

11 『莠句冊』からの引用箇所は高田衛監修江戸怪異綺想文芸大系2『都賀庭鐘・伊丹椿園集』（稲田篤信・木越治・福田安典編 国書刊行会 二〇〇一年）による。

12 『警世通言』からの引用箇所は『警世通言』（嚴敦易校注 人民文学出版社 一九五六年）による。

13 注6に同じ。

14 注6に同じ。高田氏は、また「塚を成立させた古代への合理的な洞察は、すでに『攝津志』の階段で、これらを「三陵」とした上で、『即此按「皆上古ノ荒陵」といういい方で示されるところであった。しかし『攝津志』は、これらが沿海の古墳であることを無視していた。庭鐘は『攝津志』の実証的な思考を継承しつつ、さらに沿海の古墳であるという条件にのっとり、第三の話を構成しているわけである」と庭鐘の沿海の古墳に着目し、海の王族を主人公にして小説にしていると述べている。

15 注6に同じ。

16 注2に同じ。

17 第一部第三章をご参照いただきたい。

18 徳田武「都賀庭鐘 遊戯の方法―『英草紙』『繁野話』と唐代小説・三言―」（『日本近世小説と中国小説』第二章所収 青裳堂書店 一九八七年）

19 徳田氏は前掲論文で『繁野話』の第三篇における「繋ぎ」の方法を以下のように述べている。「この篇に於いて庭鐘が最も重点的に意図を置いたのは、それもさることながら、中国小説『任氏伝』と本朝の説話『今昔物語』の一節という、その構成・趣向・措辞において本来全く没交渉の両話を如何に巧妙に破綻なく関連付けるか、という点に在ったのである。再三述べるが、第一段は「任氏伝」の構成を撰取し、第二段は今昔の構成に準拠している。「任氏伝」と今昔の間には何の関連もない以上、第一段と第二段が一見断絶しているかのように思えるのは当然であろう。ところが庭鐘は、第三段において、一見無関係であるかのような両話が相互に因となり果となって関連していることを、小蝶の言に托して説明する。即ち、第三段で第一段と第二段の両話を巧妙に、破綻なく統合してみせるのである。この方法こそ、庭鐘がみずから「手束弓の故事に任氏の伝奇を繋ぐ」と、述べた方法である」。

第二部

石川雅望の読本と中国古典小説

第一章 『近江県物語』における中国戯曲『笠翁伝奇十種』の利用法の一端

―常人の人物像と小道具「笏」を中心に―

一 はじめに

『近江県物語』は文化五年（一八〇八）に出版された石川雅望の長編読本である。これが清代李漁の『笠翁伝奇十種』の「巧団円伝奇」を翻案したものであることはすでに周知のごとくである。¹⁾ 李漁は清初の戯曲作家であり、字は謫凡、号は笠翁である。『笠翁伝奇十種』は所謂「奈何天伝奇」、「比目魚伝奇」、「玉搔頭伝奇」、「巧団円伝奇」、「慎鸞交伝奇」、「憐香伴伝奇」、「風箏誤伝奇」、「蜃中楼伝奇」、「鳳求鳳伝奇」、「意中縁伝奇」の十種である。早稲田大学図書館には出版年不明の曲亭馬琴旧蔵の『笠翁伝奇十種』がある。ただし、「蜃中楼伝奇」は欠本である。李漁は戯曲以外、『十二楼』、『無声戯』などの白話小説と『閑情偶寄』の随筆をも著している。そのなか、『閑情偶寄』では、十六巻のうち五巻にわたり戯作法を紹介している。

『舶載書目』（大庭脩編 一九七二年）によると、『笠翁伝奇十種』は元禄十三年（一六九一）と享保十三年（一七二九）に日本に舶載されたとの記録がある。『近江県物語』以外にも、雅望の他の二つの読本『天羽衣』と『飛驒匠物語』が、それぞれ『笠翁伝奇十種』の「奈何天伝奇」と「蜃中楼伝奇」の趣向を利用している。²⁾ ここからも、石川雅望が、いかに李漁の作品を愛読し、その作品から影響を受けていたかが分かる。雅望は天明八年（一七八八）に大田南畝主催の「訳文の会」の参加に始まり、以後、漢籍の和訳に研鑽を積み、成果として『通俗醒世恒言』を寛政二年（一七九〇）に出版している。

戯曲の文体と白話小説の白話文体を雅望がうまく把握し、吸収しているところから、彼の漢文・漢文学の造詣の深さが窺える。

本章では、今まで明らかにされていない『近江県物語』における常人の人物造形と小道具の「笏」に着目し、「巧団円伝奇」の利用法の一端を明らかにしたい。また、常人によって生じる笑いと滑稽は、雅望が『笠翁伝奇十種』にある「醜角」の滑稽から影響を受けたものであるという結論に導きたい。

二 『近江県物語』と「巧団円伝奇」の粗筋

便宜上、「巧団円伝奇」と『近江県物語』のあらましを纏めておく。

姚克承（姚継）は、一人の秀才である。（傍線部は筆者、以下同）彼は、両親に死なれ、一人で生活している。よく夢の中に、一つの小楼が出てくる。その二階のベッドの後ろに玩具箱があり、これには自分が小さいときに遊んでいた玩具類が入っている。

隣に住んでいる曹玉宇（姚器汝）は姚克承のことを気にいり、彼を娘の曹小姐の婿にしようと考えている。乱世の中では、学問をしても、出世できないから、曹玉宇から商売を勧められた姚克承は旅に出た。出発前、姚は曹小姐から詩の書いたハンカチを贈られた。旅の途中で、姚は自分を売る翁に出会い、彼を買って、父親にした。また、賊たちが女の人を袋に入れて、売っているのを聞いて、自分の婚約者かもしれないと思って、買ってきたところ、一人の姥であった。そこで、この姥を母親にした。姥から、自分の貞潔を守るため、巴豆を体に塗り、病気を装う烈女のことを聞き、買いに行くと、婚約者の曹小姐であった。後に、すべてがわかってきたが、買って来た翁と姥は、実は、自分の本当の両親であった。夢の中の小楼は、自分の住んでいた家であり、その二階にあった玩具類は、夢の中に出てきた玩具類であった。（「巧団円伝奇」）

村上の御時に、藤原季光夫婦がいた。彼らには、長年子供ができなかったため、妻は長谷寺に祈願し、愛丸が生まれた。しかし、愛丸は三歳の時に、病気で亡くなり、船岡に埋められた。その夜、一人の乞食が愛丸の墓を荒らし、彼の腰に挿してある笏を盗もうとしたところ、愛丸が、蘇り、通りかかった旅人猿丸に命を救われた。

愛丸は、猿丸に育てられ、名前を坂上梅丸に改められた。梅丸が九歳の時に、猿丸が死んで、同じ村の医師橘安世の世話になって、成人した。安世は、一人娘蘭生の婿に梅丸を選んだが、安世の甥常人は、悪知恵を働かせ、梅丸を家から追い出した。

家を出た梅丸は、途中で、武士の嵯峨左衛門に出会い、養子に迎えられた。時に、藤原保輔と藤原斉明が盗賊を従え、横行していた。梅丸は都に上る途中、盗賊の手から西念法師を救った。盗賊が婦人を守るのを聞いて、梅丸は買いに行った。はじめに買って来たのは、一人の姥であり、梅丸は、彼女を母親にした。姥から、敵陣の中に、巴豆を塗って、自分の貞潔を守る烈女がいるのを聞いて、蘭生だと思い、再び買いに行ったところ、今度は本当に婚約者の蘭生であった。

梅丸は盗賊討伐のため、藤原保昌の所に赴いた。彼は知恵をめぐらし、敵陣に入り、大火事を引き起こし、斉明とその部下を滅ぼした。また、嵯峨左衛門は、頼光の要請に応え、

軍勢を率いて、鈴鹿山に籠った保輔を滅ぼした。

最後に、皆は頼光のところに集まり、事の真実が明らかになった。即ち、嵯峨左衛門は、藤原季光であり、梅丸の実の父親であった。養父子の縁を組んだ二人は、本当の親子であったのだ。また、買った姥は、藤原季光の妻であり、梅丸の実の母親であった。西念法師は、かつて墓を荒らした乞食であった。頼光は、梅丸と菌生の仲人になり、二人の結婚を祝った。梅丸は近江掾となり、一家は栄華幸福に暮らした。 (『近江県物語』)

両作品の要約の傍線部を読み比べると、『近江県物語』が「巧団円伝奇」を典拠にして、その筋に従い翻案したものであることは、明らかである。「巧団円伝奇」の男女主人公の姚克承、曹小姐は、『近江県物語』の男女主人公の梅丸と菌生に変えられ、尹厚夫婦は藤原季光夫婦に変わり、曹玉宇夫婦は橘安世夫婦に変わったのである。実の父親と養父子の縁を組む構想、戦乱の中、盗賊たちによって袋に入れられた姥を買ってきて、これを自分の母親にした構想、印の物(笏)を手がかりに、巴豆を塗り貞潔を守る婚約者を請けだした構想、養父も、買った姥も、実は本当の両親であった構想などは、忠実に「巧団円伝奇」に沿って翻案したものである。

「巧団円伝奇」と『近江県物語』についての受容関係は、野口寧齋氏の『袋のうば』の辨をはじめ、山口剛氏と麻生磯次氏の詳しい論があるため、それに譲りたい。³⁾ここでは、一見ただけではわかりにくいのが、実は「巧団円伝奇」からヒントを得た常人の人物像と「笏」に注目したい。

三 常人の人物像と「巧団円伝奇」

『近江県物語』には、主人公の梅丸に対して、恋敵の人物常人が設定されている。文武両道の梅丸とは違い、彼は、「生まれつき心ひがみ、まがくしきのみならず、芸能の方も、無骨」である。叔父である安世は、そんな彼を見て、自分の家業を継ぐ人ではないとし、梅丸を娘菌生の婿に選んだ。常人は梅丸を妬み、いつも悪知恵を働かせ、梅丸を家から追いだそうとする。彼は、下女に梅丸が菌生に贈った聘物を盗み出させた。以前に、菌生に艶書の歌を送った時に、菌生からもらった断る内容の歌を聘物につけて、梅丸に返した。梅丸はそこで菌生が自分を嫌がり、自分と結婚する気がないと信じ、家出をした。

盗賊たちが来ると、常人も慌てて逃げまわった。物騒な世の中であるゆえ、思い切って

盗賊に入ったらいと考え、盗賊に入ろうとしたが、旅人の頭を切ってほしいと要求された。臆病な常人は、野原に行つて、死んだ人の頭を拾つて、これを自分が切つた四大天王の一人の頭だと嘘をついたが、その頭を見てみると、女の人の頭である。これが原因で盗賊のリーダーから侮辱されながらも、盗賊の仲間になり、板の風呂の水を炊く仕事を得た。最後、彼は叔父の財産を自分の財産にし、近江の神崎で生活をしていたが、梅丸にその罪を暴かれ、鬼界が島に流された。

従来、常人の人物像については、あくまでも雅望が新しく作つたものであると言われてきた。

例えば、麻生磯次氏は、常人について以下のように述べている。

近江県物語では、かなり重要な役割を持つ人物に、橘安世の甥常人と西念法師とがある。原話にはこれに当る人物は見えない。常人は梅丸の恋敵として現れ、全体の結構を著しく複雑ならしめている。常人は梅丸と菌生との婚約をねたみ、梅丸の聘物を盗み出し、嘗て菌生に贈つた艶書に対するすげない返事を、その聘物に添へて梅丸に渡し、菌生が梅丸を嫌ひ居るさまにつくろふのである。梅丸はこれを信じ、安世の家を出奔してしまふ。その後常人は盗賊に加担し、安世方に忍び入り、結局罪を訊かされて鬼界が島に流されるのである。この顛末は原話には全く見られぬ新しい趣向で、江戸の文学では常套手段となつてゐるところの恋敵の趣向を加味し、全体の筋書を複雑にしたのである。⁽⁴⁾

常人の恋敵の役で、全体の筋が複雑になつたことは、確かであり、間違いないことである。しかし、常人の人物像を、全く石川雅望が新しく作つたものと言ひ切つてよいのであろうか。というのは、常人が菌生に和歌を送る発想や、常人が盗賊に加入する発想は、原典の「巧団円伝奇」にはすでに見られる趣向だからである。まず、盗賊に入る場面を見よう。

「巧団円伝奇」(全三十三齣)の第十齣「解紛」⁽⁵⁾と第十一齣「買父」では、尹厚を虐める悪少年が登場する。尹厚は親孝行をする養子をもらうため、自分自身を十両で売るアイデアを思いつき、これを掲示板に書き、町の賑やかなところに掲げた。すると、これを聞いた悪少年は何人かを集め、尹厚をからかつて、殴つた。そこを通りかかった姚克承は、彼らの間に立つて、仲介をした後、尹厚を十両の金で買った。後に、尹厚と姚克承が、茶

楼で茶を飲んでみると、先ほどの悪少年たちが、また悪い案を考えだし、倍の値段で尹厚を買おうとしたが、尹厚は高い値段にまったく興味を示さなかった。悪少年はこれを見て、仕方なく退いた。帰る時、彼は、こう言った。

前日聽見人説、有個男人生孩子、又有個婦人長胡須。如今又遭这桩事、種種新聞、都是不祥之兆、明朝的天下、決失無疑了。我們快快去投闖王、帮他一齊造反、不可失了機會。」(先日男が子供を産んだやら、婦人がひげを伸ばしたやらと聞いた。今、またこのような不思議な事にあつたのはどういうことだ。各々は、不祥の兆しだ。明朝の天下は、失うことに決まつている。我々は早く闖王李自成に身を寄せ、彼の造反を助けよう。今の機会を失つてはいけない。)

(「巧団円伝奇」)

悪少年は尹厚が金にまったく興味のないことを不思議に思い、今の世の中の不思議な事は天下不祥の兆しであると思ひ、闖王李自成に身を寄せ、その一員になる事を決めた。

『近江県物語』卷三「ひはぎのうひ山ぶみ」には、賊たちが近江に近づくのを聞き、人々が逃げ回るシーンがある。常人もみなと同じく逃げ回つたが、途中、「巧団円伝奇」の悪少年と同じアイデアを思いつく。

(筆者注、常人)かの盗人のせめきたるさわぎに、おそれまどひて、あわてふためき、逃出て、あたり近き大野まで、はしり行けるが、たくはへたる物ひとつもなく、「いづくへゆかんにも、ふびんなり。いかゞせん」と、つくぐと思ひめぐらしけるが、「いまかく、盗人どものはびこりて、国々にみちたれば我ごときものいかにともせん方なし。今降を乞て、かれが手下となりなば、のち／＼なりいでんも、と思ひ定めて、ぬすびとゞもの、あつまりをる所に行きて……」(『近江県物語』「ひはぎのうひやまぶみ」)

二重線で引かれた部分を読み比べると、乱世の中、賊に入り、造反人になる発想は、やはり雅望が「巧団円」からヒントを得たことは、明らかである。故に、常人は、まったく石川雅望が新しく作った人物であるとは言えない。雅望は、「巧団円」の悪少年からヒントを得て、常人を賊に入らせることから常人の人物像に着手したのではないかと思われる。まず、「賊入り」の発想があつて、そこからいろいろな要素を加え、常人の人物像に肉つけていったのであろう。

重友毅氏は常人の人物像について、「常人の如きは、原作には見当らぬ人物で、或ひはそこでは単に一端役を勤めてゐるに過ぎない悪少年から脱化したものかとも考へられるが、それにしても働きの上に格段の相違がある」と述べている。⁸⁾

基本的には、重友氏も麻生氏と同じ意見である。が、一端役として、常人は悪少年から生まれた人物であるとも認めている。

盗賊加担が「巧団円伝奇」から趣向を取ったように、常人の人物像に於いて、ヒントを「巧団円伝奇」から得たものはもう一つある。これは常人と菌生との歌のやり取りである。

「巧団円伝奇」の第六齣「書帕」では、姚克承が商売に出ていくのを聞いて、曹小姐は、自分の気持ちを詩に表現し、ハンカチに書き、姚に送った。その詩は「関関たる睚鳩は、河の洲に在り、窈窕たる君子は、淑女の好迷。(原漢文、以下同)」である。これは、『詩経』開卷冒頭周南「関雎」の詩「関関たる睚鳩は、河の洲に在り、窈窕たる淑女は、君子の好迷。」を捻ったものである。

曹小姐は、自ら自分を「窈窕」たる「淑女」と称えるのをやめ、「窈窕」の二文字を姚克承に使って、「窈窕たる君子は、淑女の好迷」に変えたのである。

これを読んだ姚克承は、曹小姐の賢さに感心し、同じく『詩経』の詩「我に投ずるに、木桃を以てす。之に報ゆるに瓊瑤を以てす。報ゆるにあらず、永く以て好と為さん。」(衛風「木瓜」)を「我に投ずるに瓊瑤、之に報ゆるに木桃。報いにあらず、永く以て好と為さん」に変えて、父の形見の「尺」の上に書き、曹小姐に送った。

姚克承も曹小姐と同じように、自分のものを「瓊瑤」と譬えず、謙遜して「木桃」に譬えたのである。ここで、男女主人公二人の詩のやり取りが行われることによつて、二人の謙遜ぶりや、互いの気持ちが通じ合っていることなどが、気持ちよく読みとれる。

『近江県物語』では、この詩の贈答は、姚克承と曹小姐とにそのまま対応する人物、梅丸と菌生とのやり取りに移されたのではなく、悪役の常人と菌生とのやり取りに変えられた。悪役の常人と女主人公との歌のやり取りに変えられたため、原典の男女主人公のような互いを思いあう意味合いがまったく読み取れなくなった。

『近江県物語』巻二「せいがいはい」では、常人は、ひそかに菌生に心を寄せ、艶書に梅の枝をつけて、菌生に送った。菌生は、これを見て、下品だと思つて、艶書も梅の枝もそのまま返したが、それに、「なか垣のへだてもわかで梅が、のなどここにしもにほひきぬらん」と常人を嫌う歌を付けた。

「巧団円伝奇」での二人が互いを思い合う場面が、常人の片思いの場面に転じられたと

同時に、悪役の常人に主人公の梅丸の代わりに、和歌のやり取りをさせたことによって、後に物語が展開していき、波瀾が起こったのである。

前に述べた通り、常人は普段より、梅丸を妬み、叔父の安世が梅丸を婿に決めたのを聞いて、悪知恵を働かせ、梅丸の聘物を盗み出し、菌生の返歌を添えて梅丸に返したことで、梅丸は家を出た。ここから、物語が始まり、梅丸が実の父である人と出会い、養子の縁を組み、また実の母を買って、両親と巡り合うことができ、なお出世もできたのである。

このように、曹小姐と姚克承との詩のやり取りの趣向を、常人と菌生との歌のやり取りに転じさせたことよって、雅望は常人が後に悪知恵を發揮できるように種を蒔いておいたのであり、それよって、物語をより複雑化させることができたのである。ただし、その複雑化できたベースには、「原典」の恋人同士(1)の詩のやり取りの趣向を利用しながらも、これを常人と菌生とのやり取りに変えたという雅望の発想の転換があったことを忘れてはならない。

以上述べてきたように、常人という人物像を構想する時に、少なくとも、「巧団円伝奇」の悪少年の賊入りの趣向と、男女主人公二人の詩のやり取りの趣向は、雅望にヒントを与えたことであろう。彼は、そこから思案を巡らし、常人の人物像を工夫したのである。盗賊に入る時、人の頭を切つて来いと要求されるのであるが、これは『水滸伝』の林冲が梁山泊に入る時、頭領の王倫から「投名状」を要求される趣向の転用である。盗賊の営を逃げ出した後、途中で密会の男女の芋を横取りし、二人を驚かす一条は狂言『どぶっかちり』によるものであると指摘されている。⁽¹⁾

このように、雅望は「巧団円伝奇」の盗賊加担の趣向や、男女の詩のやり取りの趣向の上に、『水滸伝』の趣向を活かしたり、狂言『どぶっかちり』の趣向を取り入れたりして、常人の人物像をどンドン肉づけしていった。しかし、常人があくまでも悪少年として描かれていることから、「巧団円伝奇」の悪少年の延長線上に常人が創作されたことは、明白である。

四 「巧団円伝奇」の「尺」から生まれた「笏」について

「巧団円伝奇」の第二齣「夢訊」において、姚克承は、夢の中で一人の翁に出会い、彼から以下のような言葉をかけられた。

(筆者注、玉尺) 那是後來得的、并非爺娘所賜、你記錯了。只是一件、玉尺雖不是爹娘所賜、却關係你的婚姻、也不可拿來丟棄、牢記此言。(尺は、あなたが後にもらったもので、実の両親がくれたものではない。あなたの記憶が間違っているんだ。ただ、この玉尺は両親からもらったものではないけれど、実はあなたの結婚と関わっているものだから、なくしてはいけない。この言葉をよく覚えておけ。)

(「巧団円伝奇」)

ここでは、夢の中の翁が姚克承の玉尺は実の両親がくれたものではないと語る。即ち、玉尺をくれた、今まで育ててくれた父親が本当の父親ではなく、養父ということになる。養父からもらった「玉尺」は、自分の結婚にかかわる大事なものと伝えられた。

『近江県物語』では、梅丸の結婚に関わる物も設けられて、これは「巧団円」に沿っての翻案であるが、「尺」は「笏」に変えられている。ここで雅望がこの小道具「笏」に附した役割を考えたい。

その前に、まず「笏」の出所を考えよう。梅丸の「笏」は、姚克承のように、養父からもらったものではない。うわべでは、「笏」は梅丸の養父猿丸が形見として梅丸に残した物であるが、実は、「笏」は梅丸の一歳の誕生日の時に、実の父藤原季光が、梅丸の前にいるような物を並べたところ、彼が手に取って、手放さなかった物である。即ち、実の父が準備してくれたものであり、父親と梅丸と二人とも見知った物である。ここで、後に、両親と再会を果たすための伏線が張られているのである。

話を元に戻し、「笏」の役目を考えよう。

雅望は「笏」一つで「一石三鳥」の効果を狙っていたと筆者は考える。一つは、梅丸がこれを聘物として婚約者に渡し、またこれを手掛かりに婚約者を探し出した役目である。

二つ目は、離別した両親と再会を果たす信しるしの役目である。三つ目は「試児」の伝統で、梅丸(幼名は愛丸)の将来を予言することである。これについては、中国の風習「試児」と関わっており、第二章で論ずることにする。

婚約者を探し出す手がかりの発想は、間違いなく「巧団円伝奇」をそのまま利用している。「巧団円伝奇」では、男の主人公姚克承は、袋に入れられた女を買う時に、女の腰に挿している「尺」を手で確認した後に、婚約者の曹小姐であると分かり、曹小姐を買い出したように、『近江県物語』では、梅丸が袋の女を買う時に、彼もまた女の腰に挿している細長い物―後に分かったが、笏である―を確認でき、これを手掛かりに婚約者の菌生である

と分かり、菌生を請けだしたのである。だが、よく考えてみれば分かるように、「尺」と「笏」は形が似ていて、発音も同じく「しやく」であるが、実はまったく違うものである。「巧団田伝奇」の「尺」は、物差しであり、姚克承の養父が布の商売をする時に、布を量るに使っていたものである。しかし、『近江県物語』の「笏」は物差しではなく、朝務の時に仕官が使うものである。この書き換えに雅望の手腕も伺える。「笏」本来の漢字音は「コツ」であり、「骨(コツ)」と通じること嫌って、「シヤク」の慣用音が用いられる。「尺」を「笏」に変える着想は、日本漢字音を介した産物なのである。この改変により、愛丸が近江掾となつて成功する将来を予言することができた。このような周到な伏線を、雅望は一心かけていて、物語の全体の繋がりを緊密にしている。

「笏」が婚約者を探しだす手がかりである発想は「巧団田伝奇」から得たものであるが、同じ「笏」がまた離別した両親と巡り合う証拠品になるという構想は、「巧団田伝奇」には見られない。「巧団田伝奇」では、主人公の姚克承が両親と再会を果たした証拠品は、彼がいつも夢で見ていた二階建ての建物と建物の二階のベッドの後ろにある玩具類である。夢で見ていた建物と玩具類とが現実にある物とまったく同じであることに気づいた時に、真実が分かってきたのである。姚克承の買った両親の家はちょうど夢で見ていた建物であり、そして二階のベッドの後ろには玩具類箱があり、そこに入っている玩具類は全て夢で見ていた玩具類であった。即ち、買った両親の建物は自分が小さい時に住んでいた家であり、玩具類は小さい頃に遊んでいた玩具類であり、買った両親は実は自分の本当の両親なのである。

このように、姚克承が両親とめぐり会うのに、大きな力を果たしていたのは夢であり、「尺」とは全く関係ない。李漁は婚約者を探し出す手がかりと両親とめぐり会う証拠品とをそれぞれ別に設置したのである。

『近江県物語』はどうであろう。

『近江県物語』では、反乱を平らげた後、みんなが頼光の邸に集まり、梅丸が聘物として菌生に渡した物が開けられ、その中から「笏」が現れた。「笏」を見た藤原季光は、「こここそ我子愛丸が死しける時、こしにさゝせて埋めたつる笏なれ。」と怪しんだが、養父猿丸の遺言の手紙を読むと、康保元年三月十九日船岡の山から拾った子供であると書いてある。これは、愛丸の没日と埋められた場所とぴったり合った。そこで養子養父である二人は実の父子であること、買った姥は実の母親であることが分かったのである。

「巧団円伝奇」のように、雅望は夢を利用しなかった。この再会を果たしてくれる証拠品はやはり「笏」に託された。何かの証拠品によって、離別した夫婦や、親子が再会を果たすのは、中国の戯曲の中にはありふれたものである。同じく『笠翁伝奇十種』所収の「玉搔頭」はその一例である。これは玉搔頭を手掛かりに、恋人同士が巡り会った話である。もちろん、再会の構想においては、雅望は完全に「巧団円伝奇」から離脱したわけではないが、しかし、とくに「巧団円伝奇」に拘っていないのが雅望のスタンスである。彼は、離別した親子が再会する時の信しんに拘っていた。この信は、ほかでもなく、誕生日の時に、父が準備してくれた、梅丸が掴んだもの——笏にしたのである。前にも述べたが、「笏」を父の父親が形見として墓に置くという設定は、後に巡り会う時の証拠品である伏線を張っておいた。雅望は李漁から学んだが、典範の李漁よりもよい腕を見せている。彼は、李漁のように、婚約者を探し出す手がかりと両親と巡り合う証拠品とをそれぞれ別に設定したのではなく、小道具の「笏」一つに二つの役目を負わせたのである。「笏」の小道具は目立たないが、物語全体を通して、確かに一貫して重要な役割を果たしていた。「笏」の小道具ひとつからも、雅望の優れた翻案の手腕が分かる。雅望は自分の作品にこのような信を設けることによって、主人公がいろいろと困難を乗り越えた後に、これを手がかりに、また巡り合うというストーリーを可能にしたのである。

五 常人の滑稽と『笠翁伝奇十種』における「醜角」の笑い

ここで、話を少し変え、常人の話に戻り、悪役の常人の愚かさと悪知恵で引き起こした滑稽について考えたい。大胆な推測をしてみようと、常人によって引き起こした滑稽は李漁の『笠翁伝奇十種』における笑いや滑稽を引き起こす「醜角」の影響を受けていたのではないかと筆者は考える。戯曲の中における「醜角」というのは、墨を顔に塗り、外見が醜いところから名前が付けられている。滑稽な言動を取ることによって、観客を笑わせるのが、役目である。これがどうも常人のそれと通じるように思われる。

『近江県物語』では、常人によって引き起こした滑稽はいくつかもある。先ほどすこし触れたが、盗賊加担のため、人の頭を切ってくるようと言われたが、臆病のため、彼は人を殺すことができず、暗い中で野原に転がっている人の頭を袋に入れて、大口を叩いて、これを四大天王の渡辺源二綱の頭であると嘘をつく。しかし、袋を開いてみたら、これは女性の頭であった。盗賊のリーダーは、にたにた笑い、常人を拷問する。嘘が見抜かれた

常人は肝がつぶれるほど体を振るわせていた。盗賊は、常人のこの姿に笑いをこらえきれない。

盗賊に入った後、彼は盗賊の金剛二郎と一緒に叔父の安世の隠れ家を襲う。そこから叔父の鎧を盗む。夜になって、鎧を背負い、賊営を逃げるが、途中で疲れてしまい、百姓家の穀倉で休む。そこで密会する男女に出会ったが、こっそり彼らが持っている芋を盗み食ってしまった。男女が裸になる時に、男か女かの腋臭が常人のところまで飛んできて、常人は思わず「あなくさ」と声を出したら、二人は驚き、脱いだ服を拾い、慌てて逃げ出すが、途中で転んだりしてさまざまな醜態が現れる。これを見た常人は、大笑いする。

常人は鎧を背負って、叔父の元の神崎の家に帰ると、その家の主になって、家の財宝を自分の物にした。盗賊が袋の女を売る情報を得て、彼も菌生がいると思って買いに行った。しかし、買ったのは、菌生ではなく、狂った女性であった。女性は袋から出てくると、常人にだきつき、歌を歌う。常人は、びっくりして女性を捨てようと思ったが、盗賊たちが女を捨てる者は頭をその場で切る、と言ったので、常人は仕方なく女を連れて帰った。皆は「手うちたゝきてわらひあへ」た。

以上の三つは、常人によって起きた滑稽である。この三点はいずれも読者の笑いを誘う所であり、丁数を大幅に占めている。「投名状」の趣向だけでもかなり面白かったが、雅望はそれで物足りないと感じたためか、拾ってきた頭を女の頭にしたり、常人の嘘をばれさせたり、読者を笑わせるところを工夫した。

典拠の「巧団円伝奇」には、これと似る箇所が見つからず、笑の要素があまりなかったが、「巧団円伝奇」と同じく『笠翁伝奇十種』に属する他の作品を見てみれば、笑いが随所に見られるのである。例えば「奈何天伝奇」や「蜃中楼伝奇」などの中には観客を笑わせる醜角を設定しており、滑稽役を担わせている。まず、「奈何天伝奇」の「醜角」——闕素封をみる。

「奈何天伝奇」（全三十三齣）の闕素封は世に第一の醜い男であるが、三人の美しい妻を持っている。しかし、三人の妻は、すべて闕素封の顔を見たことがなく、騙されて嫁にきたのである。新婚の夜は、暗い中に、何とかだったが、次の日になると、闕素封の本当の姿がばれて、妻は相次ぎ家の中にある書房——「奈何天」において出家し、一心念仏する。

そんな闕素封の滑稽は、自己紹介から始まる。闕素封のニックネームは「闕不全」である。顔が醜い上、体中の五官四肢ひとつも完璧なものがないことがその名前の由来である。

ある人が闕不全のために面贅を作った。贅の内容は以下のようである。

眼不叫做全瞎、微有白花。面不叫做全疤、但多黑影。手不叫做全秃、指甲寥寥。足不叫做全蹠、脚跟点点。鼻不全赤、依稀微有酒糟痕。髮不全黄、朦朧似沉香色。口不全喫、急中言常带双声。背不全駝、頸後肉但高三寸。更有一張歪不全之口、忽動忽靜、暗中似有人提。還余兩道出不全之眉、或断、或聯、眼上如經樵採（目は全く見えないわけではないが、眼病を患った後の傷が残っており視力は低い。顔は傷だらけとは言えないが、黒い傷跡が多い。手の爪は全くないわけではないが、ごく少ない。両足とも不自由なわけではないが、片方がびつこだ。鼻は全部赤色ではないが、にきびの跡が残っている。髪の毛は全部黄色ではないが、朦朧と沈香の色と似ている。いつもどもっているわけではないが、急ぐと言葉を二回言う。ひどい猫背ではないが、首の後ろについている肉は高さが三寸もある。更に口はいつも歪んでいるわけではないが、時に歪みだし時にもとにもどり、誰かがひそかにこれを操っているようだ。また残りの二つの眉毛だが、よく生えてくれず、断っているようにも見え、繋がっているようにも見え、まるで樵に伐られたようだ。）（「奈可天伝奇」第二齣「慮婚」）

右の引用文を読んでもみると分かるように、李漁は闕不全を本当にとても醜い人物として設定している。闕不全の容貌を描写する言葉自体が滑稽的であり、笑を引き起こすのである。

闕素封の一番目の奥さんは鄒小姐である。結婚の当日は、二人は洞房に入り、蠟燭を使用人が前もって消したので、鄒小姐は闕素封の顔を見られなかった。夫婦の事を終え、闕素封はやくも夢に入るが、鄒小姐は何らかの匂いで眠れない。それは何の匂いだろうとよく嗅いだら、闕素封の体臭である。口、脇下、足、体中に臭わないところがない。鄒小姐は耐えられなくて、天に向かつて、「なぜ私はこの蛻螂（闕素封のたとえ、糞虫）と寝なければならぬのか」と問う。やがて次の日になって、闕素封が鄒小姐の前に来たら、鄒小姐は大きな声を出して、「この怪物に嫁いでどうしよう」と泣き崩れた。鄒小姐は闕素封の事を「蛻螂」と「怪物」で形容している。一か月を過ぎたところで、鄒小姐は我慢の限界に達し、彼女は「書房」に仏像を安置し、そこで出家した。（第四齣「驚醜」）

鄒小姐の出家に対して、闕素封は始めは必死に留めたが、鄒小姐の固い態度を見て、今度は罵りに変わった。「臭淫婦、真賤人（筆者注、いずれも女性を罵る言葉）」と叱り、鄒小姐よりもっと美しい女を妻にすると誓った。（第六齣「逃禅」）

闕素封は果たして二番目の奥さんを手に入れることができた。しかも、奥さんは、容姿の優れる女性である。しかし、物語の筋はまた、一番目の奥さんと同様で、彼女もまた騙されて嫁に来た後、闕素封の醜貌に驚かされて、出家の道を選んだ。(第十一齣「醉昏」、第十四齣「狡脱」)

「奈何天伝奇」はこのように、世に稀な醜男子を設定することで、随所に笑いをひき起こしている。観客が劇場でこれを見た時には、笑声が劇場に満ちたことであろう。「奈何天伝奇」においては、闕素封は「醜角」であり、所謂主役の「生」ではないが、彼の存在によって、「奈何天伝奇」全篇は明るい雰囲気満ちており、喜劇の結末へと導かれていく。『近江県物語』の常人も主役ではなく、梅丸の恋敵として存在するが、彼の存在によって、読本に滑稽と笑いを生じながら、物語の筋を複雑化にすることができた。

また、もう一つの例、「蜃中楼伝奇」(全三十齣)の「醜角」――涇河小龍を見てみよう。
「蜃中楼伝奇」は唐代の伝奇小説「柳毅伝」を戯曲化した作品である。⁽¹²⁾

洞庭湖龍王―青龍の娘舜華が柳毅とひそかに結婚を約束したが、青龍はこれを許さない。舜華の叔父である錢塘赤龍が勝手に舜華を涇河王の息子との婚約に応じた。舜華と柳毅の婚約に怒った青龍は、赤龍の話を受け入れ、舜華を涇河小龍に嫁がせる。(第七齣「婚諾」)
涇河小龍は、お腹が空いているかどうかも分からないぐらい、生まれつきの愚か者である。そんな彼に涇荷という三十歳の女が付いており、彼に男女の事を教えている。涇荷は自分こそ龍の種を産みたいため、涇河小龍にわざと間違った嫁の評価基準を教える。嫁を見る時に、一に髪を見る。髪が黒ければ黒いほうが醜い、黄色のほうがよいと。二に足を見る。足が小さいのはよくなく、大きい方がよいと。三に年齢を聴く。若いのはよくない、年取ればとるほどよいと、教えた。(第十一齣「惑主」)

すると、舜華を見た涇河小龍は、頭、足、顔をよく見てから、「不要她。不要她。(彼女はいやだ。いやだ。)」と叫ぶ。母親はなぜと聞いたら、彼は「頭髮是黒狗毛、不是金絲髮。脚是三寸狗爪、不是尺二金蓮。就是这副嘴臉、也不像有一千歲的。(髪は黒く、狗の毛の色のように、黄色の糸のような金髪ではない。足は三寸ばかり、狗の足の大きさで、尺二寸の金蓮の足ではない。顔を見てみても、どうしても千歳の人とは見えないので、良い嫁ではない。)」と説明する。(第十四齣「抗婚」)

涇河小龍の論理は涇荷の教えによるものであるが、彼の愚かさはこれで浮き彫りにされた。みな彼の理由を聞き、大笑いした。劇場の観客もおそらく大笑いしたに違いなからう。

『近江県物語』で常人によって引き起こされた滑稽や笑いは、「奈何天伝奇」や「蜃中楼伝奇」の「醜角」の笑いや滑稽と共通している。「奈可天伝奇」は雅望の読本『天羽衣』に使われている。また、読本『飛騨匠物語』にはすこしではあるが、「蜃中楼伝奇」の趣向が用いられている。彼は、李漁のユーモアに知らず知らずの内に影響されたのである。

雅望が小説の中に、滑稽と笑いを入れることについて、稲田篤信氏は「当時、『笠翁伝奇十種曲』を読本の中に利用したのは雅望に限らないが、文化五年に集中する三つの読本すべてにこの書が利用されているという事実は、雅望の読本の質をうかがう点で、はなはだ興味深いものがある。ひとつには、清代の喜劇作者に学んで、読本の中に笑話的要素を意識的に導入したということがある⁽¹³⁾。」とのように述べている。

稲田氏の述べた通りである。ただし、稲田氏は「清代の喜劇作者」に雅望が学んだことと大きく論じただけで、具体的に李漁の『笠翁伝奇十種』から笑話的な要素をどのように取り入れたのか、また常人の滑稽はどこから来たのかについては、言及していない。

雅望は、『笠翁伝奇十種』の「醜角」における笑の要素を見抜き、戯曲のように、自分の作品にも「醜角」を作りあげているのである。『近江県物語』の場合は、常人が「醜角」になっている。「巧団円伝奇」の典拠の構想だけではなく、『笠翁伝奇十種』の他の作品にある滑稽の要素や笑の要素を自分の作品に持ち込むことから、雅望が李漁の戯曲に大いに影響されていたことが分かる。

六 終わりに

『近江県物語』の粗筋は「巧団円伝奇」を踏襲している事、即ち、女の主人公が巴豆を塗り、病気を装い、貞潔を守ったことや、男の主人公が「袋の姥」を買い、聘物を頼りに婚約者を順調に買いだしたことなどは、先行研究で示された通りで、一目瞭然である。しかし、『近江県物語』における新しく附加された趣向と指摘されている部分も、実はまったく新しく作られたわけではなく、やはり「巧団円伝奇」から発想を得て、そこからアイデアが膨らんでいったものであることは考察の通りである。

常人の人物造形に際し、雅望は「巧団円伝奇」の悪少年の賊入りからヒントを得て、常人を賊に入らせたのである。また、「巧団円伝奇」の男女主人公がお互いを思いあう詩のやり取りを、常人と菌生との和歌のやり取りに転じさせ、物語が波乱万丈になる前提を作っておいた。「巧団円伝奇」の上に、『水滸伝』の「投名状」の趣向も取り入れ、逃走中に、密会の二人を垣間見て、音を出し、二人を驚かした狂言『どぶかっちり』の趣向も取り入

れたのである。このようにして、常人の人物像は肉づけられてきたわけである。

「笏」も「巧団円伝奇」の「尺」から思いついたものである。が、原典の「尺」より、雅望は『近江県物語』において、「笏」に新しい役割を附加した。これは両親と巡り合う証拠品である役目である。

読んで分かるような一目瞭然な趣向はもちろん、目立たないが、「巧団円伝奇」を利用していている部分もあるのである。目立たない部分にいろいろな要素を加えたり、新しい役割を附加したりして、翻案をしていくのは、石川雅望が「巧団円伝奇」を利用する特徴の一つと言えよう。

また、常人によって引き起こした滑稽は『笠翁伝奇十種』の「醜角」の滑稽に影響されたものであると考えられる。雅望は李漁の戯曲の滑稽と笑いとに深く感じ、これを読本の世界に転じている。

しかし、『近江県物語』において、すべてが「巧団円伝奇」や他の『笠翁伝奇十種』の作品から構想を得たわけではない。雅望は自分のオリジナリティーをもきちんと出している。

彼は、『源氏物語』『紅葉賀』の冒頭を模したり、『前太平記』の世界を『近江県物語』に利用したりして、いろいろと工夫している。これらの工夫によって、『近江県物語』は一人の少年の伝奇的人生を描くことに成功した。重友毅は『近江県物語』を「原作を凌駕する出来栄えを示してゐた」と評価し、大田南畝は「六樹園（筆者注 石川雅望の号）があらはせる近江県物語をよみて、俗流にあらざることを知れり。」と賞賛したのである。⁽¹⁵⁾

注

- 1 「巧団円伝奇」が『近江県物語』の典拠であることを一番早く指摘したのは、野口寧斎の『袋のうば』の辨（『早稲田文学』明治二年（一八六九年））である。
- 2 山口剛氏は『飛驒匠物語』は「蜃中楼伝奇」を利用していていると指摘し、『山口剛著作集』巻二 中央公論社 一九七二年）、重友毅氏は『天羽衣』は「奈可天伝奇」の趣向を使っていると指摘している（『六樹園の雅文小説』『近世文学の位相』第二篇に所収（日本評論社 一九四四年））。
- 3 山口剛氏には『山口剛著作集』第二巻に「江戸小説史上の一事象」の御論があり、麻生磯次氏には『江戸文学と支那文学』（三省堂 一九四六年）第二章の中に「雅文小説に於ける支那文学の影響」の御論がある。

- 4 前掲麻生磯次氏の『江戸文学と支那文学』 一四〇頁
- 5 「齣」というのは、戯曲で場面を数える量詞である。
- 6 「巧団円伝奇」からの引用箇所は『李漁全集』（浙江古籍出版社 一九九一年）による。
- 7 『近江県物語』からの引用箇所は『石川雅望集』（国書刊行会 一九九三年）による。
- 8 注2にある重友氏著作 一三七頁
- 9 「投名状」の趣向が『水滸伝』を利用していることは、重友毅氏が前掲論文「六樹園の雅文小説」にて指摘している。
- 10 鈴木敏也「浪漫小説作家としての石川雅望」 『近代国文学素描』所収 目黒書店 一九三四年）
- 11 「奈可天伝奇」からの引用箇所は『李漁全集』（浙江古籍出版社 一九九一年）による。
- 12 「屢中楼伝奇」の序に見られる。「至如唐人所傳柳毅事甚奇、人艷稱之」とある。
- 13 稲田篤信 「『天羽衣』論*綾足・秋成・雅望」 『江戸小説の世界 秋成と雅望』に所収 ペリカン社 一九九一年）
- 14 稲田篤信 「『近江県物語論』*もうひとつの梅若物」（前掲『江戸小説の世界 秋成と雅望』所収）
- 15 注2に同じ
- 16 大田南畝 『玉川砂利』三二五頁（『大田南畝全集』所収 岩波書店 一九八七年）

第二章 『近江県物語』における中国白話小説の趣向利用について

―『女仙外史』、『醒世恒言』と『初刻拍案驚奇』を中心に―

一 はじめに

『近江県物語』が清の李漁作『笠翁伝奇十種』の「巧団円伝奇」を翻案したものであることは、すでに第一章で触れたところである。刊記には、文化五年の出版とあるが、稲田篤信氏の考察によると、実際に『近江県物語』は文化四年の内に、江戸の四書肆の相版で出版されており、売り出されているらしい。¹⁾

『近江県物語』の典拠については、「巧団円伝奇」以外ほかにもある。第一章で触れたが、重友毅氏は『水滸伝』の趣向や、『笠翁伝奇十種』の「奈可天伝奇」の趣向も利用されていると指摘している。²⁾ また、日本の古典に拠った趣向として、鈴木敏也氏は『落窪物語』の趣向や、狂言『どぶかつちり』の趣向、『宇治拾遺物語』の趣向などを指摘している。³⁾ 近年、稲田篤信氏により、『近江県物語』に見られる『前太平記』や『源氏物語』の趣向も指摘されている。⁴⁾

ところで、稲田氏は、「中国典拠の説としては、すでに、適切な指摘に尽きており」とも述べている。しかし、実は、中国古典文学の典拠は上記以外にも、『女仙外史』、『醒世恒言』や『初刻拍案驚奇』など、部分的な趣向として利用されている作品がまだある。これらは、今まで全く指摘されていないのである。

本章では、『近江県物語』における小道具―「笏」に注目し、今まで指摘されていなかった中国の「試児」の趣向や、埋葬地から蘇る趣向、神仏に祈願して子供を授かり、神仏に言われた言葉が現実になる趣向などの原典を明らかにし、これらの趣向を取り入れることによって、物語全体がいかに面白く、複雑化されたかを論じたい。

二 「笏」の登場

―中国伝統習俗「試児」の趣向取りとその展開

第一章の『近江県物語』の粗筋のところでは述べたように、主人公梅丸（愛丸）一歳の誕生日の時に、父親が、彼に百玩を選ばせると、愛丸は他の物に目をやらず、笏を取って、

喜んで手放さなかった。「笏」の登場する場面をみておこう。

季光うるせき心より、愛丸がもてあそぶ調度は、もとよりにて、笏文房の具などならへ置きて、愛丸を中にすめて、いづれをか取と、うち守りぬけるに、愛丸ぬきりて、笏を取て喜で放さず。季光うち見て、「此兒百玩の雜器にめをかけず、笏を取たるは、ゆくすゑ我家の、榮へ見すべき兆なり」とて、大きによるこびて、即宴席を設て、うちあげ祝ひける。これより愛丸、かた時笏を放さず、ひゝな、ふりつゞみなどは、手にだにとらず、ひたすら笏を取てぞ遊びける。〔近江県物語〕卷一「ふなをか」⁽⁶⁾

右に引用した箇所は波線部は、愛丸一歳の誕生日の光景である。

実は、この光景は、一歳の誕生日に、いろいろなものを子供の前に並べ、何を取るかを見て、その将来を占う中国の風習「試児」（抓周、試周などともいう）によるものである。

「試児」に関する記載は、『顔氏家訓』（五八九年以後の成立）に見られる。『顔氏家訓』は南北朝北齊の顔之推（五三一～五九一）が著した子孫を戒める家訓書である。その「風操第六」には、「試児」について以下のように紹介されている。

江南の風俗に、児生まれて一期なれば、為に新衣を製して盥浴裝飾し、男は則ち弓矢紙筆を用ひ、女は則ち刀尺鍼縷、並びに飲食の物及び珍宝服玩を加へて、これを児の前に置き、その発意して取る所を觀、以て貪廉愚智を驗す。これを名づけて試児と爲す。親表聚集して讌享を致す。これより以後、二親若し在せば、この日に至る毎に常に酒食の事あるのみ。（原漢文、以下同様。）〔顔氏家訓』・「風操第六」⁽⁷⁾

愛丸の一歳の誕生日の部分と『顔氏家訓』の「試児」の部分とを読み比べると、父親の藤原季光は息子の愛丸を試す「試児」をしていたことが分かる。

江戸時代、京都の村田庄五郎によって寛文二年（一六六二）に『顔氏家訓』の和刻本が出版されている。また、一条兼良（二四〇二～一四八二）が漢の故事説話を集めた『語園』にも、「小兒ノオヒサキヲ試ムル事」の故事で「試児」を紹介している。⁽⁸⁾

雅望が『顔氏家訓』から「試児」の風俗を知ったのか、それとも『語園』を通して「試児」の風俗を知ったのかは、確定できないが、この風俗を知っていた事は確認できる。そして、知るだけにとどまらず、これを自分の作品にも取り入れているのである。

しかし、『顔氏家訓』にしても、『語園』にしても、いずれも「試児」の風俗はどういうものかの説明、あるいは紹介に留まっているだけであり、実際、「試児」で子供が取ったものが、その「貪廉愚智」を予言できたかどうか、子供の将来が、果たして「試児」で試された通りになっているかどうかについては、全く言及されず、例も出されていない。また、親戚や両親が、子供の「試児」で掴んだ物を見た時の反応もまったく描かれていない。

だが、『近江県物語』では、前に引用した波線部のように、藤原季光は、愛丸が笏を取ったのを見て、「ゆくすゑ我家の、栄へ見すべき兆なり」と思い、大いに喜び、祝宴を開いたのである。なぜなら、笏は官人の装身具の一つであり、仕官へと歩む道を予言している。藤原季光は分かっていたからである。実際、後に、愛丸はいろいろと経験することになったが、最後には果たして戦功を立て、「叡感ことにあさからずして、(中略)梅丸が文武のざへを、ほめさせ給ひて、近江椽(ついで)にぞなされける」とあるように、近江椽になり、一家榮華に暮らすことができたのである。

では、「試児」が「貪廉愚智」を試すだけでなく、将来の職業身分を予言するということを、雅望はどこから学んだのであろう。実は、「試児」が子供の将来を予言するものだという趣向は、よく小説に見られるのである。このような趣向を、小説中に使うことによって、小説自体を面白くすることができる。雅望は、読本の構想を考えるときに、中国小説の構想から大いに学んだのであろう。

清の呂熊(生没年不詳)が著した長編白話小説『女仙外史』(一七〇二)には、主人公賽児の「試児」の場面が描かれている。

本書は『舶載書目』(大庭脩編 一九七二年)によると、正徳三年(一七一三)と寛保元年(一七四一)に日本に輸入されている。三宅嘯山がこれを訳し、『通俗大明女仙伝』と題して、寛政元年(一七八九)に出版したことから『女仙外史』が当時の知識人に親しまれていたことが推測される。また、雅望とほぼ同時代を生きていた読本作家馬琴が、『女仙外史』から影響を受け、『開巻驚奇侠客伝』(一八三二)を著したことは、すでに周知のことである。馬琴が『女仙外史』を好む事を、麻生磯次氏は「筆者注 賽児が」忠義の為に憤死した景清・鐵鉞などの子孫を糾合して、燕兵に当らせようとした仕組は、吉野朝の遺臣に同情を寄せる馬琴に取っては快心の事であったに違いない。かやうに反逆者を制し、忠臣の末路を完うさせようとする意図に於て、両者共通なものがあつた。侠客伝執筆に際し、女仙外史が適当に参酌されたのは当然であつたとおもふ。⁽⁹⁾と述べている。つまり、『女仙外史』が南朝最眞にふさわしい素材の一つとしても愛読されていた事が分かる。

『通俗大明女仙伝』は、賽児の一歳の「試児」の場面を以下のように訳している。

賽児誕生日ニ成シカバ、堯拳酒ヲ備テ親戚ヲ招。(中略)賽児ヲ紅毯ニ突居見ルニ、数多
ノ物ニハ目モヤラズ。頓向ナル劍ヲ取テ引ヨセ。一向弄内頻ニ指ヲ以テ鞘ヲ撫ケ
レバ。(中略)賽児又左ノ手ニ玉印ヲ取シニ。鈕アリテ紅糸縹ヲ付タリシヲ。自臂ニ
カケ入レ。又積重タル書ヲ取ツテ打返シ、看居タリシカバ。衆人スベテ呆タル躰
ナリ。

〔通俗大明女仙伝〕

□で囲まれた部分は、それぞれ賽児が「試児」で取った劍、玉印と書籍である。彼女は、小さい頃から書籍を愛読し、女子ではあるが、粉黛を施さず、武術に心を引かれた。後に、彼女は、明の朱棣が惠帝から帝位を奪った不正を訴え、惠帝の忠臣の後裔を集めて蜂起し、朱棣に対抗して山東省の済南府に新しい政府を開いた。即ち、賽児が「試児」で抓んだ劍、玉印、書籍は、いずれも賽児の性格や将来の「貪廉愚智」を正確に占ったのである。また、賽児が「試児」で劍と玉印と書籍とを取ったことに対する周りの人々の反応も描かれていて、「衆人すべて呆たる躰なり」とみな驚かされたのである。なぜなら、女の子にして、劍と玉印と書籍を取るのには、あまりにも不思議だからである。愛丸の父親の反応と、この衆人の反応とは、丁度異曲同工である。

雅望は、天明八年（一七八八）に大田南畝主催の「訳文の会」に参加したことを皮切りに、以後、漢籍の和訳に研鑽を積んだ。成果として明代の馮夢龍が編著した白話小説集「三言」の第三言『醒世恒言』から四篇を選び出し、『通俗醒世恒言』に翻訳し、これを寛政二年（一七九〇）に出版している。三宅嘯山の『通俗大明女仙伝』が出版されたのは、その一年前の寛政元年（一七八九）である。雅望は、同じく白話小説の翻訳をしている嘯山の翻訳の方法を意識しながら、『通俗大明女仙伝』を読んでいたのではないかと考えられる。

中国で玉印が仕官の道を歩む印であるように、日本では笏が官僚の道を歩む印である。笏は、朝務・神拝の際に手に取る官人用の長方形の薄板であり、官人の装飾品の一つである。『延喜式』(九二七年)卷四十一「彈正台」には「凡五位以上は牙の笏・白木の笏通用せよ。前拙後直。六位以下の官人は木を用ゆ。前挫後方」(原漢文)とある。つまり、形と材質も定められていた。物語の設定は花山院の時代であるところから、「笏」を取った梅丸は将来六位以上の官に成ることが予言されていたことが分かる。

雅望は、「試児」の事を『顔氏家訓』か『語園』から知り、『女仙外史』から「試児」が確実に子供の将来を予言することをも学び、「試児」とその将来を予言できる役割が気に入る、作品の中に取り入れ、愛丸に「笏」を選ばせたのである。

雅望は「試児」の伝統を知っていただけではなく、その働きを重視し、その「貪廉愚智」を試すという役割を作品の中に機能させ、作品の首尾をうまく一貫させた。愛丸に笏を選ばせ、仕官を歩む道をあらかじめ予言した。父親は愛丸が「笏」を取るのを見て、喜んだが、そこから喜びの空気が一転し、愛丸は三歳で死に、両親は悲しみに覆われ絶望した。最後に、奇跡的にめぐりあい、愛丸は近江掾になり、「試児」で占った通りの結果となった。物語は、これで起伏に富み、波瀾万丈になってゆく。「試児」の趣向は雅望の重要な仕掛けである。

三 埋葬地からの蘇生

—『醒世恒言』卷十四「閻婆楼多情周勝仙」の趣向取り

愛丸は一家寵愛のもと、健やかに育つかと見えたが、三歳の時に痘瘡にかかり、五日にして命を失ってしまった。一家は悲しみを抑え、—「彼が衣服玩器の類、いさゝか留めおくべからず。金銀珠玉の類なりとも、彼が手に触たらんかぎりは、悉棺にをさめて、葬り」(一)重線と番号は筆者付、以下同様)、船岡に埋葬した。もちろん、愛丸の手放さなかった笏も一緒に棺に収められた。妻は「こよひ、のべにおくらんは、あまりに俄なり。あすこそ」と愛丸を翌日に葬るように要求したが、藤原季光は、賛成せず、愛丸を家に置くことは、悲しみを増すだけであるとし、はやくもその日の暮れ方に愛丸を船岡山に葬った。

愛丸が埋葬された夜、一人の乞食が愛丸の墓の前に来て、墓を荒らした。

季光が子を葬たる、塚のもとに來りて、鍬とりて、うがちほる。とかくして掘あばきて、土かきよけて、棺の蓋をひらき、衣服調度など、とり出して、包につゝみて、持ゆかんとせしが、をさな子の死骸の腰に、何やらん物の見ゆれば、「さるべき宝にこそ」とて、たちよりに、ひきぬかんとするに、世にはおもはずなる事にそありけれ、児が死骸ふたゝび息出て、声をあげて、泣出しぬ。『近江県物語』卷一「ふなをか」

右の引用文は、乞食が愛丸の墓を荒らし、愛丸の腰に挿してある物を取ろうとする時に、

愛丸が蘇ったシーンである。愛丸の腰に差し込んでいる物は、笏なのである。乞食がこれを宝物と思い、引き抜こうとする時、愛丸は泣きだし、蘇ったのである。

稲田篤信氏は、愛丸の蘇生について以下のように述べている。¹⁴

愛丸（梅丸）は舟岡山に埋葬されたのち、盗掘により、蘇生する。葬地の土中から蘇生する趣向は、『伽婢子』巻四「入棺之尸甦恠」にみえるものなどが連想されるが、こゝは、山東京伝『桜姫全伝曙草紙』（文化二年刊）巻二、惨殺された玉琴の胎内から嬰兒が蘇生する条が意識されているだろう。『曙草紙』では、この嬰兒が清玄となつて桜姫と数奇な因縁を結ぶように、『近江県物語』も、梅丸の奇譚の物語なのである。

しかし、『伽婢子』巻四「入棺之尸甦恠」を読んでみると、これは愛丸の甦ったシーンとまったく違っている事に気づく。

大内義隆の家の女房死けるを、野に送り出し埋まんせしに、にはかによみがえりぬ。打ころさんは無下にかはゆしとて、つれてかへりしに、髪はそりをとしぬ。是非なく尼になり、衣を着て半年ばかりありて、また死たり。その年果して家臣陶尾張守がために義隆は国を追出されたり。永禄年中に、光源院殿の家の下部にはかに死せるを、二日までをきけれども生だざりければ、わかき下部どもかばねを千本に送りて埋まんとするに、たちまちによみがへる。打ころして埋まんといふに、此もの手を合せなきさげびて、「たすけよ」といふ。さすがに不敏の事とてつれかへり、部屋にをきければ、四五日のうちに、日ごろのごとくに成たり。その年五月に、三好・松永反逆をおこしぬ。かばねは陰気にして、よみがへれば陽に成たる也。是下として上を、かす先兆也といふが故に、葬所にてよみがへりしものは、一たび家にもどさずうちころすと也。

『伽婢子』巻四「入棺之尸甦恠」¹⁵

引用した部分を見ると、「入棺之尸甦恠」には、死んだはずの人が蘇る環境、あるいは条件については、何も言及されていない。唯、人が埋められんとする時に棺桶から蘇ったとの記述の一言だけであり、愛丸のように、埋められてから、誰かの行動によって、甦ったのではない。また、『伽婢子』で、浅井了意が強調しなかったのは、死んだ人が蘇るのは、「下剋上」の先兆であることである。陰が陽に成る事は、下が上を犯す兆しであるとの主張である。

しかし、愛丸の場合は、物語では藤原保輔と藤原斉明が後に盗賊を率いて、反乱をすることになってはいるが、これは、愛丸が蘇ってから二十年近く後のことであり、「下剋上」の兆しとはとても言えない。まして、保輔と斉明の反乱は、平らげられたのであり、下が上を剋することはできなかったのである。

また、稲田氏の述べている、雅望が『曙草紙』巻二の玉琴の胎内から嬰兒が蘇る条を意識していたという説も牽強にすぎると思われる。まだ一度も胎内から生まれたことのない胎児が胎内で死んでまた蘇生することと、一度この世に生まれてきて死んで、また蘇る発想は根本的に違っていると思われる。

では、雅望は愛丸が埋葬地から蘇生する趣向をどこから取ってきたのであろうか。

雅望の愛読する『醒世恒言』の巻十四「鬧樊楼多情周勝仙」には以下のような場面がある。

周勝仙は樊楼（酒楼の名前）の范二郎と知り合い、お互いを思いあって、恋の病になっ
てしまった。二人の思いに気づいた王婆は二人の仲人をして、聘物も周勝仙の家に届いた。
しかし、これはすべて周の父が外出して、家にいなかった時に決められたことであつた。
父親は帰つて来て、これを聴くと、范二郎の低い身分を嫌がり、猛反対した。これを知つ
た周勝仙は、怒つて息絶えた。『勝仙の母は、深く悲しんで「多留幾日」と死んだ勝仙を家
に一日でも多く居させようとしたが、勝仙の父は、これを許さなかつた。』

そのため、父親は、「財を惜しむから、勝仙を嫁入りさせたくなかつたのだろう」と妻か
ら非難された。そこで「父親は、「你道我割舍不得三五千貫房奩、你看女兒房里、但有的細
軟、都搬在棺材里」（三五千貫の嫁入り道具を惜しむと言われたが、ほら、見なさい、勝仙
の部屋の貴重品は、すべて棺桶に収めた）」と財を惜しまずに、勝仙の身の物や、たくさ
んの宝物を棺桶に収めた。

朱真という『盗人は、勝仙の棺桶にたくさんの金が入っているのを知り、夜に墓を荒らし
に行った。』

下刀挑開石板下去、（中略）有許多金珠首飾、尽皆取下了。只有女孩兒身上衣服、却難
脱。（中略）見那女孩兒白淨身体、那厮淫心頓起、按禁不住、奸了女孩兒。『你道好怪！
只見女孩兒睜開眼、双手把朱真抱住。（朱真が刀を使って棺桶の石板を開くと、（中略）
中にはたくさんの金と珠の装身具があり、朱真はそれらすべてを取った。只女の子の
服だけがまだ残っていたが、これがとても脱がせにくい。（中略）女子の白肌を見て、

彼はよこしまな欲望を起こし、欲情を収められず女子を姦淫した。怪しいことに、女子は目を開き、両手で朱真を抱きしめた。）

『醒世恒言』卷十四「閻樊楼多情周勝仙」⁽¹⁶⁾

朱真は、墓を荒らし、その中の金と珠の装身具をすべて取った。勝仙の衣服をも取りたくて、衣服を脱がせかかるが、その美しい体に心を奪われ、みだらな欲望を起こしてしまい、勝仙を姦淫したところ、勝仙は蘇ったのである。

「周勝仙」のここまでの筋を愛丸の甦る部分と比較すると、

一 棺桶に家族がたくさんの財宝を入れておいたこと
二 母は死んだ子供を家にできるだけ長くとどめたいが、父は思い切ってこれを葬りに出させたこと

三 墓に置かれた財宝を盗まれ、墓が荒らされたこととその描写

四 死んだ人が墓荒し人の行動によって埋葬地から蘇生したこと、と蘇った後の地の文があること（『近江県物語』には、「世にはおもはずなる事にそありけれ」とあり、「周勝仙」には「你道好怪！」とある。）

この四つの共通点を読み取れる。

ただし、周勝仙が蘇ってきたのは、盗人の朱真がみだらな心を起こしたからであり、これを読んだ雅望は、この部分を道徳に照らして厭ったこともあるが、また愛丸が三歳の男の子だったこともあるが、勝仙のような姦淫によって蘇る方法を使わずに、乞食が愛丸の腰に挿してある笏を取ろうとする時に、愛丸が蘇ったというように設定を変えている。それにしても、勝仙も愛丸も取られる価値に値するものを身に着けているため、これが取られる時、あるいは取られた後に蘇生したところは共通している。愛丸は笏を身に着けていたのであり、勝仙は高価な服を身に着けていた。

『今昔物語集』にも蘇生する例はさまざま見られるが、それは親族などが法華経を書写したり、唱えたりすることによって、死んだ人が法華経の力で自然に甦った話である。墓荒しの行動によって蘇生するのは全く違うものである。

雅望が『醒世恒言』を愛読し、その中から四篇を選び、『通俗醒世恒言』を出したことは前に述べた通りである。そして『通俗醒世恒言』の巻末に、『後編通俗醒世恒言』三十六種の前予告がされていることから、雅望の『醒世恒言』を全訳しようとする志が確かめられる。後編の出版はついに実現できなかったが、少なくとも彼は、『醒世恒言』を全部読んでいたと推測される。彼のもう一つの読本『天羽衣』においては、『醒世恒言』の巻九「陳多寿生

死夫妻」が典拠の一つとして認められることも、雅望がいかに『醒世恒言』を利用していたかを物語るものである。⁽¹⁸⁾

『醒世恒言』巻十四「開樊楼多情周勝仙」を読んだ雅望は、おそらくこの一篇の、死んだはずの人が墓の中から蘇る構想を印象深く頭に残したことであろう。

この趣向の利用によって、物語の筋が複雑になってゆき、梅丸の伝奇的な人生が始まったのであった。蘇生するこの一節がなかったならば、主人公は永遠に両親と離別したまま、何の展開もなかっただろう。『近江県物語』の物語自体、成立しなかった、と言っても過言ではないほど、蘇生の趣向は重要な役割を果たしているのである。蘇生したからこそ、いろいろな可能性が生じてきて、「巧団円伝奇」の構想をこの物語に利用することができたのである。雅望が、巻一「ふなをか」において、いかに工夫し、物語を面白く展開させていく準備をしておいたかは、このような一つ一つの趣向取りからも読み取れる。彼は、物語全体を将棋のように見て、一つ一つの駒を丁寧に置きながら、話を進めていったのである。

四 『初刻拍案驚奇』巻十三「趙六老舐懷喪殘生 張知県誅梟成鉄案」の趣向取り

粗筋のところでは述べたが、^①藤原季光夫婦は、「常に子のなきこと」を、妻は「思ひおこして、忍びて初瀬にもうで、なげき祈」った。(点線と番号は筆者付、以下同様) 彼女は「終夜誦経して、暁のころしばしまどろみぬとおもふほど、あたりまばゆきまで、かぐやきわたりければ、驚て見あげたるに、たふとき法師の幼き児をかき抱き、立おはして、^②『此みどり子給ふなり。されど育てん事かたかるべし。養はれんことは安かりなん』とのたまふ。妻此ことのいぶかしければ、猶問奉らんとするほど、雲霧のはるゝやうに、見へずなり給ひぬ。さて目さめて感涙とゞめあへず、山をくだりて、京に帰りつ」いた。

その後、^③「日数ふるほどに、身たゞならず成て、あたる月といふに、やすらかに子をうみつ。(中略) ^④愛丸と名づけて、夫婦手のうちなる玉のことく、思ひいつくしみ、なで養」った。

これは、愛丸がいわゆる申し子であることを示すシーンである。愛丸は母親が長谷寺に祈願して授かった子供である。

点線で引かれているように、子供を授けると同時に、観音は、「育てん事かたかるべし。養われんことは安かりなん」と言って、消えてしまった。そして、その話は、後日駢を現わし、愛丸は三歳で亡くなり、藤原季光夫婦は彼を育てる事が出来なかったのである。後

に彼は墓の中で蘇り、猿丸に救われ、坂上梅丸と名乗り、反乱を平らげ、藤原季光夫婦とまた巡り会うことができた。梅丸は戦功で近江掾となり、藤原夫婦と安世夫婦を養って、一家団欒に暮らすことができた。まさに「養はれんこと安かりなん」の験である。

『近江県物語』のこのシーンは、以下の話とよく似ているのではないだろうか。

『初刻拍案驚奇』卷十三「趙六老舐犢喪殘生 張知県誅梟成鉄案」冒頭の入話を紹介しておく。

正徳年間、松江府城有一富民姓嚴、夫妻兩口兒過活。^①三十歲上無子、求神拜仏、無時無處不將此事掛在念頭上。^②忽一夜、嚴娘子似夢非夢間、只聽得有人說道：「**求來子、終沒耳。添你丁、滅你齒。**」嚴娘子分明聽得、次日、即對嚴公說知、却不解其意。^③自此以後、嚴娘子便覺得眉低眼慢、乳脹腹高、有了身孕。懷胎十月、歷尽艱辛、生下一子、眉清目秀。^④夫妻二人、歡喜倍常。万事多不要緊、只愿他易長易成。

〔『初刻拍案驚奇』卷十三「趙六老舐犢喪殘生 張知県誅梟成鉄案」⁽¹⁹⁾〕

右の引用文の粗筋を要約すると、以下のような内容になる。

明の正徳年間、松江府には嚴と名乗る裕福な夫婦二人が暮らしていた。既に三十歳にもなったが、子供に恵まれない。そこで、いっどこにいても子供を授かるよう、神仏に祈ることを忘れずに心懸けていた。ある夜、突然、嚴の妻は夢現の間に、声が響くのを聞いた。言うことには、「求めて来る子は、終に耳無し。家族は増えるが、あなたの齒は減るぞ」と。嚴の妻ははっきりと聞こえたので、次の日に嚴公に話した。しかし、嚴公はその言葉の意味が分からなかった。その日以後、嚴の妻は腹がだんだん膨らんでゆき、十か月後に、男の子が生まれたのである。せっかく授かった子供だったので、嚴夫婦は非常に喜んだ。二人はひたすら子供が無事に成長することを願った。

右の引用部の傍線と『近江県物語』の相応する部分とを比較すると、以下のような共通点があることが分かる。

- ① 夫婦が長年子供に恵まれず、神仏に子供を授かるよう、祈願した点。
- ② 夢の中で、神仏から言葉を授かり、その言葉が子供の将来、家族の将来を暗示した点。
(□で囲まれた言葉)
- ③ 妻が子供を授かってから、生まれるまでの描写がある点。
- ④ 祈願の効果があり、子供を授かったことと、授かった子供を夫婦二人が大事にする点。
では、嚴の妻が神仏に言われたことは現実になったのであろうか。

敵の息子は大きくなっていくにつれて、金を浪費し、賭け事に夢中になった。家の財産もそのおかげで、底をついた。外で借金だらけになった敵公は、その息子を見ては、心を痛め、息子を殴るふりをしたが、息子は逃げようとした。そこで敵公が逃げられないように止めようとしたところ、息子は拳骨を振って、敵公の顔を殴り、**敵公の歯は二本打ち落とされてしまった。**

息子もさすがに悪いことをしたと思って、家から逃げた。敵公は、怒り極まり、息子を裁判所に訴えた。息子は途方に暮れ、平素一緒に遊ぶ仲間の一人丘三に助けを求めた。すると、丘三は彼を辺鄙なところに連れて行き、口を彼の耳に近づけた。秘密話をするかと思ったら、**カシャと彼の耳を噛み切ってしまった。**

子供を授かった当初、夢で言われた「**求来子、終没耳。添你丁、滅你齒**」四句の言葉は現実になり、息子は終に耳がなくなり、敵公は歯二本をなくしたのである。

これで、「趙六老舐犢喪殘生 張知県誅梟成鉄案」の冒頭と、『近江県物語』の相応する部分と、もう一つの共通点を加えることができる。即ち、五番目の共通点として、夢で言われた神仏の言葉が両方とも現実になり、その験を現わしたのである。

尤も、申し子の発想はありふれたもので、仏教説話の靈驗譚にもよく見られるものである。『長谷寺験記』第四話には、長谷寺に祈願して生まれた長谷雄の故事と、第三十一話に長谷寺に祈願して親孝行の娘が生まれた故事が見られる。だが、これらは、祈願することによって、子供が生まれた記述にとどまるだけであり、『初刻拍案驚奇』のように、妻が妊娠してから子供が生まれるまでの描写や、神仏に掛けられた言葉が子供と家族の将来に関わる大事な言葉であることなどは、言及されず、ただ観音の靈驗を強調しているだけであり、物語の展開に大きく関わるものではない。

また、前に述べた『女仙外史』の主人公―賽児も両親が神仏に祈願して授かった子供である。これも、雅望が『女仙外史』を読んでいた一つの証左である。ただし、『女仙外史』では、賽児の特殊な生まれ方―十月十日で生まれず、十五ヶ月目でようやく産まれたこと、また産まれた時、空には音楽が響き、彩雲が現れたこと―に重点が置かれている。即ち、賽児がいかに平凡でない子であるかが強調されたのである。

雅望は、仏教説話における申し子譚をも、賽児が生まれる経緯をも、意識しながら、作品の構想に当たっていただろう。しかし、前に述べた四つの共通点があることから考えると、より『初刻拍案驚奇』を参考にしていたと思われる。

第三章で触れる梅若伝説の資料の中にも、申し子のモチーフが見られるのであるが、梅

若者が申し子であることを覚えつつ、『初刻拍案驚奇』巻十三の冒頭の入話を参考にしていたと思われる。¹²⁰⁾

雅望は白話を愛読し、白話小説集の「三言」を読んでいるので、当然「二拍」の『初刻拍案驚奇』を知らないわけではない。彼は『初刻拍案驚奇』に目を通していたと考えられる。

その一つの証拠として、雅望のもう一つの読本『飛驒匠物語』に、仙薬を作る部屋で、男女の仙人二人が契を交したことで、仙薬が汚されて、完成できなくなったゆえ、二人が下界に下される場面がある。これは『初刻拍案驚奇』の巻十八から趣向を学んだと思われる。これについては、第六章で詳しく論じたい。

雅望は『初刻拍案驚奇』の巻十三の冒頭の話を読み、仏が女性の夢に現れ、何かを予言する発想を印象深く受けとめたことであろう。神仏の言っている言葉がこれから授かる子供と家族の将来を予言し、しかも現実が予言通りになったことは、雅望の読本創作上とても都合の良いヒントである。彼は愛丸を申し子に設定する時に、『初刻拍案驚奇』のこの構想の枠組みを借り、愛丸と家族の将来を神仏の口を借りて語らせ、愛丸の身の上にさらなる伝奇的な彩りを施すことができた。この発想も「試児」の発想のように、大いに的中し、まず愛丸を両親と離別させておき、大人になってからまた巡りあわせるという劇的な物語展開を可能にしたのである。

これで『近江県物語』の巻一に於いて、「試児」、「蘇生」と「仏の言葉の験」の三つの仕掛けが仕込まれていたことが分かる。この三つの仕掛けは、三つの伏線でもあり、物語の筋の展開を暗示するものである。雅望は、この三つの伏線を置くことによって、読者にいろいろと想像力を膨らませ、物語を楽しませることに成功したのである。

五 終わりに

以上、中国の伝統習俗「試児」の趣向、『醒世恒言』巻十四「鬧樊楼多情周勝仙」における蘇生する趣向と『初刻拍案驚奇』巻十三「趙六老舐犢喪殘生 張知県誅梟成鉄案」冒頭の趣向の、『近江県物語』における受容を述べてきた。これらは今まで全く指摘されていないかった趣向である。

「試児」の趣向により、愛丸がつかんだ「笏」が彼の仕官の道を歩む将来を予言した。次いで蘇生する趣向によって、愛丸（梅丸）の伝奇的な人生が始まった。即ち、死んだはずの梅丸は墓荒しの行動によって蘇り、猿丸の息子となり、安世の婿となり、そして常人

の計らいで家出をしたが、それが実の両親とめぐりあうという結末に繋がったのである。この二つの趣向の利用により、物語全体は複雑になってゆき、波乱万丈になっていったのである。また、『初刻拍案驚奇』巻十三「趙六老舐犢喪殘生 張知県誅梟成鉄案」冒頭の趣向の利用は、愛丸と両親との離別を予言し、後にまた巡り会う事ができるとの暗示をもかけている。雅望は、この三つの趣向をひとつひとつ丁寧に使ひ、『近江県物語』を一つの梅丸伝奇として描くことができた。それゆえ、この三つの趣向取りは、極めて重要であると言わねばならない。

また、小道具の「笏」ひとつに注目すると、将来の予言、婚約者を探し出す手がかり、両親とめぐり会う信しんの三つの役目を担っていることに気づく。前にも述べたが、重友氏と麻生氏両氏は「巧団円」と『近江県物語』とを具体的に比較していたが、小道具の「笏」についてはほとんど言及がなかったのである。雅望は「笏」一つで「一石三鳥」の効果を狙っている。即ち、婚約者を探し出す手がかりの役目、離ればなれになった両親とめぐりあう時の証拠品、と将来を予言する役割の三つである。前の二つは既に第一章で述べており、本章では「試児」で挿んだ笏の将来を暗示する役割について考察を行った。

このように、「巧団円伝奇」をベースにしながら、他の趣向を取り入れ、作品中に織り込むことによって、『近江県物語』は起伏に富み、神秘性と伝奇性が高まり、面白く展開してゆくことができたのである。第一章でも紹介したが、文化六年二月、『近江県物語』を読んだ、大田南畝が「予平生いとまなければ、近頃流行の小説をよむにいとまあらず。六樹園（筆者注 石川雅望の号）があらはせる近江県物語をよみて、俗流にあらざることを知り。」と『近江県物語』を賞賛したことが、それを証明している。

注

- 1 稲田篤信『石川雅望著作集』・「解題」四二三頁（国書刊行会 一九九三年）
- 2 重友毅氏は『近世文学の位相』（日本評論社 一九四四年）第二篇に「六樹園の雅文小説」があり、鈴木敏也氏は『近代国文学素描』（目黒書店 一九三四年）に「浪漫小説作家としての石川雅望」がある。重友氏は、常人が盗賊に加入する時に、盗賊のリーダーから人の頭を切つて来いと命じられた趣向は『水滸伝』の林冲が梁山泊に入る時に首領の王倫から言われた「投名状」を利用したものであると指摘、また梅丸が後にス

パイとして敵陣に入り、戦いの勝利を促した一条は『笠翁伝奇十種』の「奈可天伝奇」の、闕忠が袁將軍を助けて、白天王を滅ぼす趣向を使っていると指摘した。

3 鈴木敏也「浪漫小説作家としての石川雅望」『近代国文学素描』所収（目黒書店 一九三四年）

4 稲田篤信『近江県物語』論*もう一つの梅若物（『江戸小説の世界*秋成と雅望』所収 ペリカン社 一九九一年）

5 4に同じ。

6 本論文で引用した『近江県物語』の箇所は前掲国書刊行会『石川雅望著作集』による。

7 顔之推『顔氏家訓』（上海中華書局 一九三六年）

8 『語園』の中に「試児」を以下のように紹介している。「江南ノナラワシ子生テムカハリ月ニ及ヒケレハ髪アラヒ湯ヲヒカセ新キ衣装ヲキセ男子ニハ弓矢紙筆女子ニハモノサシ針糸ヲ並置其辺リ飲食珍宝モテアソヒノ道具ヲ置テ小児ニ是ヲトラスル也其取ツク所ニシタカツテ廉恥貪欲智愚ハアラハルル也是ヲ名付テ試児ト云也。」引用文は、古典文庫第三七七冊吉田幸一校訂『語園』（古典文庫 一九七八年）による。

9 麻生磯次『江戸文学と支那文学』（三省堂一九四六年） 一四九頁

10 『近世白話小説翻訳集』第三卷『通俗大明女仙伝』（汲古書院 一九八五年）

11 『通俗醒世恒言』は石川雅望が白話小説集「三言」の第三言『醒世恒言』の四十篇の中から四篇を選び、和訳したものである。その四篇はそれぞれ巻六「小水湾天狐貽書」、巻二十八「呉衙内隣舟赴約」、巻三十四「一文銭小隙造奇冤」、巻十八「施潤澤灘闕遇友」である。巻末に『後編通俗醒世恒言』三十六種近刻の予告をしている。

12 正宗敦夫校訂『延喜式』（日本古典全集刊行会 一九二九年）

13 日本には、中国の風習「試児」に当る風習―エラビドリがある。しかし、エラビドリについての記載は、屋代弘賢が文化十二年か十三年に肥後国に発送した『肥後国天草郡風俗問状答』だけに見られる。また、増田勝機氏の論文「誕生日を祝う習俗並びに初誕生のエラビドリ習俗について」（『日本民族学』 一九八二年）では、エラビドリは奈良以西の西日本に分布しているとの調査結果を指摘した上で、このエラビドリ習俗は日本に発生したのではなく、中国の試児の習俗が伝播してきたものと主張している。また、祖父江孝男も増田氏と同じ調査結果を

出しており、「日本における乳児諸儀礼―地域的差異その他の問題―」（『民族学ノ
ート』平凡社 一九六三年）の中では、エラビドリの範囲を「近畿以西」と指摘
している。即ち、東日本にはエラビドリの風習がなかったわけである。この習俗
はいっつ西日本で始まったのかについては、はっきりとした文献が見られない。た
とえ雅望の生きている間に、すでにこの習俗が存在しているとしても、石川雅望
は実生活からこれを知る可能性はゼロに近い。なぜなら、江戸生まれ江戸育ちの
江戸子である。粕谷宏紀氏の『石川雅望研究』（角川書店 一九八五年）によると、
彼が文化元年（一八〇四）四月、京坂の旅に出たが、途中病のため、近江の日野
宿でやく三か月療養し、目的を果たせず、江戸に帰ってしまったからである。故
に、むしろ、本章で述べたように、書籍を通して、中国の「試児」の習俗を知っ
たのではないであろうか。

14 前掲稲田氏論文

15 『伽婢子』からの引用箇所は、新日本古典文学大系『伽婢子』による。

16 馮夢龍『醒世恒言』（人民出版社 一九五六年）

17 『今昔物語集』卷十二第三十七に「信誓阿闍梨依経力活父母語」が法華経の力によ
って死んだ人が甦る一例である。

18 注2に同じ。

19 凌濛初『初刻拍案驚奇』（中華書局 二〇〇九年）

20 第三章をご参考されたい。

第三章 『近江県物語』における男の主人公―梅丸の人物造形について

一 はじめに

『近江県物語』の典拠研究が進んでいる一方、男の主人公の梅丸に焦点を当てて、彼の人物像を分析した研究はそれほど多くはない。稲田篤信氏は、梅丸の人物像について、稚児物語の影響があり、その根底に『秋夜長物語』の梅若が意識されていると指摘している¹⁾。

本章では、梅丸の人物像に注目し、その多重的な面影を明らかにしたい。梅丸は原典の「巧団円伝奇」の主人公の姚克承に依って作られた人物ではあるが、姚克承の身の上になり性質を数多く持っている。それらを、雅望がどこから摂取してきたのであろうか。

原典の姚克承は秀才であり、武術に関してはまったくの素人である。彼は、のちに郷試に受かって、四番目の経魁を取ったが、反乱を平らげるような志はすこしも見られなかった。それに対して、梅丸は学問もよくでき、射術も素晴らしく、知恵を働かせ、反乱を平らげた文武両道の英雄として描かれたのである。

主人公―坂上梅丸の名前に着目すると、その名前の付け方が、坂上田村麿大將軍とよく似ていることに気づく。もしかすると、雅望は坂上田村麿將軍を意識していたのではなからうかと筆者は考える。また、雅望が自ら作品の中では、梅丸が漢の直不疑に劣らない品格を持っていると言っている如く、中国の歴史人物の面影をも重ねさせていると思われる。直不疑以外、『史記』の范雎の故事も利用されていると考えられる。

以下、稲田氏の指摘した「梅若」との関係を再検討した後、田村將軍と直不疑と范雎の面影がいかに梅丸に重ねられているかを論じたい。

二 『近江県物語』における梅丸の人物像

第一章では、『近江県物語』の粗筋を纏めた。重なる部分もあるが、ここでは巻を追って、あらましを少々細かく述べながら、梅丸はどういう人物として描かれたかを見ておこう。

「巻一」

村上の御時に、藤原季光夫婦がいた。彼らには、長年子供ができなかったため、妻は長谷寺に祈願し、愛丸が生まれた。二人は彼を寵愛した。しかし、愛丸は三歳の時に、病氣

で亡くなり、船岡に埋められた。その夜、一人の乞食が愛丸の墓を荒らし、愛丸の腰に挿してある笏を取ろうとしたところ、愛丸が蘇り、通りかかった旅人猿丸に命を救われた。

愛丸は、猿丸に育てられ、名前を坂上梅丸に改められた。梅丸が九歳の時に、猿丸が死んだため、梅丸は同じ村の医師橋安世の世話になって、成人した。安世は、一人娘蘭生の婿に梅丸を選んだが、安世の甥常人は、悪知恵を働かせ、梅丸を家から追い出した。

家を出た梅丸は、墨俣川で雨宿りの時に、盗みの嫌疑をかけられた。梅丸は盗んでいなかったが、その人に金を出した。後に、嫌疑が晴れたが、その時、側で事の始終を見た嵯峨左衛門は梅丸の行動に感心し、同行を申し出た。

「卷二」

梅丸が家を出た後、盗賊は近江を襲い、安世が妻を連れて逃げた。蘭生は貞潔を全うするため、巴豆を体に塗り、病人を装ったが、捕まった。一方、嵯峨左衛門は日ごろからの梅丸の振る舞いを見て感動し、梅丸と養子の縁を組んだ。京都の家司が駆けつけ、都の家は盗賊に襲われたと報告した。梅丸は都の状況を見に行くために出発した。美濃のある寺で盗賊たちと出会って、酒宴の興に田楽をし、盗賊の割符を得た。盗賊に捕られた蘭生の腰元を救い、彼女から、常人の計らいを知った。盗賊の夜叉丸は蘭生の美しい容姿を見て、彼女を妻にしようと考えた。蘭生は巴豆を塗って危機を逃れた。同じ囚屋に囚われている姥と知り合い、自分の身の上を語った。

「卷三」

安世は妻を連れて伊賀の親戚に身を寄せた。常人は盗賊に入ったら、身は安全だと考え、侮辱されながらも、盗賊に入った。彼は金剛二郎と伊賀の安世の親戚の家を襲った。金剛二郎は、安世の宝物の鎧を盗んで、逃げたが、常人は捕まって、安世に勘当された。盗賊の陣に帰った常人はチャンスを見て、鎧を背負って、逃げ出し、安世の妻の言う言葉を頼りに、近江の安世の家に帰り、地下から黄金を掘り出し、家の主となった。

「卷四」

盗賊たちは、奪ってきた女たちを家族に請け出させ、残りの女を袋に入れて、売ることにした。梅丸と常人二人とも蘭生を買い求めようとしたが、梅丸は姥、常人は気の狂った女性を買った。梅丸は姥を母親とした。姥から美しい烈女のことを聞き、蘭生だと思って、買いに行くと、果たして蘭生であった。後に常人は人を雇い、蘭生を奪いに来させたが、奪われた蘭生は安世に助けられた。

「卷五」

安世は頼光と文学の師弟関係に当たり、彼は梅丸を連れて、頼光がいる石山寺に行った。頼光は梅丸の学問と射術を試してみたところ、梅丸の文武に感服した。盗賊討伐のために、梅丸を藤原保昌の元に赴かせた。

藤原保昌は近江の高島に籠った甥にあたる斉明に降伏するようにと説いたが、降伏してくれなかった。梅丸は以前賊からもらった割符を使い、敵陣に入り、味方と装って、大火事を起こした。斉明の逃げようとするところを射て殺し、斉明の賊軍を滅ぼした。その後、梅丸は近江の常人のところに行き、田村將軍の曲を舞い、安世の鎧を取返した。と同時に、左衛門は鈴鹿山へ軍勢を向かわせ、保輔を滅ぼした。

梅丸は近江の盗賊を平らげた功があつて、近江掾に任命された。みんなが頼光の邸に集まり、一々の真実が明らかになった。梅丸は嵯峨左衛門の実子であり、死んだ愛丸である。袋の姥は嵯峨左衛門の妻であり、梅丸の本当の母である。西念法師は墓を荒らした乞食であり、猿丸は愛丸を連れていった旅人であつた。その後、梅丸一家は繁栄した。

前の章でも述べたが、袋の姥を買う段と女の主人公を買う段、買った姥は実の母親である段、養子養父である二人は実は実の父子である段は、忠実に原典の「巧団円伝奇」に沿つたものである。それらの部分に於いては、梅丸は原典の男の主人公の姚克承に依るものが多い。それ以外、梅丸と姚克承とは、共通点が少ないのである。

梅丸は姚克承と違い、彼は母親が長谷寺に祈願して授かつた子供である。そして、伝奇的な経歴を持っている。三歳の時に一度死んだが、後にまた蘇ってきたのである。大人になつた梅丸は以下のように描かれている。

此数多ある弟子の中に、坂上の梅丸といふ者ありけり。年ははたち計にて、面きよく、姿みやびかに、学ぎえの方も、人にたちまさりて、志もうるはしかりければ、誰々もほめ物にぞしたりける。(中略)もとよりかしこき若者なれば、一を聞いて十をさとり知りて、今は左右なき、書生とぞなれりけり。学問のひま／＼には、弓ひき、太刀うちわぎをも、習ひて、いさゝかをこたらず、はげみ学びける。

即ち、大人の梅丸は文武両道の優れる青年として設定されたのである。これは姚克承との一番の違いである。梅丸は射術に優れ、盗賊にスパイとして入り、知恵を巡らし、盗賊を滅ぼす英雄のような人物となっている。また、その智慧は、軍事的計略に表われるだけで

はなく、師の鎧を常人の手から取り戻す時も見一見できる。

雅望はどうやって梅丸の人物像を作り上げたのであろうか。

三 梅丸と梅若

稲田篤信氏は、梅丸について、「本作の主人公・梅丸の命名は江戸に古くから伝わった梅若伝説の主人公にゆかりがある。これと、『秋夜長物語』などの稚児物語が、作品の底流に意識されていたとみるべきであろう。」^②と述べている。

また、山本和明氏は、『近江国輿地志略』の「志賀郡 韓崎」の項に、『秋夜長物語』のあらましが紹介されていることから、『近江』の地に「梅若」に通じる伝承が存在していたと興味を覚えたという。「勢多の橋に身投げをして死ぬ存在としての梅若―梅若物の原態が『近江』の地に息づいていた。梅丸という名の主人公を設定するとき、江戸に伝わる梅若物から直接に導かれたのではなく、『近江』を意識しての登場ではなかったのだろうか。」^③と氏は指摘している。

しかし、稲田氏の指摘している『秋夜長物語』にしても、山本氏の指摘している『近江国輿地志略』に見られる梅若に関する記載にしても、いずれも稚児物語である。山本氏の言う「志賀郡 韓崎」にある梅若の伝承は、『秋夜長物語』の内容を紹介したものである。これを以下引用する。

『長物語』に云、後堀川院の御宇、西山の胆西上人、もとは北嶺東塔の衆徒、勸学院の宰相律師教戒といへり。教戒いさゝか思ひありて、山を出て他に住んとしけるが、さすが医王・山王の結縁も捨てがたく、同坊同侶のわかれちも名残をしく、あかしくらしけるが、ある時石山に七日籠りて通夜す。其夜の夢に、美少年を見て心にわすれず、うかれ歩しに、三井寺の辺にて雨に逢て、聖護院の御房の庭に立ちよれり。然処に二八ばかりの美少年、花を手折てたゞみ居たり。是は三条京極に住たまへる、花園左大臣の子、梅若と申にてぞありける。律師が夢に見たる面影に、少しもたがわねば、弥思ひまさりつゝ彼少人のつかへる童をかたらひ、文をおくりければ、少人其心をあはれみ、律師を招て、一夜あひけり。是より後律師、山に帰りても恋慕も心やまらず、ふし沈みて明しくらせり。梅若此由を聞て、彼人、はかなくなりなば、なからん跡をとひてもかひなし。たとひしらむ山路なりとも、尋行むと思ひ立、童一人を具し

て出けれども、歩みなれぬ道につかれて、唐崎の松の陰にやすらひ、あはれ天狗こたまなりとも、我をとつて比叡山へあて登れかしと云処に、年たけたる山臥来ていづちともなくうばひ行。又、梅若うせたりとて山門三井寺大にさはぎ、山門の衆徒教戒律師以下如意が嶽より乱れ入り三井寺に火をかけやきはらひ、又其後梅若帰り来りけれども、我事故に、仏閣殿舎火災に罹りしを怨み泣て、文を書、童にもらせて律師につかはし、瀬田の橋の下に身を投て、むなしくなれり。
『近江国輿地志略』⁽⁴⁾

引用は些か長めになつてしまつたが、『秋夜長物語』とはどういう物語なのかを理解する上で参考になる。

引用の部分を吟味すると、それは十六歳の美少年梅若と年取つた律師教戒との男色物語であることに気づく。これは、たとえ近江の地に伝承されたとしても、『秋夜長物語』の中における梅若と『近江県物語』における梅丸との間に、些かの共通点も見られない。名前は似ていることは確かだが、『近江県物語』には男色物語が存在しない。『近江県物語』は稚児物語ではない。『近江県物語』と『秋夜長物語』とを比較すると分かるように、『近江県物語』には、梅若と教戒に当る人物が見られない。梅丸は盗賊の手から西念法師を救つたが、二人の間には恋慕の気持ちはまったく読みとれず、男色の要素はどこにもない。

『秋夜長物語』の主人公の「梅若」の名前に拘りすぎて、『近江県物語』を一つの稚児物語として片づけてしまうのは牽強にすぎる。

ただし、稲田氏は同時に梅丸の名の由来は「隅田川の木母寺梅若縁起の世界こそがただちに連想されなければならないのであつた。」⁽⁵⁾とも述べているが、ここではただ名前の由来にとどまり、梅若縁起との関わりを論じなかつた。そこで、木母寺縁起に関わる梅若伝説の内容に踏みこみ、『近江県物語』との関係を考えたい。

木母寺の縁起に関する梅若伝説というのは、吉田少将の子供である梅若は、十二歳の時、人買い商人にかどわかされ、東に下るが、途中で疲れて隅田川で死んでしまった。一年後の歿日に、里人が集い弔うと、我子を探ねてくる母は真実を知り、悲しくなる。母親は、梅若の塚の隣に庵を設け、梅若の菩提をしているうちに、自分も池に身を投げてしまった。

謡曲の「隅田川」がその伝説の一つである。謡曲の「隅田川」以外、梅若伝説に因む資料は、ほかには慶應義塾大学国文学研究会編『梅若縁起の研究と資料』(桜楓社 一九八八年)に収められている『梅若権現御縁起』(木母寺蔵)、『隅田川木母寺畧縁起』(慶應義塾図書

館蔵）、『武蔵野国埼玉郡梅若塚畧記』（満蔵寺蔵）、『梅若丸傳奇』（スペインサーコレクション）などがある。⁽⁶⁾ 梅若伝説は近世に流行っていた伝説であり、雅望は何等かの形でこれを知ったと思われる。

この四つの伝説を読み比べると、多少の違いはあるものの、以下のような共通点が見られる。

- 1 梅若丸は、申し子である点⁽⁷⁾
- 2 五歳にして、父親の吉田少将が亡くなる点
- 3 八歳で比叡の月林寺に出る点
- 4 十二歳で人商人によって、東の国に連れられ、隅田川で亡くなった点
- 5 死期が三月十五日である点
- 6 家は北白川にある点
- 7 母親は武蔵野に下り、自分の子を捜しに来て、彼を弔い、最後に自分が池に身を投げた点
- 8 梅若丸は、文殊菩薩の転身である点

『近江県物語』と梅若伝説とを内容の面で比べると、1番の申し子である点、5番の死期が三月である点、6番の家は北白川である点の三点が、『近江県物語』にも確認できることが分かる。

梅若丸は、寺に祈願して授かった子供である（『梅若権現御縁起』には、夫婦二人は「日吉宮に祈り試み」とあり、『隅田川木母寺畧縁起』には、夫婦「日吉の神へ参籠して丹祈をなす」とあり、『武蔵野国埼玉郡梅若塚畧記』には「近江国なる日吉山王権現に、祈念のため籠りける」とあり、『梅若丸傳奇』には、母親の花子が「北野の天神にまうて、祈申しける」とある）。『近江県物語』の梅丸も、母親が長谷寺に祈願して、授けた子供である。申し子の趣向は、第二章で『拍案驚奇』の趣向利用で触れたが、梅若伝説の申し子も意識されていたであろう。即ち、雅望が申し子譚を利用する時に、『拍案驚奇』の卷十三の入話と梅若丸が申し子であることを同時に意識し、作品の中に持ち込んだのである。

そして、梅丸と梅若丸の死ぬ日が似ている。梅若丸が死んだのは「三月十五日」であり、梅丸が死んだのは「三月十九日」である。二人とも三月に死んだ。

尚、二人の家は同じく京の白川である。『近江県物語』には、「今は昔村上の御時、藤原の季光といふ人有けり。白河のほとりに、家あつくりて住けり。」とあり、前に紹介した四

つこの梅若伝説すべて、梅若の生まれたところを「北白河」と記している。

以上の三つの共通点、即ち申し子であること、故郷が白川であること、死んだ月が三月であったこと、四つ目に、名前に共通の「梅」があることなどを考えると、稚児物語の『秋夜長物語』よりも、木母寺縁起に関わる梅若伝説のほうを雅望は意識していたことが分かる。

四 梅丸と田村麿大將軍伝説

主人公坂上梅丸の姓名に着目すると、梅若丸以外に、坂上田村麿の面影も重なっているのではないかと思われる。山本和明氏にも同様な指摘があった。

氏は、『近江県物語』への視座⁹の論文で、『近江県物語』における地名の検証から坂上田村麿大將軍伝承との関連を結び付けている。

氏はまず、『近江国輿地志略』に見られる田村麿が再興した善勝寺、高座田村明神社、田村川などを、『近江県物語』の舞台の神崎と関連づけた。また、田村麿伝説の『田村草子』や謡曲『田村』の舞台となる鈴鹿山を、『近江県物語』の舞台の一つである鈴鹿山と関連づけて、「物語の深層部に田村麻呂伝承の姿をみることで⁹」たと結論を導いた。

ここでは、共通している舞台の地名からではなく、敢えて山本氏とは違う角度から、作品の細部に入り、田村麻呂伝説の『田村草子』や浄瑠璃の関連作品と、『近江県物語』との共通点を見出したい。

『近江県物語』の巻五に「石山寺」、「田村將軍」、「うどんげ」の三章が設けられている。「田村將軍」が一章のタイトルとして使われていることから、雅望が田村將軍を意識していたことは分かる。

また、坂上梅丸と坂上田村麿との名前だけ見ても、「坂上」の姓と「まろ」の名が共通している。もうすこし深く考えれば、「梅」は「田村」の二文字からの変身であるとも看做される。というのは、古来「木」と「母」との二文字で「梅」を代表する例は少なくない。前に述べた木母寺の名前は、実は梅を木と母と二つに分けた表記である。『日本詩話叢書』卷二山本北山（江戸中期の儒学者一七五二—一八一二）の「孝経楼詩話」¹⁰には、「梅母通用ス、母ヲ、トガノ木ト訓ズルハ、此ノ方限ノ事ナリ、梅児ノ寺ヲ、木母寺ト號スルヲ、誤リナリト云者アレ共、實ハ然ラズ、羣玉韻府ニ、梅ヲ木母と稱スルコトアリ、湖海新圖ニ、梅ヲ木母ト名ク、嵯峨集ニ、東山雪村、名ハ友梅、梅尾ニ到リ、此ノ山之名ハ、

我が名ノ字ナリト云トキハ、木母ヲ梅トスルコト、此方ニモ久キコトナリ。」とある。即ち、「木」と「母」の二文字で「梅」を表現することは、古代ではよくあったことである。

「田村」は「木」と「田」と「寸」の三つに分解することができる。その中、「田」と「寸」を一つの文字にすると、「母」にならなくもない。

この推理で、「梅丸」の「梅」は「田村」の二文字に由来することにもなる。これは回りでどい気がするかもしれないが、その可能性は否定できない。もちろん、前に述べたように、「梅」の文字は、「梅若」から直接取ってきたことにした方がより自然であろうが、とにかく、名前だけに注目して見ても、「梅若」と「坂上田村麿」の両方が意識されていたことは明らかである。

話は戻り、田村伝説の作品から『近江県物語』と共通するところを見てみたい。山本氏は両者に共通の舞台が見られると述べている。ここで、山本氏の論の延長線上に立ち、氏の言及されない部分を述べていきたい。

室町時代のお伽草子『田村草子』は、藤原としひと將軍の子であるとしむね（田村丸）が、鈴鹿山の鬼神おおたけ丸を鈴鹿御前の天女の助けで退治し、後にまた、近江の高丸を退治した物語である。謡曲の『田村』では、前半は、清水観音の縁起が語られ、後半は、田村麻呂の霊が出てきて、自分が帝の宣旨を受け、鈴鹿山の悪魔を退治したと話す。鈴鹿山は鬼神を退治した共通の舞台となっている。

『近江県物語』の舞台は、近江と伊勢になっている。斉明を近江の高島で討ち、保輔を伊勢の鈴鹿山に滅ぼした。これは、山本氏の指摘と同じところである。

しかし、舞台が一致する以外、『田村草子』には、『近江県物語』と共通する所が、他にも見られる。

『田村草子』には、

「此子（田村丸）、九歳の年より、あたりの山寺にて、がくもんせさせけるに、一を十と、さとりけるか」とある。

『近江県物語』には、

「もとよりかしきき若者なれば、一を聞いて十をさとり知りて」とある。
両方「一を聞いて十を悟り知る」の意味の言葉を使っているのである。

また、『田村草子』では、田村の父親の名前は、「藤原としひと」であり、『近江県物語』では、梅丸の父親の名前は「藤原季光」である。両方「藤原」の姓となっていて、名の「とし」と「季」も通じている。

更に、幼いころから父と別れ、最後に父と対面することができたという、共通点もあるのである。『田村草子』では、田村丸が生まれる前に、父のとしひとが、上京したので、ずっと離れて暮らしていた。十何歳の時に、田村丸は形見の鎬矢を持って、上京し、いろいろ試練を受け、やっと父親と対面する事が出来た。それと同じく、梅丸は、三歳の時に、病気でなくなり、父親と離れたが、後に、救われ、大人になった後、形見の「笏」で父親と再会を果たすことができた。一旦別れて後にまた父親と巡り会うところは、共通している。これらを表にまとめると、右のようになる。

	田村 草子	近江 伊勢の鈴 鹿山		船岡 (田村丸は奈良坂の鬼「りようせん」を船岡山に切った。)	此子 (田村丸)、九歳の年より、あたりの山寺にて、がくもんせさせけるに、一を十と、さとりけるか	藤原としひと	田村丸が生まれてない頃から、父のとしひとは、上京したので、ずっと離れて暮らしている。十何歳の時に、田村丸は形見の鎬矢を持って、上京し、父親と対面する事が出来た。
	近江	近江	船岡	(梅丸) もとよりかしこき若者なれば、一を聞いて十をさとり知りて	藤原季光	梅丸は、三歳の時に、病気でなくなり、父親と離れたが、後に、救われ、大人になった後、形見の「笏」で父親と再会を果たすことができた。	
舞台	地名の一致	主人公の賢さを形容する言葉	父の姓	幼いころから父と別れ、最後に父と対面すること			
近江 県物 語	伊勢の鈴 鹿山	船岡 (愛丸が死んだ後に、船岡に埋められた。)	藤原季 光	梅丸は、三歳の時に、病気でなくなり、父親と離れたが、後に、救われ、大人になった後、形見の「笏」で父親と再会を果たすことができた。			

なお、浄瑠璃の『二代田村三代田村』と『田村三代記』⁽¹⁾も、田村將軍に関わる伝説であるが、同じく田村丸と父親が鬼神を退治する物語になっている。年代不明の事もあり、雅

望は、これらに目を通したかどうかは確認できないが、『二代田村三代田村』では、田村丸の父親の名は「年光」^{としみつ}となっており、『田村三代記』では、父親の名は「利光」^{としみつ}となっているのである。

『近江県物語』では、梅丸の父の名は「季光」^{すえみつ}である。周知の通り、「年」の異体字は「季」^{とし}である。そして「季」と「季」は類似字形である。雅望は「年」から「季」を聯想して、「季」から「季」と同じ字形を持つ「季」を聯想して、梅丸の父親の名前を「季光」にしたのではないかとも考えられる。

雅望は、何等かの形で、田村鷹伝説に触れ、田村鷹の英雄のイメージをヒントにして、自分の作品に於いて梅丸を一人の英雄のように作りたかったのである。田村鷹が近江と伊勢で悪魔を退治したように、梅丸は近江と伊勢にいた賊軍を藤原保昌と滅ぼした。

五 梅丸と直不疑

「すのまた川」の章では、梅丸は、常人の奸計で家出をして、遠江の国に住む亡き父の友人の所に身を寄せようと決めた。しかし、すのまた川に着くと、雨に川のみかさがまさり、渡るすべがなかった。その人家で一晩泊まろうと思いついた。家に集まる人の中に、梅丸の火打ち袋を見て、自分の無くなった袋であると主張する人がいた。これを聞いた梅丸は驚いたが、

あらそひて論じいふべきにあらず、とおもひめぐらして、一面をやはらげて、云けるは、

「さては、御辺の物にてこそさふらひつれ。おのれもけふ、道にて求て候へば、それぞと心えて、かけはらに置いて候なり。内に入置給ひしは、いかなる物にて候か」と、

へば……

『近江県物語』「すのまた川」

と躊躇う間もなく、自分の火打ち袋ではないと認めてしまった。そして、袋に一両の銀が入っていたと言われると、また銀一両を足して、袋とともにその人に返した。しかし、しばらくしてあの人は、自分の失った火打ち袋を他の所で見つけた。先に梅丸に取った行動と態度を恥じながら、梅丸の所に来て謝った。

さきには、思ひたがへて、あらぬ事を申かけて候ひき。おのが火ひち袋ついでのよく似て候はば、ふとふしぎなることを、申出して候。今うしなひつる物は、見つけ出て候へば、

給り候品は、返しまゐらする也。さるにても、いみじき雑言申て候こと、かたはらいたく、のべ申べき詞もなく候。あはれ御とくに、ゆるせさせ給はなん」と、おめくといふを、かたはらにある人々、「いざや、人をさしてぬすびとと悪名をつけて、のゝしりしを、たやすくゆるすべきならず。そのたうには、かやつがつらがまち、ゆがむばかり、うちはりて、さて怠状かゝせて、はらをゐ給へ」など、口々にいふを、梅丸耳にもいれで、うち多みて、かの男に向ひて、「さてはそれがしを、盗人也とおぼされし、御うたがひは、はれ給ひぬとや。先々よろこばしくこそ存候へ。さきに奉りつる火うち袋、返し給はんことうれしくこそ存候へ。とかくのたまひし事共は、はらだち給へる時には、さもあるべき道理と存候へば、ひがことゝは承らず候。然るに、ねんごろにおほせ給ふこと、なかく心ぐるしく損さふらふ」といへば……

梅丸は、盗人に悪名を被らせたことにすこしも怒らず、容易くあの男を許したのである。此のすべてを見たひとりの六十あまりの人（嵯峨左衛門のこと）は、「もろこしの直不疑が故事にも、をさくおとるまじく」と感心して、梅丸を褒めたのである。

ここで、雅望は、嵯峨左衛門の口を借りて、自らその典拠を直不疑の故事に拠っていることを漏らしている。

直不疑の故事は『史記』の「万石張叔列伝」（万石君父子、直不疑、衛綰、周仁、張叔らの合伝）に見える。

塞侯直不疑は、南陽の人なり。郎と為りて文帝に事ふ。その同舎に告帰するもの有り、誤りて同舎の郎の金を持ちて去る。已にして金の主覚り、妄りに不疑を意ふ。不疑、之れ有りて謝し、金を買ひて償ふ。而るに告帰する者至りて金を帰す。而うして前の郎の金を亡ふ者大いに慙づ。此を以て称して長者と為す。文帝称挙し、稍く遷りて太中大夫に至る。朝廷見に、人或いは毀りて曰く、不疑は状貌甚だ美なるも、然れども独り其の善く、嫂を盗むを奈何ともする無し、と。不疑聞きて曰く、我は乃ち兄無し、と。

『史記』「万石張叔列伝」、原漢文

右の引用部分を読むと、梅丸が罪を認めて謝罪した点は、直不疑のそれを直接利用したものと分かる。直不疑のこの話は『蒙求』の「不義誣金」にも見られる。記述は『史記』の内容とほぼ同じである。梅丸と直不疑は、二人とも自分のために弁解をしなかったが、やがて事の真実が明らかになってきて、事実が自分の潔白を証明してくれた。

六 梅丸と范睢

直不疑の故事は、雅望が作品の中で自ら言及しているが、しかし、はっきりと言わず、読者にその典拠を探してもらおうような処もあった。実は、雅望は『史記』に見えるもうひとりの歴史人物の故事を使っているのである。それは范睢である。

「田村將軍」の章で、梅丸は敵陣の中にスパイとして入り、夜火事を引き起こし、敵軍を滅ぼしたのである。戦功を立てた梅丸は、ひそかに神崎の里に帰り常人を探し仇を打とうと考えた。その時、常人は安世の家を自分の家とし、財産をも自分の者とし、厳然として家の主人となった。しかし、梅丸は、常人を訪ねに行く時は、わざと卑しく装ったのである。

⑦ 梅丸、二十町ばかりこなたにて、衣服ぬぎかへて、よごれ垢づき、やれはらめきたる麻の衣着て、たゞひとり、常人が家にぞ往ける。(傍線は筆者、以下同)案内乞て、

⑧ 「梅丸こそ参て候へ。いまはよるべなき身となりて候へば、ならひえたる田樂を舞て、けふのいとなみとなして候。いかで見参にいらばやと存て、わざと参りて候」といはせける。

すると、常人は菌生のことについて聞きたいので、梅丸を奥の部屋に連れて行った。ちょうど常人の所に客人がたくさん来ていたので、酒の興として、梅丸はほかの田樂する人と、一緒に舞い踊り、席上の人々から褒められた。常人はもう一つ興あることを見せてと要求してくると、梅丸は、「おのれちか比あらたにつくれる、田村將軍といふ一曲さふらふ。これを舞て御覧に入まゐらせん。こは後巻しりまきして出たてば、鎧かぶとかしたびなん」と言った。常人は何心もなく、安世から盗んだ鎧を梅丸に渡した。梅丸は、舞い踊りながら歌い、人々は耳をすまして聞いていた。この時に、表のほう急に騒ぎだし、「大將軍保昌あそん、入来り給ふ也。」とわめいた。常人はこれを聞き、恐ろしくなり、わなわなと体を震わせた。これを見た梅丸は、常人に向かい、

⑨ 「さな驚給ひそ。おのれ出むかひて、やすく帰し出しまゐらせん」とて立あがれば、常人鎧の袖をひかへて、「をこの事なし給ひそ。大將軍に向ひ奉りて、げすの身の物申べきことやはある。さては我さへいみじき罪にやあはん。とく外へ逃出給へ」といふ

声さへ、齒のねあはず。「さやうにくるしがり給ふな。われよくこしらへすかしてみん」とて、常人が手をふりはらひて、のどくとあゆみで出る。(中略) ㊦「常人は」障子のひまより、覗きみたるに、梅丸表の方に出て会釈すれば、大將軍座につき給ひ、うやくしく札をなして、梅丸にうちむかはせ給ひ、何事か物語しておはす。常人耳をそばだて、きくに、よくも聞へず。大將軍の御声にて、「さてもさねよき具足にて候」どの給御声、ほのぐくと聞ゆ。いよく心もえず、うかどひみたるに、㊧大將軍又しきだいし給ひて、「かしこにて待つ奉らん」とて、立あがりて出ておはす。あまたの軍兵左右にならひて、いみじく警固して出て行く。梅丸おくりまゐらせて立帰り、奥さまに入て見れば、常人面はさながら土のごとく成て、口うちあきてふるひをり。梅丸うちわらひて、「いかに常人汝我師のをしへを守らず、ぬすびにおちあぶれて、おなじかさしの名をさへけがしつ。いかにや我師安世どの、たからとし給ふ相伝の御きせながは、此鎧にてあるか」といへば、いよく肝つぶれて、「さてはことあらはれぬ」と思ひて、逃出んとするを、梅丸声をあげて、「ものども来りてからめよ。」とよばれば、表の方より士卒十騎ばかり入来て、常人をとつておさへ、たかてこてにくりあげつ。(中略) 常人が縄をとりて、とよめきいさみて出行ける。後にきけば、常人は公家の御さたとして、きかいが島へながしつかはされけるとなん。

常人は大將軍が来るのを恐れるが、梅丸は自分が出て、大將軍に帰してもらうと積極的に提言する。しかし、常人は、この時点においてまだ梅丸が偉くなったことを知らず、彼の卑しい田楽師の身分を軽蔑し、その卑しい身分で自分まで巻きこまれることを恐れ、梅丸が出て行くのを止めようとした。大將軍が恭しく梅丸に礼をなし、何かを語るのを見て、もつと心得なくなった。やがて、大將軍を送り戻ってきた梅丸は、常人の盗人になった罪と安世の鎧を盗んだ罪を暴き、人に命じ、常人を屈服させ、縄でくくつた。

『史記』の「范睢蔡澤列伝」には、これと似ている構成を持つ叙述がある。

山名順子氏は日本文学協会第三十二回研究発表大会(氏の発表を聞けなかったが、後に友人を通して発表資料を見せていただいた)にて「石川雅望『近江県物語』における主人公梅丸の造形」の発表の中で、『史記』の可能性で范睢のことについて触れている。

范睢は魏の王のもとに仕えようとした。初めは魏の中大夫須賈に仕え、二人は魏昭王のために、使者として斉に行った。斉襄王は范睢の弁舌を噂に聞き、人を遣して范睢に金

五キロと牛肉と酒を贈ったが、范雎は受け取らなかつた。これを知った須賈は激怒し、范雎が魏の秘密を齊に漏らしたため、齊襄王は贈り物をしてきたのだと考え、魏に帰った後、これを魏の宰相魏斉に告げた。魏斉は、大いに腹を立て、家来に命じ、范雎を打たせた。范雎は死んだふりをして、竹製の敷物で巻かれ、厠にほっておかれた。酔っぱらった客は入れ代り范雎に小便をかけた。侮辱を受けた范雎は見張りの人に助けを求め、脱出できた。後に、彼は、鄭安平の助けで、秦の国まで行って、張禄と名前を改めた。秦の国で、范雎は秦昭王を補佐し、秦の国がますます強くなってきた。彼は秦王に韓・魏を討とうと進めた。これを知った魏国は、使者を秦国に遣した。その使者は須賈であつた。

范雎既に秦に相たり。秦號して張禄と曰ふ。而して魏は知らず、以為へらく范雎已に死して久しと。魏、秦の且に東のかた韓・魏を討たんとするを聞き、魏、須賈を秦に使はず。○范雎之を聞きて微行を為し、敝衣間歩して邸に之き、須賈を見る。須賈之を見て驚きて曰く、范叔固より恙無かりしか、と。范雎曰く、然り、と。須賈笑ひて曰く、范叔、秦に説く有りしか、と。○曰く、在ざるなり。雎、前日過を魏の相に得。故に亡逃して此に至れり。安くんぞ敢て説かんや、と。須賈曰く、今、叔は何をか事とする、と。范雎曰く、臣、人の為に庸賃す、と。須賈意に之を哀れみ、留めて與に坐して飲食す。曰く、范叔、一寒此くの如きか、と。乃ち其の一縑袍を取りて以て之に賜ふ。須賈困りて問ひて曰く、秦、張君を相とす、公之を知るか。吾聞く、王に幸せられ、天下の事皆相君に決すと。今、吾が事の去留は張君に在り。孺子豈に客の相君に習るる者有りや、と。○范雎曰く、主人翁之を習知す。雎と唯も亦調するを得たり。雎請ふ、君を張君に見えしむることを為さん、と。(中略) 范雎帰り、大車駟馬を取り、須賈の為に之を御し、秦の相府に入る。府中望み見て、識る有る者は皆避け匿る。須賈之を怪しむ。相舍の門に至り、須賈に謂ひて曰く、我を待て。我、君の為に先づ入りて相君に通ぜん、と。○須賈、門下に待ち、車を持すること良久し。門下に問ひて曰く、范叔出でざるは、何ぞや、と。門下曰く、范叔といふもの無し、と。須賈曰く、郷者我と與に載りて入りし者なり、と。門下曰く、乃ち吾が相張君なり、と。須賈大いに驚き、自ら賣られしを知り、乃ち肉袒膝行し、門下の人に困りて罪を謝す。

『史記』「范雎蔡澤列伝」、原漢文

范雎がいわゆる張禄であることに気づいた須賈は、大いに驚き、一杯食わされた思いで、自らはだぬぎして、四つん這いになって、謝罪をした。范雎は彼の罪を問うた。

④ 范雎曰く、汝が罪幾ばくか有る、と。曰く、賈の髪を擢きて以て續ぐも、賈の罪には尚ほ未だ足らず、と。范雎曰く、汝が罪、三つ有るのみ。昔者楚の昭王の時にして、申包胥、楚の為に呉の軍を卻く。楚王之を封ずるに荆の五千戸を以てす。包胥辞して受けざりき。丘墓の荆に寄りしが為なり。今、雎の先人の丘墓も亦魏に在り。公先に雎を以て齊に外心有りと為して、雎を魏齊に悪りき。公の罪一なり。魏齊の我を廁中に辱むるに當たり、公止めざりき。罪二なり。更々酔ひて我に溺せり、公其れ何ぞ忍べるや。罪三なり。然れども公の死する無きを得る所以は、綈袍戀戀として、故人の意有るを以てなり。故に公を釋す、と。乃ち謝して罷む。

『史記』「范雎蔡澤列伝」、原漢文)

范雎は須賈の罪を三つ挙げた。自分を謗った罪、他人が自分に恥を搔かせることを止めなかつた罪と、魏齊が自分を廁に放置することを放任した罪の三つである。しかし、須賈が自分に綈袍一着を贈ってくれたことにより、故人を忘れない心があつたと考え、その罪を赦した。

梅丸と范雎とを比べると、

ア 自分の仇に会いに行く時に、華麗の衣服ではなく、わざと目立たない装いをする点

イ 仇に会い、わざと自分の高い地位を隠し、下級の仕事をしていると告げる点

ウ 自ら自分が高貴な人に会いに行くと言及する点（范雎は張禄に会いに行くと言い、梅丸は保昌あそんに会いに行くという。）

エ 仇が相手が高貴な人となった、あるいは高貴な人と親しくなったことに気づき、大いに驚く点

オ 仇の罪をその前で暴く点

に驚く点

などの共通点が見られる。

山名順子氏は前掲発表で同じく粗末な衣服を身に付ける点や、欺かれたことに気づき狼狽する敵役などに言及している。

しかし、右に挙げた細かい共通点以外、物語の進展においても、范雎の影響を受けていると筆者は考える。これは山名氏が言及してない点である。これを補足して述べたい。

范雎は「家貧しく以て資無」い貧乏人で、身分の低い人である。彼は須賈の誹りで、殺されんばかりの時に、見張りの人に再生するチャンスを得たのである。その後、彼は名前を変え、秦の国に至り、秦王の寵愛と信任を得て、高い位につき、高貴な人となった。そ

の後、敵の須賀と会い、微行して、彼を騙し、罪を暴き、仇を打ったのである。

この物語の進展の仕方をそのまま借りたのは、『近江県物語』における梅丸の人物造形である。

梅丸は三歳の時に一度死んで、後に蘇ったが、蘇った後は名前を坂上梅丸と改めた。田楽の養子となった彼は、いつも敵役の常人に卑しい身分を嫌われていた。後に常人の計略で家出をしてしまった梅丸は、范睢のように死の危険を襲われるようなことはなかったが、安世の家を出た後に、他の国で嵯峨左衛門と出あい、また安世の推薦で保昌朝臣のところへ赴き、智慧を働かせ、斉明と保輔らの盗賊を滅ぼした。その功により、近江の掾となつて、高貴な身分に転身することができた。そして、盗賊を滅ぼした後に、彼は仇を捜しに行き、わざと汚い服を見に付け、敵を騙し、その罪を暴き、常人を捕まえたのであった。こう考えると、細かい処だけではなく、物語の進展に於いても、范睢の故事が多く参考にされたことになる。

雅望が、歴史人物に纏わる故事を作品の人物の身に移し、人物を作る傾向は他の読本の中にも見られる。次章での述べる読本『天羽衣』にも、『史記』の列伝から取った故事を作品中の人物に使ったのである。詳細は第四章を参照されたい。

七 終わりに

以上に述べてきたとおり、梅丸の身においては、多重な面影が窺える。「巧団円伝奇」の姚克承以外、『梅若権現御縁起』と『梅若丸伝記』などの江戸の木母寺縁起に関わる梅若伝説における梅若丸の面影、そして坂上田村麿大將軍の面影が重ねられていることが分かる。また、中国の古典文学から、『史記』の直不疑、范睢の故事を使っているのである。特に、范睢列伝は「田村將軍」の章全体が踏まえていると言ってもよい。

このように、雅望は主人公の梅丸の身に、中日の古典文学に見える人物の何人かの面影を重ねさせながら、多重かつ立体的な梅丸の人物像を一步一步作り上げたのであった。仮死するまでの梅丸には、梅若伝説の梅若丸の面影を多く投影し、成人した後の梅丸に、田村麿、直不疑、范睢の面影を投じた。そして、雅望はそれらの故事と典拠をただ積みあげるのではなく、適切に利用し、梅丸を作り上げることに成功したのである。

注

- 1 稲田篤信 『近江県物語』論*もう一つの梅若物(『江戸小説の世界*秋成と雅望』所収) ぺりかん社 一九九三年)
- 2 注1に同じ。
- 3 山本和明 『近江県物語』への視座(『説話論集と説話集』二〇〇一年)
- 4 大日本地誌大系第三冊 一二五頁 大日本地誌刊行会 一九一五年
- 5 注1に同じ。
- 6 ここにあげた四種類の資料の出版年は『梅若縁起の研究と資料』(桜楓社 一九八八年)の「資料編」によればそれぞれ以下のものである。『梅若権現御縁起』は延宝七年(一七七〇)、「隅田川木母寺畧縁起」は刊記なし、『武蔵野埼玉郡梅若塚畧縁起』にも刊記はないが、奥書があり、終わりに「應永三年三月」にこの本を抄録する記述があることから、應永三年(一三九六)以前から流布していたことが分かる。そして、『梅若丸傳記』は近世中期の制作かとの考察がある。二二三頁。

7 『梅若権現御縁起』には、少将夫妻は、子供に恵まれず、夫婦は日吉の宮に祈願した。「七日みてる三更のこと、諸共に一睡し給へは、み給ふ又ふたりにて、所も同じき夢に、童子一人枕かみに立そひ給ひて、いかに少将夫婦、汝等か過去の因の悪業にひかれて、現在の果に子の種なし、求授むとするに、神の力たも及はず。されど、丹誠を抽てゝたのむ志、切也、よて、いつくしみを垂て、我神身を化成して、汝等か子と成へし、相かまへて疑をなすなどある神語を、さた／＼と聞終へるかと思へ、諸共にさめぬ、瑞夢いとあやしくたうとくして、悦ひ給ふ事かきりなし。(中略) 月重れは、いはた帯結ひて待給ふに、その月あやまたす生れ給ひぬ。」とある。そして、『梅若丸伝記』では、梅若の出生について、以下のように描かれている。「かくて年月をくられけるか、有る時花子は、北野の天神にもうてゝ祈申けるは、我さきの世いかなる契ありてや、少将の妻となり、とし月をふれと、子のなき思ひに身をこかしぬ、男子を一人たまはれとて、夜すから御経をよみて、暁かたにすこしまとろまれければ、僧一人枕かみにたち給ひて

さきもせぬ梅のつほみは何かせん

とのたまふと夢に見て、玉のやうなるおのこをうめり、彼夢の告、かつは心にかゝりけれど、此若君のうつくしきになくさみて、梅若丸と名をつけて、夫婦の寵愛なめならず、今は思ふ事なけにそすまれける。」とある。

8 第二部第二章を参照。

9 前掲山本和明氏論文

10 蘆洲池田四郎次郎編『日本詩話叢書』巻二 鳳出版社 一九七二年

11 『韻府羣玉』について、早稲田大学図書館蔵『新增説文韻府羣玉』（一七一六年、請求記号 ホ04 00864）で確認したところ、「梅」の項目の下に「枅也。可食従木每聲」とある。『韻府羣玉』をすべて調査していないため、断言できないが、あるいは北山の言っていた「木母」の表記はほかの項目にあるかもしれない。

12 『二代田村三代田村』は南部叢書第九冊（南部叢書刊行会 一九二八年）を参考にした。解題のところ、「原本は紫波郡煙山村吉久四郎氏の所蔵であって、傳写の年代久しい間に、遂に誤字・宛字や假名遣ひなどを多く生じた。行文の古拙なこと、ともに頗る郷土的特色の濃厚な点をも味ふべきである」とある。

『田村三代記』は仙台叢書第十二巻（仙台叢書刊行会 一九二六年）を参考した。

13 「万石張叔列伝」からの引用は『史記』（新釈漢文大系シリーズ 明治書院 二〇〇四年）によるものである。

14 徐子光注の『蒙求』には「不義誣金」について、以下のようにある。引用箇所は新釈漢文大系『蒙求』（明治書院 一九七三年）による。

前漢の直不義は南陽の人なり。郎と為りて文帝に事ふ。其の同舎に告帰するもの有り、誤りて其の同舎の郎の金を持ちて去る。已にして同舎の郎亡ひしを覺り、不義を意ふ。不義、之有りと謝し、金を買ひて償ふ。後告帰せし者至りて金を歸す。金を失ひし郎大いに慙づ。此を以て称して長者と為す。稍くにして中大夫に遷る。朝廷の见到、人或ひは毀りて曰く、不義の状貌甚だ美なり。然れども終に自ら明らかにならず。景帝の末御史大夫と為る。（原漢文）

15 「范睢蔡澤列伝」からの引用は同じく『史記』（新釈漢文大系シリーズ 明治書院 一九九三年）によるものである。

第四章 『天羽衣』論

―『醒世恒言』及び『史記』の趣向利用について

一 はじめに

『天羽衣』は石川雅望が文化五年に出した中本型読本である。上下二巻、「三保浦」、「磯田浜」、「舞茸」、「かたみのこがね」、「初花たをるなかだち」、「尼法師の姫の君」、「あまつをとめ」、「忍ぬのこ」の八章からなっている。分量は長編読本にしては少なめであるが、中に含まれている典拠は数多い。

鈴木敏也氏は、『天羽衣』は謡曲『羽衣』を中心に展開した物語であると述べた上で、『堤中納言物語』の利用をも指摘している。^①また、稲田篤信氏は乗り物違いの場面は、『西山物語』のかへ（筆者注、人の名前）の死後の花嫁の場面を、得意のグロテスクな描写に転化していると、指摘している。^②

一方、中国古典文学に拠る典拠として、山口剛氏は、『醒世恒言』の巻一「両県令競義婚孤女」の冒頭を指摘し、麻生磯次氏にも同様な論がある。^③また、重友毅氏は、山口氏の論を受け、『醒世恒言』巻九「陳多寿生死夫妻」と『笠翁伝奇十種』の「奈可天伝奇」が部分的に利用されていると新たに指摘した。^{④⑤}

近年、閻小妹氏は中国古典文学の新しい典拠を指摘し、『警世通言』の巻二十五「桂員外途窮懺悔」（以下「桂員外」と略す）との受容関係を明かにした^⑥。これは『天羽衣』が全般的に拠った典拠であり、筆者も首肯するものであるが、改めて「桂員外」の内容を確認する時に、新たに『醒世恒言』巻三十五「徐老僕義憤成家」（以下「徐老僕」と略す）及び『史記』の趣向利用に気づく。いま以下に考察するとともに、なぜこれらの趣向が取り入れられたかについて考えたい。

二 『天羽衣』と『警世通言』巻二十五「桂員外途窮懺悔」

まず『天羽衣』の粗筋を確認しておく。

駿河の国有度郡に、三保の長者と磯田の長者がいた。二人は、一緒に囲碁を打つ仲のよい友達であった。十月に、三保の長者に白良、磯田の長者に黒良という男子が生まれた。

①翌年、磯田に小松と名付けられた女の子が生まれ、彼女は白良の許婚となった。（番号と

傍線は、筆者。以下同様) ②磯田家が、三回の火災に遭い、家がどんどん衰えていったのを知り、三保の長者は、家財を磯田に分け、援助の手を差し伸べた。磯田は、三保の厚恩に「犬ともなりて、報ひ奉るべし」と誓った。白良と黒良とはともに八歳の時に、痘瘡にかかり、黒良の症状は軽かったが、白良の症状はひどくて、かろうじて命は助かったものの、顔はとても醜くなった。

三保の長者は、慈悲深い人であり、洪水の時に、自分の家の倉庫を開き、村の貧しい人たちに米を与えた。彼は六十歳の誕生日に、村の人たちを招き、宴を設けて、彼らに貸した米や金の借用書を人々に返し破らせた。三年過ぎたのち、三保の長者は亡くなった。十七歳になった白良は、学問に専念し、自分の顔を恥じて外にめったに出かけなかったが、ある日母親の勧めで浜辺へ散歩に行くと、天女に出会い、その天女から羽衣を授けられた。天女は千日後に羽衣を受け取りに来ると約束した。しかし、帰りに、白良は黒良に酒を飲まされ、羽衣を盗まれてしまった。

三保の長者がなくなってから、三保家はどんどん衰えていき、下人は老僕の久一人しか残っていなかった。③磯田家は三保家の状況を見て、援助するどころか、娘の小松を他所に嫁がせようとする。これを知った久は、磯田家に行き、三保家の聘物を返してほしいと要求したが、逆に殴られてしまった。

志田の長者は、小松を気に入る、尼の即仏に頼み、聘物を送ったが、結納当日、磯田家に以前仕ていた雲井の持参した舞茸を皆が食べたところ、正気を失って、舞い踊り、結納の儀式は台無しになった。雲井は黒良が盗んだ羽衣を白良に返した。

④日々に貧しくなっていくので、三保一家は蔵を一つ売ると決めた。蔵の下の穴から父親の碁盤が見つかり、その下の甕から三保の長者の一万両の遺金が現れた。三保家は再び繁栄を取り戻し、白良は、これを羽衣の恩とした。

小松を志田家に嫁がせることになり、これを知らない小松は輿に乗ったが、途中雷雨にあい、置き去りにされた。雷雨が止んで、人々は再び輿を担ぐが、これには即仏の死体が入っており、志田の家に着いた輿の戸を開けて、みな大騒ぎになった。黒良は、国守の妻の乳母の娘を見初め、密会しようとする悪藤太に頼んだが、事件が発覚し、悪藤太は牢屋に入れられ、事件に参加した即仏は逃げる途中に池に落ちて死んでしまった。黒良一家も縄にくぐられ、牢屋に入れられた。

天女との約束の千日目の日に、白良と母親が浜辺に来ると、小松と雲井に出あった。小松と白良は夫婦の縁を結んだ。白良が海に入り、雲井に体を洗ってもらおうと、この世にま

たとない美男子に変わった。雲井は、すなわち天女だったのである。

⑤磯田親子は、三保家の恩に背いたことを後悔した。三人は同じ夢に犬になり、法師に叩かれる―を見た。恩赦の政があり、一家は地元に戻された。⑥白良はまた彼らを憐み援助し、磯田夫婦に庵を作り、養った。

続いて、『警世通言』巻二十五「桂員外」の粗筋を要約する。

元の大順年間、江南蘇州府に施済夫婦がいた。施済は慈悲深い人である。②同じ塾に通っていた桂五福が落ちぶれたのを見て、施済は彼に三百兩の金を貸し、桂一家を自分の別所の家に住ませた。桂五福は、来世では犬となり、馬となり、施家の恩に報いたいと誓った。①桂の妻孫氏は、一人の女の子を産み、両家は子女のため、許嫁を約束した。

桂五福は、施家の家に住み、庭の銀杏の木の下から千五百兩の金を発見した。桂夫婦は、これを施家に告げず、自分達のものにした。三年後、施済は急病にかかり、命を失った。桂五福一家は、千五百兩の金を携えて会稽県に引越し、良田を買い、大金持ちの生活を送る。一方、施済の死後、施家はどんどん衰えていき、下人たちは家を離れ、施済の妻嚴氏と息子の施還二人が家を守った。施済の同窓だった支徳は、施家の貧しい状況を見て、援助の手を差し伸べ、施還を自分の婿に迎えた。支徳は、桂五福が会稽で出世したの聞き、これを施還に教え、桂五福に援助を求めるように勧めた。③これを聞いた施還は、母親を連れ、会稽に行き桂五福を訪ねたが、冷たくされた。昔父親が貸した三百兩も、借借証がないことを理由に、返してもらえなかった。母親の嚴氏は、桂家の不義に怒り、血を吐き、死んだ。

④家に帰った施還は、家を売ることにした。家を片づけるときに、天井から箱を見つけた。箱の中に家計簿一冊があり、そこにはどこに金がどれくらいあるかが具体的に書かれていた。施還はこれを頼りに、巨万の財産を得た。これで施家は、昔ながらの繁栄を取り戻した。

⑤ところで、桂五福は、金で官職を得ようとして、都まで来たが、七千兩の金を騙しとられた。落ちぶれた桂五福は一家が犬になった夢を見て、自分が施家の恩に背いたことを後悔した。家に帰ると、二人の息子が殴られ、すでに死んでしまっていた。妻の孫氏も、息淹淹であった。息子の霊が母親にとりつき、親子三人は翌日に施家の犬に生まれ変わる、と告げた。

桂五福は施還の家に謝りに行ったが、施還は許してくれなかった。施家の中の三匹の犬

を見かけ、桂は号泣した。⑥施還は支徳の説得で桂五福の娘を妾に迎えた。後、桂五福は一心念仏し、施家の家で死んだ。施還は及第し、二人の子を儲け、幸せに暮らした。

『天羽衣』と「桂員外」とを比較すると、以下のような共通点が見出せる。

- ① 子女が小さいときに、両家が婚約をしている点
- ② 一方の長者が没落した一方を援助した点。そして援助を受けた一方は犬になったとしても、恩に報いたいと誓った点。
- ③ 援助した一方が今度没落すると、援助を受けた一方が知らぬふりをして、不義な事をした点
- ④ 不義を受けた方の家の中で、莫大な遺産が見つかり、再興した点
- ⑤ 不義をした一方が犬になる点（「桂員外」では、桂五福一家は、娘を除き、妻と二人の息子が施還の家の犬に生まれ変わり、『天羽衣』では、磯田夫婦と息子三人とも、犬になった夢を見た。）
- ⑥ 不義をした一方は許され、心を改め、一心念仏する点。

特に、遺金の発見の一段と犬になる一段は、「桂員外」が典拠であることを最もよく物語っている。『天羽衣』の「かたみのこがね」と「ぬぬのこ」の二章はそれぞれ遺金の発見と犬になる趣向を取り入れている。注意すべきは、恩に背いた側が恩を受けた当初、来世犬になって恩に報いたいと言った所である。桂五福は、「来世犬馬となり、恩に報いたい」と礼を言い、磯田は「犬ともなりて、報ひ奉るべし」と感謝した。雅望は「犬馬」を「犬」にしたのは、馬のように働くという労力のイメージを和らげ、犬の忠実なイメージをもっと強調しなかったであろう。犬が主人に対して忠実で、主人の恩に必ず報いることは、日中文学作品に共通してよく見出される。周知のように『捜神記』の巻二十にある「義犬塚」は忠犬の黒竜が主人を草原の火事から助けるために、体を濡らし、その体で主人の寝ているところを水で湿らせ、疲れはてて死んだ物語である。『日本書紀』巻二十一にある「捕鳥部万の奮戦」の中にも主人の屍を墓に収め、自分が側で番をして餓死した忠犬―白犬がいた。犬にはこういう属性があればこそ、桂五福と磯田は、自分を助けた恩人の恩に報いるために、来世は恩人の犬となると誓ったのである。だが、二人はその言葉を忘れ、恩人の恩に背く行為をしてしまったのである。勸善懲悪のため、一種の罰として、桂五福の妻と二人の息子は死んだ後施還の家の犬と転生し、磯田夫婦と息子は犬になった夢を見たのである。この懲罰によって桂五福も磯田も心を改めたのである。

かつて、山口剛氏は『醒世恒言』巻一「両県令競義婚孤女」の冒頭の話が『天羽衣』に影響を与えた、と指摘された。「両県令」の入話の内容は以下の通りである。

王春と王奉の兄弟には、それぞれ瓊英と瓊真の娘がいる。二人の娘はそれぞれ金持ちの潘百万の息子潘華と蕭通判（筆者注、通判は官名）の息子蕭雅の許嫁となっている。が、瓊英が十歳の時に両親が相次いで死に、父親の王春は彼女を弟の王奉に託した。潘華は家が豊かで、容姿も美しい。これとは反対に、蕭雅の容貌はとても醜く、顔中あばただらけである。その上に、彼の父親は任地で亡くなり、清廉な人であったため、家財と言えぬ物は何一つ残らなかった。これを見た王奉は蕭雅に嫁がせるべき自分の娘―瓊真を、姪の瓊英の嫁ぎ先である潘華の所に嫁がせ、瓊英を蕭雅に嫁がせた。だが、潘華は賭け事に夢中で、十年ぐらいで百もあつた財産をすべて使い果たし、行方不明となり、王春は瓊真を引き取るはめとなった。一方、蕭雅は努力家で、及第し、最後には尚書の地位にまで上がり、瓊英も一品夫人となった。

山口氏は、この話を『天羽衣』の典拠とする理由について、「六樹園（筆者注、石川雅望の号）は大体此の趣向を借り、王春、王奉兄弟を移して、三保の長者・磯田の長者とし、蕭雅・潘華の二人によって、白良・黒良を作り、別に志田の長者を設けて、潘華の役割の一部をあてがった。更に瓊英を小松に引き直し、小松と白良とを許嫁の關係に置いたが、それによると三保の長者は、また蕭別駕の役割をもに担はせられたわけである」と述べている。

しかし、山口氏の指摘された「両県令」の入話と『天羽衣』とを比較すると、一致する処があまりないことに気づく。すなわち、王春と王奉は兄弟關係にあり、三保と磯田のように恩義に基づく人間關係ではない。王奉は不義をした点においては、磯田の背信行為と似ているのであるが、瓊英を小松とし、蕭通判を三保の長者にしたというのは牽強過ぎると言わなければならない。

前引の閻氏も「桂員外」と比較するとその關係は薄いと言わざるを得ない。「両県令」は「天羽衣」の典拠から外されるべきであろう」と強調している。

雅望が典拠としたのは、「両県令」の入話とは考えにくい。むしろ「桂員外」のほうが、『天羽衣』の典拠としてより適切であろう。

三 『天羽衣』と『醒世恒言』卷三十五「徐老僕義憤成家」

すでに述べてきたとおり、『天羽衣』の全体的な粗筋は『警世痛言』の「桂員外」に多く依っていることが分かる。しかし、『天羽衣』にある一人の人物―老僕の久は原典の「桂員外」には見あたらない。「桂員外」に多く拠っていながらも、老僕久の人物形象は、ほかの作品より取り入れたと思われる。

まず、老僕久の人物像を見てみよう。久に関する描写は集中的に第二章「いそだの浜」に出てくる。

三保の長者が死んだ後、三保家は段々と衰えていき、召使たちも三保の家を離れていく。残ってくれたのは、只一人だけである。「今はただ、とし比めしつかひける、久といふ翁一人ぞのこりゐたりけり。此翁まめくしき者にて、心あつく、万に心を用ひてつかへ」た。この人が、老僕の久である。

磯田家が以前に三保家から受けた恩を忘れ、貧しくなつてゆく三保家をすこしも助けず、援助の手を挿しのべてくれないのを見て、

老僕なる久、大にはらだちて、母のまへ出て云ひけるは、「故主存在の御時、家財の半をわけて、磯田がもとへ遣されし事、我しる所なり。しかるに今一銭の助をだにせず、ことに、いひなづけし給へりし時、二百兩の聘物をつかはされしを、此比承れば、ひろく近国を聞きあはせて、婿をえらばんといたすとか。あまりにほしいまゝなる、磯田がふるまひにて候へば、おのれかしこに至りて、昔より故主の、あつく、めぐませ給へる事など、申出て、つら恥かゝせて候ひなん」(「いそだの浜」)

と言った。

そして、彼は磯田の家に行った。門の前で長く待たされたが、日暮に及ぶ頃、やっと磯田の家に入ることができた。入つてみると、磯田夫婦と手代七八人並んでいて、久は、始め気おくれたが、主人と正義のためを考え、彼は以下のように言った。

三保の家、今は一月のたくはへも候はず。親子とも、安き心もなく、けふをいとなみて候。いかで昔のよしみをおぼし給ひて、今日の見ぐるしきを、救はせたまひなん。

且は御兄弟のむすびし給ひ、婿君の御契りも候へば、御おもてぶせにも候ひなん。

しかし、磯田は、すこしも話を聞いてくれず、兄弟の結びも婿の約束も否認してしまう。これを聞いた久は、腹立ち、

我主人二百金の聘物を贈て、我家の姪と定め給へる事、おのれよく知りてあり。よし此縁は、さき破り給ふとも、聘物の金は、返し給ふべきことわりなり。又これのみならず、我主人さきに家財の半をわかちて、贈り物し給へれば、かたぐゝ今の三保の家の貧窮を、救ひ給はん事、必然の道理なり。

と道理をつくして述べ、磯田に反発した。この強い主張を聞いた磯田は、その下人たちと一緒に久を殴った。それでも、久は怒りの眼に涙をうかめて、「恩を知らざるは、犬に劣りたる心よ」と磯田の長者を罵り続けた。正義感を持ち、かつ主人に対してとても忠実な久が描かれていたのである。

閻小妹氏は、久の人物像をも『警世通言』の「桂員外」に求めている。

三保の長者の死後、三保家は段々傾き、召使いたちは三保家を離れていくが、三保家の中にただ一人の老僕久が残り、三保家を助ける。一方、「桂員外」においても施家は次第に没落し、下男下女たちが離れていく。その時、施家の昔の塾の息子の息子支徳が施家にやってきて施家を助ける。(中略)離れていく召し使い達のなかに未亡人と幼い子供を支えてくれる者が現れてくる趣向も同じである。(中略)磯田家に行った久は、長く待たされたうえ、かつての三保の長者から磯田に対する援助を一切認めてもらえず、最後に追いだされてしまう。同じく「桂員外」では、施還は桂遷の家に行き、長く待たされたうえ、かつての借金の証拠を示せと迫られ、桂遷の妻に追い払われる。¹⁰⁾

即ち、原典では施済の息子に当る施還のやることを、『天羽衣』において雅望は老僕久の身に移し、また原典の支徳先生が久の原型である、と閻氏は主張している。

原典の施還が桂五福の家に行つて、桂家から不義をうける事は『天羽衣』では、下人の久の身に変えられたことは確かであり、間違いはない。ただし、施還は桂家に行つて、長く待たされたにも関わらず、彼は桂五福がきつと援助してくれると期待していたばかりである。実際に久のように、強く道理を言つて、相手と弁論することは一切なかった。

そして、原典の『桂員外』の支徳は、施家の昔の召し使いではない。支徳は施還の父親

施済と同じ塾に通っていた仲の良い同級生であった。彼は、施家の状況に同情し、施還に学問を教え、彼を自分の婿にし、物質的な面から施家を支えたが、下人久のように相手の家にまで行って、正義を主張し、相手を責めることはまったくなかった。支徳と久との設定は、やはり違うのである。

久という人物には、原典の施還が取った行動を有している一方、全く違う面影もあるのである。では、「桂員外」には存在しない正義の使用人の人物像を雅望はどこから取ってきたのであろうか。『醒世恒言』卷三十五「徐老僕義憤成家」に忠実に主人一家を支える召使が描かれている。

明の嘉靖年間、浙江省嚴州府淳安県郊外の錦沙村に徐氏の三兄弟が住んでいた。初め三兄弟は父の遺言を守り分家しなかったが、三弟の徐哲が死ぬと、兄の徐言と徐召は徐哲の遺児が多いことを嫌がり、分家を主張した。しかも、分家は、徐哲の未亡人顔氏にとっても不公平な形で行われたのである。徐家に勤める五十歳あまりの老僕阿寄がいた。作品名にある「徐老僕」はこの阿寄を言う。彼は、兄二人が前主人の遺言を守らず分家してしまったことに怒りを感じた。また、未亡人の顔氏と遺児に対する不公平なやり方にも腹を立てた。彼は、正義感を持ち、兄二人にきちんと話を聞こうと思ひ、二人の所に行つた。着いたところ、近所の人の話から自分が徐家の財産の一部として、顔氏と遺児たちに分配されたことを聞いた。これを知つた阿寄は、必ず顔氏を助け、多くの金を儲け、兄の徐言と徐召を見返してやると誓つた。その後、阿寄は、顔氏に十二両の金を集めてもらひ、自分ひとり商売の旅に出た。初めは漆、後は米などを販売し、ついに二千両を儲けたのである。これらの金をすべて顔氏に与え、徐哲の子供たちのために使わせた。亡くなった時、阿寄の唯一の財産は息子の結婚に顔氏がくれた、ただ三両の金のみであった。とても忠実かつ正義感の強い老僕であった。

そんな阿寄は、徐言たちが、父親の遺言を守らず、分家するのを聴くと、彼は、次のように言つた。

当先老主人遺囑、不要分開、如何見三官人死了、就撇開這孤兒寡婦、教他如何過活？我若不説、再有何人肯説？（中略）但他們分的公道、便不開口。若有些欺心、就死也

説不得、也要講個明白（一）（当初亡くなつた老主人は、分家してはいけないと遺言したのに、なぜ三番目の若い主人が死ぬと、その遺児と未亡人を見捨てるのたろうか。彼らをどうやって生きていかせるのか。もし私が口を出さなければ、一体誰がこのこと

を言つてくれるだろうか。(中略)もし分家が公明正大ならば、何も口を出さないが、もしすこしでも人を騙すようなことがあれば、死んでも勝手にさせないし、道理をばつきりさせてやろう)

と正義を主張し、弱い立場にある徐哲の未亡人顔氏の味方をする姿勢を強く示している。これは、『天羽衣』に出てくる下人の久と通じるところである。

また、阿寄は、徐言たちの所に行つて、自分の思うことを言おうとする時に、近所から自分は財産の一部として、顔氏の所に配属されたことを知ると、彼は

原来抜我在三房里、一定他們道我没用了、借手推出的意思。我偏要争口气、掙個事業起来、也不被人耻笑。」(なるほど、私を三房の顔氏に配したのは、兄たちが、きつと私が役立たないと言い、私を追い出しそうという魂胆だ。しかし、この私は、あいにく負けん気で、人さまに笑われないように事業を起こしてみせるぞ。)

と自分を鼓舞し、たくさんの金を儲けて、新主人の顔氏の家を支えようと心に決めたのである。

「徐老僕」の阿寄と『天羽衣』の久とを比べると、とくに傍線と波線とを引いた両者の言動に関する部分に、以下のような共通点があることが分かる。

- 1 下人としての設定と、主人に忠実な点。
- 2 正義を主張し、不義をする人の言動を責める点。
- 3 主家の主人が亡くなり、自分は悔いも怨みもなく、献身的に主家に尽くし、未亡人の一家を支える点。(阿寄の場合、新しい主人のため、商売に行つて、各々の努力を通して、二千両の金を儲けて、これをすべて主人に与え、その娘と息子のために使わせる。久の場合は、主人が不公平な待遇をされたことを知り、自分自ら相手の家までに行つて、道理を言い聞かせ、相手から殴られても、屈服もせず、主人の為に相手の不義を訴え続けた。その忠実ぶりは共通している。)
- 4 久と阿寄の称に「老僕」という言葉が使用されている点。

雅望が『通俗醒世恒言』(寛政二年)を出版した際、その末尾に『後編通俗醒世恒言三十六種近刻』の予告を出している。このことから雅望が順次『醒世恒言』の四十篇を訳することを企画していたことは、第二章でも述べていた。『近江県物語』の中では、『醒世恒

言』卷十三の趣向を部分的に利用している¹³⁾。従って、雅望が『醒世恒言』を愛用したことは明らかであり、卷三十五「徐老僕義憤成家」に目を通していたことは、ほぼ間違いないであろう。

雅望が、久の人物像を作るときに、原典の「桂員外」の施還が桂五福の家に行つて、不義を受けたことを意識しながら、『醒世恒言』の卷三十五「徐老僕」における正義感を持ち、かつ忠実な老僕の面影をも久に重ねさせたのであろう。そして、「老僕」という言葉も徐家の老僕を意味する「徐老僕」から学んだと思われる。物語全体の筋を「桂員外」によりながら、久の人物像を作るときに、『醒世恒言』の卷三十五の「徐老僕」を参考にしていたと思われる。主人に忠実な徐老僕形象を久の身に移して、正義感の持つ忠実な使用人―久を作り上げたのである。

四 『天羽衣』と『史記』

次に三保の長者の人物像について考えたい。

三保の長者の人物像は、基本的に原典の「桂員外」にある施済を原型に造られた。三保の長者と磯田の長者の二人が囲碁を打つ仲好しであったという設定は、「陳多寿」によるものである¹³⁾。

しかし、これら以外に、『史記』の中の人物の面影も重ねられていると考えられる。これは従来指摘されていなかった点である。

第一章「みほのうら」では、三保の長者は慈悲心が深く、いつも近所の貧しい人たちを隣んで、援助の手を挿しのべていた。雅望は二つの例を出している。一つは洪水の時に、自分の倉庫を開き、貧しい人に米を配る例であり、もう一つの例は近所に貸した米や金などの借用書を返し、なかったことにする例である。これをⅠとⅡの記号で示し、引用する。

Ⅰ

一年駿河遠江のわたり、大水出で、田畠をおし流しければ、貧民どもは、食ふべき物なく、皆飢て、死にいたらんとす。三保の長者、例の慈悲心をおこして、倉を開て、積置きたる米麦ども出して、貧民にあたへ、隣国へ人を遣りて、穀物あまた買とりて、あまねく人々に、わかちつかはしければ、水難にあへる民ども、此三保が恵によりて危き命をたすかりて、ひとへに長者が徳をぞ称しける。(「みほのうら」)

Ⅱ

時に三保の長者、とし六十に及びける。誕辰の日に当りて、^ア近きわたりの人々を請て、酒のませて、あつく饗応して、(傍線と記号は筆者、以下同)はてに、ひとつの櫃とり出て、いひけるは、「これに入置たるは、年頃近村に住める人々へ、米金貸遣しつる券にて候。これ借り給へる人々は、各今日を、いとなみかね給へる人々なれば、返し給はん事、実に難かるべし。こたびおのれ、寿筵のいはひごとに、此券人々に返しまゐらするなり。反古となして、破り捨て給へ」とて、人々にわたしければ、借りつる者ども、大によるこびて、「さても忝き御心かな。とし頃、利息をだに参らせで、怠りつるを、本をだに取り給はず、券返し給はる事、ありがたや、かしこや」とて、^ウ額に手をあげて、ふしをがむ。嬉さの、身にしみけるにや、「あゝかゝる人の、いつまでも、長生しておはせかし」など、とりどいひはやしてぞ帰りける。

(「みほのうら」)

実は、この二つは『史記』「汲鄭列伝」と「孟嘗君列伝」にある故事に由来しているものであると筆者は考える。

一の倉庫を開き、貧しい人たちに米をあげる趣向は、漢の武帝に仕えた名臣―汲黯と鄭當時の二人の合伝「汲鄭列伝」に見られる趣向である。汲黯は河南を通る時に、民が早魃で食べ物がなく、親子が相食うのを見て、武帝に報告せずに河南省の蔵を開き、粟を難民に配った。

孝景帝崩じ、太子、位に即き、黯、謁者と為る。東越相攻む。上、黯をして往きて之を視しむ。至らず、呉に至りて還り、報じて曰く、越人相攻むるは、固より其の俗然り。以て天子の使ひを辱むるに足らず、と。河内失火し、千餘家を延焼す。上、黯をして往きて之を視しむ。還り報じて曰く、家人失火し、屋比延焼す。憂ふるに足らず。臣、河南を過ぐ。河南の貧人、水旱に傷れし万余家、或いは父子相食む。臣謹んで便宜を以て、節を持ち河南の倉粟を発し以て貧民を振ふ。臣請ふ節を帰し、制を矯むるの罪に伏せん、と。上賢として之を釈し、遷して滎陽の令と為す。(原漢文、以下同様)

「汲鄭列伝」^(一七)

これを一の部分と比べると、雅望が、『史記』の汲黯が倉庫を開き、貧民を救済したという故事を、自分の作品に織り込んだことが分かる。三保の長者は、汲黯のように臣下ではないが、貧民を助けるために、倉庫を開き、食糧を与えた。また知恵を巡らし、隣りの国から食料を調達するところは雅望のオリジナリティーである。

続いて、Ⅱの部分で引用した借用書を借りた側に返す趣向を考えたい。これは『史記』の「孟嘗君列伝」の中の故事を踏まえているのである。

孟嘗君の門客に馮驩という人が居た。彼は、長年孟嘗君の門客をしていたが、何の提言をもしていなかった。時に孟嘗君が三千人の門客を養うために、利息を得ようと考え、薛の国に金を貸したが、なかなか利息を回収できなかった。そこで、馮驩が勧められ、孟嘗君は彼に利息の回収を願った。

孟嘗君乃ち馮驩を進めて之に請ひて曰く、賓客、文が不肖を知らずして、幸に文に臨める者三千余人。邑入以て賓客に奉ずるに足らず。故に息錢を薛に出ださしむ。薛、歳ごとに入れず、民頗る其息を与えず。今客の食、給せざらんことを恐る。願はくは先生之を責めよ、と。馮驩曰く、諾、と。辞して行き薛に至る。ア孟嘗君の錢を取る者を召して皆会す。息錢十万を得たり。酒ち多く酒を醸し肥牛を買ひ、諸々の錢を取る者を召す。能く息を与ふる者皆来れ、息を与ふること能はざる者も亦来れ、皆錢を取るの券書を持ちて之を合はす。齊しく会日を為し、牛を殺し酒を置く。酒酣にして、乃ち券を持ち前の如く之を合はす。能く息を与ふる者には与に期を為し、イ貧しくして息を与ふること能はざる者には、其の券を取りて之を焼きて曰く、孟嘗君錢を貸しし所以は、民の無き者の為に以て本業を為さしむるなり。息を求むる所以は、以て客に奉ずる無きが為めなり。今富給なる者には以て期を要し、貧窮なる者には券書を燻きて以て之を捐つ。諸君彊めて飲食せよ。君有ること此くの如し。豈に負く可けんや、と。ウ坐する者皆起ちて再拜す。

「孟嘗君列伝」⁽¹⁵⁾

右に引用する馮驩が借券を焼く故事と、Ⅱの部分に引用した三保の長者が貧しい人々に借券、つまり借用書を返し破らせること、と比較すれば、雅望が馮驩の故事を利用したことが分かる。

ア 酒宴を開き、村の人々を集め、招待する点

イ 金を返すことのできない貧しい人たちに優しくして、彼らの借用証明書を破り、なかったことにする点

ウ 恩を受けた民の反応が描写されている点。(馮驩の恩を受けた齊の民たちは、「皆起ちて再拜」し、三保の長者の恩を受けた人々も、「額に手をあげて、ふしをが」ん

だ。即ち同じく「拝」の札をしたのであった。)の三点が共通している。

実は、『史記』に載るこの二つの故事は唐代の李翰が撰した『蒙求』の中に「汲黯開倉馮煖折券」(馮煖は、『史記』には馮驩と記されている)という二句一對の標題で採られている。通行する徐子光注には、次のようにある。

武帝位に即き、黯謁者と為る。河内火を失し、千余家を焼く。上、往きて之を視しむ。還り報じて曰く、家人火を失し、屋比延焼せるも、憂ふるに足らず。河内の貧人水旱に傷むもの万余家なり。或ひは父子相食む。臣謹しんで便宜節を持するを以て、河内の倉粟を発して、以貧民を賑せり。請ふ、節を歸し矯制の罪に伏せん、と。上賢として之を積す。後、主爵都尉と為り、九卿に列す。 (『蒙求』¹⁶「汲黯開倉」)

この一段は『史記』の「汲鄭列伝」記述とほぼ同じである。

続いて、「馮煖折券」を見てみよう。

戦国策に曰く、齊人馮煖といふ者有り。(中略)後、君記を出だし、門下の客に問ふ、誰か能く文の為に責を辭に収むる者ぞ、と。煖署して曰く、能くせん、と。煖治装し、券契を載せて行く。辞して曰く、責畢く収めば、何を以て市うて反らん、と。君曰く、吾が家に有ること寡き所の者を視よ、と。煖辭に之き、諸民の当に債ふべき者を召さしむ。悉く来たつて券を合はせ、責を以て民に賜ふ。因つて其の券を焼く。民万歳を稱す。齊に反り君に見えて曰く、臣窃かに計るに、君が宮中珍宝を積み、狗馬外厩に実ち、美人下陳に充てり。有ること寡き所の者は義のみ。窃かに君が為に義を市はんとし、命を矯め責を以て諸民に賜ひ、因つて其の券を焼く。乃ち臣の君が為に義を市ひし所以なり、と。 (『蒙求』「馮煖折券」)

徐子光の注は『戦国策』巻四齊策に載る「齊人有馮煖者」によるものである。『戦国策』にある馮煖折券の部分の内容は、ほとんどそのまま注に使われたのである。

しかし、よくみてみれば、徐子光注の「馮煖折券」も『戦国策』の「馮煖折券」に当る部分も、薛の国に行つてからの馮煖についての具体的な行動の描写に欠けていることに気

づく。両方とも、「煖薛に之き、諸民の當に債ふべき者を召さしむ。悉く来たつて券を合はせ、責を以て民に賜ふ。因つて其の券を焼く。」のように、簡単な説明文だけで終わっている。

これと比べると、『史記』の「孟嘗君列伝」の中にある馮驩が券を焼く部分の方がより詳しく描かれていた。「牛を殺し、酒を儲けること」、「貧しい人は返すことができないから、券を焼くこと」など、具体的に馮驩の行動を描きだしている。そして、恩を受けた民たちの反応まで描き出されている。これらは、すべて『天羽衣』に受け継がれたのである。三保の長者は、酒宴を儲けて、貧しい人々を憐み、彼らの「借券」を返し破らせた。そして、三保の長者の恩を受けた人々は、「額に手をあげて、ふしをがむ」のであった。

雅望は、『蒙求』から二つの故事を知り、これを自分の作品に持ち込んだと思われる。しかし、人物の具体的な行動の描写の面では、特に馮煖の故事に関しては、『史記』を参考にしていたことは恐らく間違いないだろう。江戸時代、『史記』の注釈書、例えば明代の『史記評林』が広く読まれた。こうした故事が知識人の雅望の手に入ることは極めて容易であろう。

五 雅望の正義と理想

次に、雅望は、なぜ自分の作品に正義感を持つ人物を作りあげ、そして汲黯と馮煖の故事を自分の作品に取り入れたのか、について考える。

寛政三年（一七九一）に、雅望は公事宿事件で冤罪を蒙り、江戸払いされたのである。公事宿とは江戸時代、訴訟や裁判のために地方から江戸や大坂に出てきた人を宿泊させた宿屋の事である。雅望ら十四人は、宿泊人から金を不法に取った疑いで、何回も呼び出された。しかし、無罪にも関わらず、事件の裁判官の恐喝で無き罪を認めてしまった。雅望は家財を没収され、江戸には永遠に入れないと裁かれたのである。事実、これは冤罪であった。雅望は随筆『とはずがたり』の中でこの事件の始末を詳しく記している。六月から十月まで、六回の召しに及び、雅望は、当時の心情をこう語っている。

このことおこりてより、夜はうし過るころは、かならずめさめて、いぬることなし。
一椀のいひ、しひて喫すれども、つくすこと能はず。むねいたういたみて、いくたび
かあをへどをつきぬ。此ときのくるしみ、おもひはかるべし。『とはずがたり』¹⁷⁷

雅望がこの事件でどれだけ心身傷ついたかが分かるう。

しかも、無罪を訴えたにも関わらず、裁判官は信じてくれなかった。

公事宿事件に当る司（吉田百介）が、雅望らに向かい、恐喝をしたことは以下の引用文で明らかである。その恐喝で、雅望は、やらなかったことをやったと認めたのである。

八月、めしあり。こたみはせんぎばといふ所にいれられぬ。吉田百介といふ人出ていふやう、「四人のものを、ひとやにてきびしくかうじたづねつれば、これまで偽りつみたれど、みなさることしつと、はくじようにおよべり。おのれらいかにつつみたりとも、かなふべきにあらず。ないつるつみの条々、つばらにいえ。きかん。」と大きな声していきまきいふ。おのれこたへていへらく、「たとへ四人のものゝさ申しゝとて、おのれにをきては、さることし侍らず」といふ。時に、かの人目をひろげ、はたとにらまへて、「おのれめ、なにものにか」とふ。おのれ名をつげければ、いよゝなるかみのとゞろくとき声して、「おのれこそ、名にきこへたるやどやなれ。さきに、をのれをひとやにくださざりしこそねんなけれ。よし／＼、いまみよ。獄にいれんずるぞ。のこれるしやつらも、かれがいふ如くなるや。いかに」と、をゝしきかたち、まくりでにしてせむる。さらずといはず、とみにひとやにいれらるべし。さらば、命もたゆべしと、人ごと（ひとごと）に思ひければ、たれこと（ひとごと）ふるこもなく、「さることし侍りつ」といひぬ。

『とはずがたり』

牢屋に入れられると、命がなくなると思い、存命のため仕方なく、雅望はやらなかった事を認めてしまった、との回想文である。

自分を弁護する力が裁判官の権力の前では、どれだけ小さかったか雅望も自覚していたであろう。この不公平な裁判を受けた雅望は、自分の感情のはけ口として、作品の中に正義感の持つ人物を設定し、弱い立場にある人を助けさせたかったのである。久が磯田の長者に道理を言い尽くし、最後に罵りまでしてしまったことは、雅望が現実世界で、裁判官に対して到底することのできなかったことである。しかし、作品の中に久のような人物を設定することで、雅望のうらみを解消する糸口ともなっていたのかもしれない。

徳田武氏は『通俗排悶録』（文政十一年、雅望のもう一つの翻訳作品）に冤罪の苦を訴える話が多く取り入れられた理由について、このように述べている。

（筆者注、『通俗排悶録』には）このように冤罪の苦を訴える話が多いことは、よくい

われるように、『聊齋』等の筆記小説に見られる特色であり、『排悶録』もまた官憲の非道を批判する精神を承けて、かかる話を多く集めたのであろうが、雅望はまさにその点をこそ喜んだ、と思われる。なぜならば、雅望本人も寛政三年、寛政の改革のありをくらって江戸払い及び家財没収の刑を受け、江戸近郊の成子村に移居せざるを得なかったという経験を持っていたからである。この一件が客観的に見ても冤罪であり、雅望もそう認識していた。⁽¹⁸⁾

『通俗排悶録』が出版されたのは、文政十一年（一八二八）であり、公事宿の事件より三十七年後であった。七十六歳になっても雅望はまだ忘れることができなかったのである。『通俗排悶録』が出版された年より二十年程前、『天羽衣』を執筆中の雅望にとって、事件の傷はもつと深かったことに違いない。裁判官の不正と非道によって受けられた冤罪は、雅望にとって疑いなく人生を大きく変えたものである。この経験を作中に投げかけ、一種の自己投影をしているのかもしれない。

また、汲黯と馮驩の両人物は、臣下としてとても知恵のある、かつ民のためを考える人物である。このような人物を自分の作品の素材として用いること自体が、自分の無罪の主張を無視して、恐喝までして、罪を認めさせた裁判官への訴えであろう。

粕谷広紀氏は、寛政三年の公事宿事件は「雅望の文芸活動をこの事件にことよせて弾圧したのではないか」と推測しており、稲田篤信氏は公事宿事件の被疑者の中四人が狂歌師であることから、「狂歌界が寛政改革の肅正取締りの標的になっていたことは明白である」と述べている。⁽¹⁹⁾

寛政改革の弾圧を受けた雅望の権力への反発は、読本『飛驒匠物語』に発展すると、より強く表現されていたのである。これについては、松田修氏の論文「戯作者の秘めたる毒―石川雅望⁽²¹⁾」を参照されたい。

六 終わりに

かつて山口氏によって『天羽衣』への影響が指摘された『醒世恒言』巻一「兩県令競義婚孤女」の入話は『天羽衣』と関係性が薄い。その代わりに、閻小妹氏が指摘した『警世通言』巻二十五「桂員外途窮懺悔」が全体的に『天羽衣』と一致し、典拠と認めるべきである。しかし老僕の久の人物像に関しては、筆者は、閻氏の説とは見解が異なる。すなわ

ち、老僕の久の人物像に注目して分析すると、久は閻氏の言う「桂員外」の朱徳が原型ではなく、『醒世恒言』の巻三十五「徐老僕」の徐老僕が久の人物像の先蹤として重要である。雅望は「徐老僕」からヒントを得て、主人に忠実かつ正義感を持つ久を作り上げたと考えられる。

のみならず、三保の長者が蔵を開き、飢餓の民を救った一段と、近隣の借用書を返した一段は、それぞれ、『史記』の「汲鄭列伝」にある「汲黯開倉」の故事と「孟嘗君列伝」にある「馮煖折券」の故事を踏まえたものである。中国歴史上の人物の故事を自分の読本の人物造形に使うのは、雅望のひとつの特徴と言えよう。彼のもう一つの読本『近江県物語』にも、『史記』に見える直不義と範雎の故事が使われたからである。

雅望が、自分の作品に正義の人物と、民の為を考える臣下の故事を取り入れたことは、弱者であった自分が公宿事件で受けた冤罪が終生彼に影響していたことを物語り、また理想社会への憧れと現実社会への訴えをも表している。

注

- 1 鈴木敏也「浪漫小説作家としての石川雅望」『近代国文学素描』所収 目黒書店 一九三四年）その中で、鈴木氏は『堤中納言物語』の「花桜折る少将」終曲と、「思はぬ方に宿りする少将」の乗物違いをそれぞれ「初花手をるなかだち」と「尼法師の姫の君」に利用したと指摘した。
- 2 稲田篤信『天羽衣』論*綾足・秋成・雅望』（『江戸小説の世界 秋成と雅望』所収 ペリかん社 一九九一年）
- 3 山口剛『読本集』解題 日本名著全集（日本名著全集刊行会 一九二七年）所収
- 4 麻生磯次『江戸文学と中国文学』（三省堂 一九四六年）
- 5 重友毅「六樹園の雅文小説」『近世文学の位相』（日本評論社 一九四四年）所収 その中で、氏は、二人の長者が囲碁を打つ仲の良い近隣であること、両家の子女は、婚約関係にあること、男の主人公が病気で醜い男となり、最後は奇跡的に美男に戻ったこと、婚約している娘は男の容姿を構わず一途に自分の気持ちを変えなかったことなどは、「陳多寿」から取ってきた趣向であると指摘し、また醜い男に最後陰の功があり、天女に体を洗ってもらおうと、美男になったのは、「奈可天」から取った趣向であると指摘した。

- 6 閻小妹 「石川雅望『天羽衣』論―中国典拠との比較から」（信州大学経済学論集三十
七 一九九七年）
- 7 注3に同じ。
- 8 注6に同じ。
- 9 『天羽衣』からの引用箇所は『石川雅望集』（国書刊行会 一九九三年）による。
- 10 注6に同じ。
- 11 「徐老僕義憤成家」からの引用箇所は『醒世恒言』（人民文学出版社 二〇〇七年）
による。
- 12 第二部第二章をご参照いただきたい。
- 13 注5の重友氏の指摘である。
- 14 「汲鄭列伝」からの引用箇所は、新釈漢文大系『史記』（明治書院 二〇〇七年）に
よる。ただし、旧字を適宜常用漢字に改めている。注15、注16も同じ。
- 15 「孟嘗君列伝」からの引用箇所は、新釈漢文大系『史記』（明治書院 一九九三年）
による。
- 16 『蒙求』からの引用箇所は、新釈漢文大系『蒙求』（明治書院 一九七三年）による。
- 17 『とはずがたり』からの引用は『石川雅望集』（国書刊行会 一九九三年）による。
- 18 徳田武「読本と清朝筆記小説―『今古奇談』『通俗排悶録』について―」（『江戸漢学
の世界』所収 ペリカン社 一九九〇年）
- 19 粕谷広紀『石川雅望研究』（角川書店 一九八五年）
- 20 稲田篤信「公事宿嫌疑一件―寛政三年の石川雅望―」（『文学』五十二―五号 一九
八四年）
- 21 松田修 「戯作者の秘めたる毒―石川雅望」（『複眼の視座―日本近世の虚と実―』
角川書店 一九八一年）

第五章 『飛驒匠物語』と『女仙外史』

一 はじめに

『飛驒匠物語』は石川雅望が著した長編読本の中の一つであり、刊記には「文化六己巳（一八〇九）年正月発兌」とあるが、稲田篤信氏の考察によると、文化五年には既に刊行されていたらしい。^① また、大田南畝『玉川砂利』文化五年十二月二十四日の記事に、『飛驒匠物語』を読んだ旨の記事があることも、これを裏付けている。^②

『飛驒匠物語』は清の李漁作『笠翁伝奇十種』の「蜃中楼伝奇」から骨組を取ったことが山口剛氏、^③ 麻生磯次氏によつて早くから指摘されている。「蜃中楼伝奇」以外、『更級日記』の竹芝寺伝説と『今昔物語集』の趣向利用については、雅望自身が序文で明かしている。ほかに、浄瑠璃『飛驒内匠』、『源氏物語』と『妹背山女庭訓』、『和漢乗合船』と『広益俗説弁』、『狗張子』などの先行作品は典拠としてすでに指摘されている。

一方、中国古典の典拠として、同じく『笠翁伝奇十種』所収の「巧団円伝奇」が部分的に利用されていたとの論もある。^④ なお、徳田武氏は『日本古典文学大辞典』（岩波書店 一九八四年）「飛驒匠物語」の項目にて、『水滸伝』の利用が見られていると述べたが、『水滸伝』のどの部分が利用されているのか、具体的な指摘はなかった。

本章では、「蜃中楼伝奇」と『飛驒匠物語』との関連性をもう一度考え、その上で雅望の読んだ可能性の極めて高い『女仙外史』の影響を指摘したい。と同時に、『女仙外史』の日本での受容をもう一度考えたい。

便宜上、『飛驒匠物語』の粗筋を要約しておく。

飛驒匠に猪名部墨繩いなべのすみなわがいた。彼は「鶏をつくれば、まことの鶏これを見て、両翼をひろげて飛びかゝり、鼠をつくれば、猫きたつてこれをつまむ」程の技巧を持っている。墨繩と技術比べをして、彼を負かして笑つてやろうとする檜前松光という人が墨繩の所に来たが、反つて墨繩に負けてしまい、墨繩の技術に感心して、弟子入りをした。或る日、墨繩と松光二人は、良い木材を得るために、仙境に至つた。^①（番号と傍線は筆者 以下同）そこで禁を犯し恋に落ちて契をしてしまったために仙界から人間界に下された男女二仙を垣間

見た。男女は再び昇天するのに必要な瓢を渡された。其の時、男が瓢を持っていくのを忘れたので、墨繩がそれを届けに行くことになり、魯班の仙人から鉋鑿鑿斧鎚などの道具を授けられ、七十年後の再会を予言されて下界した。^②十五年後に、墨繩は武蔵野荏原郡

で瓢を渡すべき人―竹芝山人に出あった。山人は自分に横恋慕する広岡長者のために、窮地に陥ったが、墨繩の細工物によって助けられた。芦屋船主の娘紫は山人を慕っていたが、両家が累世の敵である故に、紫と山人との結婚は許されず、紫は自害してしまった。後、墨繩、山人と松光の三人は、都に上り、山人は衛士となり、墨繩は巧みな技工で帝の寵愛を得た。帝の娘女一の宮は夢の中で容姿のよい男性を見ており、それ以来心の中でずっと思っていたが、その男性は宮中の衛士である山人であった。二人は知り合い、深い仲になり、最後は宮中から逃げ出し、武蔵野国に向かった。だが、山人の母は二人の結婚に反対した。その時墨繩が帝の勅使として武蔵に下り、二人を結婚させて仙縁を全うさせた。③
三人は、百歳近くまで生きた後天界に召された。

二 『飛驒匠物語』と「蜃中楼伝奇」

「蜃中楼伝奇」は李漁戯曲『笠翁伝奇十種』の中の一つの作品である。簡単にその粗筋を紹介する。

柳士肩と張伯騰二人は縁を求めようと、一人は海へ、一人は湖へと出かけた。柳士肩は海上の蜃気楼を見て、それに架してある長い橋を渡り、二人の美女と出会った。その一人と夫婦の約束をして、もう一人を伯騰の婚約者とした。その信しんとして、鮫綯帕と晶佩を受け取り、八月十五日に四人で会う約束をして帰った。

二人の美女は実は洞庭湖の青龍王の娘―舜華と東海の黄龍王の娘―瓊蓮であった。そして蜃気楼は、舜華と瓊蓮の東海の景色を眺めたいという申し入れを叔父の赤龍王が聞き、エビ、魚などに命じて作らせたものである。長い橋は東華上仙が仙術を使って架した橋である。

東華上仙の話によると、四人はもともと仙人であったが、小さな過ちを犯したことで、人間世界に謫されたのである。

舜華は家に帰った後、自分と柳士肩との婚約を父親に言くと、反対された。その時に、ちようど叔父の赤龍王が舜華と涇河龍王の息子との婚約に応じた。これを知った舜華の父親である青龍王は、そのまま舜華を涇河龍王の息子に嫁がせた。舜華はやむなく涇河に行ったが、あくまで柳との約束を守っていた。怒った涇河龍王は彼女を涇河の地に放ち、牧羊の仕事をさせた。柳士肩は舜華と出会い、舜華からもらった手紙を、伯騰に頼み、彼を

洞庭の龍宮に行かせた。手紙を読んだ青龍王と赤龍王は、涇河を攻め、舜華を取り戻した。赤龍王は、四人の婚姻を成立たせないように邪魔したため、東華上仙は天帝に報告し、土肩と伯騰に扇と杓を与え、海を加熱させた。赤龍王は最後に負けて、四人はついに宿縁を全うしたことで物語は終わった。

山口剛氏は「蜃中楼伝奇」を『飛驒匠物語』の典拠とする理由を、以下のように述べている。⁽⁹⁾

六樹園は『飛驒匠物語』において、東華上仙を魯仙とした。また、鮫綃帕、晶佩を瓢とした。(中略) 六樹園は土肩と伯騰を、墨繩と弟子松光の関係にうつした。またこの二人を一人の山人にも変へた。舜華と瓊蓮を、むらさきと姫宮ともした。華と土肩との仲を割く赤龍王を、山人とむらさきの間に楯をつくむらさきの父とした。六樹園の翻案ぶりは大方斯うであった。

山口氏の説をよく考えると、その人物の対応関係が錯綜していることに気づく。墨繩が、東華上仙と柳土肩の二人を翻案した人物となっており、原典の柳土肩は、山人にもなっているし、墨繩にもなっている。張伯騰は山人にもなっているし、松光にもなっている。すなわち、山口氏の説によれば、雅望が翻案するにあたって、はっきりとした人物の対応関係を持っていなかったことになる。また、舜華と瓊蓮のうち、一人が紫に翻案されたという指摘も、やや強引であろう。紫が、山人を慕いながらも、両家の敵対関係のために、その恋がかなわず、最終的に自害してしまったのに対して、「蜃中楼伝奇」の舜華と瓊蓮は、いずれも自害することなく、円満な縁談を得たのであった。そして、瓢と鮫綃帕、晶佩との対応関係についてであるが、「蜃中楼伝奇」の鮫綃帕と晶佩は、舜華と瓊蓮二人が自ら情の信しるしとしてそれぞれ二人の男に与えたものであるが、瓢の場合は、そうではなく、まずは二人の仙人が罰されて、意識不明の状態しるしで、仙卒から与えられた、後にうまく仙界に戻れるための物であり、情を定める信しるしとして男女二人が互いに贈った物ではなかった。

中矢由花氏は「蜃中楼伝奇」が『飛驒匠物語』の典拠であることについて疑いの念を抱いている。⁽¹⁰⁾

(筆者注) 墨繩の人物が「蜃中楼伝奇」には見られず、『広益俗説弁』に見られることから) 本作が『蜃中楼伝奇』とは異なる話や構成を持つことがより鮮明になってくる

だろう。先に、山口剛氏によって指摘された『飛驒匠物語』の典拠が『蜃中楼伝奇』であると考えられる理由、つまり仙人の登場と、登場人物たちの移し変えについて述べたが、それらはみな、「典拠」と呼ぶには関係性が薄く、根拠に乏しいものである（中略）。「蜃中楼伝奇」の登場人物それぞれの特性を分割したり混合したりして『飛驒匠物語』中の人物たちにうつし変えた、等々の強引な解釈を加える必要性はないのではなからうか。『飛驒匠物語』の典拠として『蜃中楼伝奇』に執着する必要性はほとんどないのである。

中矢氏の述べた通り、「蜃中楼伝奇」と『飛驒匠物語』の構成そのものは違っているのである。

そもそも、山口氏が「蜃中楼伝奇」を典拠にしたのは、馬琴の発言の影響を受けていたからと思われる。

馬琴は『本朝水滸伝を読む并に批評』に、「近頃六樹園が著したる飛驒匠物語は笠翁伝奇の十種曲の中より趣向を取り出て、文は宇治拾遺にならひて作りたれど、文の上をいふものなく、趣向の出処を知るもの稀なるべし」と述べていたが、具体的に十種のいずれかが典拠であるとは明示していなかった。そこで、山口氏らは、馬琴のこの発言を受け、『笠翁伝奇十種』の中から、『飛驒匠物語』の典拠となりそうな「蜃中楼伝奇」を探しだしたのであろう。

だが、山口氏のように、「蜃中楼伝奇」の人物を一々『飛驒匠物語』の人物に当てはめるのは、あまりにも強引であり、「蜃中楼伝奇」の趣向を利用しているからと言って、全体の骨組みを「蜃中楼伝奇」から借りているというわけではない。

「蜃中楼伝奇」が最も雅望にヒントを与えたと思われるところは、謫仙の男女が人界で夫婦となった点であろう。東華上仙が四人の謫仙について次のように語った。

只因瑤池会上、有兩個頑仙、一双玄女、偶犯小過、謫落人間。那頑仙托身、一個姓柳、一個姓張。那玄女托生、一在洞庭、一在東海。這四個男女、該合成一對夫妻。^(一)（瑤池の会に、二人の男仙と二人の女仙がいて、彼らはたまたま小さい過ちを犯し、人界に謫された。その二人の男仙は、柳と張の二人に転生して、女は一人は洞庭湖、一人は東海に生れ変わった。この四人は二組の夫婦となるべきである。）

この短い言葉が雅望の頭に留まっていたのであろう。

しかし、東華上仙のこの「偶犯小過」の言葉を除いて、仙界では何があつたのか、いったいどのような過ちをしてしまったのかについては、「蜃中楼伝奇」全文を見通しても、全く言及されていない。だが、『飛驒匠物語』では、二人が謫仙された理由がきちんと書かれている。雅望は、これをどこから取ってきたのであろうか。次節において、『女仙外史』の存在を提示し、『女仙外史』と『飛驒匠物語』との影響関係について考えたい。

三 『飛驒匠物語』と『女仙外史』

『女仙外史』（一七二二年）は清の呂熊が著した神魔小説である。第二章で既に触れたが、『舶載書目』（大庭脩編 一九七二年 関西大学東西学術研究所）によると、正徳三年（一七一三）と寛保元年（一七四一）に日本に輸入されたとの記録がある。雅望の他の読本『近江県物語』においても、小範囲ではあるが、すでに『女仙外史』の利用が確認できているので、同じく雅望の著した読本である『飛驒匠物語』においても、これが利用された可能性は十分であると推測できる。

まず、『女仙外史』のあらましを記しておく。

仙界の瑤池大会の後、嫦娥が広寒宮に戻ると、天狼星は広寒宮にやってきて、嫦娥を妻にしようとして求めてきた。①天狼星は天帝によって人界に下された、明の皇帝の成祖となるべき人物である。彼は、人界に行く前に嫦娥の美貌を愛し、彼女を連れて人界で夫婦となるろうと考えたのである。嫦娥は天狼星の無礼に怒り、天帝に天狼星を裁いてほしいと要求したが、かえって天帝から、怒った嫦娥こそは既に仙人としてのタブーを犯してしまい、翌日に人界に下されることを命じられた。織女娘娘は、嫦娥を憐み、嫦娥が再び天界に戻れるように、鮑姑という仙人に願いで、嫦娥の保護と教育の役目を頼んだ。②嫦娥は山東省の蒲台县の唐孝廉の家に生まれ変わり、唐賽児という名前が付けられた。鮑姑は唐賽児が生まれてすぐ唐家にやってきて、賽児の乳母となり唐賽児の日常生活を世話する。十五歳の年に、賽児は済寧府の林公子と結婚することになったが、二人は、本当の夫婦生活があまりなく、半年を過ぎたところで、林公子は死んでしまう。後に、賽児は国の飢饉に大量の金子を寄付したり、蝗いなせの害を払いのぞくなど民のために行動した。

当時まだ燕王である朱棣（すなわち成祖）が建文帝の帝位を奪ったことに対して、賽児

は建文帝の忠臣の子孫を率いて、山東省の済南で蜂起し、成祖の年号に従わず、成祖と抵抗しながら、建文帝を待ち、帝の位を彼に返そうとした。人界に留まって四十年あまり、成祖の軍隊と常に対抗していた。成祖が北の戦場で命を失ったことよって、嫦娥の彼に対する恨みが解け、③衆仙人の迎えて天界に戻ったのである。即ち、当初広寒宮での嫦娥と天狼星の悪縁が人界で解消され、また解消されたことよってふたたび仙界に戻れたのである。

この物語の構成を『飛驒匠物語』と比べると、傍線で引かれるように以下の三つの共通点にまとめることができる。

- (一) 謫仙のモチーフ（仙界で起こったことを含め、謫仙の理由と再び仙界に戻れる条件がきちんと示されている点）。
- (二) 主要人物の設定が似ており、物語は仙界と人界の二元世界で展開していく点。
- (三) 最後に仙界に戻れた点。

この三点についてすこし言葉を足して説明したい。

- (一) 謫仙のモチーフ（謫される理由、仙界に戻れる条件）

謫仙という点だけに注目すれば、「蜃中楼伝奇」も確かに四人の主人公は謫仙であった。しかし、前にも述べたように、謫仙に関する記述は、東華上仙の口を通して語らせたその短い文書だけに留まっている。しかし、『飛驒匠物語』には、仙界でのハプニング、なぜ謫されたのか、そして、再び仙界に戻れる条件について詳しく書かれている。これは、「蜃中楼伝奇」には見られないところである。

『飛驒匠物語』巻一の「ほうらいの山」では、墨繩と松光が蓬萊の仙界にやってきて、魯班の仙人に案内され、蓬萊宮の別殿を見学した。ちょうどその時に、男女二人の仙人が天界のルールに違反して、太上老君から叱られる光景を垣間見た。太上老君の罵り詞は「汝らひそかに夫婦となりて、仙都の掟にそむきたり。しかし塵縁のつきざる所いかんともすべきにあらず。今より汝らを欲界にくだして夫婦となさしめん。業つきたらんには、ふたゝび此所へむかへてん」である。即ち、仙人が恋に落ちてしまったことは、仙界のタブーであり、恋をしてしまった以上は、仙人としての資格は失われてしまったのである。

そして、二人とも無事に仙界に戻れるように、瓢が一つずつ与えられた。「この瓢はかれらが人間に胎をやどして、さて後ふたゝび、此仙界へ帰り来らん時、つゝがなく此瓢を

持来らざれば、仙となる事あたはず。もし此瓢にいさゝかの疵だにつきても、もとの位の仙人とはなりがたし」という言葉の如く、瓢は二人が無事に仙界に戻るための大事な道具となっている。しかし、男仙が瓢を忘れたため、墨繩はその瓢を持って転生された男仙に届ける役を頼まれた。人間界に戻つてくると、時はすでに十五年経っていた。墨繩が男仙の生まれ変わりである山人を見つけた。墨繩は冤罪を受けた山人を助けたり、山人と女仙の生まれ変わりである女一の宮の結婚を全うさせたりして、山人の保護役として十分に働きを果たしていた。

同様の内容が『女仙外史』にも見られる。

『女仙外史』第一回「西王母瑤池開宴 天狼星月殿求婚」では、天狼星が嫦娥に片思いをして、ひたすら嫦娥を妻にしようと考えたが、嫦娥はこれに怒り、天帝に訴えた。しかし、天帝は、嫦娥の訴えに対して、「一汝奏請追還天狼、乃常人之見、非仙真之語也」（あなたは天狼星を人間界から呼び戻すと要求すること自体は、すなわちすでに凡人が思うところであり、本当の仙人が言う言葉ではない）と言って、彼女を翌日に人間界に下すように命じた。つまり、仙人としては、憤る事自体がタブーであり、憤ったからには、仙人としてはいられなくなるのである。

㊦織女娘娘は、嫦娥が下されることを知り、嫦娥が必ず無事に仙界に戻るように、嫦娥を安心させ、「有一位葛仙卿の夫人鮑道姑、誓願弘深、最懇渡世。（中略）煩他下界来、終始教育、以成大道、不愁不還瑤台也」（葛仙卿という仙人の奥さん鮑道姑は、誓願を立て、渡世をもっとも願っている。下界に行つて、あなたを教育してもらおう。大道になれば、この瑤台に帰るのも憂うことなし）と言った。そして鮑道姑に下界に行つてもらい、嫦娥の教育役を願った。後に鮑道姑は賽児の乳母になり、自分の母乳を飲ませてあげた。鮑道姑の母乳は、仙界の仙水と同じようなものである。すなわち、賽児は生まれてからすぐ仙水を飲むことができたのであり、これはのちに彼女が肉身のままに仙界に戻れた一つの要因となっていた。また、鮑道姑は賽児に学問を教えるだけでなく、後に成祖との対抗の時にも、賽児に戦略を教えた。

右の傍線で引かれている部分を纏めてみると、以下のⅠとⅡが似ていることに気づく。

Ⅰ 仙界のタブーを犯したことが諷された原因となっている点。『飛驒匠物語』では、これは二人の愛であり、『女仙外史』では、これは怒りであった。（）

Ⅱ 人界に下される時に、一緒に人界に付いてくる、仙人を助ける付人が設けられた点と仙界に戻る条件が言及されている点。『女仙外史』では、付人は鮑道姑であり、『飛

『驛匠物語』では、付人は墨繩である。嫦娥は、賽児に生まれ、鮑道姑の母乳を飲むことで、肉身のまま月殿に戻れることが可能となったが、山人と女一の宮は、瓢のおかげで最後にまた仙界に戻れたのである。）

即ち、謫仙のモチーフにおいて、『女仙外史』と『飛驒匠物語』には、具体的に謫される理由と、仙界に戻る条件と、仙界からの付人がいるなど共通点が見られるのである。

しかし「蜃中楼伝奇」は、謫される理由を「偶犯小過」（偶たま小さき過ちを犯す）という四つの文字で済ませてしまい、具体的な記述はほかには何一つもなかった。謫された仙人が仙界に戻る条件についても、何一つ言及されておらず、仙界に戻る設定自体は「蜃中楼伝奇」にはなかったのである。謫された男女が夫婦となる点は、「蜃中楼伝奇」を参考にしたかもしれないが、それ以外の謫仙のモチーフは、『女仙外史』第一回によるものが多いと見てよからう。

嫦娥と天狼星は、山人と女一の宮のように、恋人同士ではない。嫦娥から見れば、天狼星は、むしろ自分の敵とでも言うべき人物であるが、仙人として感情を動かしてはいけないうという掟は、両作品は同じである。『女仙外史』第一回では、仙人が下界に下される理由について、作者呂熊は「或因乎喜、或因乎忿、或因乎恩愛仇怨」（或いは喜により、或いは忿により、或いは愛、怨みに因る）と語り、また「縁有二種、好縁曰情、悪縁曰孽」（縁は二種類あり、好きものは情といい、悪きものは孽という）と綴る。愛にせよ、怨みにせよ、仙人は、感情を動かすこと自体がタブーであり、動かした以上は、失格である。雅望は、『女仙外史』をよく理解し、この言葉の意味をもきちんと味わったのであろう。そして、『女仙外史』では二人の仙人の怨みは、清い仙界で解決するのが許されなかったもので、俗の人間界でこれを解決しようと下されたのである。物語も、仙界から人間界へと二元の世界で展開されていく。『飛驒匠物語』では、同じく二仙の愛は、清い仙界では許されるものではなく、これも俗の人間界でその縁を全うさせた設定となっている。仙界の掟を破ってしまった仙人が謫され、人界でその「恩愛情仇」を解決する基本的な骨組は同じなのである。

（二）主要人物の設定が似ており、物語は仙界と人間界の二元の世界で展開していく点。

墨繩と鮑道姑の人物設定は、相似しており、ともに付人として主人公に付き添って、彼らを保護して助ける役である。これ以外にも、注目すべき点はまだある。

まず、謫仙が生まれ変わった後の身分は、一人が貴い人となるのに対して、もう一人は普通の家に生まれる点である。『女仙外史』では、天狼星は、皇室の皇子に生まれ変わり、嫦娥は蒲台县の普通の家柄を持つ唐孝廉の家に生まれた。そして、『飛驒匠物語』では、女仙は、帝の姫として生まれて、男仙は、武蔵野の普通の民家に生まれたのである。

これだけではなく、両作品がともに、三角関係を設定している。

『女仙外史』では、まず唐賽児と林公子が結婚することになったが、林公子は結婚後半年して命を失くしてしまった(『女仙外史』第六回「嫁林郎半年消宿債 嫖柳妓三戰脱元陽」)。その後、唐賽児は、仙界で怨んでいた天狼星の生まれ変わりである成祖と終始対抗し、天界にいた時の仇を打った。

『飛驒匠物語』においても、初め山人と紫は、恋に落ちるが、紫の父親が結婚を固く断ったため、紫は、自害してしまった。その後、山人は、上京して、元の女仙の生まれ変わりである女一の宮と出あい、愛し合って、仙縁を全うしたのである。

途中で主人公と親しい関係を持つ一人を物語から消すという手法は両作品が同じである。また、物語の世界は、仙界と人界の二元世界にとどまって、水界が介していない処は両作品が通じている。よく考えてみれば、「蜃中楼伝奇」は、仙界と人間界以外、第三元の水界も設けられており、水神の龍が登場してくる。二人の女仙が謫された後、水神の竜の娘に生まれ変わったのであり、人間に生まれ変わったのではない。人間に生まれ変わった男仙は、最後に人間とではなく、異類である龍女と結婚した。換言すれば、「蜃中楼伝奇」は、仙界、人界、水界の三元の世界によって物語が成り立っているのに対して、『飛驒匠物語』は仙界と人界の二元の世界となっている。

稲田篤信氏は、雅望が「蜃中楼伝奇」の三元の世界を、『飛驒匠物語』において仙界と人界の二元の世界に転じた、と考えられている。

「蜃中楼伝奇」はその原拠的作品である唐代伝奇『柳毅伝』の世界構成をそのまま承けて、その上に道教的な世界観を加味して、仙・人・水(鬼)の三元世界を舞台としている。(中略)ところが、雅望の読本では、ストーリーの上で、水神の加護によって主人公が守られていくといった展開は見られない。また、雅望は、原拠の仙界・水界を一元化して、仙・人の二元世界に転じている。⁽¹⁴⁾

しかし、実は、「蜃中楼伝奇」の水界・仙界の二元の世界を一元化したのではなく、そも

そも「蜃中楼伝奇」の三元の世界に依らず、直接二元の世界の構成を持っている『女仙外史』から仙・人の二元世界の構成をそのまま持ってきたのではないかと解釈したほうがもつと納得がいくと思われる。

(三) 最後に仙界に戻れた設定

山人、女一の宮、と墨繩三人は百歳近くの時に、仙界に迎えられた。

墨繩は都にありて、その住所は隔つれど、山人姫宮とひとしく、齢高くなりぬまで、貌おとろへず、壮年の時のごとくにぞありける。此三人みな百歳ちかく生のびけるが、一日天晴たる日、紫の雲墨繩が家の庭に、たなびくとみへしに、蓬萊にて逢ひつる、魯班仙人あらはれ出て、一月宮造営の御いそぎなり。いぞとて、墨繩が手をとりて、雲居高くそのぼり行ける。山人のもとにも同日に、あまた仙人おり下りて、山人姫宮を、玉の輿にのせ、又ふたつの瓢をば玉の管にをさめて、仙樂たかやかに奏しつゝ、天上へこそそのぼり行きし……

すなわち、謫仙は最後に仙界に戻れたのである。しかし、今まで典拠とされてきた「蜃中楼伝奇」には、四人の謫仙は仙界に戻るシーンがなく、四人が二組の夫婦となり、円満なる結末で物語は終わっている。

が、『女仙外史』の最後九十九回「嫦娥白日還瑤台 師相黃冠婦玉局」に嫦娥は白日に仙界に迎えられ、仙界に戻る記述があつた。

時太陽初昇、正射着城西、遍空中彩霧盤旋、香風縹緲、隱隱然聞有天樂之声、遙見多少仙官仙吏皆着霓裳羽衣、各執絳節雲旛、伫立層霄、恰像個迎接人的。月君早已穿着天孫賜的混元開辟一炁仙衣、戴着碧霞元君送的藍玉雕鏤九鳳冲天百宝冠、束着嵩嶽夫人獻的伽楠造成五龍銜珠帶、蹬着東海龍女貢的青糸織就百花凝香履、拜別了鮑、曼二師、又与兩位劍仙稽首作別。(中略)才斂衣坐於鸞背、忽東台一声响、為火崩裂、四大弟子尸解出神、各御彩雲一朵、隨了月君、冉冉昇上雲霄。(時に太陽が昇りはじめ、城の西側を照らしている。空中に彩つた霧が遍く立ち籠め、香をおびた風が軽く吹いた。かすかに空に音楽が響いたのを聞いた。遙かにたくさん仙官が羽衣を着て、雲に立ち、その様子は恰も誰かを迎えに来たようだ。賽兒は、已に仙人の贈ってくれた羽衣

を着て、冠をつけ、豪華な帯を身に付け、東海龍女がくれた香のする靴を履き、鮑、曼の二人と劍仙の二人に別れを告げた。(中略) 鸞の背に腰をかけると、忽ち東で大きい音がして、火が崩裂して、四人の弟子が尸解を経て仙人となったのであった。各々雲の上に立ち、賽児に従い、雲の奥へとゆつくりと昇つて行つた。

仙界で仙人として感情を動かすのは、怨みといい、愛といい、仙人としてこれは失格である。欲で満たされた人間界に謫され、人間界でそれを解決してから再び仙界に戻るという設定においては、『飛驒匠物語』は「蜃中楼伝奇」より、むしろ『女仙外史』を多く参考にしていたのであろう。

骨組みだけではなく、細かいところにおいても、雅望は『女仙外史』を利用していたのである。女一の宮の誕生した時の描写と彼女の優れる学芸についての描写は、唐賽児のそれととても似ている。

女一の宮が誕生した時の奇異的描写を以下に引用する。

此姫宮生れさせ給ひける日、こしき取りて、例のごとく、屋の上へ人のぼりける時、大空より、鞠ばかりに大きに見へたる物、光りかがやきて棟の上に落ぬ。此人おそれて、屋の上にはらばひて、目をとどて、ふるひゐたり。扱何事もなかりければ、目をひらきて見るに、屋の上に物あり。おづくよりて見れば、ひさごのごときかたちせる物なり。

そして、女一の宮の学芸については、

此姫宮たてゝならひ給はざれど、琴碁書画の道々、すべてくらき事なく、上手にておはしければ。げに凡人にはおはさじなど、人々さゝやき聞へけり。

と記している。

これらと類似する記述は、ともに、『女仙外史』に確認できる。

先ずは、唐賽児が生まれてきたときの描写である。すでに第二章で紹介したが、三宅嘯山が『女仙外史』の前三十回を和訳し、寛政元年(一七八九)に『通俗大明女仙伝』を出版した。これは雅望が『通俗醒世恒言』を出版した寛政二年(一七九〇)より一年前であった。賽児が生まれてくる光景を嘯山は以下のように和訳している。

程経テ十五ヶ月二當八月十四夜五更ノ時分。(中略) 既明夜西ノ刻ニ及テ夫人腹ヲ痛シカバ。人ヲ走テ収生ヲ呼シメシニ。忽彩雲戸ヲ繞。異香室ニ盈。隠々トシテ半

空ニ笙笛鸞雀ノ声聞シガ。程ナク一ツ子ヲ産下リ。サレトモ更ニ初声ヲ立ザリケレバ。

〔通俗大明女仙伝〕卷一「蒲台県嫦娥降世」

そして、賽児の学問については、

賽児既五歳ニ及ヌ。鮑母先女小学ヲ教ルニ。唯一遍ニシテ之ヲ諳ジ。穎異超絶テ。

一度目ヲ過ハ忘ズ。四書五経二年ニシテ読終ヌ。畧大義ヲ講ズルニ。聞レ一ヲ知レ十

ヲ。又ヨク古人ノ解セザルヲサトシケレバ。家ニ在処ノ書。盡内室ニ入レ看セシム。

〔通俗大明女仙伝〕卷一 「蒲台県嫦娥降世」

と記している。

即ち、二人の謫仙が転生して人間として生まれてくるときは、普通の人間と違い、空に奇妙な音楽が響いたり、あるいは仙界で使う仙薬を入れる瓢が一緒について来たりする。

二人の出生はそれぞれ特性があると言えるものの、仙人が生まれてくる時の奇異、産まれつきの聡明さなどを描き出すという、細かい処まで工夫するところは、雅望が『女仙外史』から影響を受けた証左の一つと言えよう。

繰り返しになるが、「蜃中楼伝奇」の四人の仙人が謫され、最後に二組の縁談がまとまった一条を、雅望は山人と女一の宮の身に移したことは確かであろうが、それ以外、「蜃中楼伝奇」と『飛驒匠物語』の関係性は薄く感じられる。仙人が謫される理由、仙界に戻る条件、人界へ同行する付き人などの設定、そして、物語が人界・仙界の二元世界で展開される設定、最後に仙人が仙界へ戻る描写がある点など、所謂物語の構成の面に於いては、「蜃中楼伝奇」よりも、『女仙外史』の方が、『飛驒匠物語』との共通点が多く見出される。そして、賽児と女一の宮の生まれてくる情景の描写、二人が学芸に優れる記述など、細部まで似ているのである。だから、「蜃中楼伝奇」の趣向を取り入れた一方で、雅望がより作品の骨組みにしたのは、『女仙外史』のほうではなからうかと筆者は考える。

四 『女仙外史』の日本での受容

従来、『女仙外史』の日本での受容が、一番よく知られたのは、馬琴の読本、特に『開巻驚奇侠客伝』と言えよう。これは、麻生磯次氏をはじめ、多くの読本研究者によって指摘されている。

麻生磯次氏が「忠義の為に憤死した景清・鉄鉉などの子孫を糾合して、燕兵に当らせようとした仕組は、吉野朝の遺臣に同情を寄せる馬琴に取つては快心の事であった」と馬琴

の利用動機を述べている。即ち、馬琴が気に入ったのは、『女仙外史』に表現された南朝鼻屑である。

また、徳田武氏は、『繁野話』の注と解説では、第二篇「守屋の臣残生を草莽に引話」と第七篇「望月三郎兼舎竜屈を脱て家を続し話」では、趣向の一部として、『女仙外史』が利用されていると指摘している。

現実世界では敗者であった守屋が長寿を得、勝利者であった馬子と太子の子孫の滅亡を見とどけることによって、寿命の点では勝利者に転ずる、という筋は、清の呂熊の長編歴史小説『女仙外史』に得たものである。燕王に帝位を奪われた建文帝が、史実と異なつて、僧侶に扮して宮中を脱出し、燕王よりも長寿を保つ、という『女仙外史』の筋は、歴史上の敗者に同情し、歴史の欠陥を虚構に託して補正する、という精神に支えられている。(中略)(筆者注、第七篇では)眉鱗王が僭偽の竜衣を僧衣に替えての脱走は、第二話にも用いた『女仙外史』第十八回、建文帝の脱出譚を取り入れたらう、と思われる。

庭鐘と馬琴は、『女仙外史』を利用するにあたって共通した思想を持っていたと言つてよからう。すなわち、二人とも中国の歴史上の敗者―建文帝とその遺臣に注目し、かれらに対する同情から、自分の国の歴史上の敗者―吉野朝とその遺臣に対する同情へと視線を移し、作品の中で虚構を設けることで、歴史の遺憾を補正しようとしたのである。

しかし、雅望が『女仙外史』を利用する時は、むしろわざとこのような歴史的要素を排除して、謫仙という浪漫的要素だけに注目したように見える。鈴木敏也氏は、雅望を浪漫小説作家と称し、雅望の読本に浪漫的要素が見られると論じた。雅望が気に入ったのは、賽児が、燕王が建文帝の帝位を奪つた不正不義に怒り、建文帝に同情し、彼のために死んだ忠臣の子孫を率いて燕王と対抗する、という南朝鼻屑的なところではない。彼が注目したのは、政治的な対立から離れ、仙界で何かがあった二人の仙人が人界に下されて、人界でその「恩愛情仇」の感情を全うさせたところである。彼は、歴史上の是非を評するまでにまだ余裕ができていなかったのかもしれない。江戸払いの冤罪を受けた雅望は、現実社会への自分の憤悶を表現するのに、仙界という虚構を借りたかったのであろう。

馬琴の『開巻驚奇侠客伝』は天保三年(一八三二)春に出版された。これは、『飛驒匠物語』が出版された年の文化六年(一八〇九)より二十三年後であった。即ち、『女仙外史』

を利用するにあたって、二人の注目するところはそれぞれ違ったのであるが、実は、雅望は馬琴よりも早く『女仙外史』を用いたことになるのである。雅望の注目する所は、南朝最良ではなく、『女仙外史』の中における謫仙の仕組であるが、彼が馬琴より早く『女仙外史』を取り入れたことは事実であろう。繰り返しになるが、第二章ではすでに論じたが、『近江県物語』の中で、梅丸の一歳の時に行った誕生会の光景は、『女仙外史』の賽児が一歳誕生日に行われた「試児」の趣向によるものであった。雅望の読本における『女仙外史』の受容は、『女仙外史』の日本での受容史において、大きなポイントになると考えられる。これから『女仙外史』の受容史を論ずるとき、雅望の読本をも視野に入れねばならない。

五 終わりに

本章では、従来『飛騨匠物語』の典拠とされていた「蜃中楼伝奇」における謫仙の趣向について、雅望が作品の骨組みとして取り入れたとする説に疑義を呈した。「蜃中楼伝奇」は四人の謫仙が仙界に戻るような記述はまったくなく、謫仙の理由と仙界に戻る条件についても言及はなかった。謫された場所は、人間界と水界の二世界に分かれた。二組の結婚も、山人と女一の宮のように、人間同士の結婚ではない。それに対して、『女仙外史』の第一回には、これらについての記述が見られる。

また、謫仙された仙人が俗の人間界において、その欲情なり、欲念なりを解消し、再び仙界に戻る構成は、むしろ『女仙外史』によるものと考えたほうがよからう。その大きな骨組みの元で、日本の竹芝伝説や、今昔物語、加えて第六章で述べる『水滸伝』、『拍案驚奇』、『牡丹亭還魂記』などの趣向を取り入れて、雅望は物語を完成させていたのである。

こうして見ると、『女仙外史』の日本における受容は、馬琴の読本だけではなく、雅望にも見られたのである。そして、馬琴よりも早くこれを取り入れたのは、雅望であった。雅望は、馬琴が『女仙外史』の南朝最良の部分に注目していたのとは違い、謫仙などの夢幻的な面に目を注いだのであった。二人の関心の寄せたところは、それぞれ違ったのであるが、雅望が馬琴より早く『女仙外史』を取り入れたことは事実である。これは、『女仙外史』が日本における受容史での大きなポイントにならう。

注

- 1 稲田篤信『石川雅望著作集』・「解題」四百三十四頁（国書刊行会 一九九三年）
- 2 注1に同じ。
- 3 山口剛『読本集』解題（日本名著全集刊行会 一九二七年）
- 4 麻生磯次『江戸文学と中国文学』第二章「雅文小説に於ける支那文学の影響」（三省堂 一九四六年）
- 5 水谷不倒氏は墨繩の妙技と古浄瑠璃『飛驒内匠』との関係を説いている。（『草草紙と読本の研究』 駿南社 一九三四年）
- 6 稲田篤信『飛驒匠物語』論*機関と正義」（『江戸小説の世界*秋成と雅望所収 ペリカン社 一九九三年）
- 7 佐藤深雪『飛驒匠物語』典拠私考」（『日本文学』二十六卷十号 一九七九年）論文では、氏は墨繩の技巧―鶏、鼠、四面の家、木鶴、猫が『和漢乗合船』に見える細工であると指摘した。
- 8 前掲注4に同じ。
- 9 前掲注3に同じ。
- 10 中矢由花『飛驒匠物語』試論―墨繩の造形と典拠に関する一考察」（『国文』九十七卷 お茶の水女子大学国語国文学会 二〇〇二年）
- 11 曲亭馬琴『本朝水滸伝を読む并に批評』（『曲亭遺稿』所収 国書刊行会 一九一一年）
- 12 「蜃中楼伝奇」からの引用は『李漁全集』巻四（浙江古籍出版社 一九九一年）による。
- 13 第二部第二章をご参照いただきたい。
- 14 前掲注6に同じ。
- 15 『女仙外史』からの引用箇所は『女仙外史』（上海古籍出版社 一九九一年）による。
- 16 『通俗大明女仙伝』からの引用箇所は近世白話小説翻案集第三卷（汲古書院 一九八五年）による。
- 17 馬琴の読本に『女仙外史』が典拠として使われていたことについて初めて指摘したのは麻生磯次氏である。氏は一番早く指摘し、『女仙外史』が『開卷驚奇侠客伝』に与えた影響を論じた。（前掲書『江戸文学と中国文学』。後に、崔香蘭氏は著作『馬琴読

本と中国古代小説』の中で、『開卷驚奇俠客伝』以外にも、『近世説美少年録』と続編『新局玉石童子訓』の中にも、『女仙外史』の趣向が使われていると論じた。また、黄智暉氏に「馬琴読本における春秋の筆法―『女仙外史』の影響を手掛かりに―」（『国語と国文学』八十三―七 二〇〇六年）がある。

18 前掲注4に同じ。百四十九頁。

19 徳田武注『繁野話』（新日本古典文学大系 岩波書店 一九九二年）

20 鈴木敏也「浪漫小説作家としての石川雅望」（『近代国文学素描』所収 目黒書店 一九三四年）

第六章 『飛驒匠物語』における

『水滸伝』、『初刻拍案驚奇』、『牡丹亭還魂記』の趣向取りについて

一 はじめに

第五章では『女仙外史』と『飛驒匠物語』との関連を論じ、『飛驒匠物語』は『女仙外史』から骨組を取ったことを考証した。実は、『女仙外史』以外、趣向として利用されている中国白話文学はほかにもあった。第五章ですでに紹介したが、徳田武氏は『日本古典文学大辞典』（岩波書店 一九八四年）「飛驒匠物語」の項目で、『水滸伝』の利用が見られていると述べている。しかし、『水滸伝』のどの部分が利用されていたか、具体的な指摘はなかった。そこで本章では、『水滸伝』がどのように『飛驒匠物語』に利用されていたのかを明らかにする上で、『飛驒匠物語』巻一の「ほうらいの山」、と巻四の「夢のたぐち」に注目し、今まで全く指摘されていなかった中国白話小説『初刻拍案驚奇』と明の戯曲『牡丹亭還魂記』の趣向利用を明らかにしたい。

『飛驒匠物語』の粗筋は第五章で紹介しているため、ここでは省略する。

二 『飛驒匠物語』と『水滸伝』

『飛驒匠物語』「ほうらいの山」では、墨繩と弟子の松光はよい木材を得るために、深山に至った。山路を深く分けて入ってみれば、切岸がそばだち、下は千尋もある。そして、向こう側と三間ばかり隔てていて、渡りようがない。そこで、墨繩は、包の中から、管のようなものを数多く取り出して、つぎあわせると、一つの梯子となった。これを使い、二人は向こうまで這い渡ることができた。背中を木にあずけて休憩していると、一人の牧童が現れた。

さて打わたりて、かのまきのもとにいたりけるに、あまりにつかれたれば、しばし樹の根にしりうちかけて、やすむほど、かなたにて笛の声すなり。「かゝる深山に何ものか入来りけん」とてあやしみ見れば、「草刈わらはの十ばかりなるが、籠を背におひて、笛ふきならしつゝ来り。（番号と傍線部は筆者、以下同じ）墨繩を見て、「そこは此國のたくみと聞えだる猪名部の墨繩ぬしにおはするにや」といふ。墨繩「かゝる童の、いかでわが名を知りたるならん」と、ふしぎながら、「しかに候」といへば、童がいはく、「此奥山にすめる人あり。そこを待給ふ事ひさし。『今日こゝに入来り給はん

れば、おのれに先行むかひて、其由しらせ奉れ』と、の給ひき」とて、笛のしりして、「此道より折れてゆき給はゞ、たゞかしこに到り給ひなん。おのれは草を刈て後、跡より参らんずれば、ともなひ往がたし」といふ。墨繩心得されば、「其逢みんどの給ふ人は、いかなる御方にか」とへば、童「まづかしこに行て、其子細は問はせ給へ」と、いひさして、又笛うちふきつゝ、山をこへて行ぬ。松光がいはく、「かゝる深山に、人すむべき道理なし。一定僊人などいふものなるべし」といふ。「何にもあれ、いざ行て見ん」とて、墨繩さきにたちてゆく。所々に熊狼などゐたれど、みな耳尾をたれて、むかふ事なし。

深山の中に、笛の吹く童が現れ、墨繩たちに声をかけてきたのである。彼は、墨繩の名前を知り、そして山の奥に墨繩を待っている人がいると伝えたのち、また一人笛を吹いて山を越えて行つた。

笛を吹く童が登場する点、童が墨繩の名前と彼が今日山に来ることを知る点、途中熊や狼などの猛獣がいたが、近づかなかつた点などは、明らかに明の施耐庵作『水滸伝』の第一回「張天師祈禳瘟疫」洪太尉誤走妖魔に見られる牧童の趣向を利用した証である。以下『水滸伝』第一回の牧童と関わる内容を紹介する。

宋仁宗の嘉佑三年、疫が流行り、たくさんの民が死んだ。仁宗は、江西信州龍虎山の張天師に疫を払ってもらうために、洪太尉洪信を使者にして、迎えに行かせた。洪信太尉は信州に着き、体を浄め、龍虎山に向かつたが、山路が歩きにくく、足も疲れはてたので、心の中で文句を言った。すると、松の樹の背後から白い虎が、雷のような声を出して、ぱつと洪太尉の前に躍り出た。が、忽ち山坂に向かつて跳んで行つた。また、五十メートルくらい進むと、風が通つた感じがして、瞳を凝らして見たところ、大きな毒蛇がいた。洪太尉は肝をつぶし、そのまま倒れたが、再び目を開いてみれば、毒蛇は、麓に向かつて、姿を消していた。結局、虎も毒蛇も太尉を傷つけることはなかつた。太尉は、張天師が自分をからかつたことに不満を抱いた。そこへ、牛に乗り、笛を吹く童が現れた。

岡島冠山（一六七四—一七二八）が『水滸伝』を和訳し、『通俗忠義水滸伝』を出したことは周知のことである。冠山の訳を以下に引用する。

「笛ノ音隠々ニ響キ。漸々ニ近ク聞ヘケリ。太尉恠ク想ヒ。心ヲ納テ之ヲ見ルニ。」

一箇ノ童子。黄牛ニ横サマニ打乗。山ヲ過テ太尉ノ面前ニ来リ。只顧鉄笛ヲ吹テ遊行ス。
 二時ニ太尉彼道童ニ向テ曰。汝ハ何ヨリ来レリヤ。又我ヲ識リタルヤ。道童聞テ大ニ
 笑ヒ。笛ヲ以テ太尉ヲ指シ。汝茲ニ来ル事。天師ニ對面セン為ナリ。我今朝草庵ノ中
 ニ在テ。天師ノ前ニ待リケルニ。天師我ニ告テ曰。今都ニ疫癘盛ニ。行リ。軍民多ク
 傷損ス。此故ニ仁宗皇帝。洪太尉ヲ勅使トシテ。此ノ山ニ来ラシメ。我ヲ都ニ請待
 アリ。三千六百分。羅天大醮ヲ修シメテ。天災ヲ禳ヒ癘病ヲ祈。速ニ民ヲ救玉ハ
 ントノ御コト也。因レ之我今鶴ニ乘リ雲ニ駕シテ。都ニ往ト宣ヒキ。定テ此比ハ
 都ニ著玉フラメ。然バ庵中ニハ人アルマジ。汝無益ノ處ヘ往ンヨリ。速ニ下向セヨ。
 此ノ山ニハ。猛獸毒虫極テ多シ。恐ハ汝ガ性命ヲ傷害セン。必ス遲疑スル事ナカレ。
 太尉カ曰汝虚言ヲ以テ誑クコト勿レ。只実情ヲ以テ告ヨカシ。道童重テ返答ニモ不
 レ及。復鉄笛ヲ吹テ。森ノ中ニ入ニケリ。

右の引用した『通俗忠義水滸伝』と「ほうらいの山」の相応する部分と比べて、以下の
 ような共通点が存在することが分かる。

- Ⅰ 笛を吹く牧童が登場する点。
- Ⅱ 牧童が来訪の客の名前を知り、予め彼らの情報を把握している点。
- Ⅲ 牧童が事を伝えた後に、笛を吹き、姿を消す点。
- Ⅳ 山中に、獣が現れたものの、尋ねてくる人を傷つけなかった点。

これで、「ほうらいの山」におけるこの牧童の一条は、『水滸伝』の第一回を踏まえてい
 たことは明らかであろう。雅望は随筆『ねざめのすさび』巻二で『水滸伝』について言及
 している。「宗江（筆者注、正しくは宋江）は仁智の長者にして、賊となれるは拠なきより
 出たる也、と人のしれるがごとし。しかるを金世歎（筆者注、正しくは金聖歎）が評に、
 しひて宗江を姦智の大賊として評せるはことわりなし。」とあり、金聖歎の宋江に対する
 評価が正しくないと述べている。金聖歎の批評というのは金聖歎が批評を書いた『第五才
 子書水滸伝』のことであろう。このことから、雅望が『水滸伝』を読んでいたことは、明
 らかであろう。

馬琴の『南総里見八犬伝』にも、『水滸伝』の第一回の牧童の一条が利用された箇所があ
 る。それは、第二輯卷一第十二回「富山の洞に畜生菩提心を発す 流水に 浜て神童未来果
 を説く」である。

伏姫は父親である義実の言の信を失わせないため、犬の八房に伴われ、山に入った。彼女は毎日読経し、八房もいつのまにか読経の声に傾け、心を澄ませた。このようにして一年間が経ったある日の事であった。

浩処かこうじょに乾ぬなる、重山やへやまの根方ねかたに当りて、笛ふえの音幽ねかすに聞えけり。伏姫耳ふせひめを側そばで、あやしやこの山には、樵夫きこりも入らず、山兒やまがっも住すまひぜず、わがこの処へ来つる日より、きのふまでもけふ迄も、人にあふことなかりしに、思ひがけなく笛の音の、こなたを指て聞ゆるは、草刈かるものゝ迷ひ入りしか。(中略)且まづそのやうを見ばやとて、そなたに向て立給たちふ。笛はますく吹澄ふきすまして、間あほひちかくなるまゝに、と見れば一個ひひとりの藪童くさかりわらひ、その年は十二三なるべし。腰には鎌と鑿くを挿さし、鞍には両箇ふたつの籠かを掛、手に一管いちくわんの笛を拿り、黒き犢ここのに尻かを懸かけて、木間このまを出てあゆませ来つ、伏姫を尻目に懸て、なほ草笛の音をどゞめず。牛を流水ながれに逐おひ入れて、涉わたさんとする程に、伏姫は忙いそしく、「こやくく。」と呼かへし、「そなたはいづれの里の子ぞ。人跡絶じんせきたたるこの深山路みやまじへ、ひとり来るだもこゝろ得がたきに、路に熟なれたるものゝ如し。吾儕わなをしるや。」と問給とへば、童子どうじは莞尔にっことうち笑みて、しづかに笛を襟えりに挿さし、「われは何なでふ認みざらん。おん身還かへつてわれを識しらず。…」

伏姫が人の来ない深山で一人の笛を吹く牧童に出会い、彼から長々と自分の懐妊とその宿因とを語られる場面である。

右の引用から分かるように、牧童が牛に乗り、笛を吹く点、伏姫が、牧童に自分の事を知っているかと問う点、牧童が初めはひたすら笛を吹き続ける点などは、『水滸伝』の趣向をそのまま忠実に用いている。しかも、これを文章のみによつて表現するだけではなく、「草花をたづねて伏姫神童にあふ」と題された挿絵まで設けている。挿絵では、牧童は牛の背に乗り、手には笛を横よこさまに持っていて、伏姫に何かを語っている。

馬琴は、伏姫の懐妊とその因果、懐妊する子供は、形がなく生まれた後にまた生まれること、伏姫は六か月で出産して、その時に父親と夫に会えることなどの未来話を、神童の口を借りて長々と語らせた。『水滸伝』の牧童よりも、馬琴の作った神童のほうがより神秘的であると言えよう。馬琴は、過去だけではなく、宿因、未来も知る神通の人物として神童を作り上げたのである。

実は『南総里見八犬伝』に先立って、馬琴は文化二年(一八〇五)に『水滸伝』を『新編水滸画伝』に編訳していた。馬琴の担当は初編の巻一から巻十までであり、これは『水

澁伝』(百回本)の第一回から第九回までに相応する部分であった。

播本眞一氏は『八犬伝』の牧童の挿絵について以下のように述べている。

この図が、文化二年刊の馬琴読本『新編水滸画伝』卷之一、北斎画の挿絵を下敷きに行っているのは間違いない。『画傳』では、都に流行する疫癘の病難を払い除くべく、張天師を捜して竜虎山に登った洪信の前に、童子に化現した張天師が黄牛にのり笛を吹きながら現れる。当該箇所本文も『八犬伝』と近似する。⁽⁵⁾

文化二年の『新編水滸画伝』を編訳したことがあるから、牧童の一条を頭に刻み、また『八犬伝』に活かすことができたのである。

雅望と馬琴、どちらが先に『水滸伝』と接触したのかは分からないが、このように二人はともに同じ作品の同じ所に着目し、

自分の作品に取り入れるところに共通点があるのである。二人とも、牧童の神秘性、その語る詞の予言性に目を引かれたのであろう。実は、雅望と馬琴は同じ中国の白話文学に魅了され、自分の読本に取り入れた例は他にもある。これを第七章での述べることにする。

三 『飛騨匠物語』と『初刻拍案驚奇』

『ほうらいの山』では、墨繩と松光が仙境に入り、禁を犯し恋に落ちて契ってしまった男女二仙が仙界から人界に下されるのを垣間見た。この二人の仙人の恋が発覚したきっかけは、鍊丹が成就できなかったことである。仙卒の一人がこう語る。

仙界にて金丹といふ薬を鍊事あり。(中略)此薬を鍊るほど、凡三百年ばかりを経ざれば、丹となる事あたはず。かの男女の仙人此金丹を練り作るべき役を蒙りてありながら、ひそかに戒を犯して、恐びあひけるにより、此穢れにて、金丹ほどぼしりて、聊も鼎にのこる事なし。丹薬つゝがなく成就せば、この瓢にもりて、たくはふべきを、かの男女法を犯ぬればかく仙界を、おひやるなり。

すなわち、金丹が成就できなかったのは、仙人の男女が契をなしたため、丹薬が汚されてしまったからである。金丹が汚されたことで、二人の恋が発覚し、仙人のタブーを犯したことが分かり、二人は仙界から追い出されたのである。

明末清初の凌濛初の『初刻拍案驚奇』卷十八「丹客半黍九還 富翁千金一笑」には、こ

れと類似するような話がある。

潘という金持ちは、平素丹術を好み、丹を鍊る人を先生とし師事したが、みなは、彼の銀子を騙し、実際に銀子を鍊ることができなかったのである。

ある日、また一人の道士に出会い、彼から水銀で銀を鍊ることを聞き、この道士を家に招いた。道士と同行する人の中に、美しく、仙人のような奥さんがいた。潘は彼女に一目ぼれして、彼女と契を交わすことをひそかに思っていた。道士の母親が突然亡くなり、道士は家に帰り、妻を潘の家に残し、鍊丹の指導に当らせた。道士が家に帰ったのを機に、潘は何回も道士の妻を口説き、終に二人は丹を鍊る大堂で契りをなしてしまった。

十日後、道士は戻ってきて、鍊丹の炉を覗いてみると、銀がなくなつて、丹が成就できなかったことに気づいた。そこで道士は「此必有倣交感汚穢之事、触犯了的」(きつとだれかがここで情を交わし、丹を汚し、忌諱に触れたため、丹が成就できなかったに違いない)と言った。そこで、妻と潘のことがばれてしまった。

丹を鍊る清浄なところで、契を交わすと、丹が汚されて成就できなくなるというのが、道教の考えであった。

道教に於いて、鍊丹の部屋で、欲や、情を抑えられず、すこしでもコントロールできないと、丹が成就できないことは『醒世恒言』の卷三十七「杜子春三入長安」⁽⁵⁾にも書かれている。

杜子春は太上老君に従い、修行することを決心した。太上老君は、杜子春を彼の鍊丹の部屋に連れていって、彼にどんな光景を見たとしても、絶対声を出さないようにと命じた。初め杜子春はどんな怖い物を見ても我慢していた。続いて彼は転生して口のきけない女性になった自分の日常生活の一日の光景を見た。夫との間に三歳の子供がいた。結婚してから一度も夫と口を利かなかった。夫は「この私を馬鹿にしているから、口を利かないのだろう」と思い、彼女に対して怒り、息子を石の上に投げつけて、死なせた。これを見た杜子春は思わず、あつという声を漏らした。すると、丹を鍊る炉が一気に爆発して、鍊丹は失敗に終わった。

このように、感情を動かしただけで鍊丹が失敗する位であるから、ましてや契を結ぶことは、絶対に許されないことであろう。

雅望はおそらく『初刻拍案驚奇』卷十八を読み、この設定に関心を抱き、二人の仙人にも同様のことをさせたのであろう。恋が発覚したのは、鍊丹役の二人が契ってしまったからという案は、道教的な考えに裏付けられている。

雅望は同じく『初刻拍案驚奇』の卷十三「趙六老舐犢喪殘生 張知県誅梟成鉄案」の冒頭からヒントを得て、神仏から言われた言葉が真実になった趣向を『近江県物語』に利用したことは第二章で述べた。同じく雅望の著した読本であるため、『飛騨匠物語』にも『拍案驚奇』が利用される可能性は十分ある。彼は、丹が成就できなかったことが、男女が契をなした証になりうることを印象深く頭に残し、仙人の恋が露顕した理由にしたのであるう。

四 『飛騨匠物語』と『牡丹亭還魂記』

『飛騨匠物語』卷四の「夢のたぐち」に女一の宮が昼寝をして、夢の中で、ある若い男性を見て、その人と夫婦の契をなした一段がある。少々長めであるが、以下に引用する。

イある日姫宮御手ならひしきして、机によりて、打ねぶり給ひけるに、夢に見給ひけるよう、あやしき賤の家とおぼゆる所に、日ごろ手ならし給へるひきこの、庇に釣りてありければ、おどろかせ給ひて、「是は我をさなき時より、かたはらはなきさず、持ならしつる瓢なり。いかにして、こゝにあるぞ」との給ふに、内より人出来て、「これは我家にゆゑありて、持つたへし瓢にて候。やんごとなき御わたりには、いかでかゝる物の候はん」といふを、**ロ**見給へば、鄙にはめづらしくあてなる人にて、物いひたる声も、さわやかにおかしければ、しばし打まもりておはしけるに、かたへに匠の木どもあつかひてゐたるが、入来ていふやう、「御前には此あるじと、ふかき契りおせば、女夫になり給ひなん」とて、手を取りて奥さまへゐて行く。此家のさま荒れて、あばらなる所も見ゆれど、さすがに調度などは、故ありげにて、むくつけき、あなか人のさまにはあらず。心ならずそこに居給へれば匠杯取出て、かのうつくしき人を、**ハ**我まへにすゑて、杯くみかはしなどす。此男を見給ふに、はじめ見しよりは、ちかまさりして、いみじううつくしかりければ、「扱もやさしき人にこそあれ。内わたりに行かふ人々は冠装束などこそ、うるはしけれ、すがたかたちは、此人に似たる物もなし。われは此人の妻にてあらなん」と覺す。

ハさて打かたらひておはす程、思ひかけず、父御門の御声して、「守とくまゐれ」との給へば、此男さわきてはしり出つ。御みづからもいたく驚き給ひけるが、汗もしどゞになりて、御目さめ給ひぬ。さるは机によりおはして、かり初に見給ひし御夢

にぞありける。御側にさぶらひし人々、御湯などもち参りて、「いかにおそはれさせ給ひしにか。御声をさへあげさせ給ひき」と申す。御心のうちにも、**三**「いと思はずなる夢にこそありけれ。さるにても今ひとたび、さる夢を見ばや」とおぼして、其のちこと更に机により給へど、御目もあはねば、まして夢など見させ給ふことなく、たゞ見しおもかげの恋しくて、そゞろなる御物おもひと成りて、あかしくらせ給ひけり。

右に引用した部分を簡単に纏める。女一の宮は、ある日机に伏して昼寝をしていると、次のような夢を見た。ある卑しい家の中に、瓢が釣り上げられていた。これは自分が小さい時に弄んだ瓢だと言うと、家の中から男が出てきて、その瓢は自分の家とゆかり深いものだと言り返す。その人をよく見てみると、とても美しく、上品な人であった。一人の匠が現れ、この男が女一の宮の夫となるべき人物であると告げた。女一の宮と若い男は杯を交わし、夫婦の契をなした。二人が親しく語りあっている時に、父親の声が出た。男は走ってその場から逃げ、女一の宮も甚だしく驚いて、汗をかき、目を覚めた。すなわち、これはただの夢であった。女一の宮はあの人にもう一度会いたいと夢を見ようとしたが、なかなか眠れなかった。ただただ毎日その人を恋しく思いながら、暮らしていただけである。物語の粗筋のところでも述べたが、実は、夢の中の男は、山人であり、匠は墨縄であった。後に女一の宮と山人は本当に墨縄に見守られて夫婦となったのである。つまり、女の主人公が夢で見ていた男と、現実の世界で本当の夫婦となったのである。

麻生磯次氏が、この夢の趣向が『笠翁伝奇十種』の「巧団円伝奇」に拠っていると述べている。

巧団円の發端の趣向は頗る夢幻的な色彩を有つてゐる。即ち姚継は夢で一座の小楼を見るのであるが、その楼内の調度類があり／＼と夢中に現れ、それが総て自分に関係があるもののように思はれるのである。この趣向はこの作を原拠とした近江県物語には採用されず、却つて飛騨匠物語に利用されたのである。即ち、卷之四「よめの君」(筆者注、正しくは卷四の「夢のたゞち」)で、女一の宮は夢を御覧になる。それはあやしき賤の屋の有様であったが、その庇に日頃手馴らされた瓢がかけられてあった。

(中略)原話では一人の老人が現れて姚継に向ひ、これこそ御前の家だと教へて、几帳の後の箱をさし示す。開いて見ると少年の頃用ひ馴らした玩具が一杯はいつてゐたといふ話になつてゐる。夢で恋慕つてゐる家のさまを見ること、その家に己が用ひ馴らした品物のあること、人が現れて暗示的な言葉を云ふこと等に於て、一致点を見出

し得るのである。⁽⁸⁾

麻生氏の述べた通り、夢の中に、自分が使い慣れた品物がある点は、確かに「巧団円伝奇」と似ている。しかし、女一の宮の見た夢は、実は美しい男の人と出会い、彼と夫婦の契を結ぶ点に重点が置かれているのである。一方、美しい男を見て、夫婦の契をなして、夢が醒めても、夢の中の人が恋しくて、もう一度夢見ることを願うという設定は「巧団円伝奇」には一切なかったのである。では、雅望はどこからこの趣向を取り入れたのであるうか。

中国明代の戯曲作家湯顯祖（一五五〇～一六一六）に、戯曲『牡丹亭還魂記』（以下『牡丹亭』と略す）がある。これは杜麗娘と柳夢梅の愛を描いた物語であり、湯顯祖の戯曲の中で最も人口に膾炙していた作品である。

柳春卿は幼い頃から両親を失い、園丁の郭駝と一緒に暮らしている。或る日、妙齡の美人が園中の梅樹の下に立っており、「柳生柳生、私と会うと婚姻が成り立つべし」と呼ぶ夢を見た。柳春卿はその後名を夢梅と改めた。江西南安郡の太守杜宝の娘杜麗娘は使用人の春香の誘いで、家の後花園に花見に行った。杜麗娘は疲れて、書閣の机に凭れて昼寝をすると、夢に年若い書生が出てきて、二人は夫婦の契をなした。夢から覚めた後の杜麗娘はもう一度書生と会いたく、再び後花園に行ったが、書生を夢見ることができなかった。日に増して思い募った杜麗娘は、食事が喉を通らなくなり、死んでしまった。彼女の遺言により、死体は後花園の梅樹の下に埋められた。柳夢梅は科挙の試験に行く途中、風邪を引いてしまって、杜麗娘の霊が弔われている梅花庵で休養した。夜になると、杜麗娘の霊が出て、柳夢梅と忍び会った。杜麗娘は自分の事をすべて柳夢梅に打ち明け、彼に墓を開けてもらおうと願った。柳夢梅は彼女の言葉を聞き、墓を開けると、杜麗娘が生き返ったのである。所謂作品名で言っている「還魂」をしたのである。後に、柳夢梅は及第し、進士の第一甲―状元を取った。しかし、杜麗娘の父親は柳夢梅が娘の墓を無断で開けたことに怒り、彼の低い身分も気に入らなかったもので、二人の結婚を強く反対していたが、皇帝の斡旋で二人はめでたく結ばれたのである。

明らかに『飛驒匠物語』に利用されたと思われる箇所は、杜麗娘が夢を見る話と、後にもう一度夢で男を見たいと願う所である。この二か所はそれぞれ『牡丹亭』の第十齣「驚夢」と第十二齣の「尋夢」である。先ず「驚夢」を見てみる。

杜麗娘は後花園に花見に行き、陽気にあい懐春の情に堪えず、未だ夫がいないことを嘆

く。やがて疲れて机に凭れてしばし眠ると、彼女はある夢を見た。目醒めた麗娘は、見た夢を回想する。その内容を以下に引用する。

今日、杜麗娘は些いささかかの僥倖きようしやう有るなり。**イ**偶たまたま後花園の中に到り、百花開くこと遍く、景を靚かて情を傷む。興没きやうぼつして回り、香閣に昼眠す。**ロ**忽たちち見る一生の。年弱冠ねんじやくくわんなるべくして、豊姿俊妍ほうさしゆんげんなるを。園中に於て柳糸一枝を折り得たり。笑ひて奴家わたくしに對ひて説く、「姐姐は既に書史を淹ひへり。何ぞ柳枝を將おもちて一篇を題賞かせざらん」と。那時その他に一声を応せんと要するを待ちて、心中自ら付おもちへらく、素より平生に味くく、名姓を知らず、何ぞ軽々と言を交はすことを得んや、と。正ただに此の如く想ふ間、只見る那生の前に向ひて幾句の心を傷いたむるの話兒を説了し、奴わたくしを將おもちて摟抱わたくしして、牡丹亭畔、芍薬闌らん邊に去きて、共に雲雨の歡を成す。兩情和合すれば、真に箇れは是れ千般の愛惜、万種の温存おんぞんなり。歡の畢るの時、又我を送りて睡眠せしめ、幾たびの「將まさに息まんとす」と声にす。**ハ**正ただに自ら那生の門を出づるを送るを待つに、忽たちち母親の來到らいどうに値ひ、喚わめびて醒めて將まさに來たらんとす。我一身の冷汗、乃すなはち是南柯の一夢なり。忙しく身は母親に參りて許多の閑話を絮くす。奴家の口に言の答こたへするなしと雖も、心の内に夢の中の事を思想し、何ぞ曾て懷こころを放たんや。行くも坐するも寧やすならず。自ら失う所有しゆりやうるが如きを覚ゆ。

『牡丹亭還魂記』「驚夢」、原漢文

右の引用文は、即ち杜麗娘が夢を見て、男子と出会い、夫婦の契をなした一段である。

そして、**三**その恋しい気持ち収こまられず、次の日にまた後花園へこつそりと昨日の夢を尋ねに行つた。これは所謂第十二齣の「尋夢」である。彼女は牡丹亭芍薬闌の辺りまで来て、夢の中の情景をもう一度見たかつたが、「尋來尋去、都不見了。牡丹亭、芍薬闌、怎生這般淒涼冷落、杳無人跡。好不傷心也。」（あちらを尋ねてもこちらを尋ねても、全く見えない。牡丹亭や芍薬の花壇、どうしてこんなになびしく、人影もないのでしょうか。ほんとうに悲しいです。）と昨夜の夢の中の美しい風景がすべてなくなり、会いたい人の影すらないことを悲しんだのであつた。

杜麗娘の「驚夢」、「尋夢」と、女一の宮の「夢のたぐち」とを比較すると、以下の四つの共通点が見とれる。

イ 昼寝をする時に、女の主人公が夢を見る点。

ロ 夢の中で、若くて美しい男の人と出会い、契を結んだ点。

- 〔八〕 男の人と情が溶け合う時に、母親か父親の出現によって、女の主人公が驚かされ、大量の汗をかき、目覚めた点。
- 〔二〕 夢が醒めても、夢の中の人が恋しくて、もう一度会おうと試みた点。

これらの共通点から、女一の宮の「夢のたぐち」は杜麗娘の「驚夢」と「尋夢」を参考にして作られたものではないかと筆者は考える。

『舶載書目』（大庭脩編 一九七二年）によると、『牡丹亭』は元文五年（一七四〇）に日本に舶載されたと記録されている。雅望が戯曲の粗筋を利用して、自分の読本に用いるのは、日常茶飯事のことである。彼が李漁の『笠翁伝奇十種』を愛読し、その中の「巧团円伝奇」、「奈可天伝奇」をそれぞれ読本の『近江県物語』と『天羽衣物語』に取り入れていたことはすでに述べてきたとおりである。

湯頭祖の『牡丹亭』は実は馮夢龍編の『燕居筆記』の中にある文言文で書かれた「杜麗娘記」によって改変を加え五十五齣の戯曲に仕上げたのである。明清では、「杜麗娘記」よりも、遥かに人々に知られ親しまれていたのは戯曲『牡丹亭』のほうであった。当時『牡丹亭』の評判が高く、「家傳戶誦、幾令『西廂』減価」⁽¹⁰⁾するほどであった。『牡丹亭』が出版され、人気があるため、それまで大流行していた『西廂記』の売れゆきが悪くなり、やむなく値段を下げた、というのである。

雅望と同時代を生きていた田能村竹田（一七七七〜一八三五）は、戯曲『西廂記』や『牡丹亭』を読み、戯曲の才子佳人の恋に憧れた。彼は大窪詩仏に与えた書簡の中では、「半夜酒醒夢回際、挑灯読西廂牡丹亭。未嘗不積卷浩歎。才難情難也。或謂鶯々麗娘並係夢中花、幻中月、実無有也。夫爾雖然、有事之可見、詩之可証、心目相接的見其人、何容一点疑□（□にある字は、言偏に疑）⁽¹¹⁾」とあるように、夜間酒が醒めて目覚めた時に、灯をつけて西廂記や牡丹亭を読むと書いている。そして、鶯鶯や、杜麗娘が本当に存在していた人物であり、疑うべきではないとも述べている。これは、当時の知識人が才子佳人の恋を描いた戯曲『牡丹亭』を読んだ証拠の一つである。

また第一部で扱った都賀庭鐘も『牡丹亭』を愛読したようである。中村幸彦氏の考察によると、都賀庭鐘の読書目録『過目抄』には、『牡丹亭』、『琵琶記』、『西廂記釈義』などの名や抄記が見られる⁽¹²⁾。知識人の中では『牡丹亭』はおそらく愛読されていたのであろう。

そして、先に述べた四つの共通点以外、全体の構成から見ても、『飛驒匠物語』と『牡丹亭』と共通点が見られるのである。

〔ホ〕 女一の宮にしても、杜麗娘にしても、二人とも最後には夢で見た男の主人公と結婚した点。

〔ヘ〕 男女二人の結婚に対して、一方の親が強く反対した点（女一の宮の場合は、山人の母が強く反対し、杜麗娘の場合は、杜麗娘の父親が強く反対した。）

このように見ると、『飛驒匠物語』が『牡丹亭』を利用した可能性は十分に高いことが分かる。

雅望が利用した李漁の戯曲「巧团円伝奇」の主人公は才子佳人であった。雅望は、同じく才子佳人の愛を描いた『牡丹亭』に関心を寄せたことは、十分に推測できる。すなわち、雅望は清の李漁の戯曲だけではなく、明の湯頭祖の戯曲にも目を向けていたのである。夢で才子である男と出会い、夫婦の契を交わし、また夢が醒めても、もう一度夢の情景を見たい願う杜麗娘が雅望に与えた印象は、深かったであろう。彼は自分の作品にも杜麗娘のような女性を登場させ、彼女にも夢を見させ、将来自分の夫となるべき人物と出あわせるのであった。この夢の趣向の利用によって、物語は、夢想的になっていくと同時に、女一の宮と夢の中の男とが将来夫婦になることが暗示されていた。その効果が雅望の狙いの一つであろう。『牡丹亭』の「驚夢」と「尋夢」の二幕が『飛驒匠物語』の「夢のたぐち」に用いられることによって、女一の宮が夢の中の男性を切々に思い慕う気持ちだが、うまく表現されたのである。

五 終わりに

以上『飛驒匠物語』巻一の「ほうらいの山」と巻四の「夢のたぐち」に絞り、その中に含まれた中国白話小説と戯曲の趣向利用を考察した。「ほうらいの山」で、墨繩と松光が牧童に出会う場面は、『水滸伝』の第一回に見られる牧童の一条によるものである。『水滸伝』における牧童の一条は馬琴の『八犬伝』にも利用されている。牧童の出現と彼の語りにより、異境に入った神秘性が湧き出ている。

また、仙人が契をなしたことで鍊丹が成就できず、二人の恋が発覚したのは、『初刻拍案驚奇』巻十八によるものであると思われる。

女一の宮が夢を見る「夢のたぐち」の章は、明の湯頭祖の名作『牡丹亭』の「驚夢」「尋夢」の二幕からヒントを得て、書かれたものであることは考察してきたとおりである。妙

齡に当る二人の女性は、昼寝をして、夢を見て、夢の中で美しい男性と語りあい、夫婦の契をなす。そして、夢が醒めても、尚男性に会いたく、もう一度夢を見て、夢の中の人を捜す、というところは、驚くほど共通している。

雅望の清の李漁の戯曲をよく利用することはいままで指摘されてきたとおりであるが、彼は明の湯頭祖の戯曲まで目を向けて、これを読んで自分の作品に取り入れた事はやはり注目すべき点である。『牡丹亭』の一番有名な「驚夢」、「尋夢」の二幕にいち早く目を通し、その妙味を得てそして自分の読本に取り入れたのである。

『牡丹亭』は知識人の間でよく読まれたことであろうが、これを読本に翻案した人は、雅望以外はまだ見当たらないのである。

『牡丹亭』の日本での受容は、まだ明らかになってはいないが、戯曲を愛読し、作品の中によく戯曲の趣向を取り入れた雅望の読本においては、『牡丹亭』の受容の先端が見られたのではないかと筆者は考える。明清の戯曲を自分の読本に積極的に取り入れ、これを自分の読本に活かしているのは、雅望の読本の独特な特徴であると言えよう。そもそも彼の有名な『近江県物語』の枠組みは一本の「巧団円伝奇」から借りたのである。雅望の戯曲への愛着はここからも見られるのではなからうか。

注

- 1 『飛驒匠物語』からの引用箇所は『石川雅望集』（国書刊行会 一九九三年）による。『石川雅望集』における仮名遣い、振り仮名は底本通りにしているので、本章での引用もそのままにした。
- 2 岡島冠山は『通俗忠義水滸伝』を上編、中編、下編をそれぞれ、宝暦七年、安永元年、天明四年に出した。引用の部分は『通俗忠義水滸伝』（近世白話小説翻訳集第十一巻 汲古書院 一九八七年）第一回によるものである。
- 3 石川雅望『ねぎめのすさび』（日本随筆大成第三期一 吉川弘文館 一九七六年）
- 4 小池藤五郎校訂『南総里見八犬伝』（岩波書店 一九九〇年）
- 5 播本真一「『南総里見八犬伝』第十二回を読む」（堀切実編『近世文学研究の新展開——俳諧と小説』所収 ペリかん社 二〇〇四年）
- 6 「杜子春三入長安」は唐代伝奇「杜子春」を基に複雑にしたものである。

- 7 拙稿「石川雅望読本『近江県物語』における中国白話小説の趣向利用について―『女仙外史』、『醒世恒言』と『拍案驚奇』を中心に―」（『和漢比較文学』第五十一号）本論文第二部第二章に収めている。
- 8 麻生磯次『江戸文学と中国文学』（三省堂 一九四六年）一二二頁。
- 9 『牡丹亭』の引用箇所は、『牡丹亭』（中国古典文学読本叢書 人民文学出版社 一九七八年）による。元は漢文である。適宜読み下しをした。
- 10 沈徳符『顧曲雜言』（早稲田大学蔵書 請求番号 文庫 19 F0170 1-12）
- 11 田能村竹田『竹田先生文藁』（大分県先哲叢書『田能村竹田資料集』詩文篇一九九三年）一五七頁。句読点は筆者が適宜につけたものである。
- 12 中村幸彦『中村幸彦著作集』第七卷第一章「唐話の流行と白話文学書の輸入」四九〇～五〇頁

第七章 雅望と馬琴

—『笠翁伝奇十種』と『女仙外史』の利用法を中心に—

一 はじめに

従来、馬琴と京伝の名を並べて二人を比較する論考はあるが、馬琴と雅望とを比較する論考はあまりないのである。これは、和文をもって数少ない読本を書いた雅望は、大量の読本作品を世に問うた馬琴と較べものにならないからかもしれない。が、江戸読本史上において、馬琴と京伝の存在だけが注目され、雅望が軽く見られてきた一面もあるう。

馬琴は『近世物之本江戸作者部類』では、雅望を一人の読本作者として見ていないようであり、『作者部類』には雅望の名前さえ見あたらない。この理由は、馬琴の『本朝水滸伝』を讀む並びに批評』の中に求めることができる。

馬琴はこの批評の中で以下のように述べている。¹⁾

此よし野物語（筆者注、本朝水滸傳の一名）の作者綾足は、古学に志浅からねば、その才を売らんとて、西山物語并にこの策子をも、古言もてつゞりしなり、しかれども言葉をいにしへにならひて、事は今の世の有さまにもせしくだりも多かれば、いかにぞやと思ふふしく、すくなからず、まいてやからくになる稗史を父母として、かゝる物語を作らんに、雅言もてものせんとしつること、かへすくもあやまりなり（中略）又六樹園が都の手ぶり、よし原十二時、などいふふみををこし、源氏物語の文にならひて、今の世のありさまを綴りしを、當時めでたしとて、玩ぶものもありけれど、これらのふみは、只その景致を、いにしへぶりに寫せしのみ、情をうつし、趣を盡すものにあらざれば、得たる筆には綴りもしけん、さればとて世に行るゝにあらず、畢竟楽屋の評判のみ、賣物にはなしがたかり、（中略）今の世に生れて草紙物語を作らんに、雅語正文もてつゞりては、勞して功なく、且情を寫し趣を盡すことは、得ならぬものなり

すなわち、読本は俗語で書くべきものであり、雅言をもって綴るべきではないというのが馬琴の主張である。しかし、雅望は綾足と同様で、雅言を以って物語を作っているのあり、これは馬琴の読本に対する考えとずれていた。

しかし、雅望の読本は雅言を用いるからといって、果たして評価に値しないと云えるの

であろうか。事実、第二章で触れたように、大田南畝は雅望の読本を賞賛していた。また近代では、永井荷風が雅望の読本を高く評価し、「文章の優美なるは上田秋成の雨月物語に匹敵すべく、全篇の布局構想に至つては寧雨月の上に在りと謂ふ可し、余の縣物語をよみて最興味を覚えたるは優雅なる滑稽の趣致に富みたるを以てなり、元来わが国の文学には古今を通じて雅馴なる滑稽即洋語の Humor に適すべきもの殆稀なり、是を以て論ずれば六樹園の小説は江戸文学史上の珍珠にして滑稽小説の規矩となすべきものなり」と記している。³⁾

雅望の読本は、数と規模の大きさにおいては、馬琴に劣つてはいるが、中国白話文学を取り入れる手法においては、必ずしも馬琴に劣つてはいないと思われる。本章では、二人がともに典拠とした清の李漁の戯曲『笠翁伝奇十種』と清の呂熊の白話小説『女仙外史』⁴⁾とに注目し、両者を雅望と馬琴とがどのように利用したか、その手法の特徴について考察したい。

二 雅望と馬琴の『笠翁伝奇十種』の利用法

雅望が李漁の『笠翁伝奇十種』の「巧団円伝奇」を翻案して『近江県物語』を著し、「奈可天伝奇」の趣向を『天羽衣』に取り入れ、「厩中楼伝奇」の謫仙の男女が巡り会い結婚する趣向を『飛騨匠物語』に用いたことは、今まで述べてきたとおりである。その中、「奈可天伝奇」、「厩中楼伝奇」はただ部分的な趣向が取り入れられたのに対して、「巧団円伝奇」は全体的な粗筋が『近江県物語』に利用されていたのである。ここから、雅望の読本は李漁の戯曲と密接な関係を持つてることが分かる。

実は、雅望だけではなく、江戸読本において、李漁の戯曲を取り入れた作家はほかにもある。馬琴はその一人である。享和四年（文化元年（一八〇四））馬琴は『笠翁伝奇十種』の「玉搔頭伝奇」を翻案し、形も中国の戯曲に習い、『曲亭伝奇花釵児』⁵⁾（以下『花釵児』と略す）を出版した。そのほか、文化七年出版の『常夏草紙』⁶⁾は『笠翁伝奇十種』の「風箏誤伝奇」を用いている。また、振鷺亭が文化七年に出版した『吹泳妹背山』⁷⁾も「風箏誤伝奇」を利用している。李漁の戯曲が江戸読本に与えた影響はここからも窺うことができる。

本節では、雅望と馬琴の『笠翁伝奇十種』の利用法に絞り、雅望の「巧団円伝奇」の利用法と、馬琴の「玉搔頭伝奇」の利用法とを比較し、二人がいかに李漁の戯曲を自分の読

本に取り入れていたかを見てみたい。

中村幸彦氏は「滝沢馬琴の小説観」^⑤で文政十二年三月二十六日出の殿村篠斎宛の書簡を紹介し、その中に「このはなかんさしは笠翁十種曲の紫釵記を訳せしものにて、書さまこの書によれば伝奇のよみようを会得せられん為にあらはし候き」と、馬琴自ら『花釵児』の典拠を「紫釵記」としていることを指摘した。が、「紫釵記」は明代の湯頭祖の作品であり、清の李漁の作品ではない。徳田武氏はこれを馬琴の記憶の間違いとし、本当の典拠は『笠翁伝奇十種』の「玉搔頭伝奇」であると指摘した。

「玉搔頭伝奇」の粗筋については、徳田氏が齟齬^{そご}とに紹介しているため、ここでは省略する。ただ簡単に『花釵児』の内容をまとめることにする。

第十三代將軍足利義輝は宮中に美女が少ないといい、美女を求めに、松永大膳久秀を連れて変装して宮中を出た。神崎で舞妓の桂と契りをなし、自分の將軍の身分を明かさないうまま夫婦になる約束をした。別れるときに桂が梅の釵^{かんざし}を足利に渡し、これを自分を迎える時の証拠とした。足利は都に戻り、人を遣わし桂を迎えに来させるのだが、肝心の証拠である釵を落としてしまったため、桂は従わず、貞潔を守るために、母と神崎から逃げ出した。

一方、義輝の落とした釵を拾った名波豊後武政の娘である玉苗^{たまなえ}は、義輝を見初め、彼を慕う。桂の似顔絵を持って桂を探している兵士は、玉苗を見かけ、彼女を桂と見間違え、義輝のところへ送った。

桂と母は盗人に襲われたが、名波豊後武政に助けられ、彼の家に連れられていった。名波武政は自分の娘玉苗が義輝の寵愛を受けていることを知り、自分の家にいる本当の桂を殺そうとしたが、失敗し切腹した。玉苗は父親と三好長慶、松永久秀とが内通して謀反を企てていることを知り、恥しくなり自殺した。三好長慶・松長久秀も細川晴経^{はるつね}、岩浪主税^{ちから}に破られ、九州の陶晴賢^{すえはるかた}は細川晴元^{はるもと}、郡乙就^{こおりおとじゆく}によってうち滅ぼされた。桂は義輝に宮中に迎えられ、御台所と定められた。

簡単ではあるが、右の粗筋を読むだけで、これが李漁の「玉搔頭伝奇」の粗筋に沿い翻案した作品であることは分かる。両作品の人物の対応関係を以下の表にまとめる。

「玉搔頭伝奇」	『花釵児』
妓女の劉倩倩	舞妓の桂
明の武宗帝	將軍の足利義輝
范淑芳	玉苗
劉瑾	三好長慶
朱彬	松永久秀
許進、許讚父子	細川晴元・細川晴経父子
王守仁	郡乙就
寧王	すえはるかた 陶晴賢
範欽	名波武政
劉の母親	桂の母親
牽頭の馬不進、牛何之	太鼓持ちの鶴井左平吾、亀田六次
絵師	絵師の浮世又平
	浪主馬之進行道（原典にない人物）

(二) 雅望と馬琴の『笠翁伝奇十種』を利用する際に使う表現形式

『花釵児』の目次は以下のようになっている。

拈 要ハ	観場へおちぬ伝奇の開場始事
第一齣ハ	浪遊看花
第二齣ハ	嫖院締盟
第三齣ハ	拾愁讐玉
第四齣ハ	戍節亡命
第五齣ハ	漢認仮做真
大尾ハ	看官がおかしがる国風の千秋楽事

また、『笠翁伝奇十種』の「玉搔頭伝奇」の目次は、

第一齣 拈要

第二齣 呼嵩

第三齣 分任

(中略)

第三十齣 媲美

のようになっていいる。

『花釵児』の目次の書き方は明かに「玉搔頭伝奇」の目次に習ったものであり、「齣」と「拈要」の用語をそのまま利用している。目次だけではなく、本文の書き方も戯曲に沿っているのである。第二齣の内容を部分的に引用する。

青楼曲しだ

老旦らうぼが上いづる

老おへば又接穂またつぎほの冬木名ふゆきなにかほる、こゝもながれの津つの国くにや、梅

いちはやきかんざきに、母子おやこふたりの詫住居わびずまひ、娘むすめかつらが舞まひの手も、まはりかねたる

内証ないしやうなり。(中略) 跡あとに老母らうぼは、老旦らうぼが上いづる 「ホンニ マアこのごろの日の短みぢかさ。この桂かつらは

まだ起おきやらぬか。娘むすめく」とよぶ声こゑに、巨おや上いづる 「アイト返事へんじもしどけなき、寝巻ねまきの

まゝの美人虹びじんこう、裳引むすびきつゝ立出たれば、老旦らうぼが上いづる 「イヤノウ娘むすめ。夕ア夜明ゆふあかししやつたゆへ、

けふは定さだめて眠ねむからふが、昼寝ひるねすぐすはきつい毒どく。手水てうづの湯ゆも沸わいてある。顔かほなをして飯まな

どたべや」巨おや上いづる 「アイ。したが母様はは。もふ何時なんどきでござんすぞへ」(以後省略)

『花釵児』の第二齣は、「玉搔頭伝奇」の第四齣「訊玉」、第七齣「箴哄」、第八齣「締盟」の三齣を翻案したものである。右に引用した部分は第四齣の「訊玉」を翻案した部分の一節である。右の引用文から分かるように、まず曲の名前「青楼曲」があり、そして役者(生、旦、淨、末、丑)が登場してセリフを言うのである。曲名や役者が登場する部分を示す文字は□で囲まれている。

「玉搔頭」では、曲名は「桂枝香」、「紫蘇丸」のように「」で囲まれており、人物が登場する時は「老旦上」のように「」の括弧で示され、人物がセリフを言う時には「老旦」のようにセリフの前に括弧を使い誰かのセリフであるかを説明する手法が取り入れられている。馬琴は、これにならいつつ、括弧を全部□に改めたのである。

つまり、馬琴の『花釵児』は、表現形式の上から見れば、まさしく一つの戯曲である。彼が自ら殿村篠斎宛の書簡で言っていたように、「このはなかんさしは笠翁十種曲を訳したものであった。馬琴自身からすれば、翻案というより、むしろ翻訳に近かったのである

う。そのため、作品の表現の面においては、そのまま戯曲の形をとっていたのである。

これは、同じく『笠翁伝奇十種』を利用した雅望にはないところである。第一章で雅望の『笠翁伝奇十種』の利用法について論じたが、雅望は「巧団円伝奇」の粗筋に沿って翻案をしたのであるが、表現形式上では戯曲の形をとっておらず、物語は第一の「ふなをか」から第十一章の「うどんげ」までの長編読本の形をしているのである。

では、なぜ馬琴は戯曲の形をそのまま取っていたのであろうか。

馬琴は『花釵児』末尾の「評論」で、次のように語っている。

凡伝奇小説は、我俗子の克解する処に^{ところ}あらず。もし悉漢字をもてこれを綴らば、^{くわじん}華人の小説を讀に^{よむ}しかず。若悉く我戯文のごとくせば、^{またわがけぶん}還我戯文の糟粕也。何を以てか新研^{しんけん}を^{はつす}発といはん。此編原台上の曲にあらず。文章国字にあらざれば^{ちちゆう}稚蒙に通じがたく、^{せいだんしかぐ}生旦云々の俗語をまじへざれば、^{からやまと}彼我の雑劇、^{こと}異ならざるをあかしがたし。是此書の^{まきくしき}脚色にして、^{きくしやいちばん}作者一番の趣意也。^{しゆみ}(中略)言実に過たるは戯文にあらず。言勸懲の意^{なきも}なきも、又戯文にあらず。其文俗にして其意俚ならず。是を風流の文采とはいふべし。

すなわち、馬琴が中国の戯曲の体裁にならったのは、新しいものを作りだしたいからであり、戯曲の形式を取りながら、国字を用いる、そこに馬琴の趣意があった。また、この劇文には虚構があり、勸善懲惡の意があり、俗文を用いながらも、言おうとすることは俗ではないとも馬琴は言っている。

高木元氏は『江戸読本の研究』⁽¹⁰⁾で「花釵児の方は中国の芝居を浄瑠璃風に翻案し、かつ中国戯曲の脚本様式によって表現したものである。ともに彼我の戯曲や小説というジャンルを、それぞれ取り合わせて書かれた点が新鮮であった」と述べている。高木氏も馬琴の特別な表現形式に注目したようである。

また、徳田武氏も「演劇的趣向で勸懲を表し、読者に悪とグロテスクの魅力を味わわせることが馬琴の作法なのである」と述べている。徳田氏の言っているように、『花釵児』は『高尾船字文』(寛政八年刊)に続く、読本習作時代の作品であり、読本創作の方法を模索していた⁽¹²⁾頃の作品である。事実、馬琴が戯曲の様式を使い読本を書いた作品は、『花釵児』しかなかったのである。馬琴は読本の創作方法を試行錯誤している中で、李漁の戯曲の体裁をそのまま借りたのである。

同じく李漁の戯曲を素材に使いながら、これをどういう体裁で自分の読本に反映するかは、雅望と馬琴の創作手法の一つ目の違いになるのであろう。

次節では、二人が翻案をするときに、各自重視していたところをみてみたい。

(二) 雅望と馬琴の翻案において各々重んじるもの

すでに第一章で述べたのであるが、「巧団円伝奇」を翻案した『近江県物語』には悪役の常人が設けられている。これは「巧団円伝奇」の悪少年から生まれた人物像であり、その身には滑稽な要素を雅望が付け加えていた。常人は一人の悪役であると同時に、滑稽を引き起こす役割をも大いに果たしている。『近江県物語』は体裁上戯曲の形をとっていないが、滑稽の人物を設けて読者を笑わせる点は戯曲の「丑角」を設けて笑いを引き起こすのと同じである。常人は一人の悪役であると同時に、滑稽を引き起こす「丑角」でもあった。雅望が『笠翁伝奇十種』の滑稽を自分の読本に意識的に取り入れたことは第一章で述べたごとくである。雅望は滑稽の要素を取り入れ、笑いを引き起こす面に力を入れているのである。永井荷風は鋭くこの点に気づき、「江戸文学史上の珍珠にして滑稽小説の規矩となすべきものなり」と賞賛したわけである。

しかし、「玉搔頭伝奇」を翻案した馬琴の『花釵児』では、原典の丑角の朱彬に当る かたきやく 丑の松永大膳には作品全篇を読み通しても、笑いを引き起こす場面がなかった。『花釵児』には滑稽のシーンがほとんどない。

原典の「玉搔頭伝奇」には、丑角の朱彬は奸臣の劉瑾と内通して、武宗の政権を覆そうと図る。武宗の微行についてきた朱彬は、劉倩倩のところ¹に武宗の代わりに前もって挨拶に行く。そこで太鼓持ちの馬不進、牛何之に出会う。馬不進と牛何之は朱彬も劉倩倩の縁談を取り持つために来た²と分かると、座席に座ったまま朱彬に席を譲らない。朱彬が座ろうとすると、二人は「私たちは一人は馬、一人は牛だ。だが、あなたはただの猪(筆者注、朱の発音はイノシシの発音と同じであり、人を罵る時はよく人を猪に喩えたりする)なのだ。馬も牛もイノシシより上だから、この席はわし二人が座るべきなのだ」と主張する。こう言われた朱彬は、自分はこの地域の太鼓持ちを管轄する一番偉い人間だと言い張る。すると、馬不進と牛何之は怒り、二人は朱彬を囲み殴る。

この一段を読んだ読者たちの中で、ここで笑わないものは恐らくいないであろう。三人を三つの動物に喩える発想、悪役の朱彬が大口を言ったせいで殴られるという滑稽な展開などは、この一段の笑いどころである。

しかし、朱彬の馬不進と牛何之との喧嘩の滑稽味のあるこの一段を、馬琴はそのまま使

は「淨」、「副淨」、「丑」の三つをすべて「かたき」役としている。馬琴は「丑」の重要な滑稽を起こす役目にまだ気づいていなかったのかもしれない。あるいは、気づいたといつても、無視していたのかもしれない。

原典で丑角の朱彬が馬不進と牛何之に殴られる場面は、ここではまったく逆となっており、松永は二人の太鼓持ちを殴り桂の親子を助けた設定となっている。そして、最後に二人に金を渡し、菓の代としたのである。この設定は原典の朱彬には見られず、二人の人物像もこれで程遠くなっている。朱彬の愚かさとは反対に、松永は多少の知恵が与えられている。事実、松永の金を受け取った太鼓持ちの二人は、のちに松永を案内して義輝を襲いに来たのである。松永は金を使い人の心をまるめこむのが上手であった。ここからも松永の深謀な一面が窺われる。

このように、馬琴は原典の笑いを引き起こす丑角である朱彬を翻案するに当たり、その滑稽味を無くし、周到なばかりごとをする深謀な人として新たに松永大膳という登場人物を作り上げたのである。

馬琴の改変はこれだけではない。原典の范淑芳の父親である范欽が武宗に忠実で、湖南の地を固く守り続けた一人の忠臣として描かれているのに対して、『花釵児』の玉苗の父親豊後武政は一人の奸臣に変えられている。彼は三好・松永と内通し、義輝を覆そうとした。自分の娘玉苗の地位を保つてあげようと、本当の桂を部下に殺害させるまで計画したのであった。しかし、その部下は実は一人の間者であり、本当の身分は細川晴元の家来だったのである。晴元は三好・松永・名波三人の謀反を察知し、家来を遣わし、武政を監視させていた。原典の善役の忠臣を悪役の奸臣に変えるところは、馬琴の独創である。間者を設けることと、名波を一人の悪役にすることによって、原典の「玉搔頭」より『花釵児』の筋が一層面白くかつ複雑になったのである。名波の家に仕えた若党が一人の間者である設定は、都賀庭鐘の『英草紙』第七篇にある草薙大蔵が楠弾正左衛門の計略で義氏のところに行つて間諜となつて後に義氏を滅ぼす一条とよく似ている（詳しくは第一部第一章をご参照されたい）。そして、名波を最後自ら切腹させたのは、悪を徴する所謂馬琴の「懲悪」の小説観が働いたものである。

「玉搔頭伝奇」の結末は、武宗が劉情倩とやつと巡り会え、范淑芳と劉情倩の二人を貴妃にするというハッピーエンディングとなっている。しかし、『花釵児』では馬琴は范淑芳に当る人物―玉苗を自害させたのである。晴元の家来がこう語る。

そもく此たび天下てんかの乱みだれは、御ごン大将たいしょうかつらいろが色いろに迷まよひしより事こと起おこると衆しゅ軍ぐんの風聞ふうぶん。

忠臣ちゆうしんに評議ひやうぎあつて、馬塊ばくはいが原はらのむかしにならひ、はやく桂かつらが首くびうつて、諸軍勢しよぐんぜいを励はげますべしと容子ようすを聞きけばかつらにあらず、御辺ごへんの娘むすめを玉苗姫たまなへひめ。父ちちの悪事あくじ、桂かつらが貞心ていしん、聞きにかなしく直すくさま自害じがい。義輝よしてる公こう不便ふびんにおぼしめし、彼かれに犬死いぬじさせまじと、その首くびを切きつて桂かつらが首くびとし、諸軍勢しよぐんぜいにしめせしかば、士卒しそつたちまち勇みたち、鋭氣えいき日ひごろに百倍ひやくばいして、なんなく三好松永みよしを追おつはらひ、都みやこはじめて無事ぶじに帰きす。

すなわち、玉苗は桂の代わりに死んだのである。軍士たちは天下が乱れているのは、桂のせいであると、桂の首を斬ることを要求した。これを聞いた玉苗は、「父の悪事、桂が貞心」を知るとすぐさま自害した。軍士たちが義輝の女色に耽るのに反発し、桂の首を斬ることを要求したとする一条は、徳田氏が『曲亭伝奇花釵児』の注で指摘した如く、唐の玄宗の兵士が馬塊坡で楊貴妃を討つことを要求した趣向を踏まえている。これを作品に取り入れるのは、統治者の好色で天下が乱れることへの一種の馬琴の戒めとでも言えよう。唐の歴史を鑑とし、同じ間違いをしてはいけないと統治者への警鐘を鳴らしているのかもしれない。とにかく、結末はめでたい部分もあるが、戒めをも残している。むしろ戒めの方がより大いに読者の心に響くのであろう。

『笠翁伝奇十種』を利用する際、雅望と馬琴の重視しているところが違うことはこれで明らかになってくる。雅望は『笠翁伝奇十種』の滑稽なところに注目し積極的に自分の読本に滑稽味を取り入れるのに対して、馬琴はわざと原典にある丑角の滑稽味を無くし、厳粛な姿勢と真剣な態度をとっている。雅望は「巧団円伝奇」の大団円の結末に習い、『近江県物語』をも大団円のハッピーエンディングで終わらせるのに対して、馬琴の『花釵児』は一見めでたい部分―悪人が懲罰されて義輝と桂もめでたく巡り会えた―もあるが、ほかに悲しい部分、人を戒める部分もある。すなわち、君臣を誠め政治色の厚い作品として作りあげられている。

(三) 素材を選ぶときの着眼点

『笠翁伝奇十種』はその名の通り、所謂「奈何天伝奇」、「比目魚伝奇」、「玉搔頭伝奇」、「巧団円伝奇」、「慎鸞交伝奇」、「憐香伴伝奇」、「風箏誤伝奇」、「蜃中楼伝奇」、「風求鳳伝奇」、「意中縁伝奇」の十種の伝奇戯曲を収めている。これらの十種曲はいずれも才子佳人の愛を描く伝奇であり、喜劇の色合いが濃厚である。その中から、雅望は「巧団円伝奇」

を選び、馬琴は「玉搔頭伝奇」を選び、それぞれ『近江県物語』と『花釵児』に翻案したのである。

雅望は「巧団円伝奇」の男の主人公が恋人及び実の両親と奇跡的にめぐり会う構想に魅了され、これを『近江県物語』に取り入れたのである。その上、原典の「尺」を「笏」に変え、この小道具に重要な役割を果たさせたことは第一章と第二章で述べた通りである。原典の姚克承と曹小姐は一組の才子佳人である。

ところで、馬琴は「玉搔頭伝奇」が気に入った。これはなぜであろうか。十種曲の中で、唯一歴史上の統治者が登場したのは、この「玉搔頭伝奇」である。明の武宗とその忠臣たちが登場しているのである。内容は武宗が女色を愛する部分もあるが、忠臣が奸臣と戦い、武宗の政権を守る政治性の強い作品でもある。これはほかの曲に見られないところである。これに気づいた馬琴は、ほかではなく、この「玉搔頭伝奇」を素材に選り翻案を試みたのである。

徳田武氏は「玉搔頭伝奇」について次のように述べている。

「忠臣」と「色」とを政治性と人情性という言葉に置きかえるならば、見てきたように「玉搔頭」は、歴史性・政治性・人情性をあわせ備えた作品といえそれらは、『水滸伝』『三国志演義』『平妖伝』『女仙外史』などという中国の章回体演義小説や、また後年の馬琴がそれらに学んで完成していく史伝物読本が表看板として備えている要素であった。すなわち、「玉搔頭」のこの点に、将来の自分の進むべき方向を漠然とした形ではあるが嗅ぎ取ったのではなからうか。(中略)「玉搔頭」は、劉倩倩と范淑芳の情話をもあわせ備えてはいるが、『十種曲』中最も「硬骨の文学」ともいえる。⁽¹³⁾

氏は「玉搔頭伝奇」を「硬骨の文学」とし、その中から馬琴の模索している読本のあるべき要素があったと言っている。

中村幸彦氏は「滝沢馬琴の小説観」⁽¹⁴⁾の中で、馬琴はずっと読本の作風はいかなるものがあるべきかを問い続け、その答えは文化三年に書き始めた『椿説弓張月』の時に湧いてきたのであると述べている。すなわち馬琴は、中国の『水滸伝』『三国志演義』の演義体を習うべきであると見つけた。そして以後の読本では、馬琴はこの演義体を着々と固めたのである。

文化元年の『花釵児』の時点では、馬琴はまだ中国の章回演義小説をうまく利用することができていないようであったが、うまく利用する方向に近づこうとしたのであった。「玉

搔頭伝奇」が歴史の人物を出し、史実に基づき物語を虚構している―ある意味で一種の演義体である―ことに馬琴は気づいたのである。

「玉搔頭伝奇」の総評では、睡卿祭酒杜浚が次のように評している。

明朝の三百年間、許靈室（筆者注、許進を指す）家門最も盛んなり。而して事業も復た観るべき有り。王山陰（筆者注、王守仁を指す）の理学称尊せられ、而して功烈尤も丕著なり。二公の事 籍に登載せりと雖も、未だ管弦に播かず、婦女孩童をして尽くその面目を識らしめざるも、亦た憾を缺く事なり。武宗の面目に至りては、久しく優孟衣冠に現はる。嫖院の一事、家ごとに喩へにして戸ごとに曉ると謂ふべき者なり。

（中略）是の劇 一君二臣の事を合はせ、而して聯絡して文を成し、孩童婦女をして、皆く二公君を匡すの実有るを知らしむ。二公既に君を匡すの実有れば、則ち武宗も亦た与に人を知るの明有り。是に由りて之れを觀れば、其の僥倖にして国を失ふに至らざるは、亦た理の當に無かるべき所にして、事の合に有るべき所のものなり。此れを以て勧めを臣に示せば、則ち臣の責愈よ重く、此れを以て誠めを君に示せば、則ち君体愈よ嚴なら（15）や。

（「玉搔頭伝奇」総評 原漢文）

馬琴はおそらくこれを日本の「君と臣にも示し」たかったのであろう。「臣の責任と君体の嚴」を期待していたのであろう。早期の読本において、馬琴はすでにこのような歴史性と政治性の備わる素材に目を惹かれたのであった。

君臣を戒めるため、馬琴は義輝を原典の武宗よりも愚かにしているのである。武宗は微行に出る前に、国の政を許進父子に任せるのに対して、義輝はすべてを奸臣の三好に頼んでいる。また、桂の家で夫婦の契をなした夜、松永の暗殺計画にもまったく気づいてなかった。幸い鶏の鳴る声で目ざめ、一命を取り留めることができたのである。義輝は武宗とは違い、彼は「人を知る明」がまったくない人物として描かれていたのであった。そこにも馬琴の苦心が見られる。義輝を愚かに描ければ描くほど、誠めの効果があるのである。

徳田武氏は『玉搔頭』の諸要素の内でも、とりわけその政治性が、治者の位置にある武士階級の家に生まれたことを誇りとし、何とか武家としての滝沢家を再興したいと終生もくろんでいたような馬琴の氣質に訴えたのではないか（16）といひ、馬琴の武士階級の身分、自分の家を再興しようとする心ばえが「玉搔頭伝奇」を素材にする一つの理由としている。

だが、雅望には、特にこのような傾向が見られなかったのである。雅望はとくに歴史や

政治などの要素を意識的に取り入れようとはしなかった。彼の利用した「奈可天伝奇」、「巧団円伝奇」、「蜃中楼伝奇」はいずれも政治性や歴史の色彩が濃くない作品である。統治者と統治者に仕える臣に、誠めを伝えようとする姿勢も見せなかったのである。彼は馬琴のように武士階級の家に生まれていなかった。彼は一人の町人であり、家は代々旅館を経営していた。武士階級を振興しようとする志はなかった。振興するどころか、むしろ権力の所有者への反発のほうが大きかったのである。『飛驒匠物語』には彼の反権力の姿勢が読み取れる。雅望の権力への反発は松田修氏「戯作者の秘めたる毒―石川雅望^{（一）}」が詳しい。以上、雅望と馬琴の『笠翁伝奇十種』を利用する時の特徴を見てきた。表現形式、翻案する時に重視するもの、素材を選ぶときの着眼点から分析した。馬琴は、戯曲の表現形式をそのまま取り、翻案する時に原典の滑稽の要素を減らし、勧善懲悪の面を強調した。そして、『笠翁伝奇十種』の中から一番政治と歴史の要素が強い「玉搔頭」を撰び、君臣を誠める一篇を成したのである。

馬琴とは違い、雅望は表現形式の面では戯曲の形を取っていないが、読本中に多くの笑いを取り入れている。これは戯曲の丑角の影響を受けていると考えられる。奇跡的な巡り会い方の構想を取り入れ、結末もハッピーエンディングで終わらせている。

これらの違いが出てくるのは、二人の経歴や身分の違いがあるからであろうが、小説を何物として読者に読ませるべきかについての考え方が違っているからでもある。雅望は笑いの中に悪を徴し読者を諭すことに力を入れ、馬琴は歴史の史実を背景に、演義体で語る勧善懲悪の方法に力を注いでいた。雅望が馬琴のように大作が多くなかったのは、演義体の小説法を取り入れなかったことであろう。

三 雅望と馬琴の『女仙外史』の利用法

雅望が『飛驒匠物語』において『女仙外史』を利用したことは第五章で述べた。

『女仙外史』の内容は今もう一度述べることはしないが、作品の構造だけに注目してみれば、これが二重構造を持っていることはすぐに分かる。その第一の構造は、嫦娥が人間界に下され、唐賽児という女性に生まれ変わり、仙界で嫦娥を妻にしようとした天狼星の生まれ変わりである明の成祖と対抗しつづけ、成祖が亡くなった後に、嫦娥は再び仙界に戻るという設定である。これは『女仙外史』の最初と最後の数回分を占めるだけで、決し

て物語の核心ではないが、唐賽児と成祖を仙界から下された仙人の生まれ変わりであると設定したところに、作者の思惑があったのであろう。なぜなら、普通の婦人が蜂起すると、反逆としか見られないのであるが、唐賽児は嫦娥の生まれ変わりであって、人間界に来たのは仙界での仇を討つためである。ゆえに建文帝を支持して、天狼星の転生である成祖と対抗しているのである。これはある意味で、唐賽児の蜂起を正当化しようとした作者呂熊のカムフラージュとも言えよう。

もう一つは、明の歴史上において、実際に成祖に対して蜂起をした婦人唐賽児を出し、「靖難の変」と関連を付けて、一種の演義を為した構造である。すなわち、唐賽児は、成祖に帝位を奪われた建文帝の遺臣たちの子供らを率いて、成祖と終始戦い、建文帝の年号を使用しつづけ、成祖を皇帝として認めず、成祖の在位期間、彼を一日も安心して皇帝の椅子に座らせることがなかったのであった。この部分は『女仙外史』の多くを占めており、『女仙外史』の中心部となっている。

今まで分析してきたとおり、雅望が利用したのは第一の構造であり、感情を動かした仙人が人間界に謫され、その恩愛情仇を俗の人間界で解決することによって、最後に仙界に戻った、というところである。

周知の通り、馬琴も『女仙外史』を用いて、『開卷驚奇侠客伝』（以下『侠客伝』と略す）（天保三年（一八三二）—天保六年（一八三五））を著したのである。雅望が一番目の構造に目を引かれたのに対して、馬琴の興味をそそったのは二番目の構造である。即ち、一人の女性¹が忠臣の後裔を率いて成祖と立ち向かうところであった。『侠客伝』では南朝の忠臣である楠正成の曾孫姑摩姫が登場して、隠形法を学び、代々の仇関係にあった足利義満のところに忍び入り、彼を暗殺した。姑摩姫を中心にして、館英直、野上史著演など幾多の忠臣の行動を描くところは、『女仙外史』に負うところが大きい。『女仙外史』には、方孝儒、景清、鉄鉉などの忠臣の子孫の活動が描かれている。

また、呂熊は『女仙外史』の序で以下のように述べている。

夫子 春秋を作る。一善有れば則ち挙げてこれを賞す。一悪有れば、則ちこれを罰す。（中略）晦菴（筆者注、朱熹の号）綱目（筆者注、『資治通鑑綱目』）を作る。邪正の辨を厳しくして、彰瘡の殊を顕す、春秋を継ぎて誅心の法を行ふ。凡そ此れは、皆な朝廷史官の史に非ざるなり。然るに大聖大賢ならば、蓋し実事を取りて之れを論ぜん。（中略）熊也た何人ぞ、敢て史を作るの列に附く。故に但だ諸を空言に託し以て外

史と為す¹」（原漢文）

呂熊は孔子が『春秋』を作り、朱熹が『資治通鑑綱目』を作る際に、「誅心の法」を行い、善があれば、必ずこれを賞し、悪があれば必ずこれを罰するという執筆態度を取ったことを述べた。そして彼もまた孔子と朱熹に倣い、「空言」を用いながら、外史を為すと、誅心の法を試みることを表明しているのである。

馬琴は『侠客伝』第二集引では「毎に歎ず今昔才子の筆、之を春秋心誅の文法に本づきて、而して雪恨の稗史を作る者、未だ之れ有らざるなり。是れ予が此の挙有る所以、今よりして後、是の書を見る者、予を以て謬りと為ざるときは、則ち古来人事の欠陥、其の恨みを銷するの一大快編為るを知らん」と言つて、自分が春秋心誅の法を行い、古来人事の欠陥を補い、それらの恨みを解くと述べている。馬琴も「春秋心誅」の言葉を使っているのは、『女仙外史』を意識していると思われる。馬琴は『八犬伝』第九輯卷之三十三簡端附録作者総自評の中でも、「春秋誅心」について言及している。「昔孔子の詩を削るや、猶淫娃の詞を遺して、芟も尽さざりけるは、後に戒を垂るゝなり。又心誅の文法をもて、春秋を作るに及びて、乱臣賊子は怕れしと云。果敢なき稗史物の本なりとも、学問の余力もてせる、真の作者は、この心操を見すもありけり。(中略)意衷は、清の逸田叟が、女仙外史に所謂、春秋心誅の筆に倣ふ、といはんは、烏澗がましかるべけれども、この余も本伝に、褒貶あり、そは知る人ぞ知るべからむ」とある。清の逸田叟(筆者注、呂熊の号)が孔子に倣い、春秋心誅の筆法を行うのは、おこがましいことではあるが、自分もこの第九輯では、褒めるべき人を褒め、貶すべき人を貶すと言っている。ここからも馬琴が『女仙外史』を意識していることが分かる。

また『侠客伝』第一集自序のところで馬琴は次のように述べている。

大凡此の二公(筆者注、新田義貞と楠正成)は、誠忠日月と光を争ふ。徳義流芳して既きず。惜しいかな枝葉再び振はず、榮枯得喪、南朝と終始せり。是を以て世人不平、以て遺憾と為す。余が固陋なる、敢て自ら料らず、寧ろ其の難きを排き、其の紛れを解き、叨りに旧記の闕文を補ひ、慢りに野乗の未だ言はざる所を載せて、義を演べ伝を立て、以て人の心を快くせんと思欲す。

馬琴には、南朝の忠臣の後裔が振るわないのを遺憾なこととし、野乗に言われていないことを本に載せて、演義の方法で伝を作り、人々の心を快くしようとの意図が見られる。「野乗の未だ言わざる所を載せて、義を演べ伝を立て」るのは、呂熊の「諸を空言に託して以て外史と為す」と、本質が同じである。同じく歴史上の欠陥を補おうとしているのである。

『女仙外史』が『侠客伝』に与えた影響は、麻生磯次氏に詳しい論がある。氏は、唐賽児が建文帝の忠臣の後裔を率いて、燕王と立ち向かう所が、南朝最員の馬琴の気に入ったところであったと述べ、姑摩姫は唐賽児の人物に倣って作られており、『侠客伝』は未完のままで筆が途絶えたのであったが、完成版の『侠客伝』はきっと姑摩姫が小六らの忠臣の後裔を率いて、足利氏と立ち向かう結末になっただろうと推測している。徳田武氏も「後南朝悲話―庭鐘・馬琴・逍遙―」⁽²²⁾の中で『侠客伝』の結末を予測し、そしてなぜこのように予測できるのかを論じている。

また黄智暉氏は「馬琴読本における春秋の筆法―『女仙外史』の影響を手掛かりに―」⁽²³⁾の論がある。氏は『女仙外史』を通して馬琴が「春秋誅心の法」を学び、『侠客伝』や『八犬伝』に使われていると述べ、「春秋の筆法を、馬琴は確かに『侠客伝』と『八犬伝』の執筆に用いており、特に前者は粉本の『女仙外史』以上に『春秋』を意識していると思われる」としている。

すなわち、馬琴が『女仙外史』から得たものは、ただ姑摩姫の人物造形や、『女仙外史』の二番目の構造だけではない。作者呂熊が「春秋誅心」を強調して、これを使って「外史を為す」ところも馬琴に大きな影響を与えたのである。そして、この方法は『侠客伝』だけではなく、ほかの読本にも馬琴は特技として使っているのである。彼の言った「之を春秋心誅の文法に本づきて、而して雪恨の稗史を作る者、未だ之れ有らざるなり。」という言葉は自分の自負と自信とが満々と満ち溢れている。

しかし、雅望は、『女仙外史』の第一番の構造にしか目を留めなかったのである。彼は馬琴のように建文帝、唐賽児を南朝の歴史人物に当て嵌め、馬琴のように義を演べることはやり及ばなかったが、第一番目の構造を使用することによって、作品は夢想的、ロマティックな一面が表現しだされたのであった。そして雅望の読本らしい結末―喜劇のハッピーエンディングで終わらせている。これは嫦娥が衆仙に迎えられ無事に仙界に戻ったところと合致している。

四 終わりに

水谷不倒氏は『草双紙と読本の研究』でこのように述べている。

六樹園は（中略）、馬琴と同じく支那小説の紹介者であるが、これまで余り聞こえなかったのは不運といはねばならぬ。之は文化文政の文壇唯一の紹介者である『作者部類』

が、六樹園を等閑に附したからで、其著者馬琴は前記の如く、文章の価値、趣向の新奇即ち翻案小説の価値を十分認めながら、読本作者として一言も六樹園の事に及んでをらぬ。所謂唐山の小説に対しては、馬琴と同功一体の人に拘らず、馬琴が自家の宣伝のみに努めて、六樹園の事を忌避したのは、眼上の瘤の如く邪魔であるからと猜せられても答弁の辞はあるまい。⁽²⁴⁾

水谷氏は、六樹園、つまり雅望の読本に対する馬琴の偏見を右のように語っているのである。「はじめに」のところで触れたが、馬琴が雅望を読本の作者としなかったのは、『本朝水滸伝を読む並びに批評』を見れば、その理由は何となく分かるのである。つまり、雅望が建部綾足と同じく雅文体を使っており、馬琴の読本の文体として認めた雅俗折衷の文体を使用していないからである。が、文体のことはさておき、雅望の読本の内容もずいぶん面白いのは否定できない事実であろう。

では、実際の生活の中では、二人はどういった関係であったのだろうか。交流は頻繁ではないものの、ともに大田南畝主催の「狂文会」に参加した記録はある。

南畝の日記『細推物理』享和三年の記事に以下のような記録がある。

閏正月十五日陰。狂文会兼題紙鳶のことば也。五老子、曲亭馬琴、芍薬亭、為川氏等来。島氏女来弄絃。今夜雪ふる。寒きことはなはだし。⁽²⁵⁾

また粕谷広紀氏の『石川雅望研究』⁽²⁶⁾の文化三年八月十五日の条に、「八月十五日、近藤重蔵の寓居にて、南畝らと歆月の宴」とあり、雅望と馬琴が月見の宴に一緒に参加したことがわかる。

二人がともに出席するイベントは、ほとんど大田南畝を介しているのであった。二人は大田南畝を通して知り合った可能性が高いだろう。

浜田啓介氏は「寛政享和期の曲亭馬琴に関する諸問題」の論文で、馬琴と雅望とは、「彼の若かりし日にやはり関係があったのである」と指摘している。その証拠として、馬琴の『著作堂雑記抄』にある記事を引いている。

『著作堂雑記抄』に、天保六年、前年に塵外楼清澄が死んだ事を記して、『清澄総角の時、予も面識なりき。其後相見ざる事二十余年』とある。清澄の享年から考えて、「相見ざる事二十余年」と「総角の時」とは矛盾するようだが、総角の時と言う方を採れば、寛政前期の清澄を、惹いてはその父飯盛を識っていたことになる。⁽²⁷⁾

これを受けて、粕谷氏は前掲書で以下のように述べている。

この記事（筆者注、馬琴の『著作堂雜記抄』天保六年に清澄について言及している記事）から私なりに推測すれば、馬琴と雅望の出会い、清澄の「総角の時」、すなわち「寛政十年ごろより享和二、三年の頃」（この時期は、浜田氏のいわゆる寛政前期とは異なるが）になる。（中略）雅望と馬琴の交流時期は、寛政十一年の南畝主催の「和文の会」としたほうが不自然ではない。⁽²⁸⁾

清澄は天明六年（一七八六）に生まれ、天保五年（一八三四）に没した。もし総角の時に会ったとするならば、やはり浜田氏の言われた寛政前期、寛政二年前後を指していると解釈すべきである。しかし、いずれにせよ、雅望と馬琴との交流は享和文化年間まで、馬琴の若かった時に限られるようである。

さて、このような二人であるが、読本を作るに当たり、鮮明な特性が出てくるのである。雅望は自分の和文に自信があり、読本に和文を用いて書いていた。それに対して、馬琴は読本は和文を用いるべきではなく、雅俗混交の文体を用いるべきだと主張した。

これに加えて、本章では、二人が同じく使った典拠——李漁の『笠翁傳奇十種』と呂熊の『女仙外史』の利用法に着目し、二人の読本の特徴を考察してきた。

雅望が受けた李漁の戯曲の影響は大きいようで、彼は滑稽と笑いを重視し、作品の結末はハッピーエンディングとなっている。笑いの中で読者を論しているのである。一方、馬琴の場合は、寧ろ李漁の戯曲の中の滑稽の部分でできるだけ減らし、政治と歴史の色合いの強い作品にしている。そこには真剣に自分の作品と向き合う馬琴の姿勢が読みとれる。そして、『女仙外史』を利用するにあたって、雅望が利用したのは、嫦娥が下されて、人間界で天狼星との間の「恩怨」を解消した後、天界に戻った構想であった。これを利用して、恋に落ちた男仙と女仙を人間界に下し、人間界で結婚させて、その愛を全うさせた後に天界に戻らせる、という構造にしたのである。だが、馬琴の場合は、『女仙外史』の中におけるこの「転生」の趣向ではなく、唐賽児が忠臣の後裔を集め、建文帝の帝位を奪った燕王に立ち向かう所と、呂熊の使った「春秋誅心」の方法とに引かれ、これを『侠客伝』に取り入れたのである。

雅望は馬琴のように多くの読本を世に残しているわけではないが、文体が雅文体を用いたからと言って、読本の作者と見られないのは妥当ではない。むしろ、雅文を用いる中で、

その滑稽がますます引き出されて、自分の読本を面白くさせたのであった。馬琴の読本はもちろん面白いが、雅望の読本への見直しも必要ではなからうか。

注

1 馬琴と京伝を比較する論は多いが、中村幸彦氏と水野稔氏はその中の代表と言えよう。中村幸彦氏には「京伝と馬琴」(『近世編2』)所収 三省堂 一九六九年)の論があり、水野氏には「京伝と馬琴」(『江戸小説論叢』)所収 中央公論社 一九七四年)がある。大高洋司氏は『京伝と馬琴…(稗史もの)読本様式の形成』(翰林書房 二〇一〇年)の著作がある。

2 曲亭馬琴『本朝水滸伝を読む并に批評』(『曲亭遺稿』)所収 国書刊行会 一九一一年)

3 永井荷風『断腸亭日乗』卷十三 昭和四年十月三十日の記事(岩波書店 一九八〇年)

4 鈴木重三・徳田武編『馬琴中編読本集成』(汲古書院 二〇〇〇年) 第十一卷「常夏草紙」の解題で徳田氏は、鳩の足に恋文を結び付ける趣向は、「風箏誤伝奇」の第七・八齣の韓世勲が風箏に艶情詩を記して飛ばし、淑娟がこれを拾って和韻するという趣向を転じたものであろう、と指摘している。

5 徳田武『秋成前後の中国白話小説』二十一頁 (勉誠出版 二〇一二年)

6 中村幸彦「滝沢馬琴の小説観」(『中村幸彦著作集』第一卷所収 中央公論社 一九八二年)

7 徳田武『日本近世小説と中国小説』(青裳堂書店 一九八七年) 第三部第一章『曲亭馬琴花釵児』と「玉搔頭伝奇」

8 『曲亭伝奇花釵児』からの本文の引用は新日本古典文学大系『曲亭馬琴花釵児』(徳田武氏校注 岩波書店 一九九二年)による。

9 「国立国会図書館デジタルコレクション」上に公開されている『曲亭伝奇花釵児』のデジタル資料 (<http://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/2534081>) で確認した。

10 高木元『江戸読本の研究…十九世紀小説様式攷』(ペリかん社 一九九五年) 一九三頁

11 注7に同じ

12 注7に同じ

13 注7に同じ

14 注6に同じ。

- 15 「玉搔頭伝奇」からの引用は『李漁全集』（浙江古籍出版社 一九九一年）
- 16 注7に同じ。
- 17 松田修『複眼の視座―日本近世の虚と実―』（角川書店 一九八一年）
- 18 『女仙外史』の自序は古本小説集成 『女仙外史』（上海古籍出版社 一九九〇年）による。
- 19 『開卷驚奇侠客伝』からの引用は新日本古典文学大系『開卷驚奇侠客伝』（横山邦治・大高洋司校注 岩波書店 一九九八年）による。
- 20 『南総里見八犬伝』第九輯からの引用は小池藤五郎校訂『南総里見八犬伝』（岩波書店 一九九〇年）による。
- 21 麻生磯次『江戸文学と中国文学』（三省堂 一九四六年）第三章「馬琴読本に及せる支那文学の影響」
- 22 徳田武 『日本近世読本と中国小説』（青裳堂書店 一九八七年）第四部第一章所収
- 23 黄智暉 「馬琴読本における春秋の筆法―『女仙外史』の影響を手掛かりに―」（『国語と国文学』 八三―七 二〇〇六年）
- 24 水谷不倒『草双紙と読本の研究』（駿南社 一九三四年）
- 25 大田南畝『細推物理』（『大田南畝全集』第八卷所収 岩波書店 一九八六年）
- 26 粕谷広紀『石川雅望研究』（角川書店 一九八五年）
- 27 浜田啓介「寛政享和期の曲亭馬琴に関する諸問題」（『国語と国文学』 五十五―六一 一九七八年）
- 28 注26に同じ。

終章

一 庭鐘と雅望

本博士論文では、読本作家都賀庭鐘と石川雅望の二人を取りあげて、かれらの読本の中における中国古典小説の受容を考察してきた。

都賀庭鐘は読本の嚆矢を世に出した人であるだけに、その漢学と国学の造詣の深さが伺える。本博士論文第一部第一章から第四章までは、彼の読本三部作に注目し、今まで先学の指摘されていなかった典拠―『史記』、『警世通言』、『水滸伝』を指摘し、また彼の「三言」に対する認識を確認した。また中国古典小説の趣向の取入れかたに着目し、その小説の作法が弟子の上田秋成に影響を及ぼしたことをも論じた。第四章では、典拠の指摘以外、作品の主題や作意はどこにあるのかも探ってみた。

一方、都賀庭鐘に三十六年遅れて江戸に生まれた石川雅望は都賀庭鐘と同じく、読本の中で「三言」を取り入れているが、その使用頻度が高いのは『醒世恒言』である。石川雅望は『醒世恒言』を翻訳して『通俗醒世恒言』を出しているぐらいであるから、彼の『醒世恒言』に対する愛好が見られるのであるが、翻訳だけに留まらず、読本の中に積極的に『醒世恒言』の趣向を取り入れているのである。巻十四「開樊楼多情周勝仙」、巻九「陳多寿生死夫妻」、巻三十五「徐老僕義憤成家」をそれぞれ『近江県物語』、『天羽衣』に取り入れている。『醒世恒言』だけではなく、『初刻拍案驚奇』の趣向をも使用しているのである。『初刻拍案驚奇』の使用は馬琴の読本などほかの江戸読本にも見られるが、都賀庭鐘は『醒世恒言』も『初刻拍案驚奇』をも利用しなかった。これは第一部第二章で述べたように、『醒世恒言』のなかには都賀庭鐘の創作意識に合うものが少なかったこともあるが、『醒世恒言』や『初刻拍案驚奇』も『喻世明言』や『警世通言』と比べると、「雅道」の存在しないものが多かったからであろう。儒者都賀庭鐘がこれらに素材を求めなかったのも納得のいくことである。

しかし、江戸後期となってくると、これらの町人の生活や人情を描き出した作品はすくぶる人気を得て、読本に取り入れられていくのである。

中でも、石川雅望の読本の特徴ともいえるべきところは、戯曲に多くの趣向を求めたことである。清の李漁の『笠翁伝奇十種』はもちろんのこと、明の湯顯祖の『牡丹亭還魂記』の「驚夢」「尋夢」の二齣の趣向を読本に取り入れたところは注目すべきである。雅望の読

本に溢れる滑稽は李漁の『笠翁伝奇十種』からの影響が大きかった。かれは李漁の戯曲における笑の中で勸善懲惡を説く方法を自分の読本のなかで再現している。さらにもう一点、注目すべき傾向がある。雅望がどのような戯曲を選び読本のなかに取り入れているかを検証すると、歴史的・政治的な要素が強くなって、才子佳人の愛を描く作品が多い、という傾向が見られるのである。馬琴も李漁の戯曲を取り入れているが、第二部第七章で述べたように、馬琴は歴史的な人物が登場する政治性の強い作品に目を向けているのである。

李漁の『笠翁伝奇十種』の日本近世における受容を語るには、馬琴はもちろんのことであるが、それ以外に、石川雅望の存在をも視野に入れなければならない。

のみならず、湯頭祖の『牡丹亭還魂記』は早く日本に伝わっていたにも関わらず、これを読本に取り入れた例は、現在知られたところでは、雅望以外には見られない。雅望における『牡丹亭還魂記』の受容は近世期読本における嚆矢ではないかと筆者は考える。いずれにせよ、戯曲の近世における受容では石川雅望の存在が大きかった。これだけではなく、彼は清の筆記小説をも翻訳し、『通俗排悶録』を刊行している。これは彼が中国文芸界の潮流によく気づいていたことの証である。これに関しては、すでに徳田武氏の論文「読本と清朝筆記小説―『今古奇談』『通俗排悶録』について―」^①が詳しい。

都賀庭鐘も徐渭の戯曲『四声猿』の「狂鼓史漁陽三弄」を取り入れている。徳田武氏は「これは最初の中国演劇の翻案という意義を持った」^②作品であると評している。「狂鼓史漁陽三弄」はまた歴史に素材を求めた戯曲でもある。冥土の判官の申し入れを受け、禰衡が曹操の罪を暴きながら、太鼓を打つ。冥土で歴史上の人物の是非を断するところは『喻世明言』の卷三十一「閻陰司司馬貌断獄」とよく似ている。都賀庭鐘は「閻陰司司馬貌断獄」を『英草紙』の第五話「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」に翻案している。このように、素材の選択の面において、都賀庭鐘には歴史の要素が強い素材に目を向ける傾向が見られる。この点は馬琴と同じである。しかし、石川雅望にはまったく反対の傾向が見られる。すなわち、政治と歴史とは関係なく、才子佳人の愛を描くものに興味を持ったようである。これも石川雅望における一種の浪漫主義と言えよう。

二 今後の課題

本博士論文は、都賀庭鐘と石川雅望を取り上げ、中国古典小説が日本近世読本に与えた影響の一端を覗こうとしたものである。

読本における中国古典小説の受容は、もちろんこの二人だけに限られるものではない。都賀庭鐘の弟子にあたる上田秋成や、江戸読本作者の代表と言われる滝沢馬琴、山東京伝にも受容が見られるのであり、むしろ後期に至れば至るほど中国古典小説の受容がより一層盛んになっている。本博士論文では、馬琴の読本に関して、『曲亭伝奇花釵児』と『開巻驚奇侠客伝』のみ取り上げたが、今後は馬琴の読本をも視野に入れて、中国古典小説の受容を考察したい。

また、李漁の戯曲、それ以外の元曲、明清の戯曲、などの読本に与えた影響を、広範に研究していきたい。

注

- 1 徳田武『江戸漢学の世界』（ペリカン社 一九九〇年）
- 2 徳田武「庭鐘と『四声猿』」（『日本近世小説と中国小説』第二部第五章所収 二二七頁 青裳堂書店 一九八七年）

主要参考文献

【辞書類】

- 『日本古典文学大辞典』 岩波書店 一九八四年
『日本国語大辞典』小学館 第二版

【本文類】

〔日本語〕

- 『英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』新日本古典文学大系 小学館 一九九五年
『水滸伝』中国古典文学大系 平凡社 一九六八年
『完訳水滸伝』吉川幸次郎 清水茂 岩波書店 一九九八年
『通俗忠義水滸伝』岡島冠山『近世白話小説翻訳集』第七卷〜第十一卷 汲古書院 一九八七年

『史記』 中国古典文学大系 平凡社 一九七一年

『史記』新釈漢文大系 明治書院 一九九三年

『通俗漢楚軍談』 有朋堂文庫 一九二七年

『都賀庭鐘・伊丹椿園集』江戸怪異綺想文芸大系二 国書刊行会 二〇〇一年

『御文庫目録』早稲田図書館蓬左文庫蔵の影印本を参考、出版社と出版年は不明

『繁野話』新編日本古典文学大系 徳田武校注 岩波書店 一九九二年

『醒世恒言』辛島驍氏訳 全訳中国文学大系第一集 東洋文化協会 一九五八年

『拍案驚奇』辛島驍氏訳 全訳中国文学大系第一集 東洋文化協会 一九五八年

『大日本地誌大系』第三冊 大日本地誌刊行会 一九一五年

『梅若縁起の研究と資料』慶応義塾大学国文学研究会 桜楓社 一九八八年

『日本詩話叢書』巻二 蘆洲池田四郎次郎編 鳳出版社 一九七二年

『二代田村三代田村』南部叢書第九冊 南部叢書刊行会 一九二八年

『田村三代記』仙台叢書第十二卷 仙台叢書刊行会 一九二六年

『石川雅望集』稲田篤信編 国書刊行会 一九九三年

『石川雅望集』(有朋堂文庫)塚本哲三校訂 有朋堂 一九一六年

『玉川砂利』『大田南畝全集』所収 岩波書店 一九八七年

『語園』古田幸一校訂 古典文庫 一九七八年

『通俗大明女仙伝』『近世白話小説翻訳集』第三卷所収 汲古書院 一九八五年

『通俗醒世恒言・通俗繡像新裁綺史』『近世白話小説翻訳集』第四卷所収 一九八五年

『延喜式』正宗敦夫校訂 日本古典全集刊行会 一九二九年

『伽婢子』新日本古典文学大系 岩波書店 二〇〇一年

『今昔物語集』岩波書店 一九九六年

『蒙求』新釈漢文大系 明治書院 一九七三年

- 『本朝水滸伝を読む并に批評』曲亭馬琴『曲亭遺稿』所収 国書刊行会 一九一一年
『著作堂雜記抄』曲亭馬琴『曲亭遺稿』所収 国書刊行会 一九一一年
『ねざめのすさび』石川雅望 日本隨筆大成第三期一所収 吉川弘文館 一九七六年
『南総里見八犬伝』小池藤五郎校訂 岩波書店 一九九〇年
『竹田先生文藁』田能村竹田 大分県先哲叢書『田能村竹田資料集』詩文篇一九九三年
『断腸亭日乗』二 永井荷風 岩波書店 一九八〇年
『馬琴中編読本集成』鈴木重三・徳田武編 汲古書院 二〇〇〇年
『曲亭馬琴花釵児』徳田武氏校注 新日本古典文学大系 岩波書店 一九九二年
『開卷驚奇俠客伝』横山邦治・大高洋司校注 新日本古典文学大系 岩波書店
一九九八年

- 『細推物理』『大田南畝全集』第八卷所収 岩波書店 一九八六年
『支那文学大観』第二卷『牡丹亭還魂記』上 支那文学大観刊行会 一九二六年
『支那文学大観』第三卷『牡丹亭還魂記』下 支那文学大観刊行会 一九二七年
『新刻役者綱目』『歌舞伎叢書』第一輯所収 金港堂書籍 一九一〇年
『唐土奇談』『銅脈先生全集』下巻 齊田作楽編 太平書屋 二〇〇九年
『物之本江戸作者部類』曲亭馬琴著 木村三四吾編 八木書店 一九八八年

〔中国語〕

- 『水滸伝』 施耐庵 中華書局 一九九八年
『琴史』 朱長文 四庫全書子部芸術類所収
『上古琴論』 莊清鳳 四庫全書子部芸術類所収
『初刻拍案警奇』 凌濛初 中華書局 二〇〇九年
『李漁全集』 浙江古籍出版社 一九九一年
『喻世明言』 許政揚校注 人民文学出版社 一九五八年
『警世通言』 嚴敦易校注 人民文学出版社 一九五六年
『醒世恒言』 顧学頡校注 人民文学出版社 一九五七年
『青瑣高議』 劉斧 上海古籍出版社 一九八三年
『顔氏家訓』 顔之推 上海中華書局 一九三六年
『女仙外史』 呂熊 古本小説集成 上海古籍出版社 一九九一年
『牡丹亭』 湯顯祖 中国古典文学読本叢書 人民文学出版社 一九七八年
『顧曲雜言』 沈德符 早稻田大学蔵書 請求番号 文庫 19 F0170 1-12
『西湖佳話』 古本小説集成 上海古籍出版社 一九九〇年
『醉翁談録』 羅燁 古典文学出版社 一九五七年
『西湖老人繁勝録三種』 文海出版社 中華人民七十年（一九八一年）

【研究書】

〔日本語〕

- 『日本近世における支那俗語文学史』石崎又造 弘文堂書房 一九四〇年
 『読本集』解題 山口剛 日本名著全集江戸文芸の部 日本名著全集刊行会 一九二七年
 『中村幸彦著述集』第一卷『近世文芸思潮論』中村幸彦 中央公論社 一九八二年
 『中村幸彦著述集』第四卷『近世小説史』中村幸彦 中央公論社 一九八七年
 『中村幸彦著述集』第七卷『近世比較文学攷』中村幸彦 中央公論社 一九八四年
 『中村幸彦著作集』第十一卷『漢学者記事』中村幸彦 中央公論社 一九八二年
 『日野龍夫著作集』第三卷『近世文学史』ペリかん社 二〇〇五年
 『初期浮世草子の展開』中嶋隆 若草書房 一九九六年
 『雅俗往還…近世文人の詩と絵画』池澤一郎 若草書房 二〇一二年
 『関西大学東西学術研究所資料集刊七 宮内庁・書陵部蔵 舶載書目 附解題』大庭脩
 関西大学東西学術研究所 一九七二年
 『馬琴京伝中編読本解題』徳田武 勉誠出版 二〇一二年
 『山口剛著作集』山口剛 中央公論社 一九七二年
 『江戸文学と中国文学』麻生磯次 三省堂 一九四六年
 『日本近世小説と中国小説』徳田武 青裳堂書店 一九八七年
 『江戸漢学の世界』徳田武 ペリかん社 一九九〇年
 『近世近代小説と中国白話文学』徳田武 汲古書院 二〇〇四年
 『秋成前後の中国白話小説』徳田武 勉誠出版 二〇一二年
 『江戸小説の世界*秋成と雅望』稲田篤信 ペリかん社 一九九三年
 『近世文学の位相』重友毅 日本評論社 一九四四年
 『近代国文学素描』鈴木敏也 目黒書店 一九三四年
 『石川雅望研究』粕谷宏紀 角川書店 一九八五年
 『草紙と読本の研究』水谷不倒 駿南社 一九三四年
 『馬琴読本と中国古代小説』崔香蘭 溪水社 二〇〇五年
 『江戸小説論叢』水野稔 中央公論社 一九七四年
 『京伝と馬琴…〈稗史もの〉読本様式の形成』大高洋司 翰林書房 二〇一〇年
 『江戸読本の研究…十九世紀小説様式攷』高木元 ペリかん社 一九九五年
 『読本の世界 江戸と上方』横山邦治編 世界思想社 一九八五年
 『読本の研究―江戸と上方と―』横山邦治 風間書房 一九七三年
 『増補中国通俗書目』大塚秀高 汲古書院 一九八七年
 『青木正児全集』春秋社 一九七〇年
 『長沢規矩也著作集』第五卷『シナ戯曲小説の研究』汲古書院 一九八五年
 『三言二拍本事論考集成』小川陽一 新典社 一九八一年
 『江戸文人論』池澤一郎 汲古書院 二〇〇〇年

- 『流謫の花』堀誠 研文出版 二〇〇三年
- 『八犬伝・馬琴研究』播本真一 新典社 二〇一〇年
- 『読本研究新集』第一集〜第五集 翰林書房 一九九八年〜二〇〇四年
- 『日本古典鑑賞講座』第二十五卷「馬琴」水野稔編 角川書店 一九五九年
- 『読本』『岩波講座日本文学史』第九卷近世Ⅲ所収 重友毅 岩波書店 一九五九年
- 『明清戯曲演劇史論序説…湯頭祖』牡丹亭還魂記』研究』根ヶ山徹 創文社 二〇〇一年
- 『中国近世戯曲小説論集』井上泰山 関西大学出版部 二〇〇四年
- 『中国戯曲小説の研究』日下翠 研文出版 一九九五年
- 『青木正児全集』第三卷『支那近世戯曲史』春秋社 一九七二年
- 『伊藤漱平著作集』第四卷中国近世文学編 汲古書院 二〇〇九年

〔中国語〕

- 『中国小説史略』魯迅 上海古籍出版社 一九九八年
- 『中国通俗小説書目』孫楷第 作家出版社 一九五七年
- 『話本小説概論』胡士瑩 中華書局 一九八〇年
- 『三言二拍資料』上、下 譚正壁編 上海古籍出版社 一九八一年

【研究論文】

- 小川陽一 「三言と英草紙―三現身包龍図断冤を中心に―」『和漢比較文学叢書』第七卷所収 汲古書院 一九八八年
- 劉潔秋 「中国『短編白話小説』と江戸『読本』の比較研究―『三言』と『英草紙』を中心に―」『季刊日本思想史』三十六 一九九〇年
- 徳田武 『日本近世小説と中国小説』第二部第一章 『英草紙』と三言―俗に即して雅を為す― 青裳堂書店 一九八七年
- 石破洋 「都賀庭鐘の翻案態度―『英草紙』第三篇における琴を中心に―」東方学 第五十五卷 一九八七八年
- 尾形仿 「中国白話小説と『英草紙』『文学』三四―三 一九六六年
- 丸井貴史 『『三言』ならびに『今古奇観』の諸本と『英草紙』』『近世文芸』九十七号 二〇一三年
- 及川茜 「都賀庭鐘『英草紙』の文体意識…中国短篇白話小説集『三言』との関係から」『言語・地域文化研究』十四 二〇〇八年
- 葛綿正一 「都賀庭鐘論…気象・地形・亡命」『沖縄国際大学日本語日本文学研究』十二―二二 二〇〇八年
- 佐藤深雪 「都賀庭鐘の奇談―『白水翁が売卜直言奇を示す話』―」『日本文学』二十九―四 一九八〇年
- 木越秀子 「樵夫横尾時陰―『英草紙』第三篇再考―」『近世文芸』九十一号 二〇一〇年

- 田中規子 『繁野話卷四素卿官人二子を唐土に携る話』の典拠 「女子大國文」八十二卷
一九七七年
- 徳田武 『貧福論』と『施潤沢灘闕遭友』 『近世文芸研究と評論』 二十七号 一九八四年
内田保広 「上田秋成の貧富論―『貧福論』をめぐる―」 『江戸文学』 十四号 一九
九五年
- 浅野三平 『繁野話』の周辺』 『国語と国文学』 五十一―一〇 一九七四年
後藤丹治 「英繁二書と雨月物語との関係」 『国語国文』 第二十五卷第三号、一九五六
年
- 徳田武 「読本における主題と趣向―庭鐘から秋成へ―」 『国語と国文学』 一〇月号 一
九七一年
- 閻小妹 「白猿伝説と庭鐘の翻案作―『白菊の方』について―」 『江戸小説と漢文学』 一九九三年
井上泰至 「初期読本成立の側面―『繁野話』第二話私注』 『読本研究』 四―上 一九九〇年
長島弘明 『英草紙』と秋成―秋成の物語の主題、構想解明の補助線として―』 『国語と国
文学』 八月号 一九七九年
- 宇佐美喜三八 「雨月物語私言』 『解釈と鑑賞』 第一卷第七号 一九三六年
宇佐美喜三八 「垣根草と支那小説』 『国語と国文学』 十卷五号 一九三三年
- 徳田武 「庭鐘と『西湖佳話』 『聊齋志異』 ―『莠句冊』 第三篇覚書―」 『日本近世小説と中
国小説』 第四章所収 青裳堂書店 一九八七年
- 徳田武 「庭鐘と『四声猿』 ―『莠句冊』 第六篇―」 『日本近世小説と中国小説』 第五章所収
青裳堂書店 一九八七年
- 高田衛 「伝承・庭鐘・求塚」 ―ある十八世紀小説の試行錯誤―』 『文学』 六一―三 一
九九五年
- 徳田武 「都賀庭鐘 遊戯の方法―『英草紙』 『繁野話』と唐代小説・三言―』 『日本近世小
説と中国小説』 第二章所収 青裳堂書店 一九八七年
- 佐藤深雪 「『莠句冊』論―絶間池の演義強頸の勇衣子の智ありし話―』 『静岡女子大学研究
紀要』 十六 一九八二年
- 久岡明恵 「『莠句冊』の求家俗説の海伯と『日本書紀』の海神」 『叙説』 三十八
黄智暉 「都賀庭鐘と曲亭馬琴の歴史解釈…『莠句冊』と『松染情史秋七草』の比較を中
心に」 『国語と国文学』 九〇―三 二〇一三年
- 稲田篤信 「『近江県物語』論*もう一つの梅若物』 『江戸小説の世界*秋成と雅望』 所収。ペ
りかん社 一九九三年
- 山本和明 「『近江県物語』への視座』 『説話論集と説話集』 二〇〇一年
- 野口寧斎 『袋のうば』の辨』 『早稲田文学』 一八六九年
- 重友毅 「六樹園の雅文小説』 『近世文学の位相』 第二編に所収 日本評論社 一九四四年
山口剛 「江戸小説史上の一事象』 『山口剛著作集』 第二卷所収 中央公論社 一九七二年
麻生磯次 「雅文小説に於ける支那文学の影響』 『江戸文学と中国文学』 第二章所収 三省堂

- 一九四六年
- 鈴木敏也「浪漫小説作家としての石川雅望」『近代国文学素描』所収 目黒書店 一九三四年
- 稲田篤信 『天羽衣』論*綾足・秋成・雅望』『江戸小説の世界 秋成と雅望』に所収 ペリカン社 一九九一年
- 増田勝機「誕生日を祝う習俗並びに初誕生のエラビドリ習俗について」『日本民族学』一九八二年
- 祖父江孝男「日本における乳児諸儀礼―地域的差異その他の問題―」『民族学ノート』平凡社 一九六三年
- 閻小妹「石川雅望『天羽衣』論―中国典拠との比較から―信州大学経済学論集三十七―一九九七年
- 徳田武「読本と清朝筆記小説―『今古奇談』『通俗排悶録』について―」『江戸漢学の世界』所収 ペリカン社 一九九〇年
- 稲田篤信「公事宿嫌疑一件―寛政三年の石川雅望―」『文学』五十二―五号 一九八四年
- 稲田篤信『飛騨匠物語』論*機関と正義』『江戸小説の世界*秋成と雅望』所収 ペリカン社 一九九三年
- 佐藤深雪 『飛騨匠物語』典拠私考』『日本文学』二十六卷十号 一九七九年
- 中矢由花 『飛騨匠物語』試論―墨繩の造形と典拠に関する一考察―』『国文』九十七巻お茶の水女子大学国語国文学会 二〇〇二年
- 高田ゼミナル 「石川雅望の研究」文芸論叢二 一九六六年
- 黄智暉氏に「馬琴読本における春秋の筆法―『女仙外史』の影響を手掛かりに―」『国語と国文学』八十三―七 二〇〇六年
- 播本真一「『南総里見八犬伝』第十二回を読む」堀切実編『近世文学研究の新展開―俳諧と小説』所収 ペリカン社 二〇〇四年
- 任 清梅「石川雅望読本『近江県物語』における中国白話小説の趣向利用について―『女仙外史』『醒世恒言』と『拍案驚奇』を中心に―」『和漢比較文学』第五十一号
- 中村幸彦「京伝と馬琴」『近世編2』所収 三省堂 一九六九年
- 水野稔「京伝と馬琴」『江戸小説論叢』所収 中央公論社 一九七四年
- 中村幸彦「滝沢馬琴の小説観」『中村幸彦著作集』第一巻所収 中央公論社 一九八二年
- 徳田武『曲亭馬琴花釵児』と『玉搔頭伝奇』』『日本近世小説と中国小説』第三部第一章 青裳堂書店 一九八七年
- 松田修「戯作者の秘めたる毒―石川雅望』『複眼の視座―日本近世の虚と実―』所収 角川書店 一九八一年
- 池澤一郎 「大田南畝と中国小説」『近世文芸研究と評論』七十四号 二〇〇八年
- 麻生磯次「馬琴読本に及せる支那文学の影響」『江戸文学と中国文学』第三章所収 三省堂 一九四六年

- 徳田武 「後南朝悲話―庭鐘・馬琴・逍遙―」 『日本近世読本と中国小説』 第四部第一章所収
青裳堂書店 一九八七年
- 浜田啓介 「寛政享和期の曲亭馬琴に関する諸問題」 『国語と国文学』 五十五―五十一
一九七八年
- 中村幸彦 「読本発生に関する諸問題」 『中村幸彦著作集』 第五卷所収 中央公論社 一九八二年
- 中村幸彦 「唐話の流行と白話文学書の輸入」 『中村幸彦著作集』 第七卷所収 中央公論社 一九八四年
- 青木正児 「御文庫目録中の支那戯曲」 『書肆学八―五』 一九三七年
- 中村幸彦 「都賀庭鐘の中国趣味」 『中村幸彦著作集』 第十一卷 「漢学者記事」 所収 中央公論社 一九八二年
- 中村幸彦 「都賀庭鐘伝攷」 『中村幸彦著作集』 第十一卷 「漢学者記事」 所収 中央公論社 一九八二年